秋田県文化財調査報告書第85集

藤株遺跡発掘調査報告書

秋田県埋蔵文化財センター

1981・3

秋田県教育委員会

序

藤株遺跡は明治時代以来全国的に知られている縄文時代晩期の遺跡であります。このように有名であったが過去に於いて学術的な発掘調査を試みられたことのなかった遺跡であります。このたび、国道105号線バイパス工事に係り、一部発掘調査を実施いたしました。本報告書はその結果を収録したものであります。

調査の結果縄文時代晩期の遺物――土器、土偶、装身具などの他竪穴住居跡、土坑等が発見され、中でも注目されるのは土坑の中から火葬し埋葬された女性人骨が発見されたことであります。他に後期の竪穴住居跡、土器、土偶、前期の竪穴住居跡なども発見されております。

また出土遺物が多く、整理箱400箱にも達しました。この出土遺物全てに目を通し、整理することは時間的に無理があり、報告書にはその主なものだけしか掲載できなかったことは残念でありますが、今回調査した結果の概要が理解できるように配慮いたしました。晩期初頭の土器は考古学界にとっても貴重な資料と考えられ、本報告書が多くの人達から活用されることを望むものであります。

最後に人骨の調査に御指導いただいた国立科学博物館人類研究部長山口敏先生はじめ、関係各位に対して心から感謝の意を表します。

昭和56年3月

秋田県教育委員会
教育長　畠山芳郎

例　　言

1．本書は、秋田県教育委員会が昭和55年度に発掘調査を実施した藤株遺跡の調査報告書である。

2．本書の作成にあたり、次のように分担して執筆した。

第1章，第4章2節の1，第5章……富樫　泰時

第2章，第3章，第4章1節の1・3・4・5，2節の2……高橋　忠彦

第4章1節の2……柴田陽一郎

第4章3節……山口　敏

3．遺構・遺物の写真撮影は鈴木功が担当した。

4．遺物の実測は畠山悦美が、トレースは高橋浩樹が中心となって行った。

5．本書中の出土遺物の実測図の縮尺は¼と½である。全体図・遺構実測図は任意の縮尺であり、それぞれスケールを付した。

6．土色の表記は小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帳』を活用した。

7．石材の鑑定は、秋田大学教育学部白石建雄先生にお願いした。

目　　次

序
第１章　はじめに……1
　第１節　発掘調査に至るまで……1
　第２節　調査の組織と構成……1
第２章　遺跡の立地と環境……4
　第１節　立地と環境……4
　第２節　歴史的環境……4
第３章　発掘調査の概要……9
　第１節　調査の方法……9
　第２節　遺跡の概観……9
　　１．遺跡の層序……9
　　２．遺構の分布……9
　　３．遺物出土状況……10
　第３節　調査の経過……10
第４章　調査の記録……17
　第１節　検出遺構……17
　　１．住居跡……17
　　２．炉跡……47
　　３．土坑……50
　　４．その他の遺構……112
　　５．小結……115
　第２節　出土遺物……143
　　１．土器……143
　　２．石器……188
　第３節　藤株遺跡ＳＫ05 出土の人骨……213
第５章　まとめ……218

巻頭図版１　遺跡航空写真

巻頭図版 2　土製腕輪・岩偶

第１章　はじめに

第１節　発掘調査に至るまで

北秋田郡鷹巣町藤株に所在する藤株遺跡は、明治時代中頃から縄文時代晩期の遺跡として知られており、秋田県内にある縄文時代の遺跡として有名なものの一つである。この遺跡の一部を国道105号線のバイパスが通過する計画が立てられ実施されることになった。そこで道路課から昭和54年９月範囲確認調査の依頼があり文化課では同年11月５日～10日までの６日間橋本文化財主事を派遣し、範囲確認調査を実施した。その結果、藤株部落から麻当沢へ通ずる道路をはさんで南側は100ｍ、北側200ｍが遺跡であることがわかり道路課に報告し、発掘調査が必要であることを通知した。

その後道路課と協議を重ね、調査費は全て道路課負担とし、発掘調査は教育委員会が実施することに決定した。発掘面積は約8,000㎡であった。発掘調査は昭和55年度に実施し、道路建設工事はその後に実施することになった。

そこで教育委員会では遺跡の所在する鷹巣町教育委員会の協力を得て、作業員等の手配等にとりかかり、昭和55年４月25日から発掘調査を実施することになったのである。事務的には文化財保護法第57条の３の手続きを省略し、昭和55年４月16日付けで、文化財保護法第98条の２の規定によって「埋蔵文化財発掘調査通知」を提出し発掘調査にとりかかったのである。

第２節　調査の組織と構成

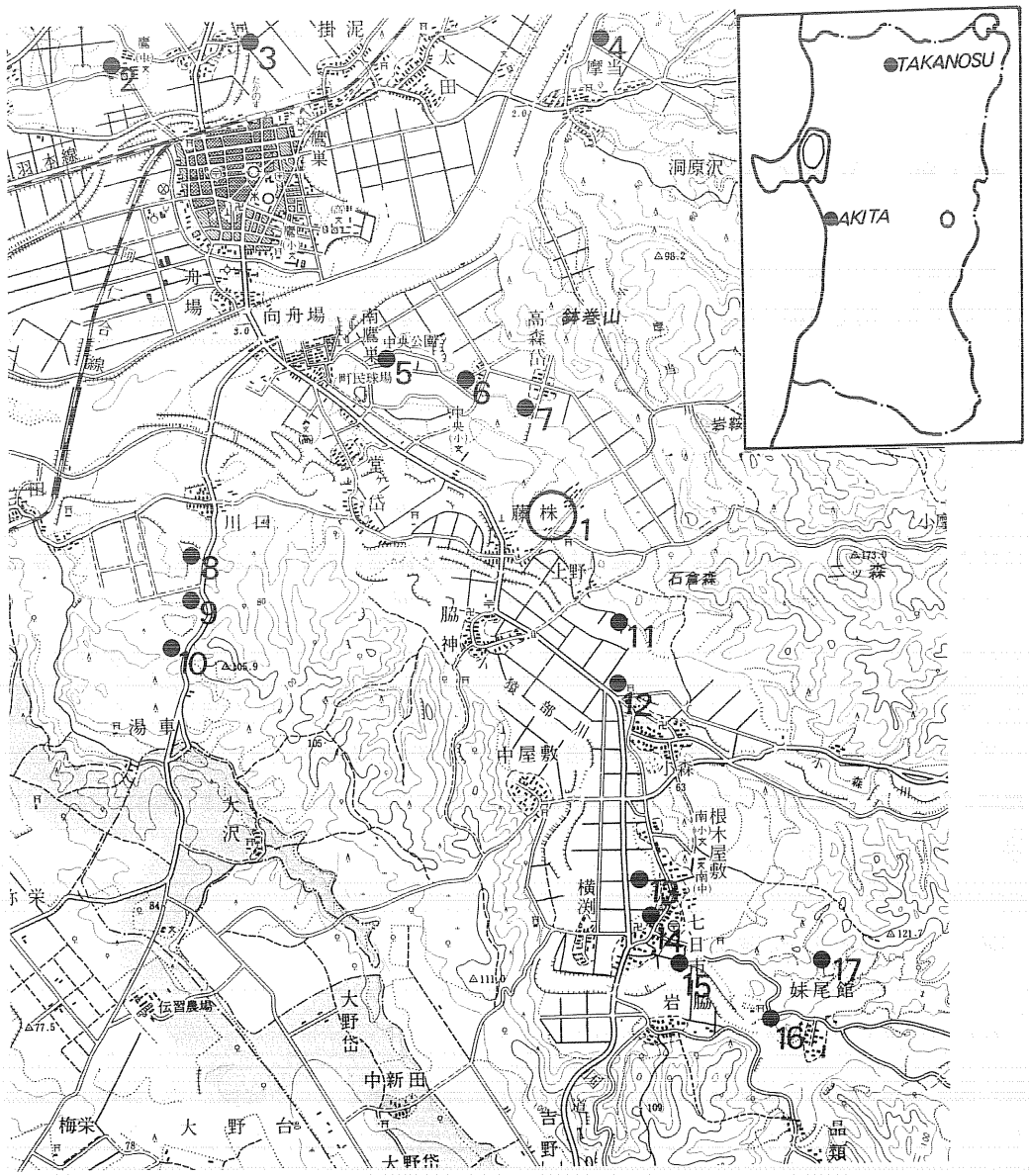
遺跡名	藤株遺跡
遺跡所在地	秋田県北秋田郡鷹巣町脇神字藤株塚ノ岱
調査期間	昭和55年４月25日～10月８日
調査対象面積	8,000㎡
調査面積	8,000㎡
調査主体	秋田県教育委員会
調査担当者	富樫泰時、高橋忠彦、柴田陽一郎　（秋田県教育庁文化課）
調査補助員	高橋浩樹、鈴木功、畠山悦美、嶺脇重宏
事務補助員	畠山桃子、中島栄子
調査協力機関	秋田県北秋田土木事務所

鷹巣町教育委員会

発掘調査参加者　畠山啓三郎、加賀松夫、畠山市郎、畠山宗五郎、本城金一郎、畠山久哉、佐藤良一、畠山直治、畠山徳之助、畠山栄治、畠山井ノ助、畠山金一郎、本城清一、本城義美、畠山宇市、佐藤辰雄、畠山正雄、畠山三九郎、能登謙悦、畠山幸一郎、畠山長蔵、佐藤嘉郎、佐藤卓二、本城金治郎、畠山真知夫、津谷金治、畠山東、福田長悦、本城久光、花田三郎、小野利隆、藤島満、福田広幹、畠山義正、板垣喜吉、泉悦子、佐藤規子、渡部京子、畠山サダ、畠山レイ子、佐藤ヒデ、佐藤ヒサ子、畠山タミ、亀山広子、畠山ヨウ子、畠山ミワ、本城ハルエ、本城トシ子、相沢スミ子、福田ケイ、畠山チエ、畠山トミエ、畠山アイ、畠山キクエ、津谷友子、佐藤ミヨ、加賀キサ、佐藤ハルエ、中嶋チエ、畠山澄子、畠山愛、仲谷美智子、泉教子、畠山順子、畠山柚香子、畠山直子、泉多鶴子、佐藤悠子、亀山明美、高橋節子、福田牧子、本城谷一志、佐藤真由美、泉美穂子、中嶋礼子

本間宏（明治大学）、山田義高、小野沢晃（早稲田大学）、和泉昭一（日本大学）、渡辺寿恵（東京女子短期大学）、佐藤敬美（日本女子大学）

遺物整理協力者　杉原敬子、石上尚子、佐藤真智子、畠山桃子、細木茂、松本淳子、山崎節子、神居トシ、石黒紀子、高橋邦子、山木紀子、児玉久子、三浦スエ、越智孝子、岡部久美子、金ひとみ、野呂田美津子、本間雅仁、佐々木奏、工藤ちか子、近藤久義、加賀聡、仁村裕司、佐藤敏之、堀井勝司、熊谷勝久佐々木勇人、堀井学、銭谷英友、東海林寿人、大高しのぶ、菊地文子、児玉輝明、神居政人、駒形望、関根千明、佐々木順子、堀井照子、雲雀ミチエ、柳田ミナ子、久米栄子、成田八百子、阿部紀子、松本宸、進藤ツタ、沢田石良子、佐藤ハル、須田リエ、田口ミチエ、堀井キン、加賀谷道子、田口明子、鈴木セツ、田口イサ、小林京子、新泉フミ、森合ナミ子、佐藤十美子、淀川美佐子、佐々木清子、米山トミエ、高橋津真子、小川恵子、庄司礼子、田口テイ子、寺山志美栄、金子佳司、仁村純子、吉田睿子、柴田綾子



1．藤株
2．胡挑館
3．田中
4．摩当
5．陣場岱Ⅰ(晩期)
6．陣場岱Ⅱ(後期)
7．高森岱(前・中期)
8．川口
9．湯津Ⅰ
10．湯津Ⅱ(後期)
11．タモノ木(中期)
12．小森(晩期)
13．根木屋敷Ⅰ
14．根木屋敷Ⅱ(後・晩期)
15．山の上(中期)
16．神明社(前・中期)
17．妹尾館(後期)

0　2.5Km

第1図　遺跡位置図

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　立地と環境

藤株遺跡は国鉄奥羽本線鷹巣駅より国道105号線を2.5kmほど南下した標高40ｍ前後の段丘上に位置する。国道 105号線をはさんで藤株部落があり、部落の中心地から左（東）に折れ、部落内を通って家並の切れる段丘上が遺跡である。右側は杉林で部落の堂がありその入口には町で立てた立派な藤株遺跡の案内板がある。堂の手前右側に泉があり、他にも二つの泉が北西側一段低い台地にある。遺跡に立つと藤株部落が一段下に見え、南には遠く森吉山、北には田代岳を望むことができる。遺跡の直ぐ南側には、小森川が流れ、小猿部川と合流し米代川に注ぎこんでいる。遺跡北側には中堤、大堤と呼ばれる湖沼があり、弧状に並んでおり、現在この湖沼を利用して鷹巣町中央公園がつくられている。湖沼はもともとは、一つにつながっていたものと考えられる。この湖沼の周辺には、縄文時代前期～晩期に至る各時期の遺跡が点在し、藤株遺跡もその中の一つである。さらに遺跡東側は出羽丘陵の裾野が広がり、小丘陵があって、それぞれに名がつけられている。遺跡はこの丘陵の末端部に位置することになる。遺跡地は、現在広い水田地帯となっているが、開田事業以前には、現在の標高よりも0.5～1ｍほど高く、畑地であったといわれる。

第２節　歴史的環境

周知の遺跡としての藤株遺跡が本格的に調査の対象となったのは、今回が初めてである。遺跡に関する報告は、かなり古く、明治19年内田清太郎が『東京人類学会報』で、藤株字上畑より土器、石鏃等が発見されたことを報告しているし、明治22年には、真崎勇助が『東京人類学会雑誌』上にて、藤株字ハリツケ台にて石鏃が発見されたことを報告している。その後、大正末期までは、藤株遺跡に関する報告は見当らないが、昭和初期になって小規模ではあるが、調査研究の対象となった。まず大正15年喜田貞吉が、遺跡をおとずれ、翌年には一部を発掘しており、昭和３年出版の『日本石器時代遺物発見地名表』の中で藤株遺跡から住居跡、環状列石土偶、土版、岩版、等種々の遺物が発見されたことを書いているが、ただ品目を取りあげただけで詳しい報告はなされていない。さらに、喜田貞吉の調査と相前後して、清野謙次が昭和3･4年にやはり、遺跡を発掘調査している。この結果は昭和44年の『日本貝塚の研究』の中に「羽後国北秋田郡沢口村藤株字高森堂の上遺跡」として報告されている。清野は、藤株遺跡を人骨

発掘の目的で調査を行なったらしいが、その目的とする人骨は発見出来なく、「……人骨を得るには貝塚を掘るか……泥炭層を掘るほかはなかった。」としているが奇しくも50年あまり後の今回の調査で人骨を発掘出来たことは、不思議な因縁と言わざるを得ない。清野は、この報告の中で発掘した遺物について詳細な説明を加えており藤株遺跡に関する報告としてこれまでの中では、最もすぐれたものといえるだろう。昭和4年武藤鉄城が『東京人類学会雑誌』に「藤株の住宅跡」と題する論文を掲載している。さらに昭和5年、山内清男は、「所謂亀ケ岡式土器の分布と縄文式土器の終末」(考古学1－3）の中で藤株出土の土器をもって大洞B－C式を提唱した。その後昭和42年富樫泰時が『出羽路』の中で「藤株遺跡とその周辺」と題して藤株遺跡とその周辺遺跡から出土の遺物を紹介している。以上前述した通り古くから縄文晩期の遺跡として知られていたもののそれに関しての報告は極めて少ないと考える。無論今日まで耕作等によって発見された遺物は相当な数にのぼると思われるが、現在ではそれら遺物も散逸している状態である。

引　用　文　献

内田清太郎　1886　「羽後国古代の遺跡」　東京人類学会報告1－10

真崎勇助　1889　「秋田県石鏃出所」　東京人類学会雑誌4－38

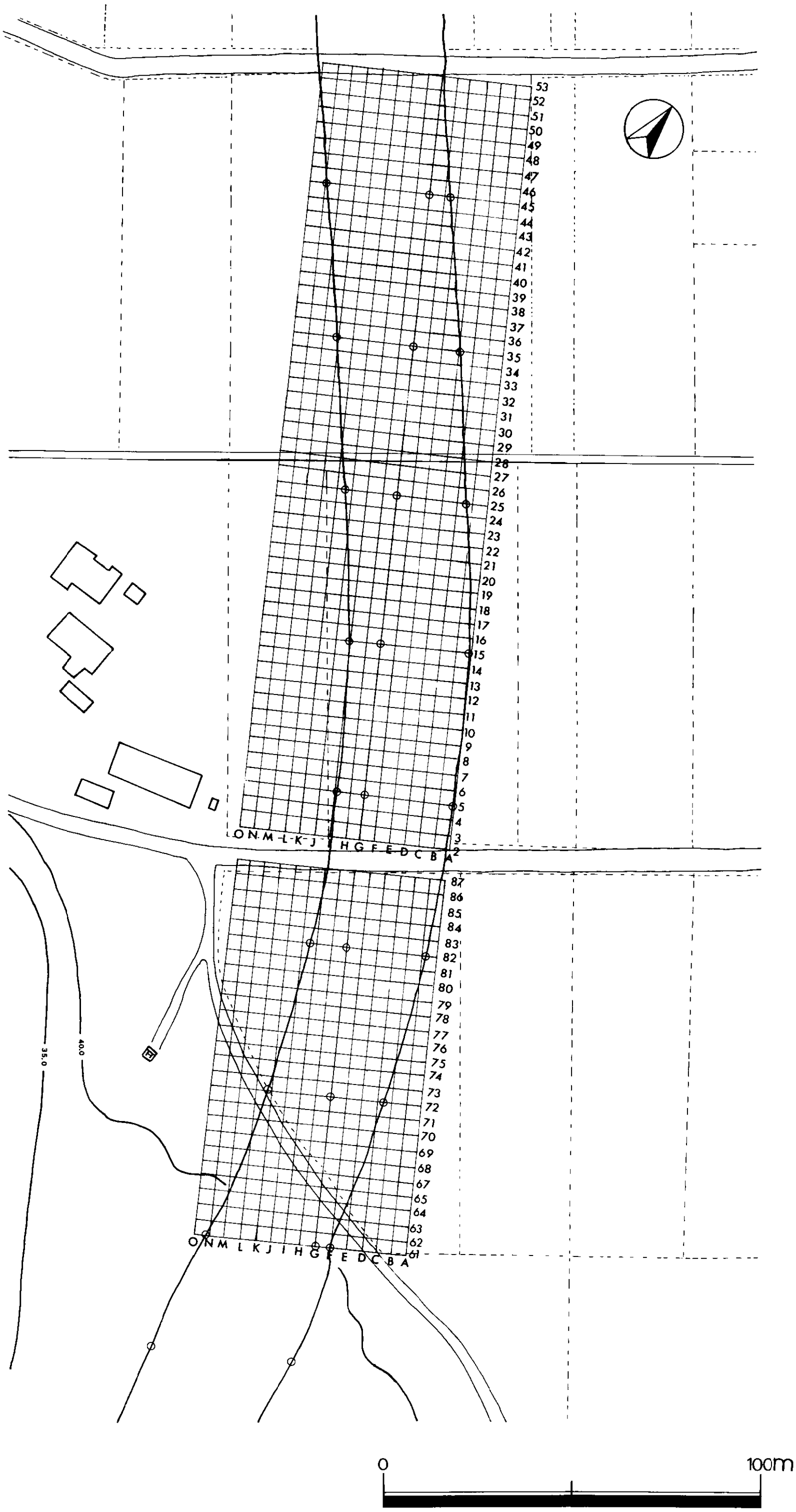
喜田貞吉　1928　「日本石器時代遺物発見地名表」

武藤鉄城　1929　「藤株の住宅跡」　東京人類学会雑誌42－238

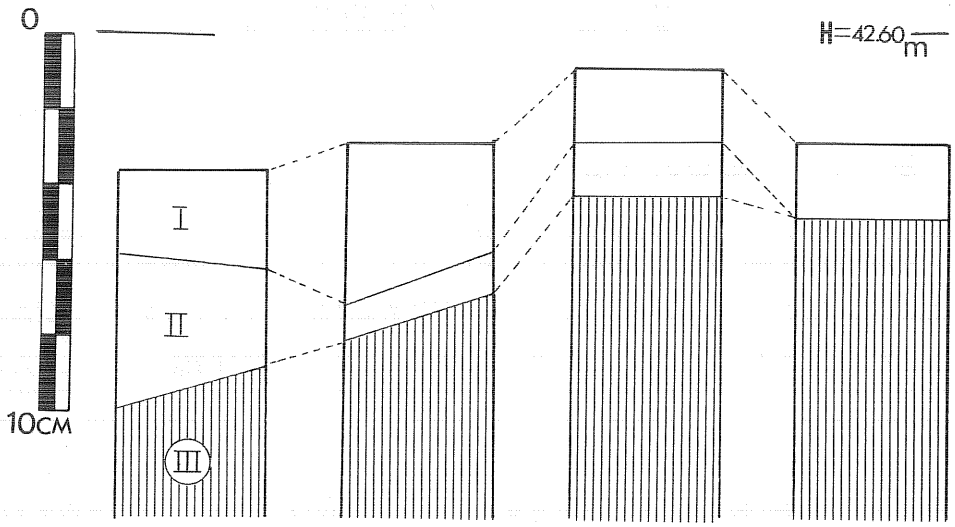
山内清男　1930　「所謂亀ケ岡式土器の分布と縄文式土器の終末」　考古学1－3

富樫泰時　1967　「藤株遺跡とその周辺」　出羽路36

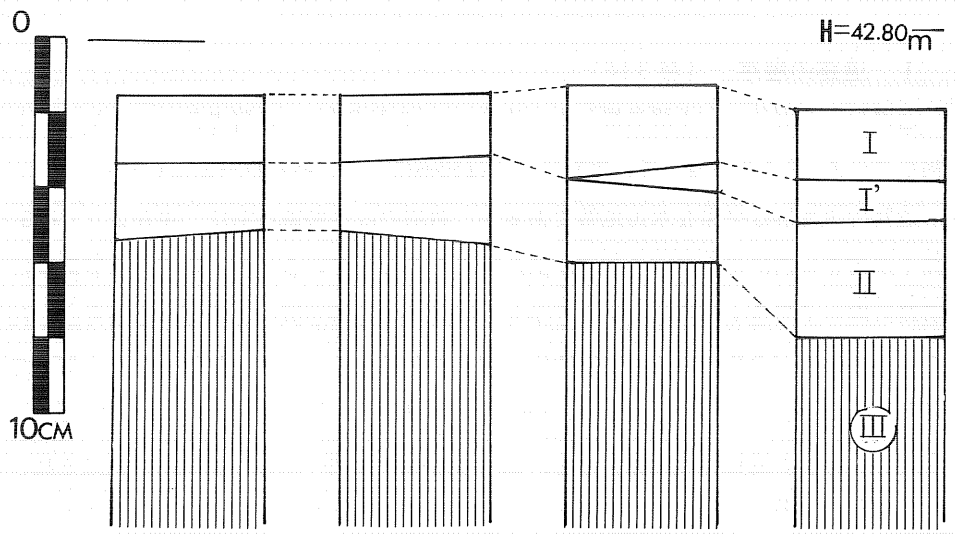
清野謙次　1969　「羽後国北秋田郡沢口村藤株字高森堂の上遺跡」　日本貝塚の研究


53
52
51
50
49
48
47
46
45
44
43
42
41
40
39
38
37
36
35
34
33
32
31
30
29
28
27
26
25
24
23
22
21
20
19
18
17
16
15
14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
O N M L K J I H G F E D C B A
87
86
85
84
83
82
81
80
79
78
77
76
75
74
73
72
71
70
69
68
67
65
64
63
62
61
O N M L K J I H G F E D C B A
35.0
40.0
0
100m

第２図　グリッド配置図



Ⅰ．黒褐色土・耕作工(5YR2/1)
Ⅱ．黒 色 土(5YR1.7/1)
Ⅲ．明褐色ローム(7.5YR5/8)



Ⅰ．黒褐色土・耕作工(5YR2/1)
Ⅰ'．黒褐色土(7.5YR3/2)
Ⅱ．黒 色 土(5YR1.7/1)
Ⅲ．明褐色ローム(7.5YR5/8)

第3図　遺跡基本層位

第３章　　発掘調査の概要

第１節　　調査の方法

調査は水田区画によって、北側よりＩ・II・III区とした。さらに道路敷地内の南北端を結ぶ直線を基準線として、これをＧラインとし平行する南北線と、これらに直交する東西の線を引き、４×４ｍのグリッドを組んだ。尚、調査開始時には、III区が未買収のため立ち入ることが出来ず、当初のグリッド設定は、Ｉ・II区に限定した。グリッドの呼称は、南→北へ数字を用い、東→西へアルファベッドを使用して、グリッドの東南すみの交点をグリッドの名称とした後にIII区の調査の際にも、Ｇラインを基準として、東西のアルファベッドはそのままに、南→北の数字だけを61番から始めることとした。つまりＩ・II区は通しで２～53ラインまで、III区は、61～87ラインまでとなる。（基準線ＧラインはN33°Wである。）

第２節　　遺跡の概観

１　遺跡の層序　（第３図）

遺跡の基本層位は、Ｉ層黒褐色土（耕作土）（５ＹＲ$^{2}/_{1}$）　II層黒色土（５ＹＲ$^{1.7}/_{1}$）　III層明褐色ローム（7.5ＹＲ$^{5}/_{8}$）で、III層ロームは50cmほどで、砂層ロームになる。

遺跡の現地形は平坦な水田地帯であるが、戦前のほ場整備以前は、現在よりも0.5～1ｍほど高く遺跡を東西に走る二本の道路が低かったと言われている。Ｉ・II区の土層観察によっても道路に向って黒色土が深くなることから、以前には道路が沢になっていたと考えられる。Ｉ区では、15cmほどの耕作土の下に植物根の混入する黒色土があり、北側ほど厚く南側ではほとんど堆積していない。II区も同様で、10cmほどの耕作土の下に黒色土があり道路に向って深くなるが、この層が遺物の包含層である。上層では縄文晩期の土器・土坑等が検出され、下層では縄文後期の土器が検出された。III区では耕作土が10cmほど堆積しているが、地山（ローム）の露出している部分もある。すでに遺物包含層は、削平されており、遺構の確認はローム面でなされた。

２　遺構の分布　（第４・５図）

Ｉ区では時代不明の井戸跡１基、住居跡１軒が40－Ｌグリッド付近で検出されただけである。

II区では、20ライン以北で、土坑11基・住居跡1軒をローム面で確認したが、いづれも掘り込み面はII層中と思われる。尚SK05は、II層黒色土中で確認したものである。20ライン以南では、8基の屋外炉が検出されたが、いづれも規模の小さなものである。さらにII層中では、16－Dグリッドを中心として24基、9－Aグリッドを中心として15基ほどの土坑群を検出し、その他に30基ほどの土坑を検出している。住居跡は7軒でいづれも10ライン以南に集中して、ローム面で確認されたものである。III区では、住居跡15軒・土坑4基・配石遺構1・埋甕1で、いづれもローム面で確認されたものである。III区住居跡15軒のうち縄文前期のものは、プランが明確であるが、後期の2基（SI15・16）は床面を残すのみである。SI22は晩期の住居跡であるが、壁等は近世の削平により存在しない。

3　遺物出土状況

本調査で出土した遺物の量は、整理箱（60×40×20cm）で400箱と相当な量である。そのうちの90%はII区からの出土で、I区・III区から出土した遺物は極めて少ない。II区では、特に23－C・17－G・5－Cグリッドを中心とした三ケ所の地域からの出土が大部分である。土器の多くは押しつぶされた状態で出土したが、復元出来たものだけでも200個体あまりになる。石器も主なものだけでも2000点を上まわり、土製品、石製品も200点以上にもなる。これら遺物は、II層から出土したもので、上部からは縄文晩期、下部からは縄文後期のものが出土したが、希に円筒下層式の土器片も含まれる。遺構内出土の遺物は、遺構の数に比べてそれほど多くはない。特に土坑内より出土した遺物は、土器片、フレイクが大部分であるが、III区住居跡からは多くの石器が出土している。

第3節　調査の経過

藤株遺跡の調査は、4月25日～10月8日まで行なった。調査の経過概要は次の通りである。

4月24日発掘作業の説明会を行なうとともに、機材の搬入、プレハブの設置をし調査の準備を整えた。25日から調査区北側I区から調査を開始した。表土は耕作土で、地山ロームまで10～30cmと浅く遺物は水田の圭畔の下にのみ残る程度である。5月6日よりII区の調査も併行して行う。同日I区40－Lグリッドで径3mほどの黒色の落ちこみ（SE01）と、38－Lグリッドで昨年度分布調査で検出された住居跡（SI01）を確認しさらに36－Gグリッドを中心に黒色の広い落ちこみ（SX01）を確認したが遺物の出土はない。SE01、SX01は湧水がひどく調査を見合わせる。5月9日、II区地山ローム面でSK03・04を始めとして10基ほどの土坑を

確認さらに23－Ｃグリッドを中心に、Ⅱ層上面にて、土器が集中して出土する。５月12日26・27－Ｃグリッドにかかる土坑（ＳＫ05）より骨が検出され、保存状態が比較的良好と判断し、調査を後日にすることとして、盛土をする。５月20日Ⅰ区の調査終了。

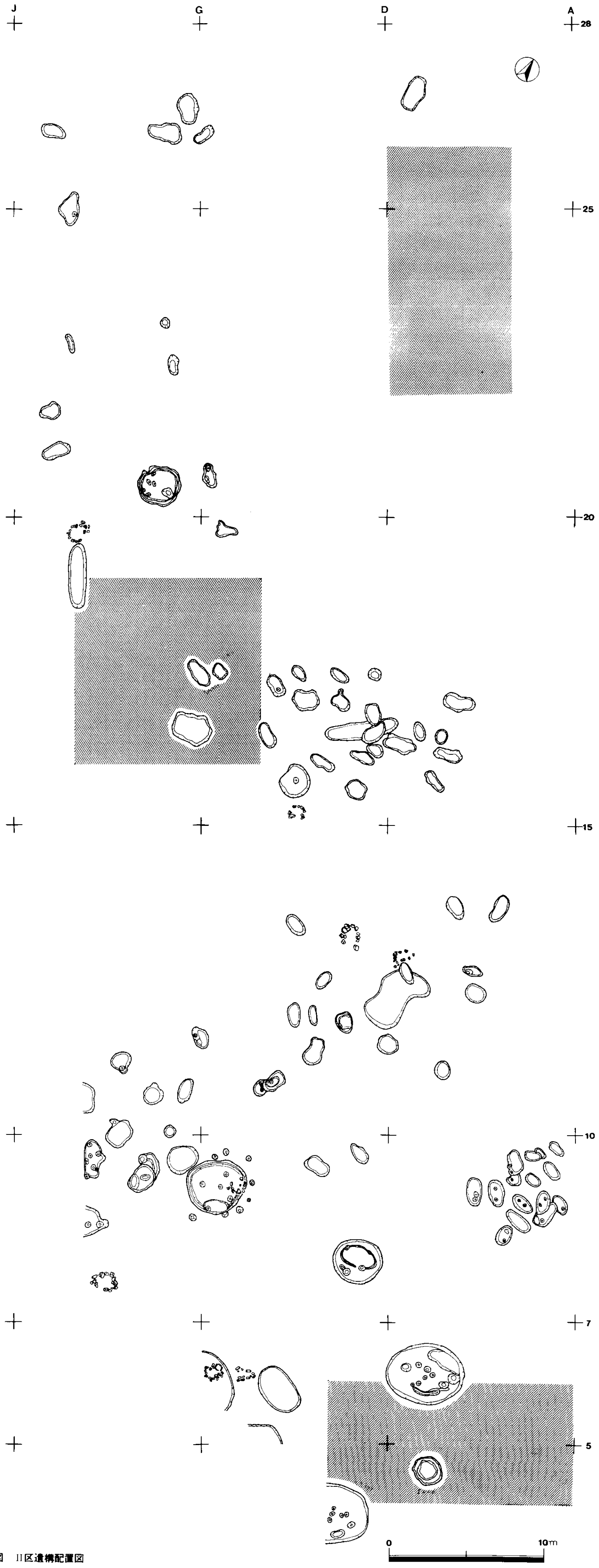
Ⅱ区17ライン以南でⅡ層上面より多数の土坑を検出したためこの面における精査を徹底する。６月２日10－Ｂグリッドで再び土坑群を確認し、先に検出された土坑群と併行して調査を行う。６月20日５ライン以南２層上面にて、多量の土器の出土を見る。７月１日土坑群調査後さらにローム まで掘り下げ、20－Ｇグリッドで ＳＩ02、８－Ｆグリッドで ＳＩ17、８－Ｄグリッドで ＳＩ18の確認がなされる。７月２日Ⅲ区も調査することと決定され、７月21日よりⅢ区表土除去と南側斜面の伐根を行う。

７月28日よりＳＫ05人骨調査のため山口敏国立科学博物館人類研究部長が来跡、30日まで調査を行なう。

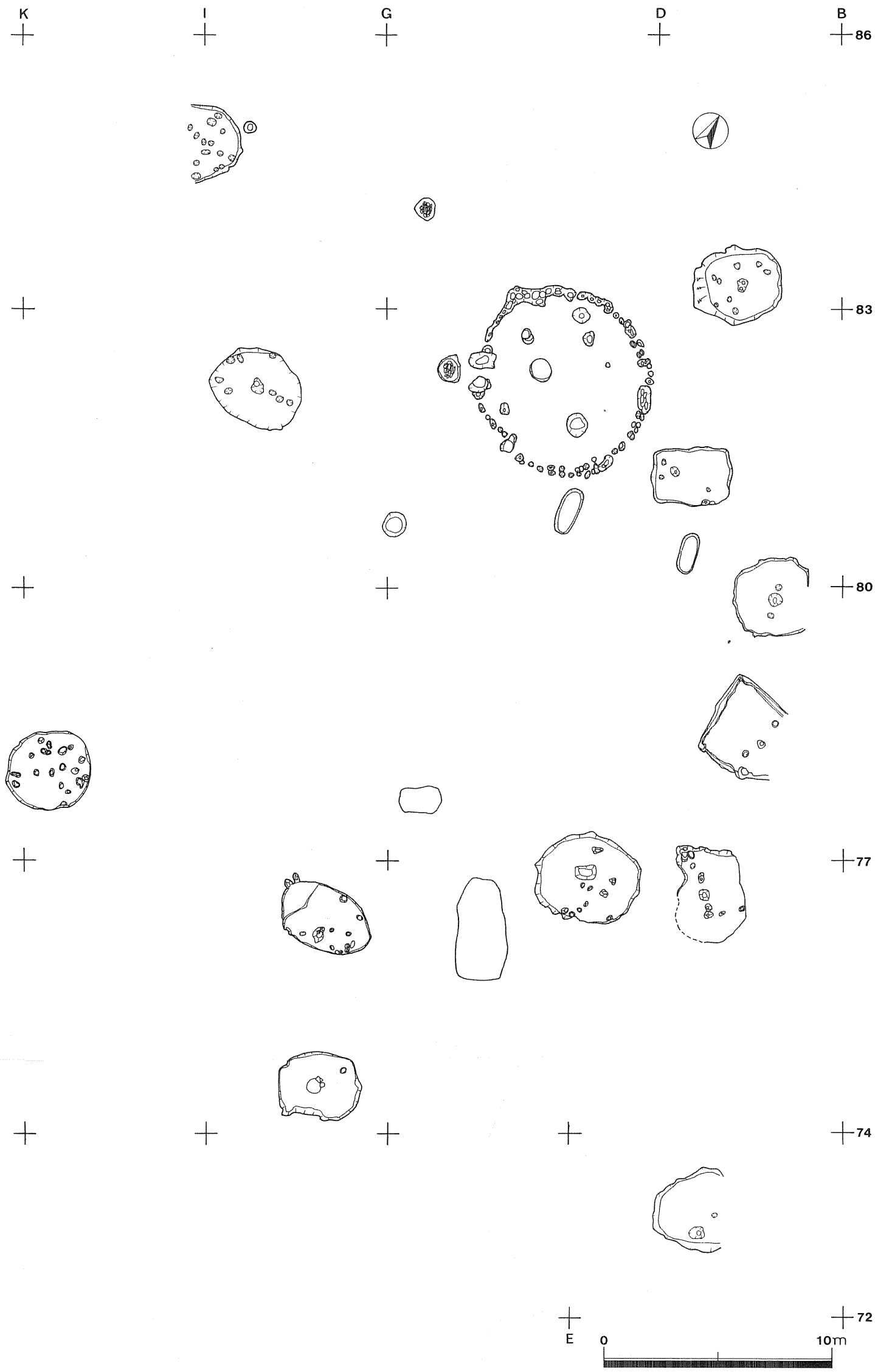
８月１日Ⅲ区よりＳＩ03を始めとして15軒の住居跡を確認し、Ⅱ区と併行して調査を進める。８月16日よりⅢ区南側斜面にＡ・Ｂ２本のトレンチを設定したが遺構・遺物はない。

９月１日より、Ⅲ区住居跡の実測、Ⅱ区では５ライン以南の掘り下げに全力を注ぎ、５軒の住居跡を確認し、これからの実測を行ない10月８日ＳＩ24の写真撮影を行なって藤株遺跡の調査を終了した。

尚、調査期間中７月19日に林謙作北海道大学助教授、８月６日に小林達雄国学院大学助教授、９月23日に坪井清足奈良国立文化財研究所長の三氏が来跡され、御指導、御助言を賜わり記して謝意を表したい。



第4図　II区遺構配置図



第5図　III区遺構配置図

第４章　調査の記録

第１節　検出遺構

調査で発見された遺構は、住居跡24軒・土坑87基・Ｔピット２基・配石遺構１基・埋甕１基井戸１基である。土坑を除けばその他の遺構は全て地山ローム面で確認されたものである。

１．住居跡

検出された住居跡は24軒で、Ⅰ区１、Ⅱ区８、Ⅲ区15である。中には、調査地域外に及ぶため一部のみを検出したものもあり、また、出土遺物が全くなく時期不明のものもある。

ＳＩ　01竪穴住居跡　（第６図）

検出地区　　37－Ｌ・Ｍグリッド　54年の分布調査で検出されたものである。

規模・形態　2.9×2.5ｍの隅丸方形の住居跡である。柱穴は四隅にあり、二回建て替えられたものと考えられる。壁は、低くゆるく立ち上がり、床面はしっかりしており硬い。炉はない。

出土遺物　ナシ

時期　不明

ＳＩ　02竪穴住居跡　（第７図）

検出地区　　20－Ｇ・Ｈ

規模・形態　直径2.3ｍの円形を呈する。床は凹凸しておりやわらかい。床面に小ピットがある。周溝は幅約15cm、深さ５cmで溝内に小ピットがある。壁高は15cmほどでほぼ垂直に立ち上がる。炉はない。

出土遺物　（第68図１、74図１）

撚糸文を施した土器下半が出土している（68図１）。石器は石錘１点・凹石３点が出土している。

時期　円筒下層ｂ式期？

ＳＩ　03竪穴住居跡　（第８図）

検出地区　　73－Ｇ

規模・形態　径3.6ｍほどの円形を呈する。床は平担で硬いが、中央部に径0.8ｍほどの浅い落

ちこみがある。壁は10cmほどでゆるく立ち上がる。炉・柱穴はない。埋土中に扁平な凝灰岩がある。

出土遺物　（第68図２～９、第74図２～５）

土器は、磨消手法によって沈線内に縄文を残すものと、縄文のみを施した粗製土器の破片が出土している。石器は石錘１点、凹石３点が出土している。

時期　縄文後期

SI　04竪穴住居跡　（第９図）

検出地区　　76－G

規模・形態　2.8×4.2ｍで東西に長い楕円形を呈する。床面は平坦で硬い。柱穴と考えられるのは５個で、いずれも深さ15～20cmである。壁は10cm前後の高さである。焼土は中央東側に0.6×10ｍほどの範囲で広がる。焼土上の扁平な凝灰岩は焼けていない。

出土遺物　（第14図６）

土器は出土しなかったが、石錘が１点出土している。

時期　不明

SI　05竪穴住居跡　（第10図）

検出地区　　77・78－J

規模・形態　3.4×4.1ｍの南北に長い楕円形を呈する。床面は平坦で硬い。ピットは16個ほどであるが、柱穴と思われるのは深さ14～21cmほどのものである。炉はないが、西側壁ぎわに40×40cmの範囲で焼土が広がる。壁の高さは約10cmである。

出土遺物　（第68図10～13、第74図７・８、第75図１～３）

土器は、撚糸文の施されたものと（11・12・13）、口縁部文様帯に刺突を加えたもの（10）とがある。石器は凹石２点（７・８）、石錘３点（１～３）が出土している。

時期　円筒下層ｂ式期

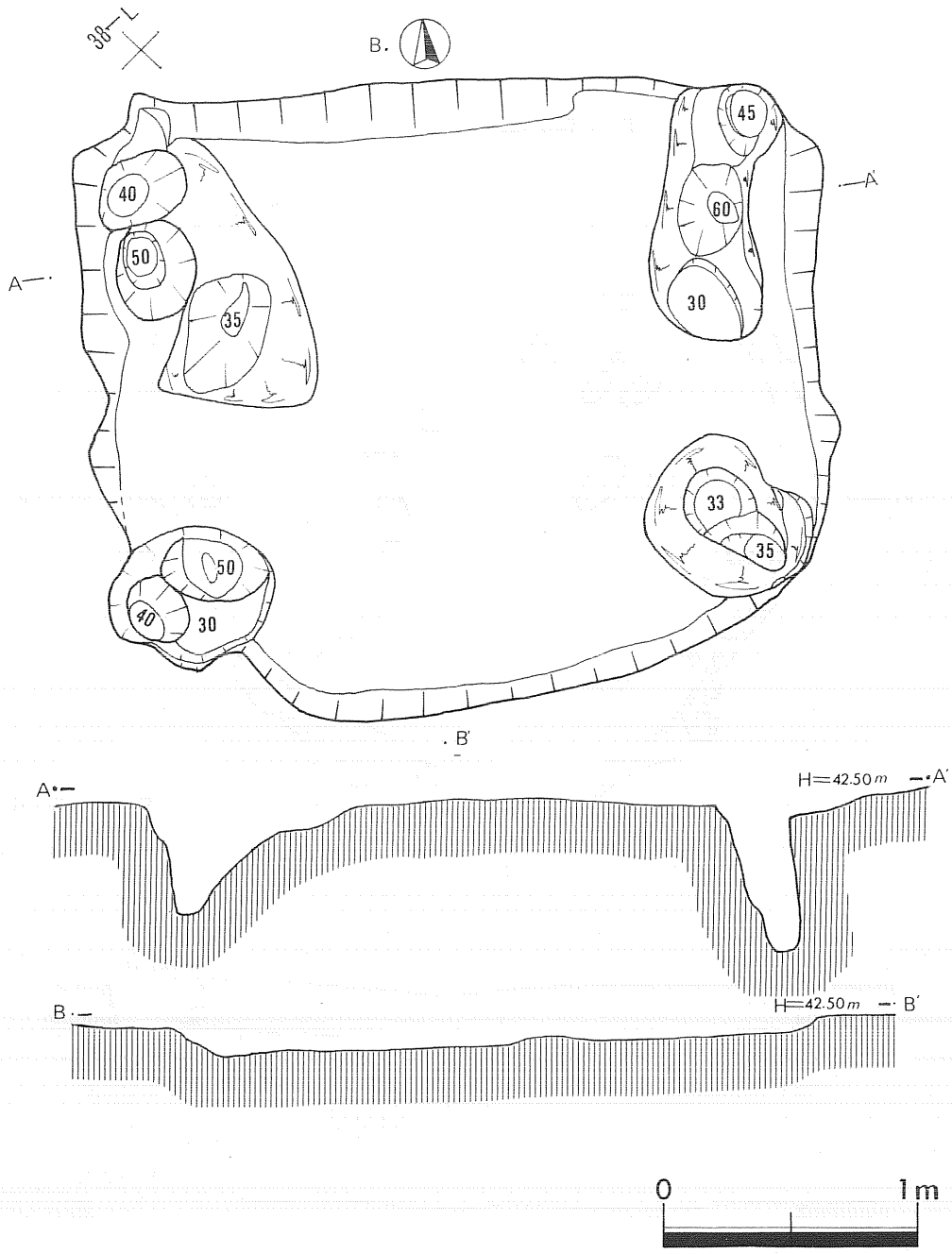
SI　06竪穴住居跡　（第11図）

検出地区　　82－H

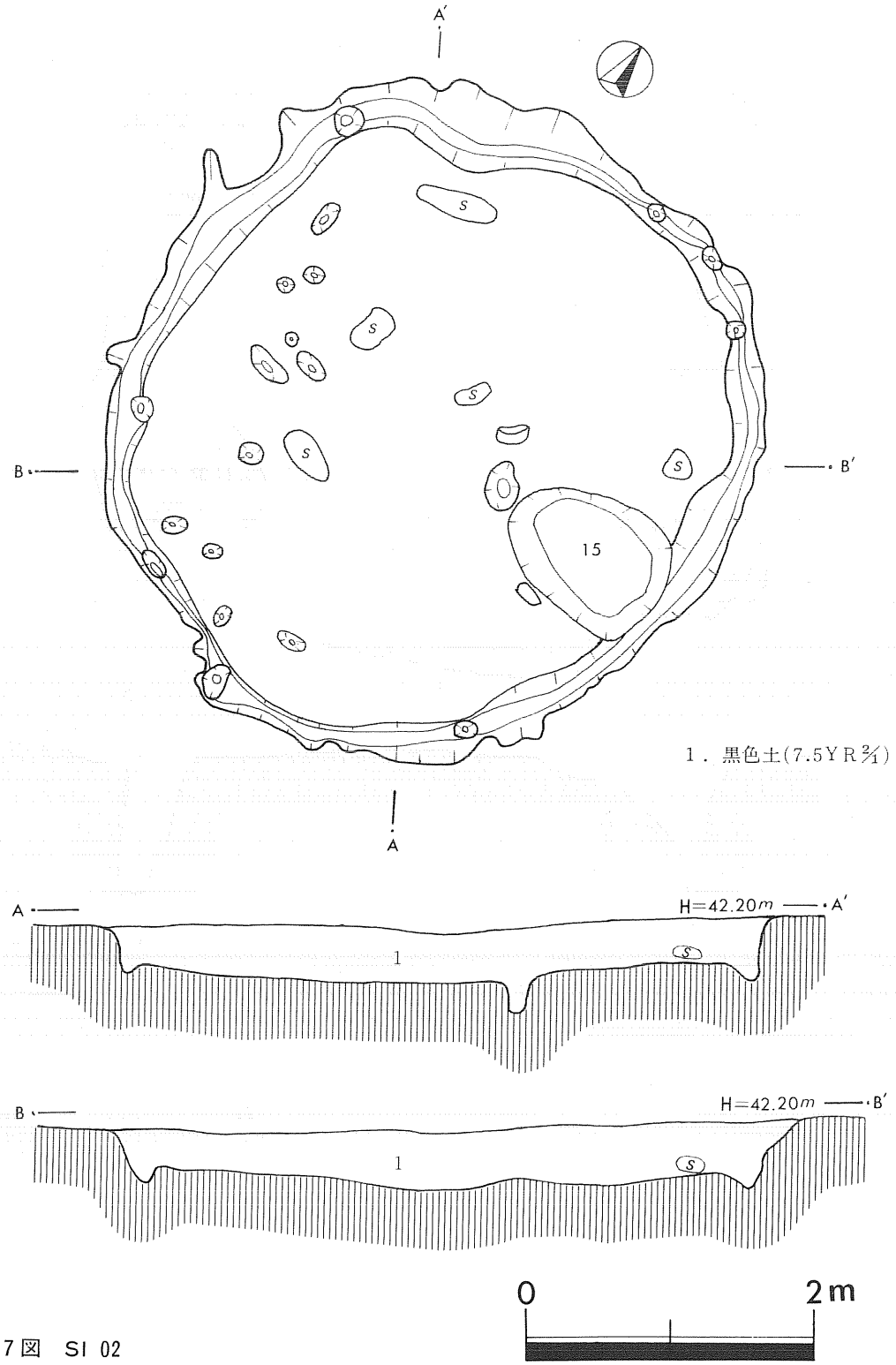
規模・形態　3.2×3.9ｍの東西に長い楕円形を呈する。床面は平坦で硬い。柱穴は５個であろう。中央部に径70cmほどの浅い落ちこみがある。壁は北西で確認できるのみである。

出土遺物　ナシ

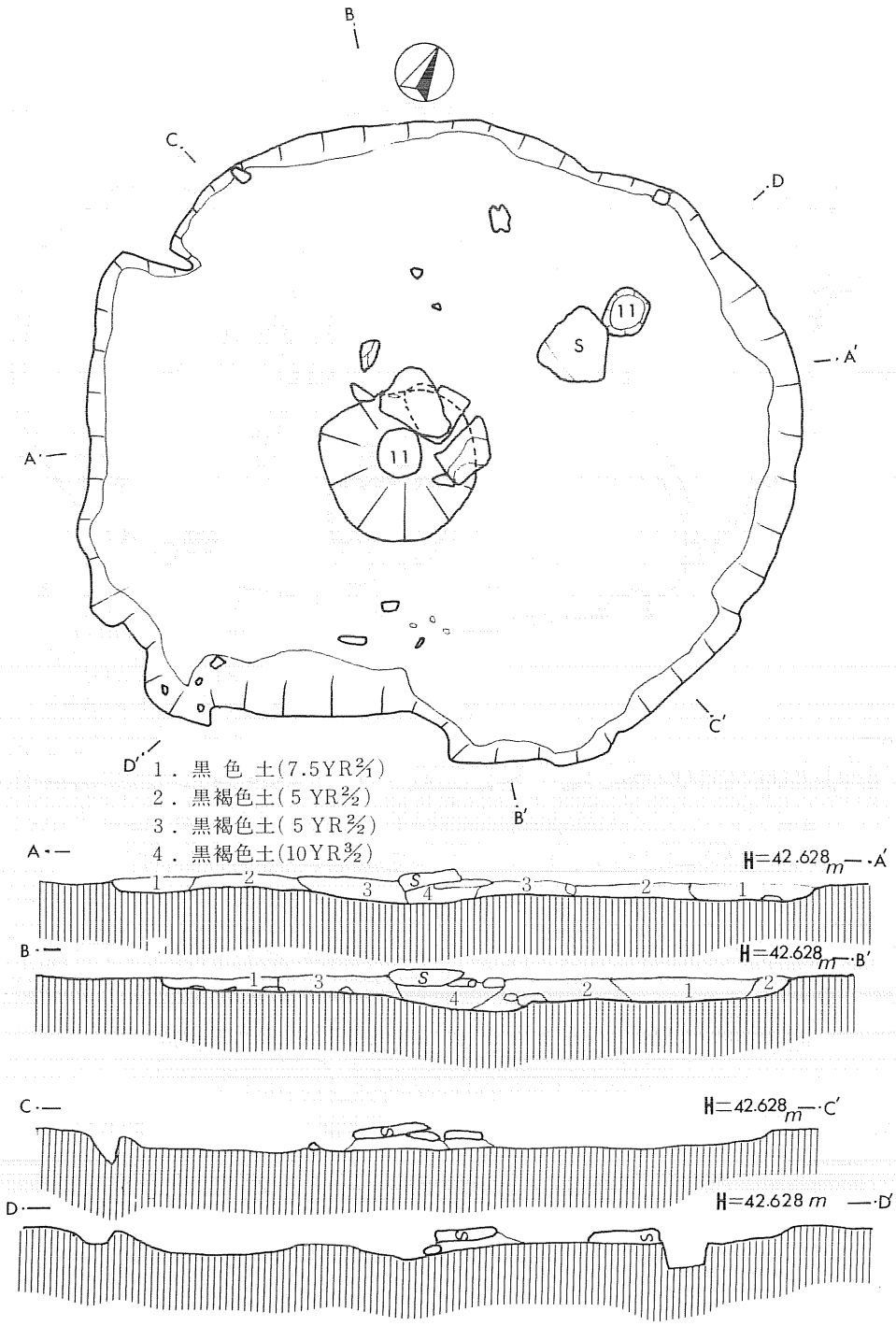
時期　不明



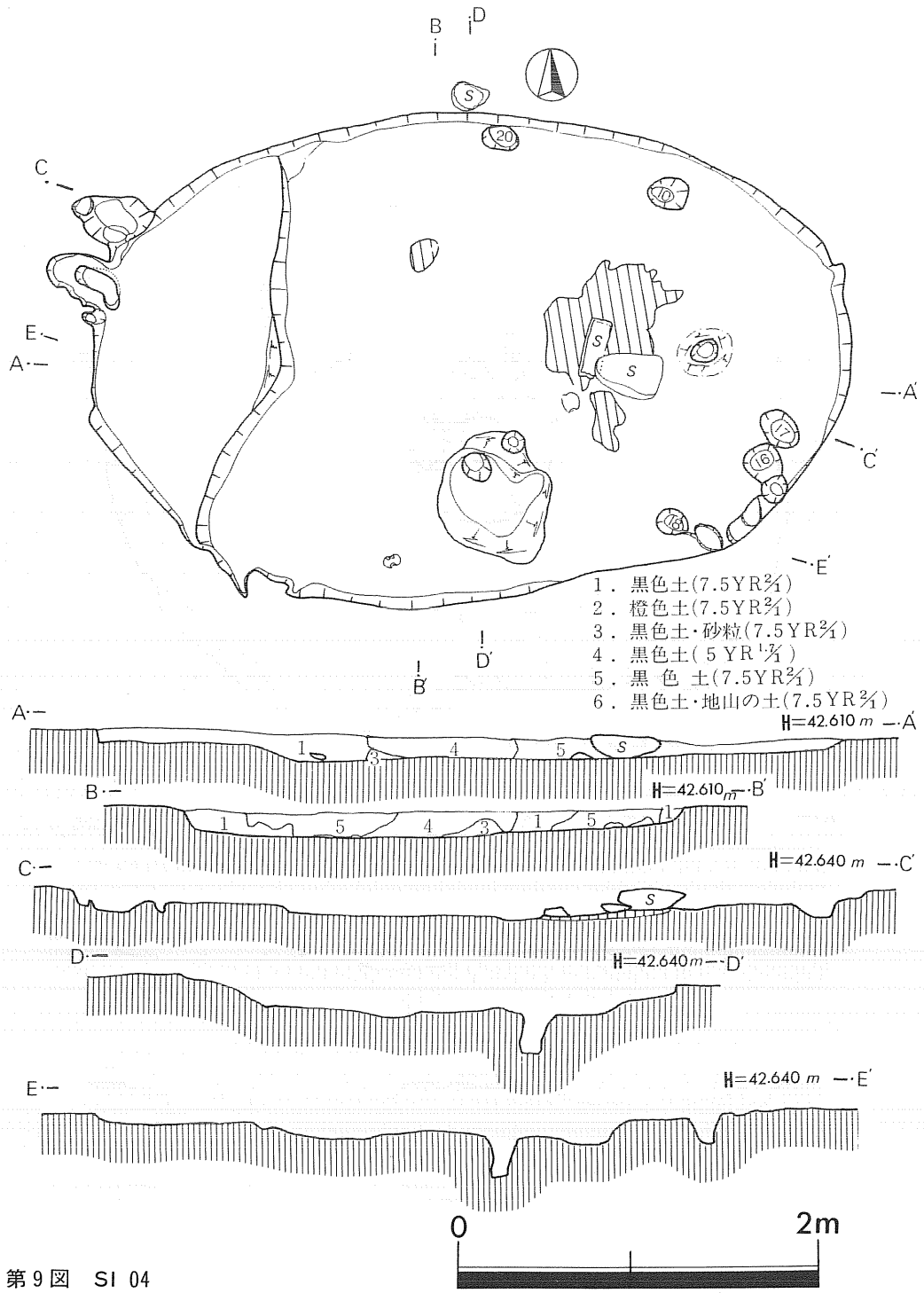
第6図　SI 01



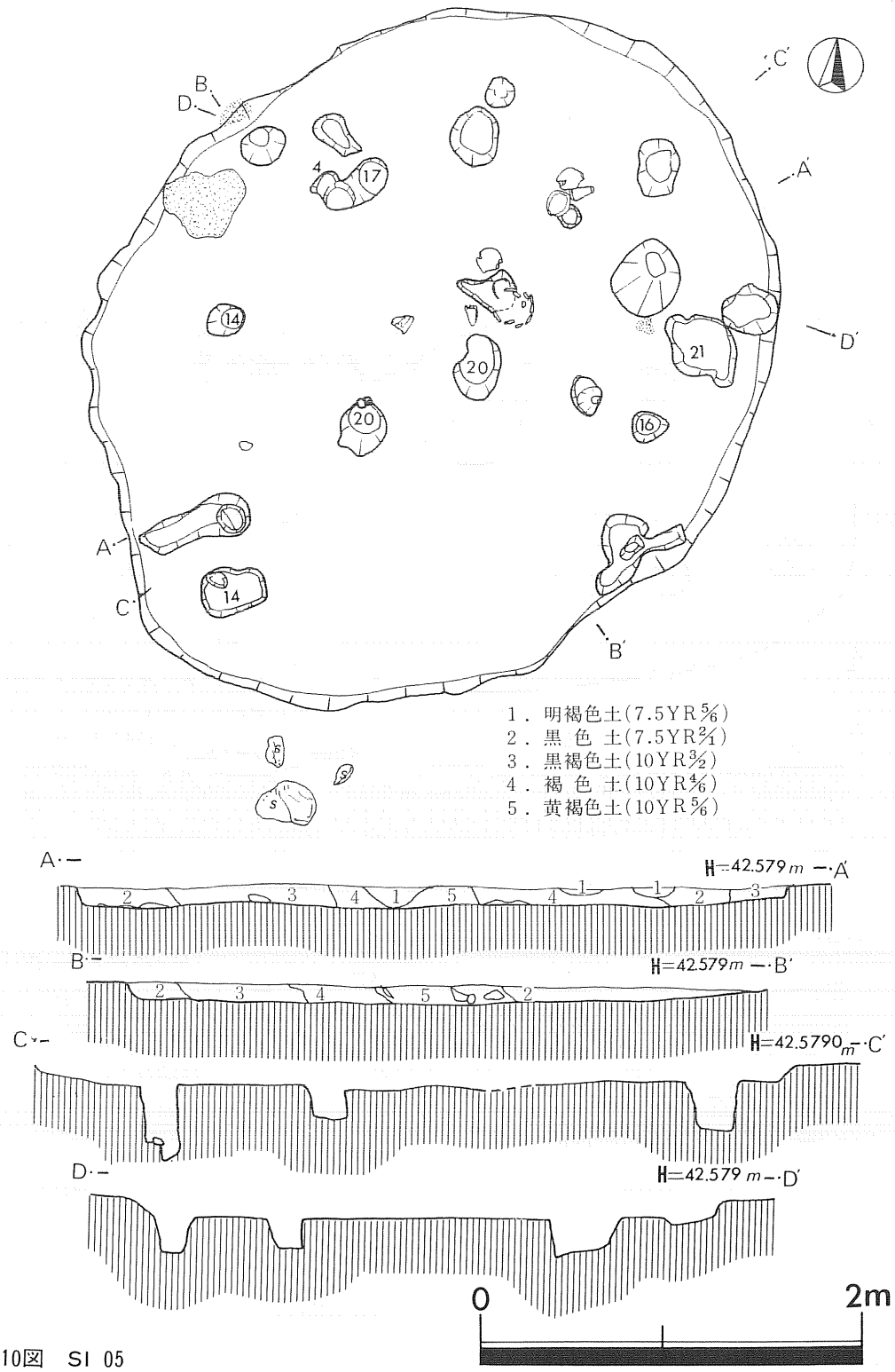
第7図　SI 02


B
C
D
A'
A
11
S
11
C'
D'
B'
1．黒 色 土(7.5YR2/1)
2．黒褐色土(5 YR2/2)
3．黒褐色土(5 YR2/2)
4．黒褐色土(10YR3/2)
A
H=42.628m
A'
B
H=42.628m
B'
C
H=42.628m
C'
D
H=42.628 m
D'
0
2m

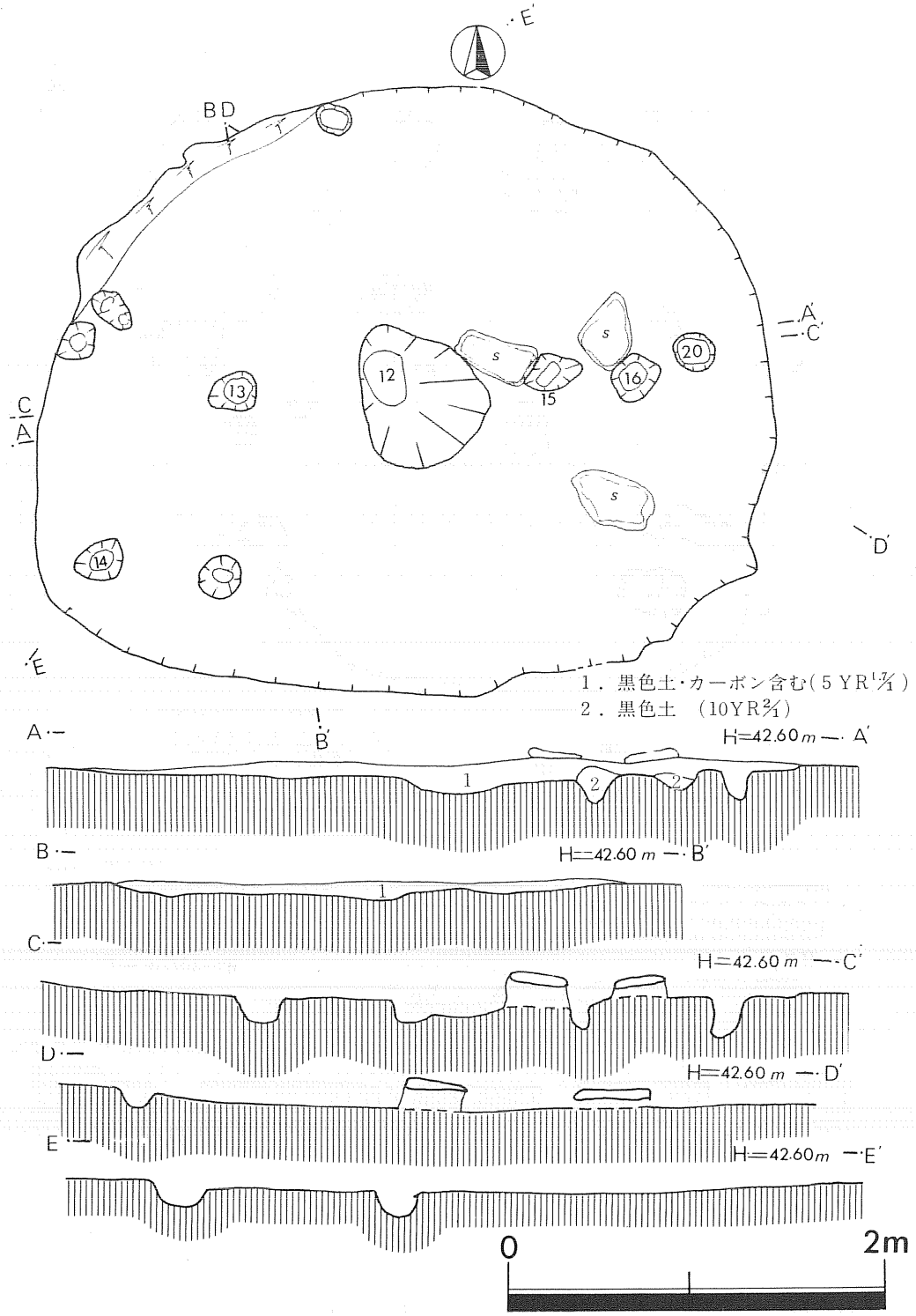
第8図　SI 03


B
D
C
E
A
A′
C′
E′
B′
D′
S
20
10
17
16
18
1．黒色土(7.5YR2/1)
2．橙色土(7.5YR2/1)
3．黒色土・砂粒(7.5YR2/1)
4．黒色土(5YR1.7/1)
5．黒 色 土(7.5YR2/1)
6．黒色土・地山の土(7.5YR2/1)
H=42.610 m
H=42.610 m
H=42.640 m
H=42.640 m
H=42.640 m
0
2m

第9図　SI 04


A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
4
17
14
20
20
21
16
14
1．明褐色土(7.5YR5/6)
2．黒 色 土(7.5YR2/1)
3．黒褐色土(10YR3/2)
4．褐 色 土(10YR4/6)
5．黄褐色土(10YR5/6)
H=42.579m
H=42.579m
H=42.5790m
H=42.579m
0
2m

第10図　SI 05


E'
BD
A'
C'
C
A
12
13
14
15
16
20
s
D'
E
1．黒色土・カーボン含む(5YR1/7)
2．黒色土 (10YR2/1)
A
B'
H=42.60m A'
B
H=42.60m B'
C
H=42.60m C'
D
H=42.60m D'
E
H=42.60m E'
0
2m

第11図 SI 06

SI 07竪穴住居跡　（第12図）

検出地区　　84－H　調査区域外のため、全体のほぼ半分を調査しただけである。

規模・形態　短径が3mほどの楕円形を呈すると思われる。床面は平坦であるが、しまりがない。柱穴は、深さ25cm前後のものが4個であろう。壁は高さ10cmほどでゆるく立ち上がる。炉はない。

出土遺物　（第68図14～17、第72図1～3）

土器は、綾絡文を口縁部文様帯にもち、直立するものがある（15）。石器は、断面形がカマボコ形を呈する石ベラ状の石器（1・3）で1は両面から調整を加えているが、3は自然面を残している。（2）は石錐であろうか。

時期　円筒下層b式期

SI 08竪穴住居跡　（第13図、図版8）

検出地区　　76・77－D

規模・形態　4×4.5mのほぼ円形を呈する。床面は平坦で硬い。柱穴は3個と思われる。中央部に90×60cm、深さ13cmほどの落ちこみがある。壁は高さ10cmほどでゆるく立ち上がる。炉はないが、南側に2ケ所の焼土の広がりがみられる。

出土遺物　（第68図18～23、第71図4・5、第74図4、第75図1）

撚糸文を施した土器下半部がある。石器は石ベラ状の石器（第72図4・5）と長軸端を打ち欠いた石錘（第75図4、第76図1）が出土している。

時期　円筒下層b式期

SI 09竪穴住居跡　（第14図、図版8）

検出地区　　78－C・D　東側一部は調査区域外のため未調査である。

規模・形態　3.5×3.5mの隅丸方形を呈すると思われる。床面は平坦で硬い。中央部に、1×1.2mほどの浅い落ちこみがあり、焼土が広がる。周溝は幅20cm、深さ18cmほどで、中に深さ17cmほどのピットがある。

出土遺物　（第69図1～15、第72図6～10、第76図2～4、図版21）

土器には撚糸文を胴部に施したもの（第69図1・2・6・10・11・15）と口縁部文様帯に綾絡文を施したもの（第69図3・4・8・9・12）とがある。いずれも口縁部が外反し、8のごとく補修孔を有するものや、12のように三段の刺突列があり、隆帯によって口縁部と体部とに区画されるものがある。他に縄文のみのもの（5・7・14）がある。石器は、縦型石匙が3点で、（72図6・9）は主要剥離面を残すものである。（7）は刺突具に近いものであろう。（72図

8・10）は横型石匙で片面調整のものである。（第76図3）は扁平打製石器で、一部をすっている。磨製石斧(第76図4）は石皿に転用したものであろうか。

時期　円筒下層ｂ式期

SI 10竪穴住居跡　（第15図）

検出地区　79・80－B　東側一部は調査区域外のため未調査である。

規模・形態　3.0×3.7ｍで南北に長い楕円形を呈す。床面は平担で硬い。柱穴は2個である。炉はないが、中央部に径55cmほどの浅い落ちこみがある。壁はゆるく立ち上がる。

出土遺物（第76図5）

扁平打製石器が出土している。

時期　不明

SI 11竪穴住居跡　（第16図）

検出地区　81－C

規模・形態　2.5×3.5ｍで東西に長い隅丸方形を呈する。床面は平担で硬い。柱穴は3個確認している。壁はほとんどない。

出土遺物　（第73図3～6）

土器の出土はなく、石器だけである。石ベラ状石器（3）、石鏃（5）、不定形石器（4・6）が出土している。

時期　不明

SI 12竪穴住居跡　（第17図）

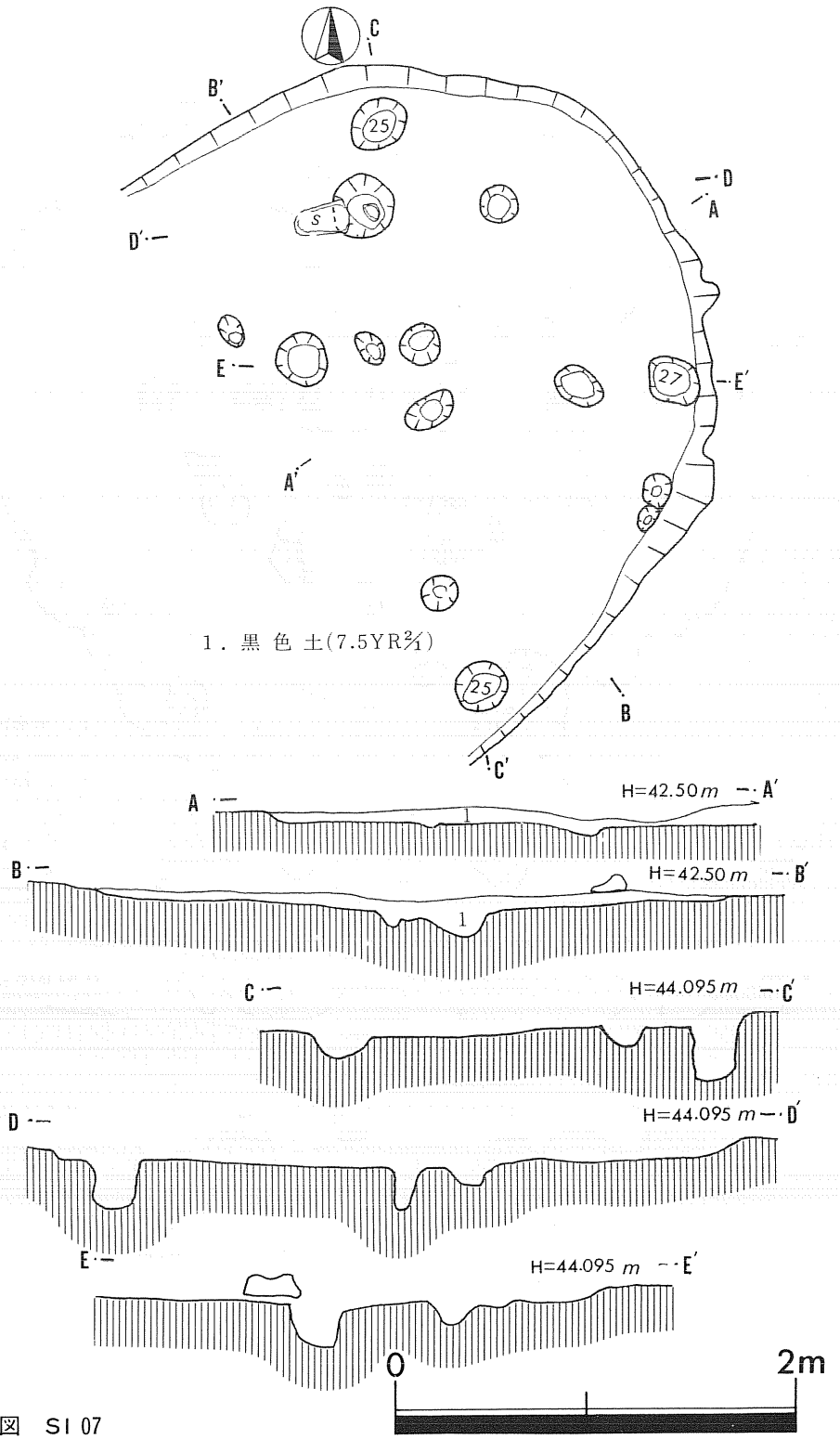
検出地区　83－B・C

規模・形態　径3.7ｍの円形を呈す。床面は中央に向かって傾斜する。柱穴は3個である。壁はゆるく立ち上がる。炉はない。

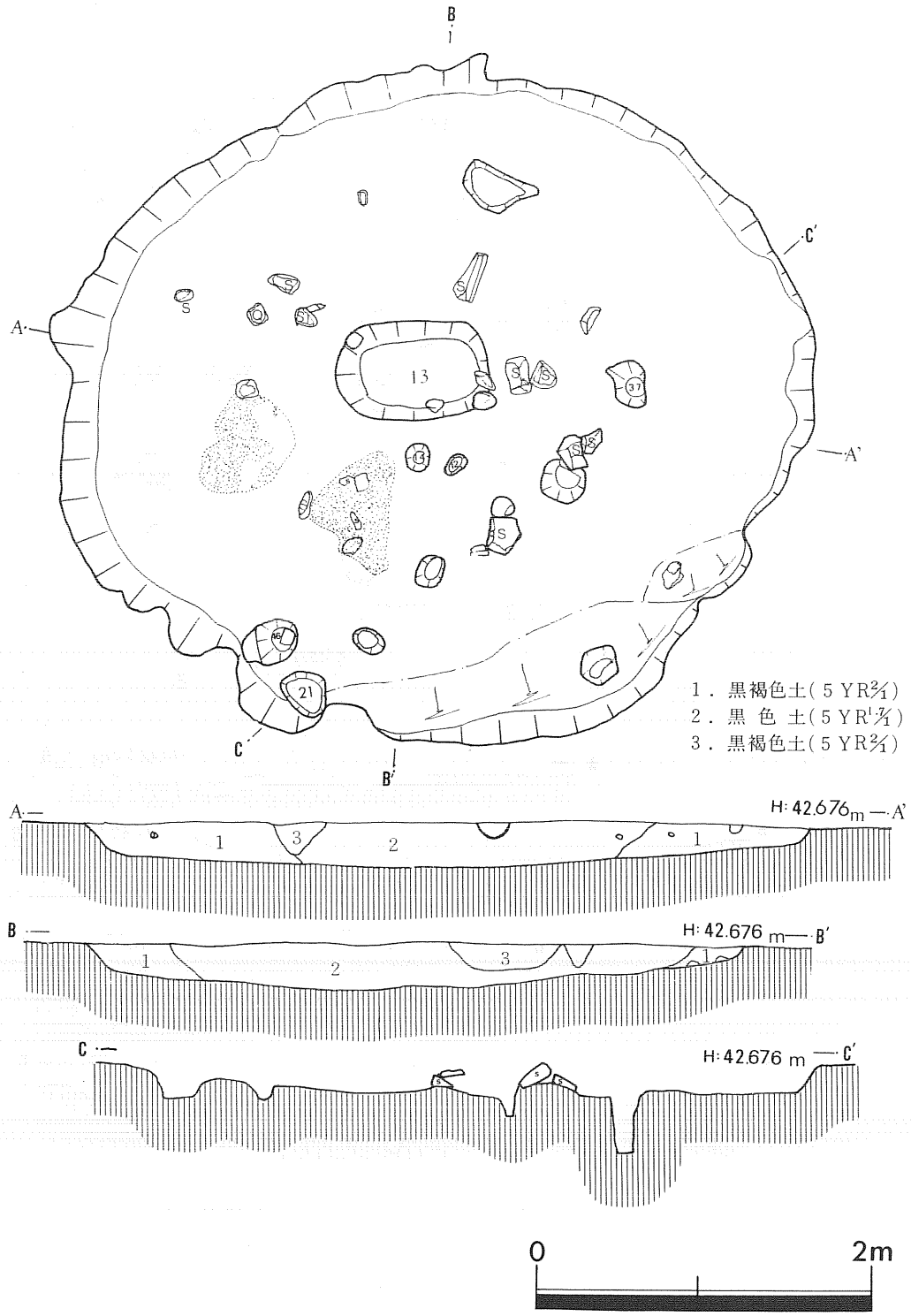
出土遺物　（第69図16～19、第73図7・8、第76図6）

土器は木目状撚糸文（第69図16・19）、撚糸文（第69図17・18・22）を施した土器が出土している。石器は、不定形石器（第73図7・8）が出土している。8はスクレイパー的なものである。（第76図6）は両面を打ち欠いた扁平打製石器である。

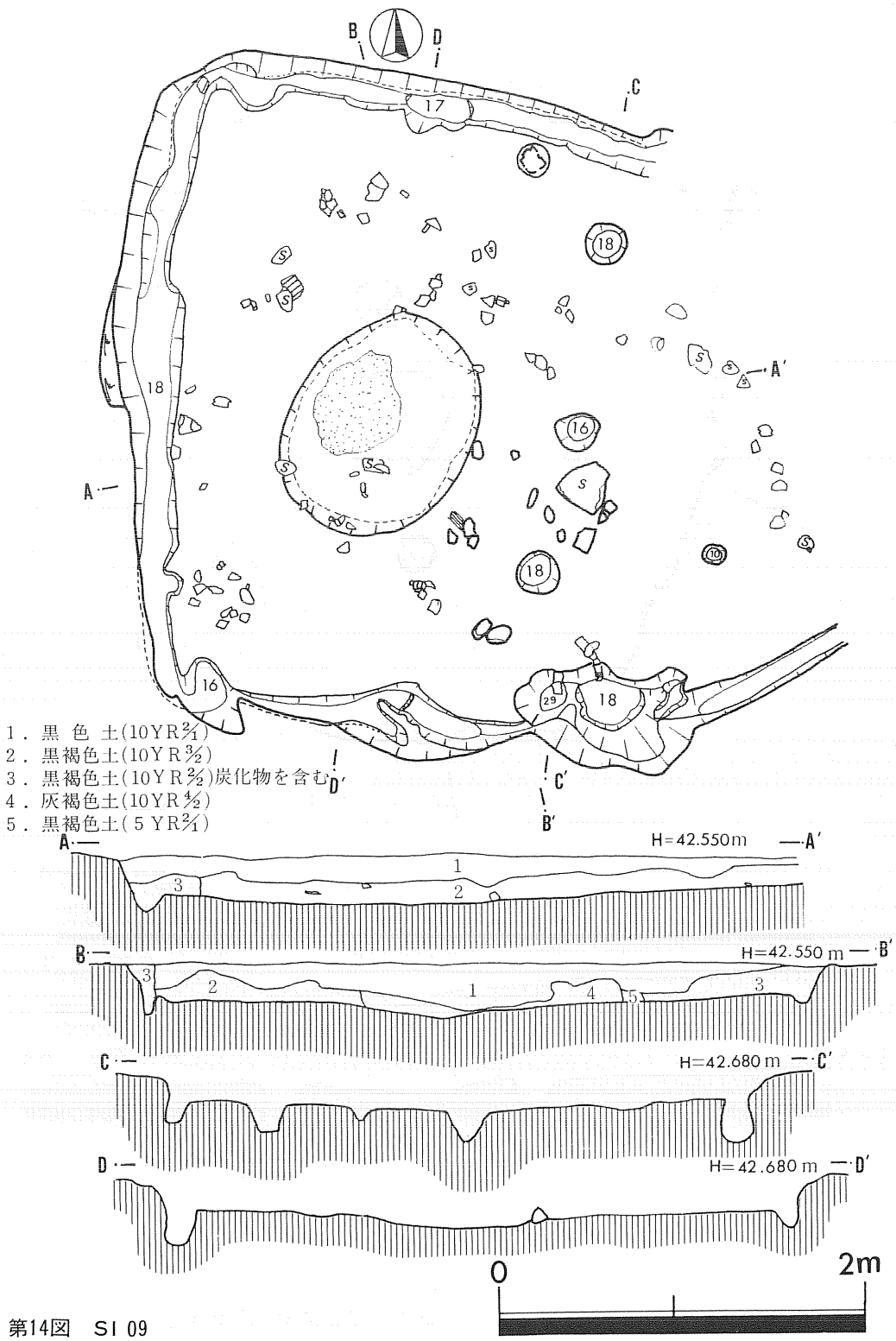
時期　円筒下層　ｄ式期


C
B'
25
D
A
D'
S
E
27
E'
A'
1．黒 色 土(7.5YR2/1)
25
B
C'
A
H=42.50m
A'
1
B
H=42.50m
B'
1
C
H=44.095m
C'
D
H=44.095m
D'
E
H=44.095m
E'
0
2m

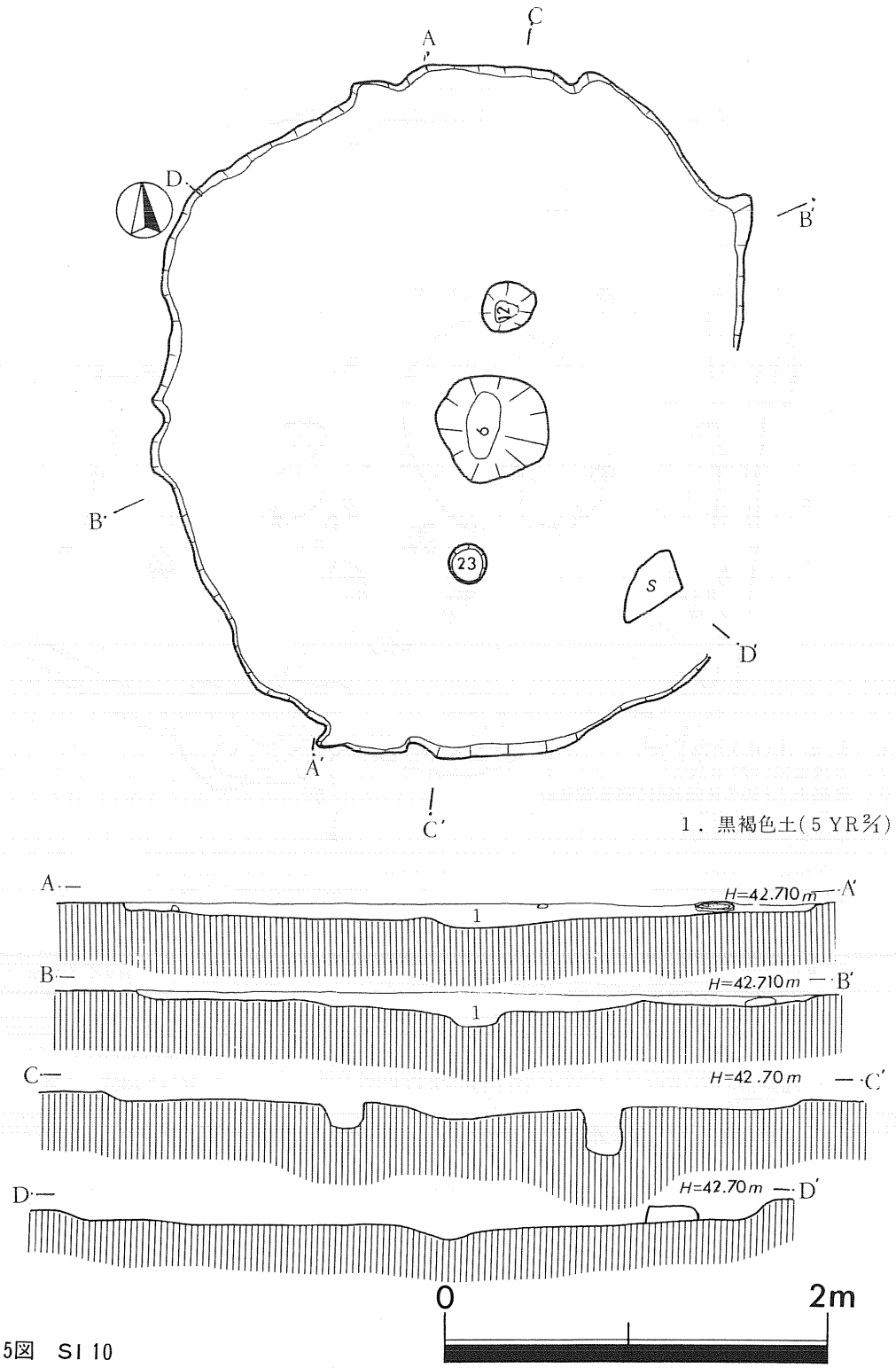
第12図　SI 07


B
C'
A
A'
13
37
21
C
B'
1．黒褐色土（5YR2/1）
2．黒　色　土（5YR1.7/1）
3．黒褐色土（5YR2/1）
A
H: 42.676m
A'
B
H: 42.676 m
B'
C
H: 42.676 m
C'
0
2m

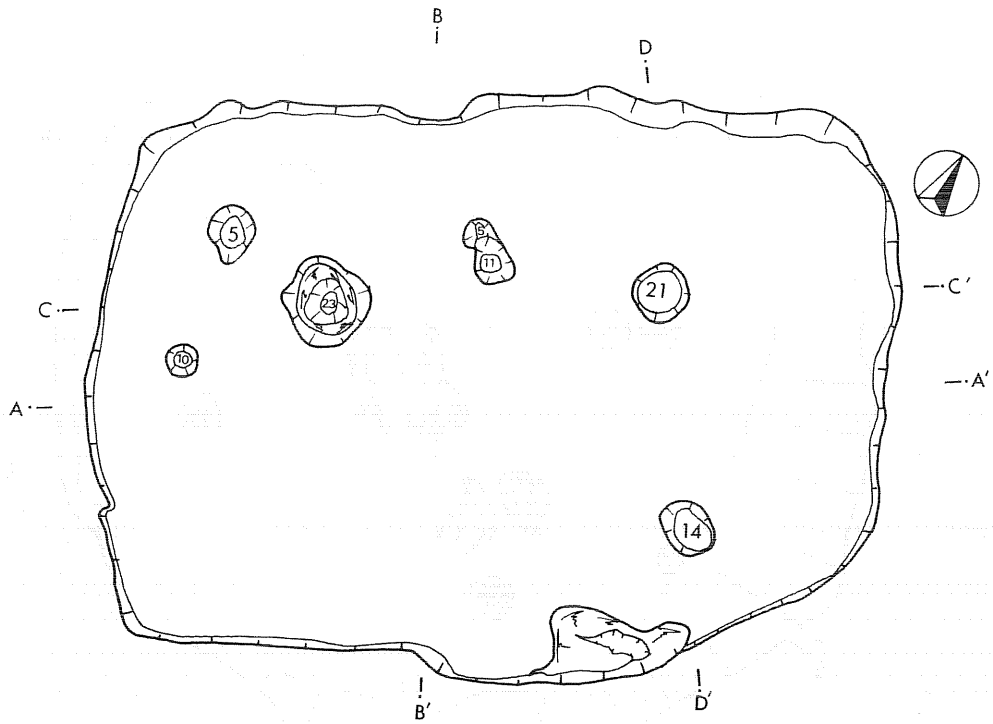
第13図　SI 08


B
D
C
17
18
16
29
10
S
A
A'
B'
C'
D'
1．黒 色 土(10YR2/1)
2．黒褐色土(10YR3/2)
3．黒褐色土(10YR2/2)炭化物を含む
4．灰褐色土(10YR4/2)
5．黒褐色土(5YR2/1)
H=42.550m
H=42.550 m
H=42.680 m
H=42.680 m
0
2m

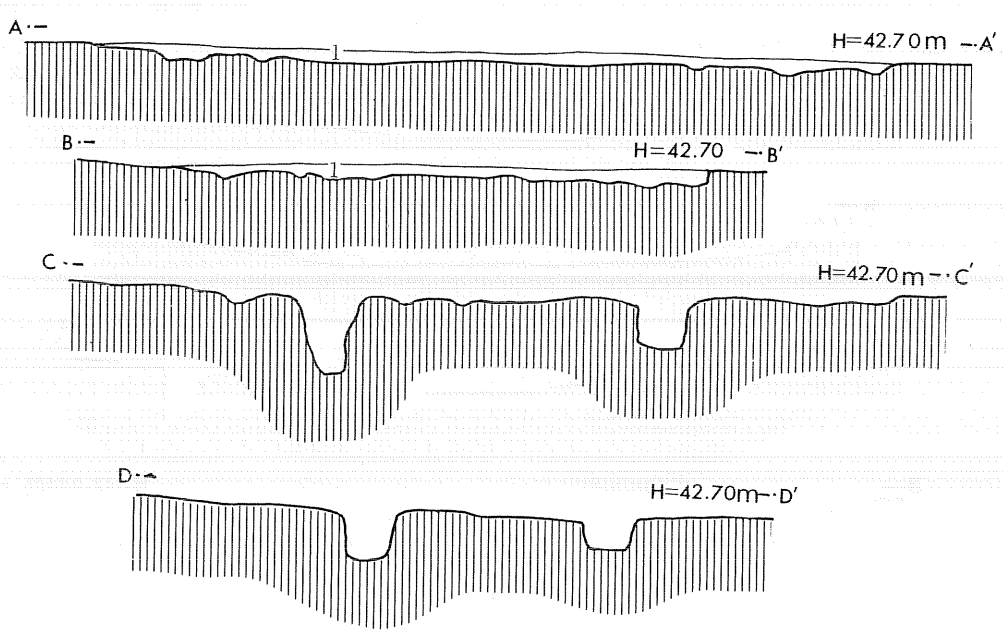
第14図　SI 09

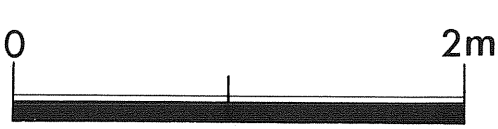

A
C
D
B'
B
23
S
D'
A'
C'
1．黒褐色土(5YR2/1)
A
H=42.710m
A'
1
B
H=42.710m
B'
1
C
H=42.70m
C'
D
H=42.70m
D'
0
2m

第15図　SI 10

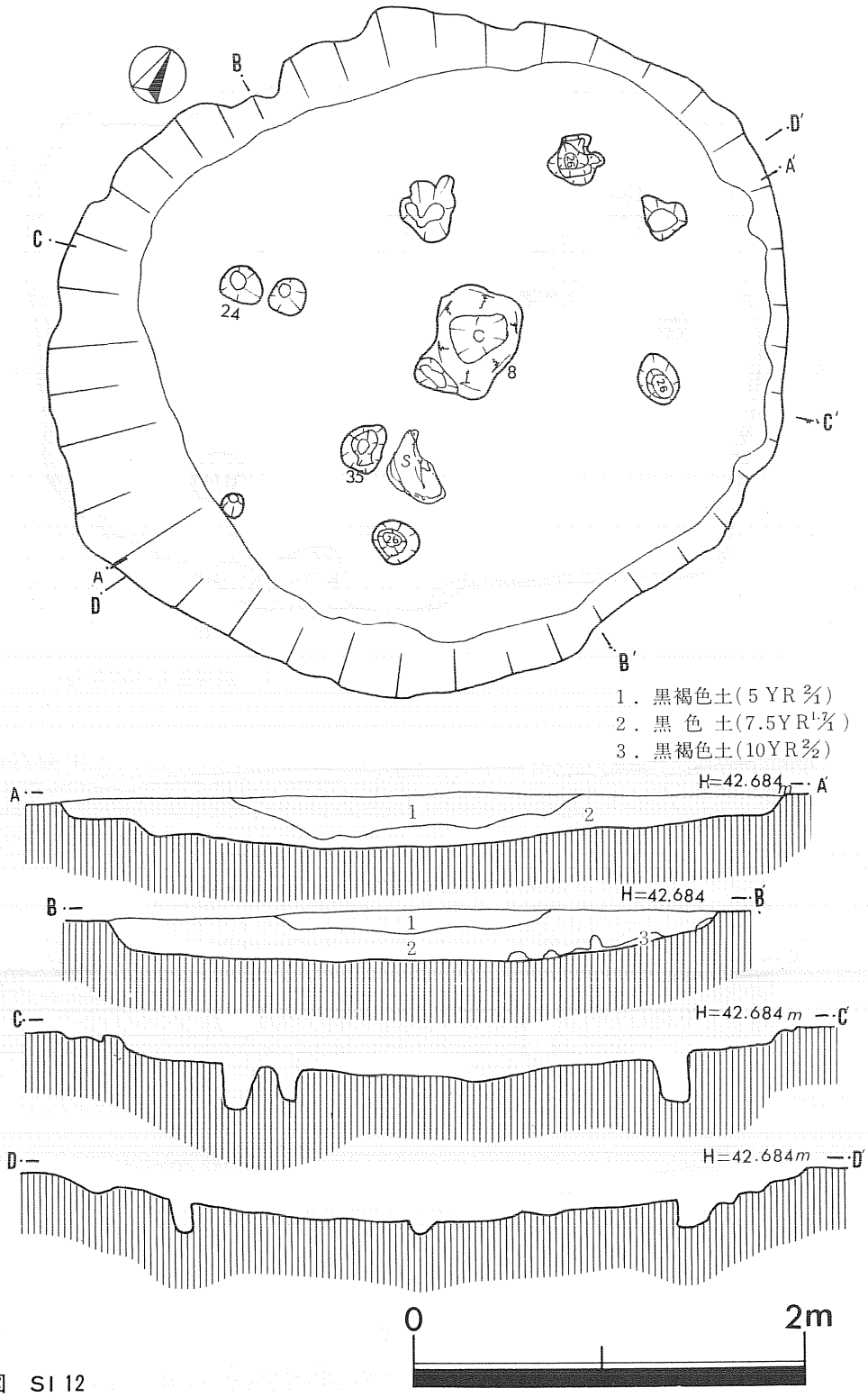


1．黒褐色土(10YR 2/2)





第16図　SI 11


B
D′
A′
C
24
8
26
C′
33
S
26
A
D
B′
1．黒褐色土(5YR 2/1)
2．黒 色 土(7.5YR 1.7/1)
3．黒褐色土(10YR 2/2)
A
H=42.684m
A′
1
2
B
H=42.684
B′
1
2
3
C
H=42.684m
C′
D
H=42.684m
D′
0
2m

第17図　SI 12

SI 13竪穴住居跡　（第18図）

検出地区　72・73－C　東側の一部は、調査区域外のため未調査である。

規模・形態　径3.7mの円形を呈するものと思われる。床面は平担で硬い。壁は、南側ではゆるく立ち上がり、北側では高さ20cmほどで直立する。柱穴・炉はない。

出土遺物　（第69図20～23、第70図１～３）

土器は、口縁部文様帯に縄文原体を横位に押圧したもので、口縁はやや外反する。２条の隆帯に刺突を加え、胴部には撚糸文を施している（第70図１～３）。

時期　円筒下層ｂ式期

SI 14竪穴住居跡　（第19図）

検出地区　76－C

規模・形態　壁は南北で削平されているが、径３mほどの円形を呈するものと思われる。床面は平担で硬い。柱穴は確認されていないが、中央に径76cmほどの浅い落ちこみがある。

出土遺物　（第70図４～13、図版21）

沈線文のみを施した土器（４・５）や、広い無文帯があり、磨消手法を用いて沈線内に縄文を残すもの（６・８・９）等がある。

時期　十腰内Ⅰ式期

SI 15竪穴住居跡　（第20図）

検出地区　77－F

規模・形態　床面の一部のみを確認したが、プランは明確でない。東側に焼土が広がる。

出土遺物　（第71図１～４、第90図１、図版32の１）

土器は、口縁部が内湾する粗製深鉢形土器の破片（第71図１・３・４）および沈線文を施した深鉢形土器（第71図２）などがある。（第90図１）は、口縁が波状を呈し、１つの花弁状の突起を有する。口縁部は無文でよく磨かれており、花弁状突起の下には半月状の短い隆帯が貼付されている。胴部は、縄文地に５本の沈線を引き、それを縦方向の鎖状に沈線でつないでいる。石器は出土していない。

時期　十腰内Ⅰ式期

SI 16竪穴住居跡　（第21図）

検出地区　75・76－E・F

規模・形態　床面が確認されたのみで、プランは明確でない。

出土遺物　（第73図９）

石ベラ状の石器が出土している。

時期　不明

SI 17竪穴住居跡　（第22図、図版９）

検出地区　　８・９－F

規模・形態　径3.5ｍの円形を呈する。床面は硬くしっかりしている。柱穴は壁外に９個あるが、西側では確認できなかった。周溝は幅８㎝、深さ10㎝ほどのものである。この住居は南側に0.8×1.7ｍの土坑をもつ。また、西側のＳＫ45（第46図）は、この住居跡に伴うものである。

出土遺物　ナシ

時期　十腰内Ｉ式期

SI 18竪穴住居跡　（第23図、図版９）

検出地区　　７・８－C

規模・形態　貼床住居である。貼床前の住居は径2ｍほどの円形のもので、貼床住居は径3.1ｍの円形を呈する。壁高は10㎝で垂直に立ち上がる。柱穴と炉はない。貼床は比較的軟かい。

出土遺物　ナシ

時期　不明

SI 19竪穴住居跡　（第24図、図版10）

検出地区　　５・６－E

規模・形態　2.4×3.4ｍで東西に長い楕円形を呈する。床は平坦で硬いが、壁はほとんどない。

出土遺物　（第73図10）

磨製石斧１点だけが出土している。厚さ１㎝ほどで、刃部・側辺部が破損している。

時期　不明

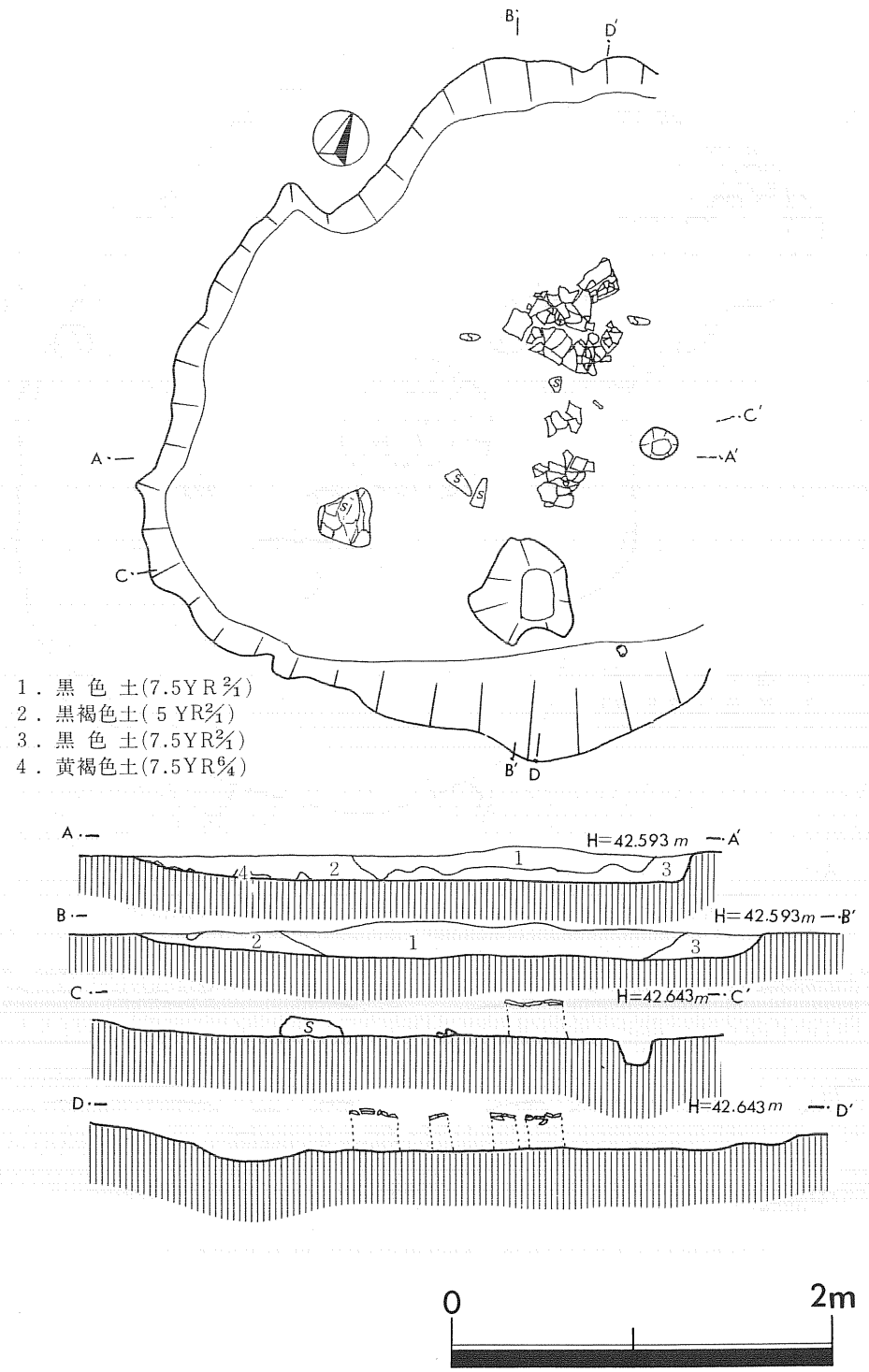
SI 20竪穴住居跡　（第25図）

検出地区　　５－E・F　全体の一部を調査しただけである。

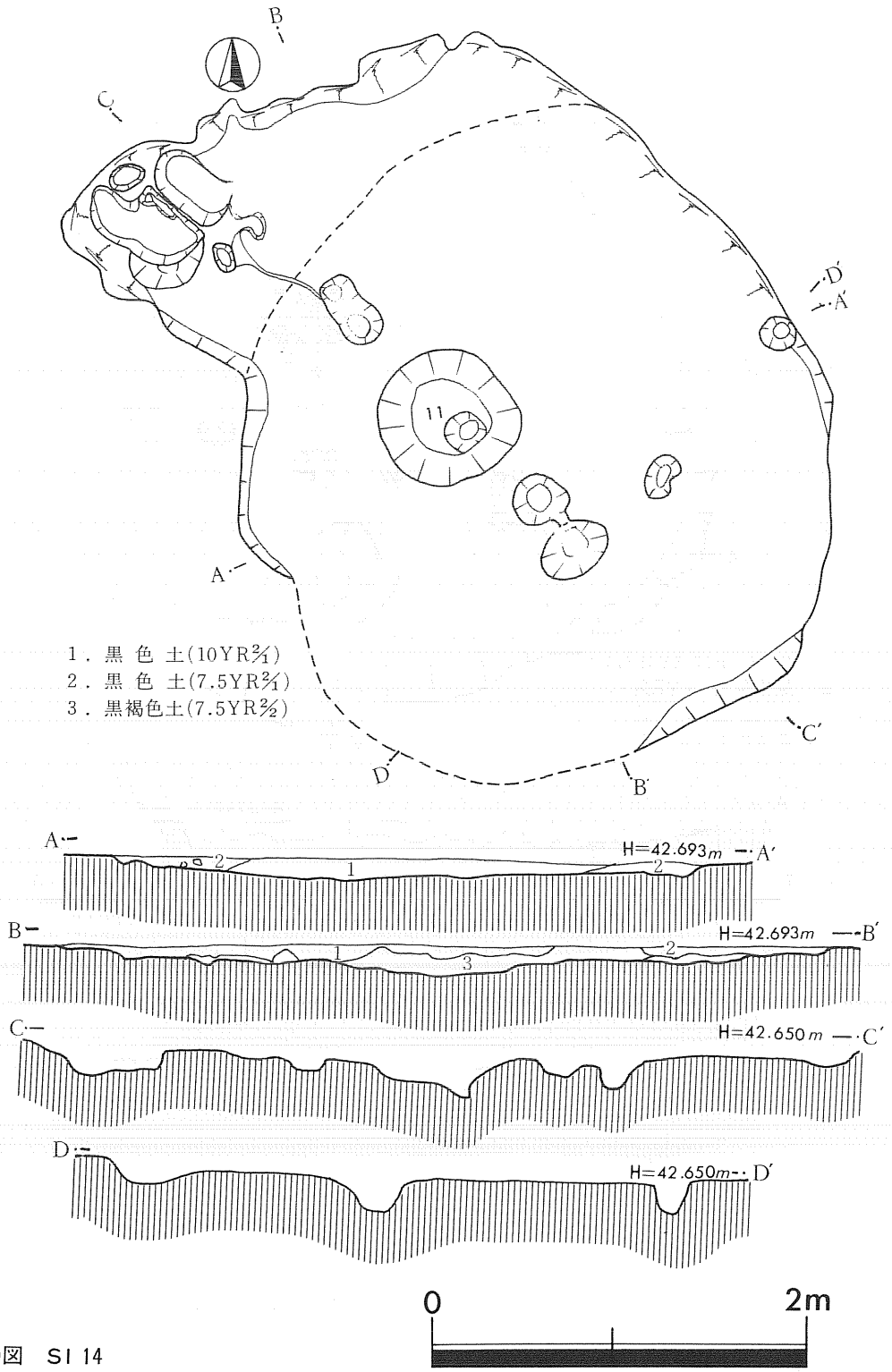
規模・形態　楕円形か隅丸方形を呈するものと思われる。

出土遺物　ナシ

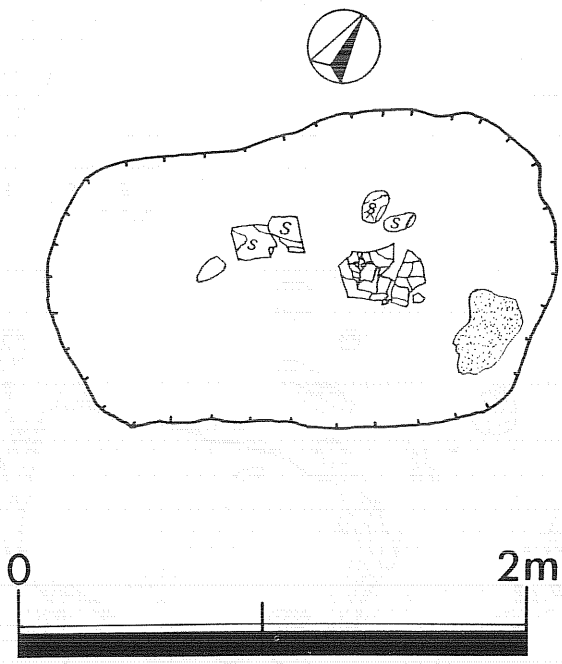
時期　不明


B
D′
A
A′
C
C′
S
B′
D
1．黒 色 土(7.5YR 2/1)
2．黒褐色土(5YR 2/1)
3．黒 色 土(7.5YR 2/1)
4．黄褐色土(7.5YR 6/4)
H=42.593 m
H=42.593m
H=42.643m
H=42.643 m
0
2m

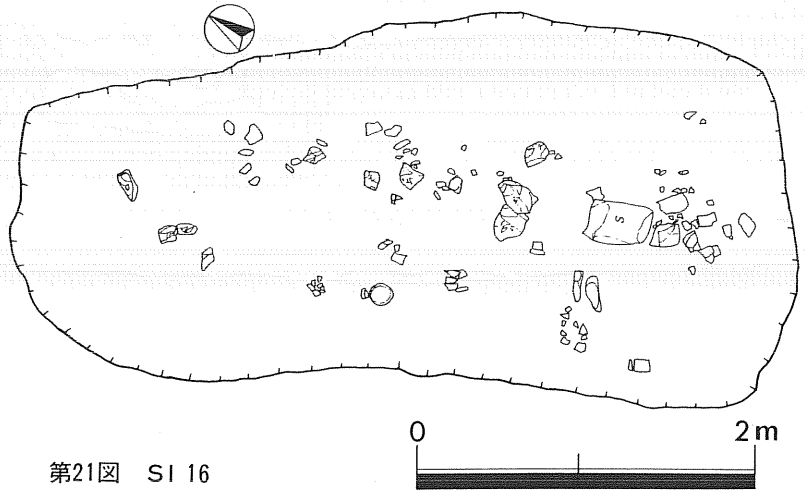
第18図　SI 13


B
C
D′
A′
11
A
1．黒 色 土(10YR2/1)
2．黒 色 土(7.5YR2/1)
3．黒褐色土(7.5YR2/2)
C′
D
B′
A
H=42.693m
A′
2
1
2
B
H=42.693m
B′
1
2
3
C
H=42.650m
C′
D
H=42.650m
D′
0
2m

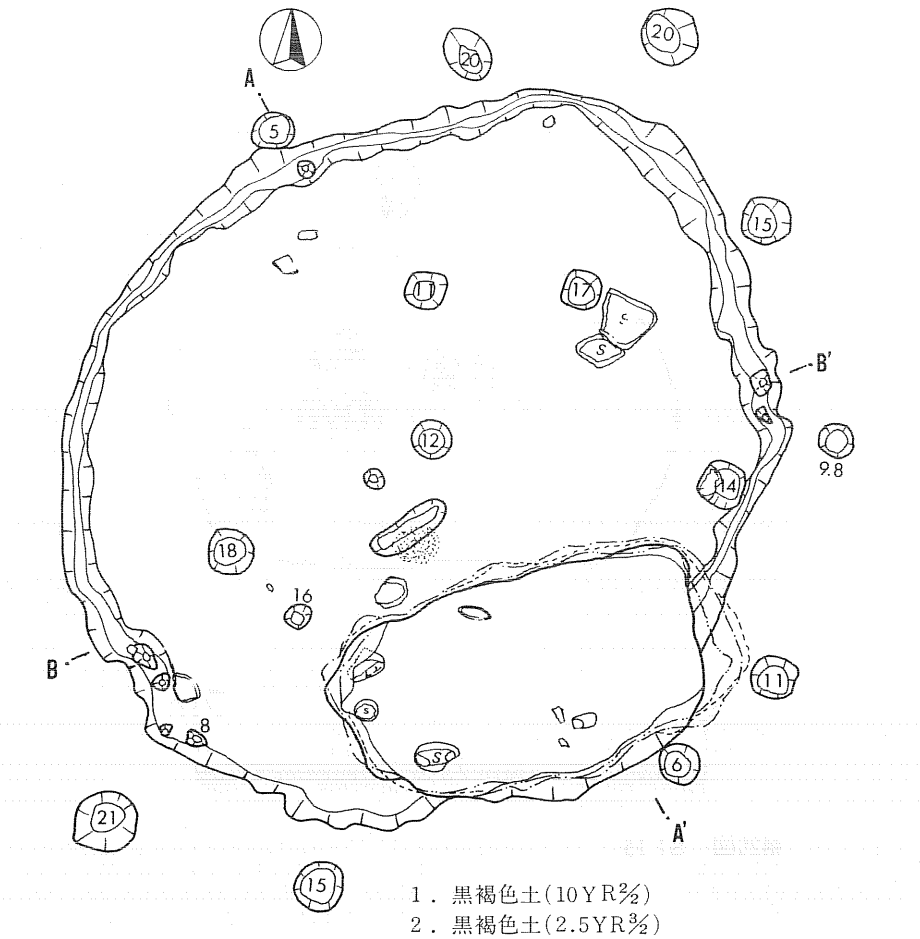
第19図　SI 14



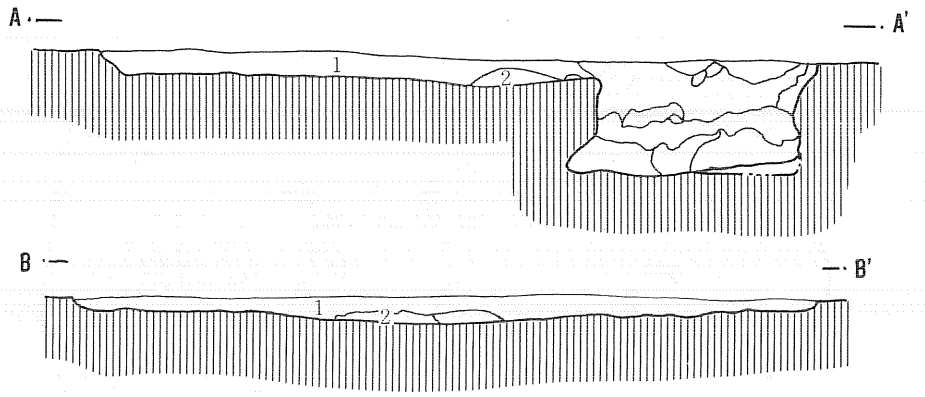
第20図　SI 15

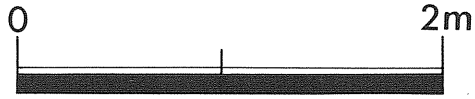


第21図　SI 16

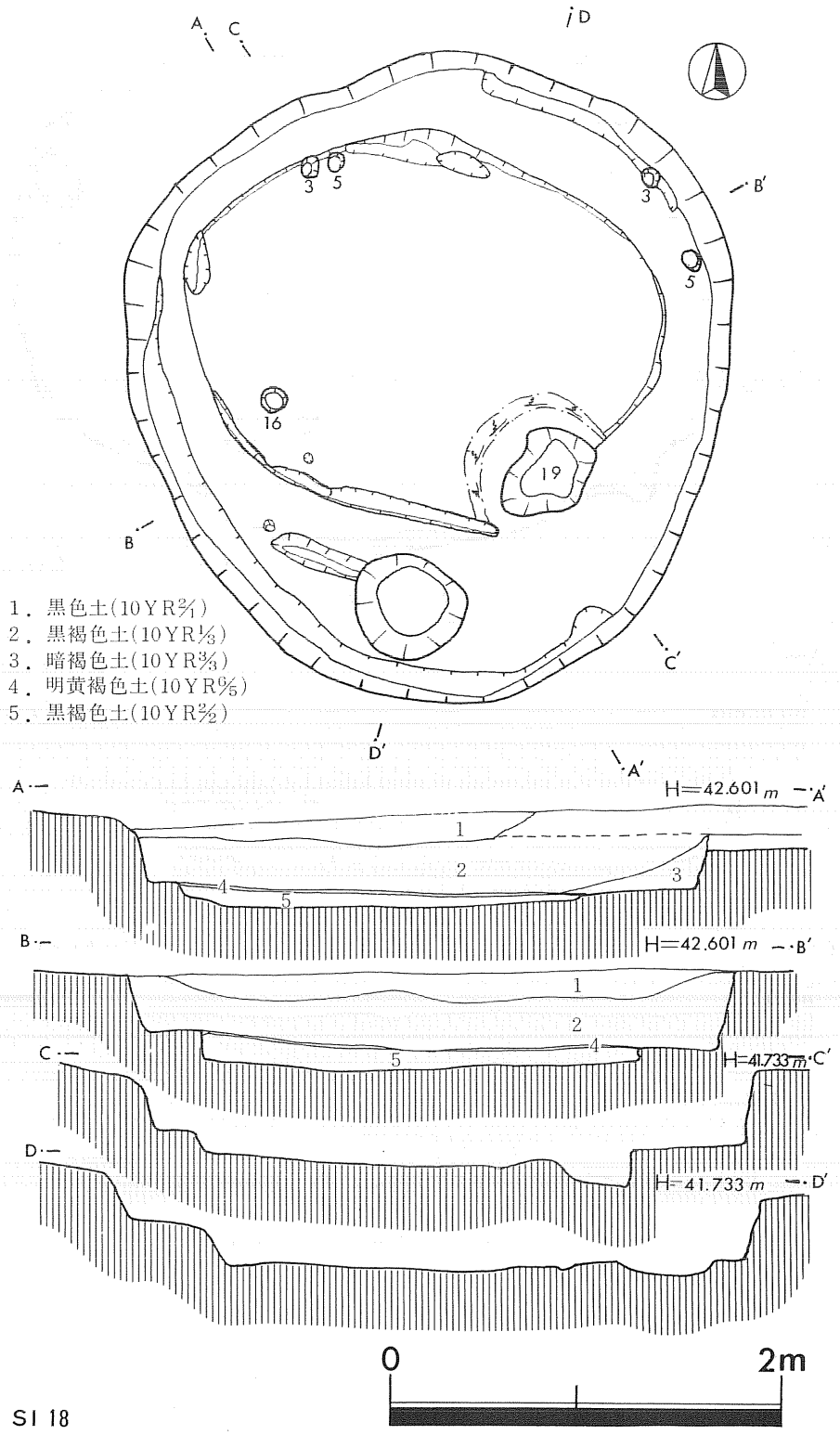


1．黒褐色土(10YR2/2)
2．黒褐色土(2.5YR3/2)

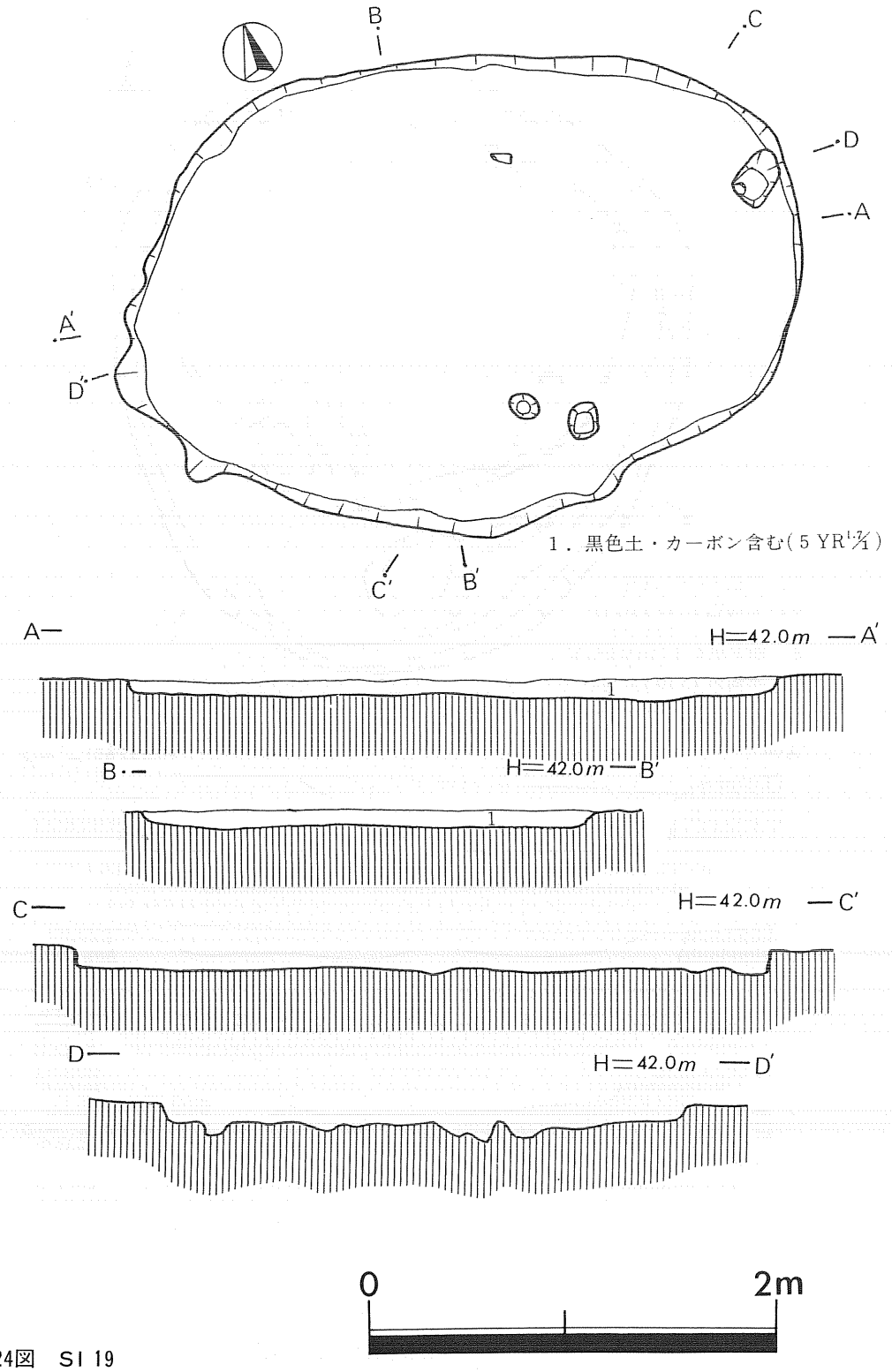




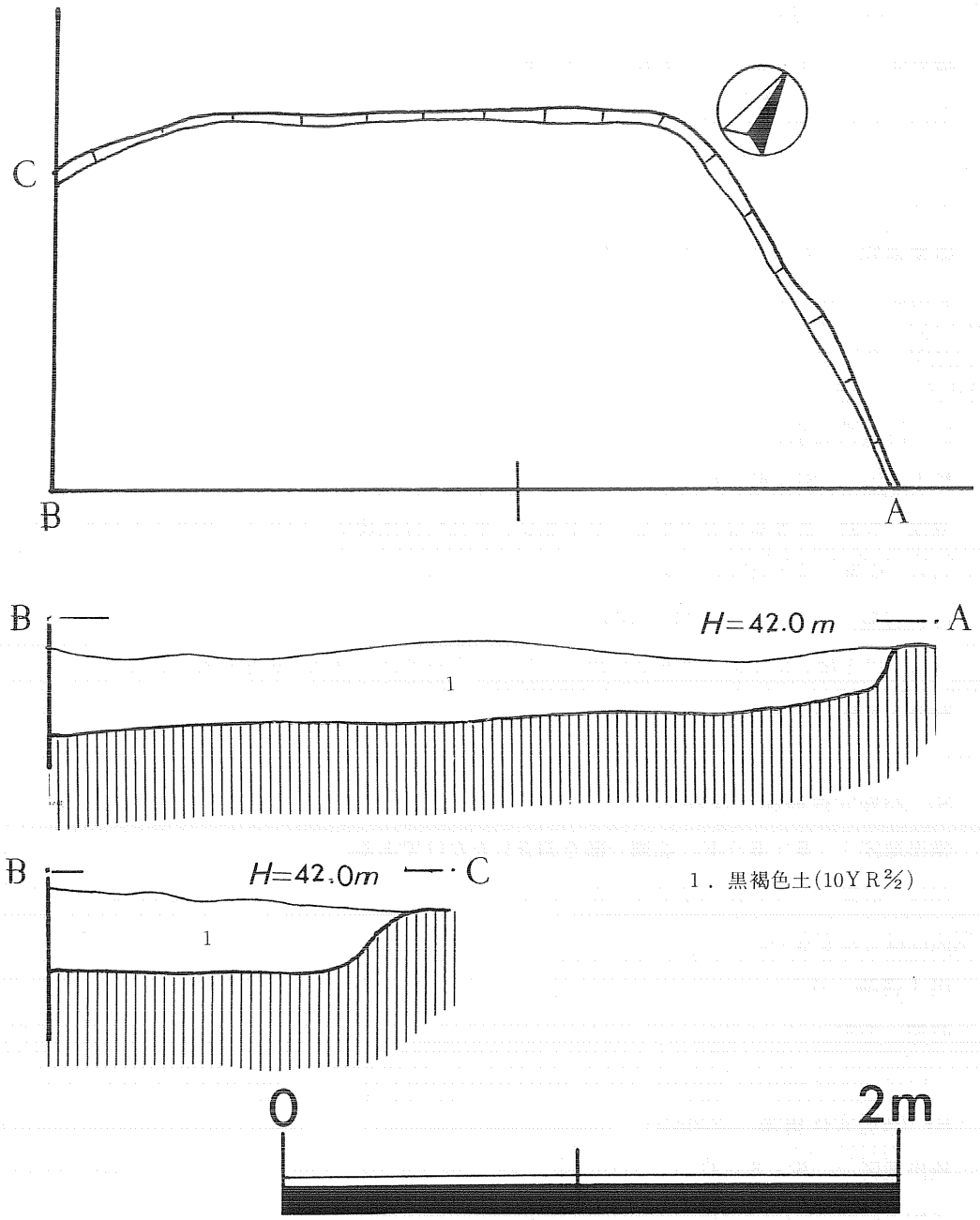
第22図　SI 17


A
C
D
B'
B
C'
D'
A'
3
5
3
5
16
19
1．黒色土(10YR2/1)
2．黒褐色土(10YR1/3)
3．暗褐色土(10YR3/3)
4．明黄褐色土(10YR6/5)
5．黒褐色土(10YR2/2)
H=42.601 m
H=42.601 m
H=41.733 m
H=41.733 m
1
2
3
4
5
0
2m

第23図　SI 18


B
C
D
A
A′
D′
C′
B′
1．黒色土・カーボン含む（5 YR 1/1）
A
H=42.0m
A′
1
B
H=42.0m
B′
1
C
H=42.0m
C′
D
H=42.0m
D′
0
2m

第24図　SI 19



第25図　SI 20

SI 21竪穴住居跡（第26図、図版10）

検出地区　3・4－D　東側の半分を調査しただけである。

規模・形態　全体の半分を調査しただけで詳細は不明であるが、調査した部分から推定すると、4.0×5.0mほどの楕円形を呈するものと思われる。床面は平坦で硬い。柱穴と思われるのは1個である。

出土遺物（第71図5～8、第76図7）

磨消縄文や太い沈線を施した土器である。石器は扁平の打製石器である。

時期　晩期

SI 22竪穴住居跡（第27図、図版11）

検出地区　81・82－D・E

規模・形態　径8mほどの小ピットが並び、主柱穴は径10cm・深さ1m前後のものが5つほどある。炉跡・焼土はない。床面はしっかりしているが、壁の存在は認められなかった。

出土遺物（第71図9～11、第76図8）

縄文だけを施した土器片と底部が出土している。石器は半月状の扁平打製石器である。

時期　晩期

SI 23竪穴住居跡（第28図）

検出地区　5・6－F　北側一部を調査しただけである。

規模・形態　プランは明確でないが、かなり大形の住居と思われる。床は硬くしまっており、壁高はほとんどない。

出土遺物　なし

時期　不明

SI 24竪穴住居跡（第29図）

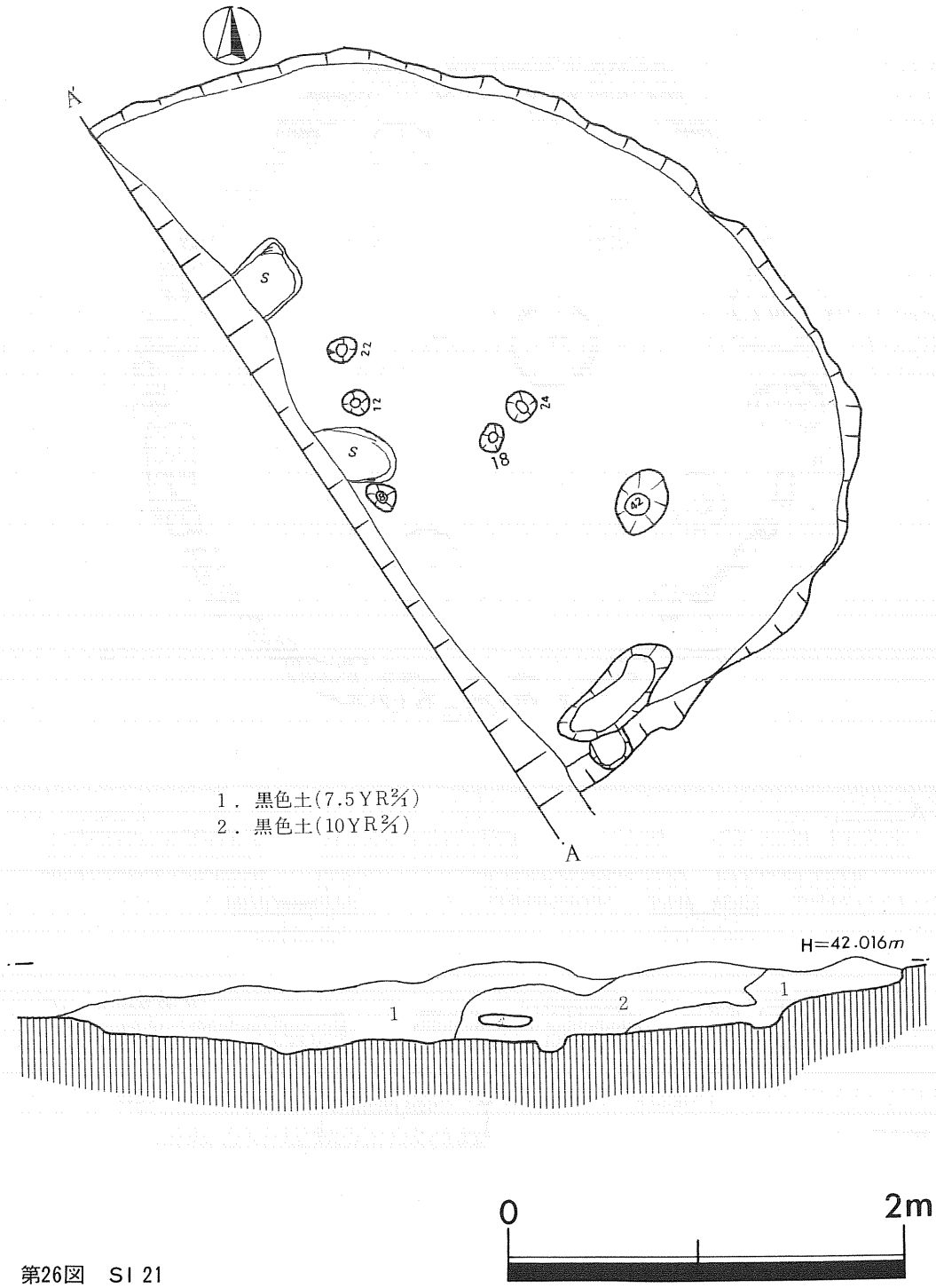
検出地区　5・6－C

規模・形態　4.0×4.8mの東西に長い楕円形で、南・北に周溝があるのみである。床面は硬くしっかりしている。中央部に焼土をもつピットがある。柱穴は45～50cmのものが3つある。

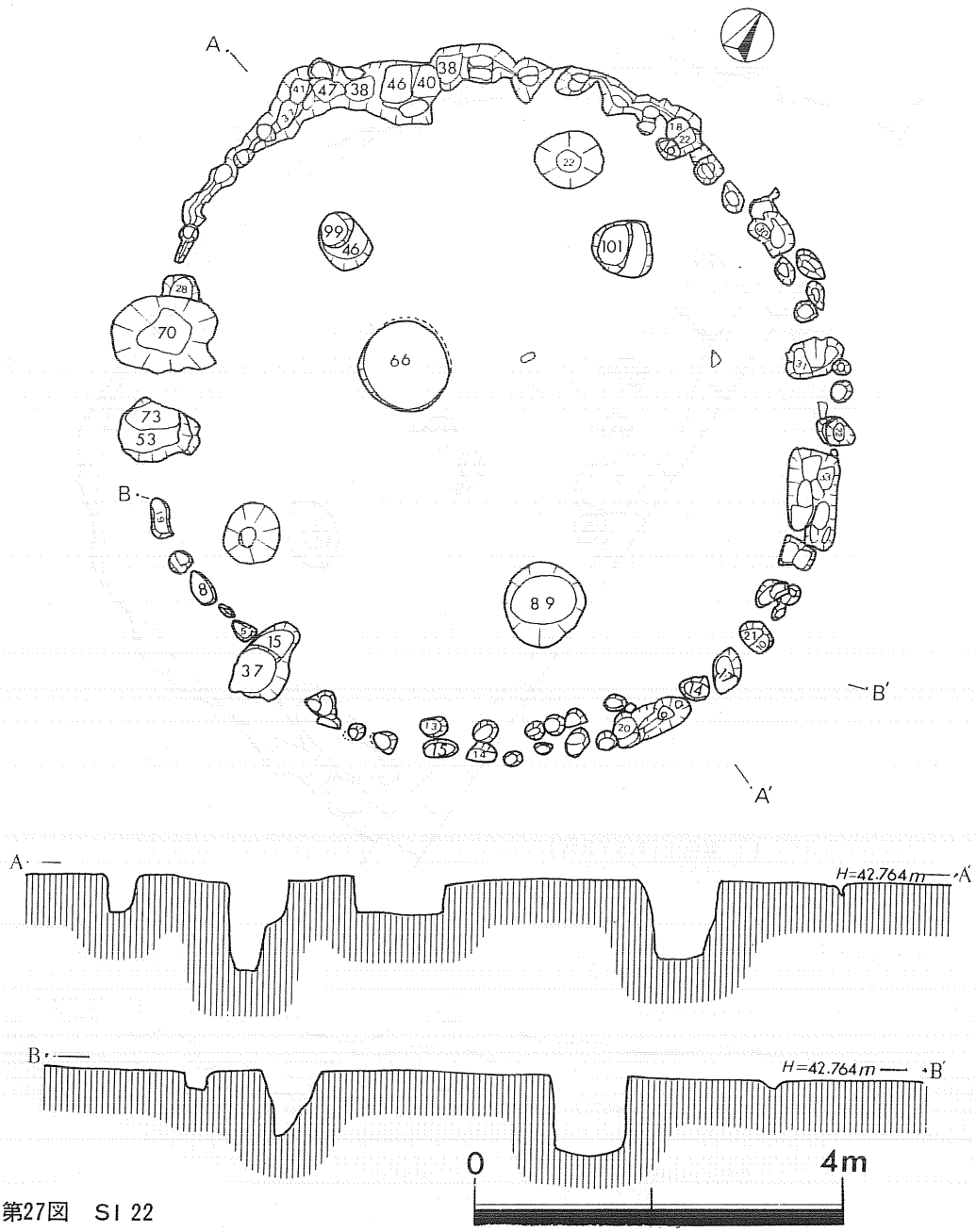
出土遺物（第71図12～23）

土器は、口縁部が外反ぎみで磨消手法を用いたもの（15、16、17、21）や、口縁部文様帯に刺突があるもの（22、23）、口唇部にも縄文を施した粗製深鉢形土器の破片などがある。

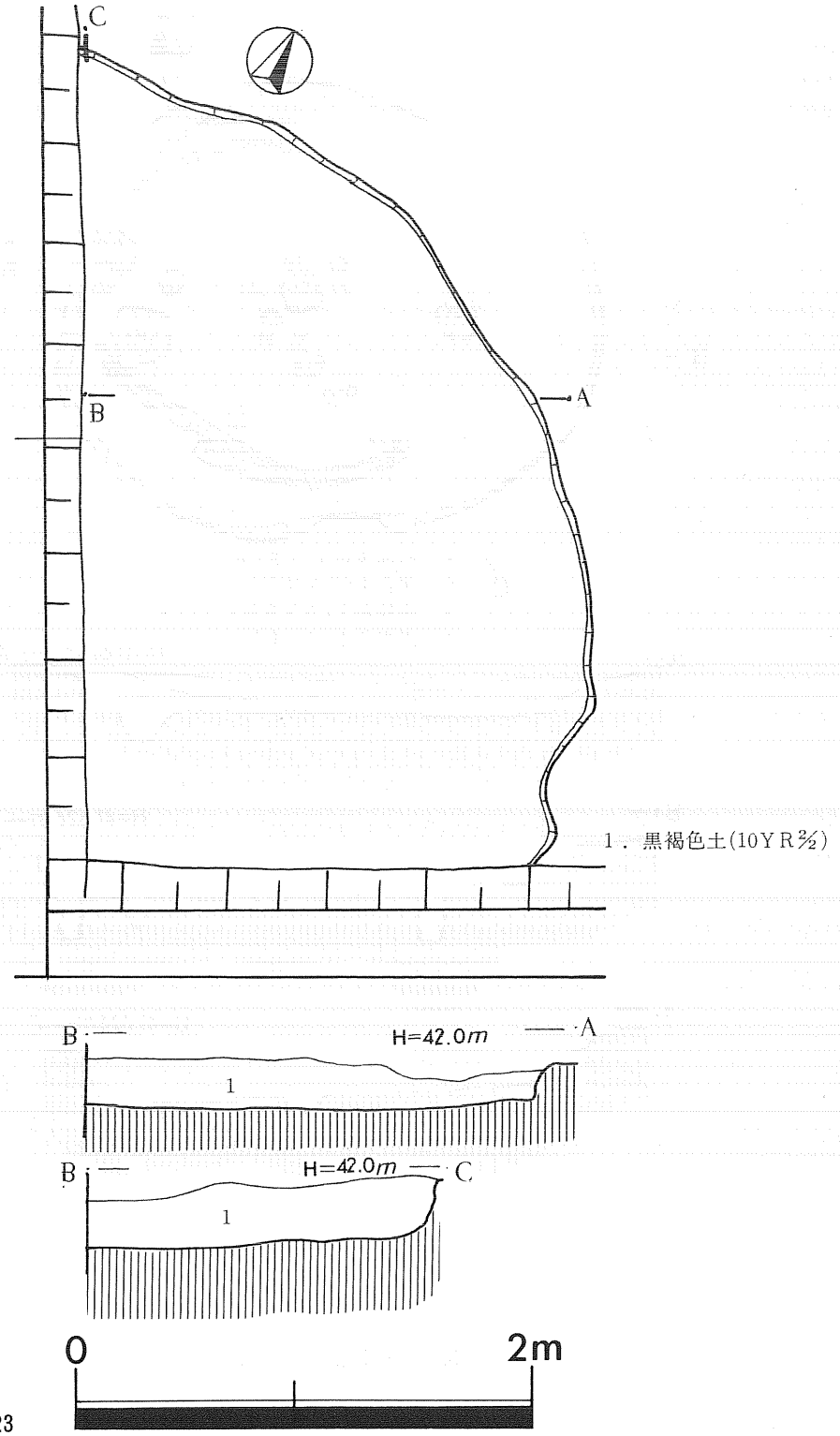
時期　後期末



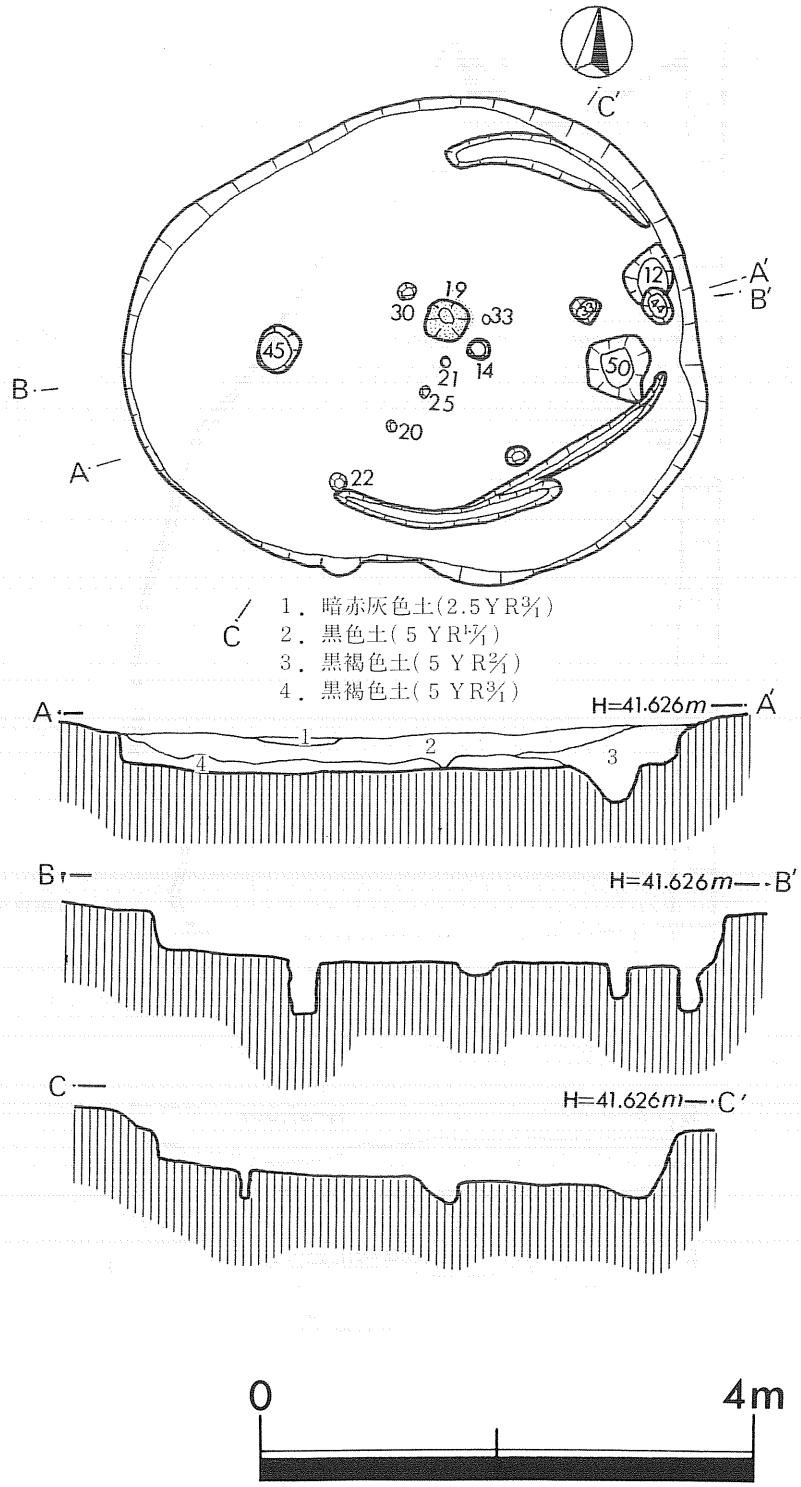
第26図　SI 21



第27図　SI 22



第28図　SI 23


C′
A′
B′
B
A
19
30
33
12
45
50
21
14
25
20
22
C
1．暗赤灰色土(2.5YR3/1)
2．黒色土(5YR1/1)
3．黒褐色土(5YR2/1)
4．黒褐色土(5YR3/1)
A
H=41.626m
A′
1
2
3
4
B
H=41.626m
B′
C
H=41.626m
C′
0
4m

第29図　SI 24

2．炉跡　（第30図、図版12）

調査で検出された炉跡は８基で、いずれもII層上面で確認したものである。時期は不明であるが、II層上面から晩期の土器が出土することから、おそらくこの時期のものと考えられる。

1号炉

検出地区　　20－Ｉ・Ｊ

規模・形態　10個の自然石を径30cmの円形に配した炉である。炉内には焼土がブロック状に入っている。北側に散らばっている石も、炉に使用されたものであろう。

2号炉

検出地区　　15－Ｅ

規模・形態　東西の石は削平されたらしく、南北に残るだけである。径40cmほどの円形を呈するものと思われる。焼土は中央部に薄く堆積する。

3号炉

検出地区　　17－Ｅ

規模・形態　南北に石はないが、径45cmの円形を呈するものと思われる。焼土はレンズ状に７cmほど堆積している。

4号炉

検出地区　　12－Ｃ

規模・形態　南東側に、炉に使用されたと思われる石が散乱している。径50cm、深さ15cmほどの堀りこみがある。焼土はみられない。

5号炉

検出地区　　９－Ｆ

規模・形態　40×50cmの楕円形を呈するものと考えられる。炉内に焼土はない。堀りこみはみられない。

6号炉

検出地区　　６－Ｆ

規模・形態　65×100cmの楕円形を呈し、石はしっかりと埋められた保存状態のよい炉である。

北側に粗製深鉢形土器の埋甕があるが、胴下半部だけである。焼土は中央部に堆積している。

8号炉

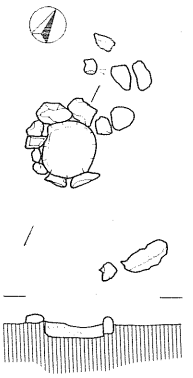
検出地区　13－D

規模・形態　径50cmほどの円形を呈する炉である。焼土はみられず、堀りこみもない。

9号炉

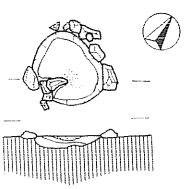
検出地区　7－I

規模・形態　65×80cmほどの楕円形を呈する。石はしっかり埋めこまれ、保存状態のよい炉である。また、焼土は一部にみられるだけである。



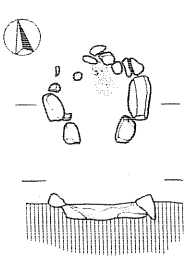
1．黒褐色土(5YR½)炭化物含む
2．褐 色 土(7.5YR⅘)焼土

1号炉



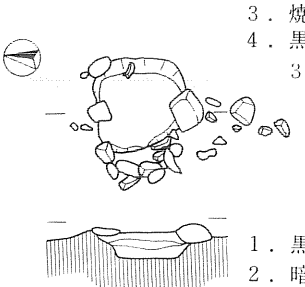
1．黒褐色土(5YR⅔)焼土粒子混入
2．明褐色土(7.5YR⅚)
3．1と2の混合土

2号炉



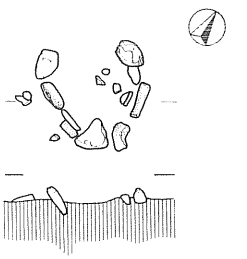
1．黒色土(5YR⅔)
2．明褐色土(7.5YR⅝)と
黒褐色土(10YR⅔)が混入している。
3．焼　土
4．黒褐色土(7.5YR⅔)

3号炉

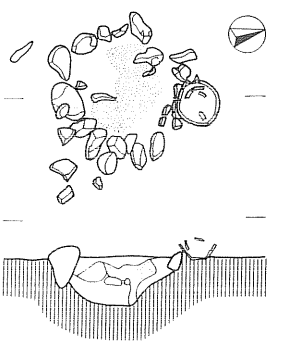


1．黒褐色土(7.5YR⅔)
2．暗褐色土(5YR⅓)
3．黒 色 土(7.5YR⅔)

4号炉

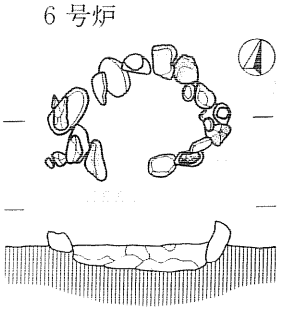


5号炉



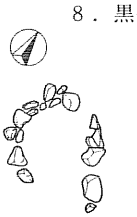
1．黒色土(7.5YR½)に褐色粒子混入
2．黒色土(7.5YR½)に焼土粒子混入
3．褐色土(7.5YR⅘)焼土
4．黒色土(10YR½)
5．黒色土(7.5YR⅔)にに褐色土粒子混入

6号炉

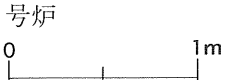


1．黒色土(5YR⅔)
2．明褐色土(7.5YR⅝)と
黒褐色土(10YR⅔)が混入している。
3．焼　土
4．黒褐色土(7.5YR⅔)
5．黒色土(7.5YR⅔)に
地小粒子混入
6．明黄褐色(10YR⅚)
7．黒褐色土(5YR⅔)
8．黒褐色土(7.5YR¾)

9号炉



8号炉

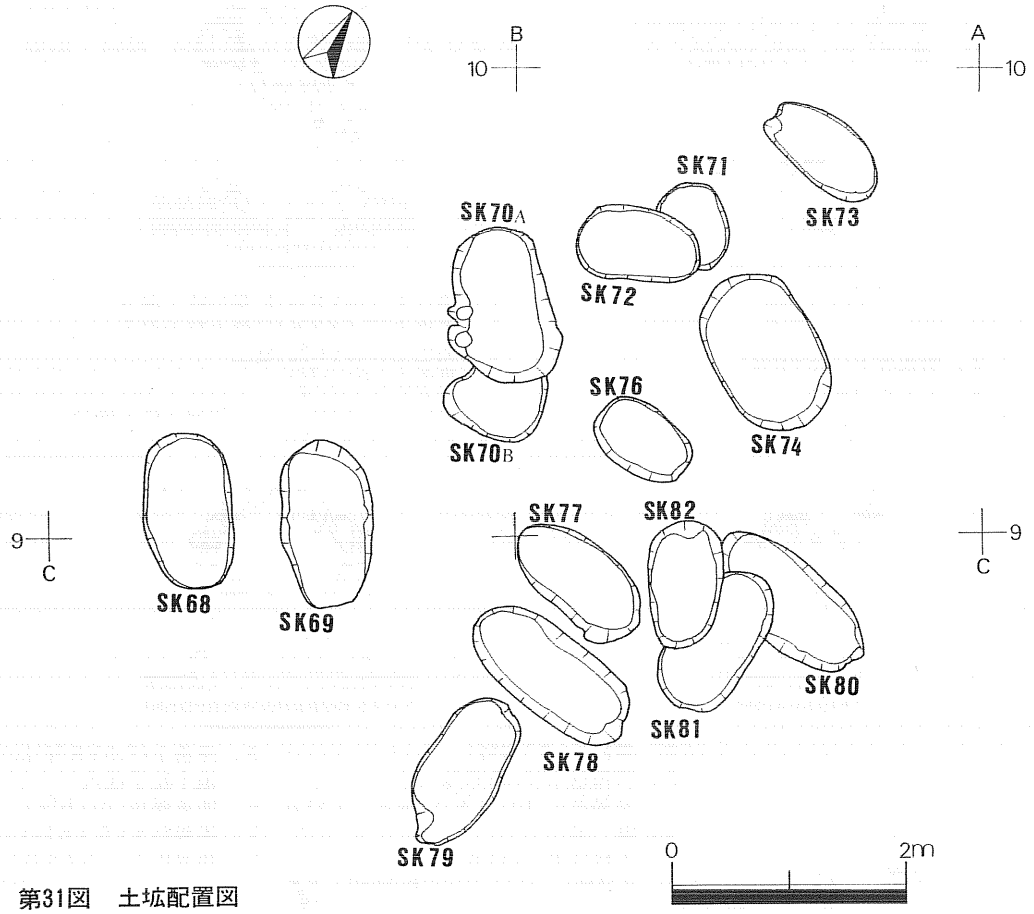


第30図　炉跡

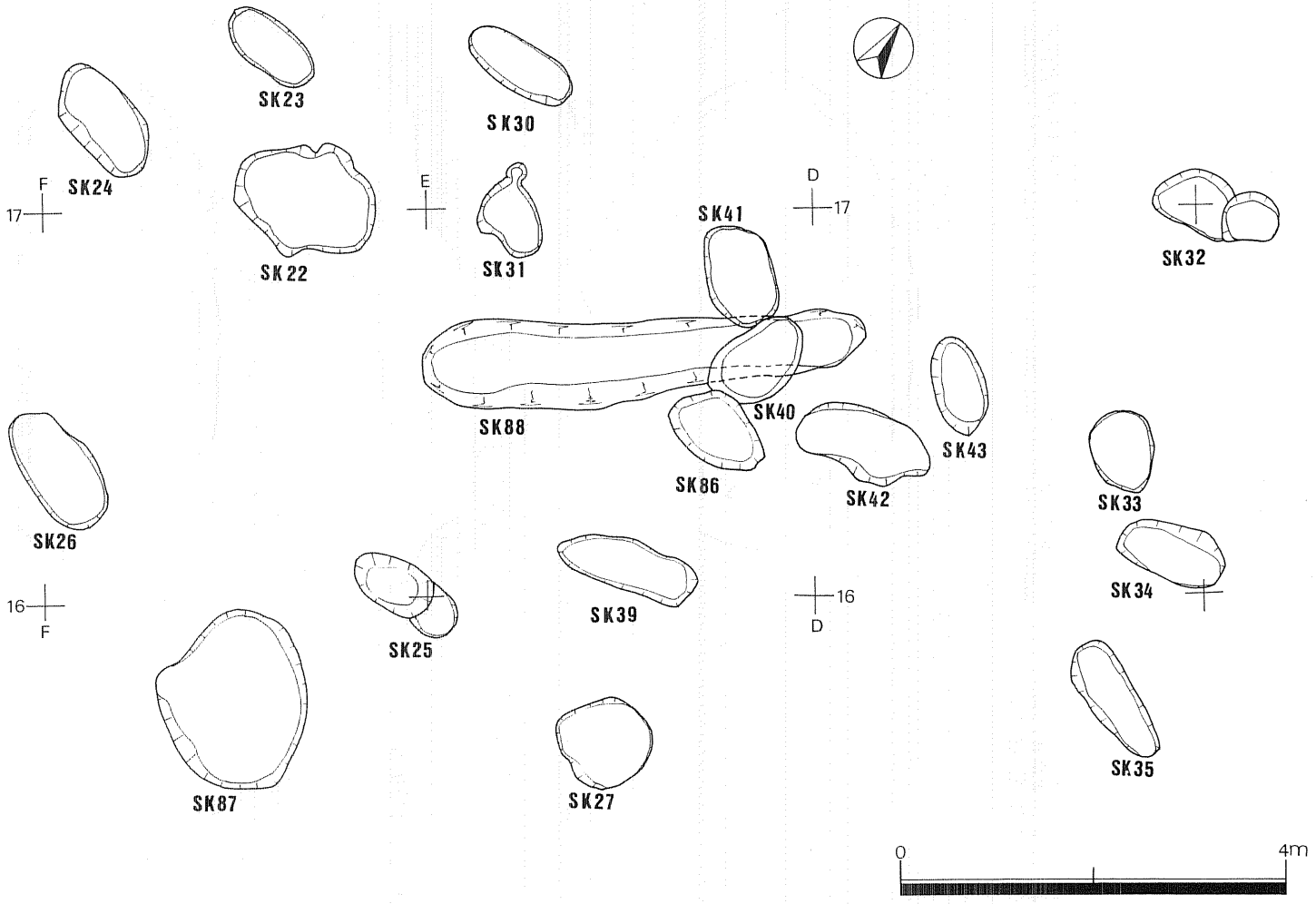
3．土坑

調査で検出された土坑は81基で、II区78基、III区３基である。土坑番号を付したものは100基以上になるが後に攪乱と判明したものは欠番とした。

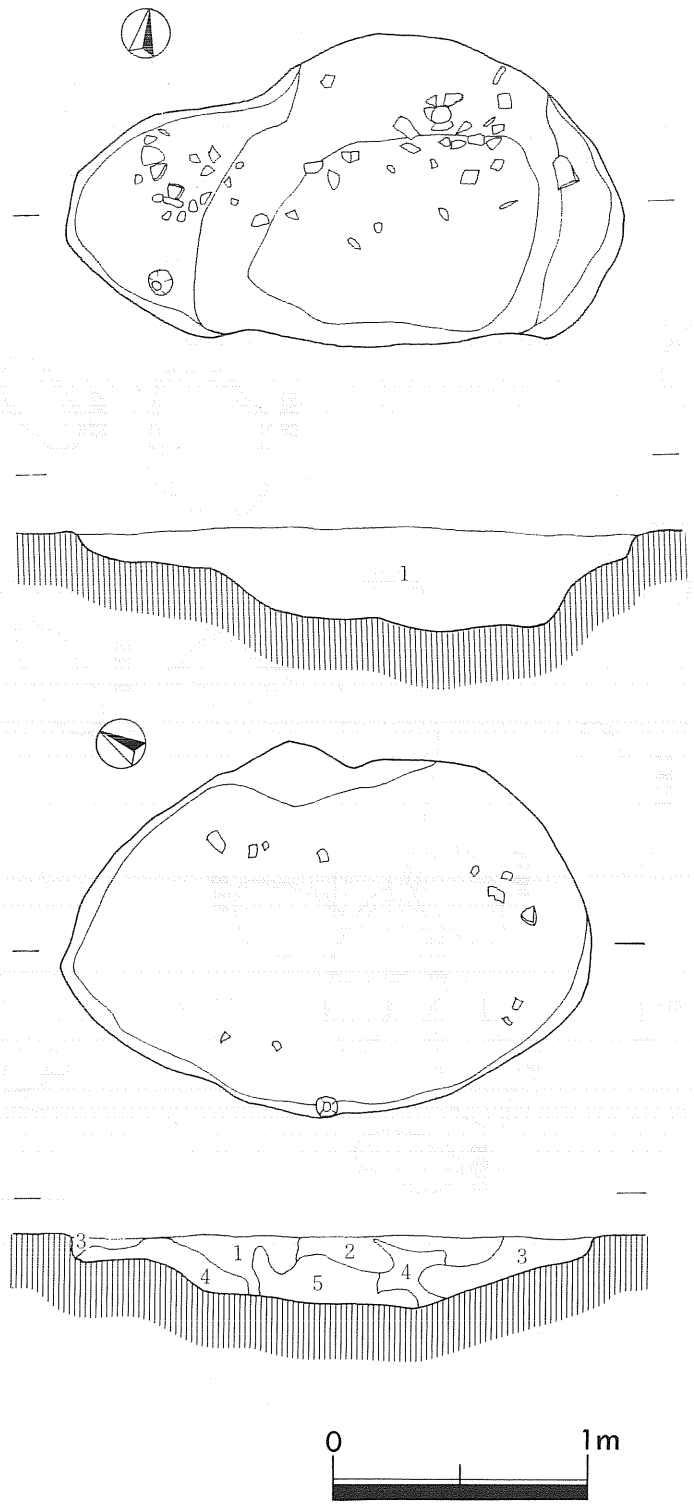
図面中＊は骨、▲は石鏃、はベニガラを示す。表中の頭位はベニガラの位置をもってそれとした。表中の数値の単位は全てcmである。



第31図　土坑配置図


SK23
SK30
SK24
SK22
SK31
SK41
SK32
SK88
SK40
SK43
SK86
SK42
SK33
SK26
SK34
SK39
SK25
SK35
SK87
SK27
F
17
E
D
17
16
F
16
D
0
4m

第32図　土坑配置図



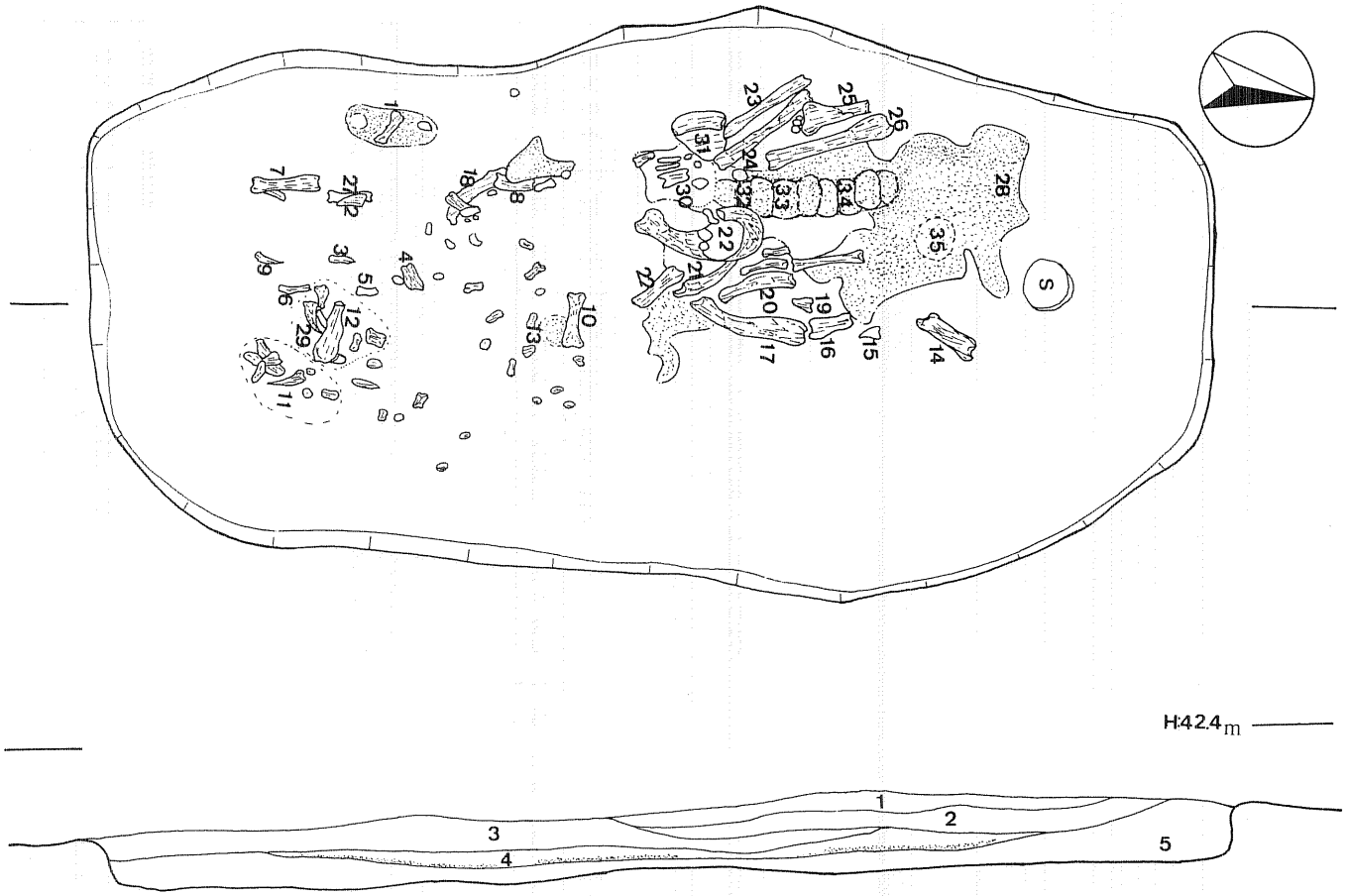
1．黒褐色土(7.5YR2/3)

1．黒 色 土(10YR2/1)
2．黒褐色土(7.5YR3/1)
3．黒褐色土(7.5YR3/1)
と橙色土(7.5 YR6/8)の
混合土
4．橙色土(7.5YR6/8)
5．橙色土(7.5YR6/8)
3層より明るい

第33図　SK03・04

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ０３	26－G	220×126	210×110				N100°W
形態	楕円形						
時期	大洞B						
備考	地山直上での確認。中央部に向って落ちこむ。遺物は坑内北側より集中して、出土した。有孔石製品が出土している。						

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ０４	26－G	208×150	200×112				N33°W
形態	楕円形						
時期	大洞B						
備考	地山直上での確認。中央部に向って落ちこむ。						



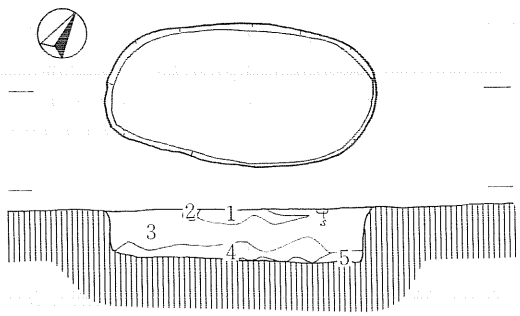
1．赤黒色土(2.5YR 1/7)
2．明褐灰色(5YR 7/1)の灰
3．黒 色 土(7.5YR 1/2)
4．明黄褐色土(10YR 7/6)の焼土
5．黒褐色土(5YR 2/1)

0 10cm

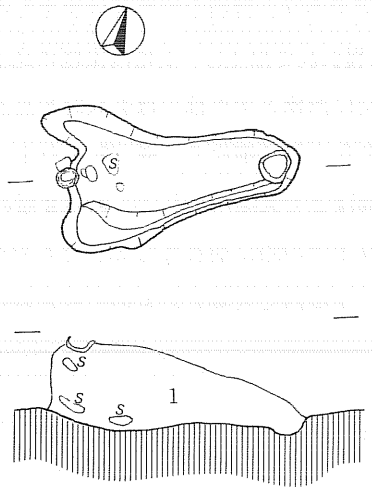
第34図　SK05

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ０５	26-C・D	193×　95			○	北	

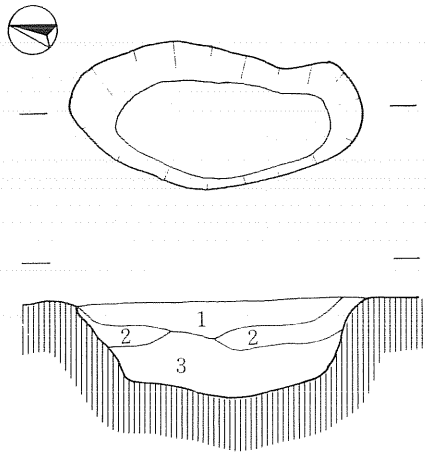
形態	楕円形
時期	大洞Ｂ
備考	２層中で確認されたもので、初めは焼土と灰が楕円形状に広がっており、それによってプランを確認したものである。確認面より５cmほどで、西壁の際にNo.24・35が検出され、その周辺を精査したところ、骨片・骨粉が多量に出土した。 遺物は土坑面に多く、土器片とフレイク・チップであり、特別な副葬品は出土しなかった。骨は2層明褐灰色の灰と4層明黄褐色の焼土に覆われて出土し、土坑内南側の底面からは、炭化した木材片も認められた。骨は上半身特に西側と中央部の保存状態が良かったが頭骨と思われるものは検出出来なかった。下半身の骨は細片で、飛び散ったような状態で検出された。土坑の深さは、確認面から10cmほどで実際の掘りこみ面は２層の上面と考えられる。骨は35番まで番号を付したが取り上げの際に崩れてしまったものが多い。骨の出土状態からは、二次的埋葬とは考え難く、土坑内で火葬したものと考えられる。



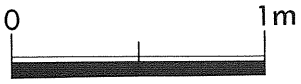
1．明褐色の焼土(7.5YR 5/8)
2．明黄褐色土(10YR 7/6)
3．黒色土(5YR 1.7/1)
4．黒褐色土(10YR 2/3)
5．明黄褐色土(10YR 7/6)



1．黒色土・明褐色混入(10YR 2/1)



1．黒色土(7.5YR 1.7/1)
2．明黄褐色土(10YR 6/8)
3．褐色土(10YR 4/6)

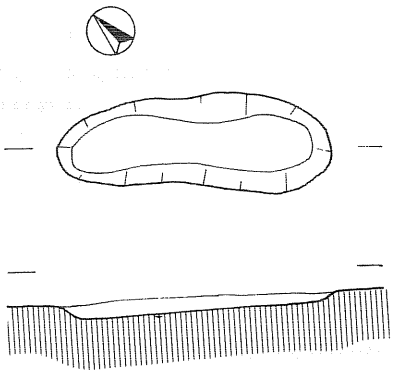


第35図　SK07・08・09

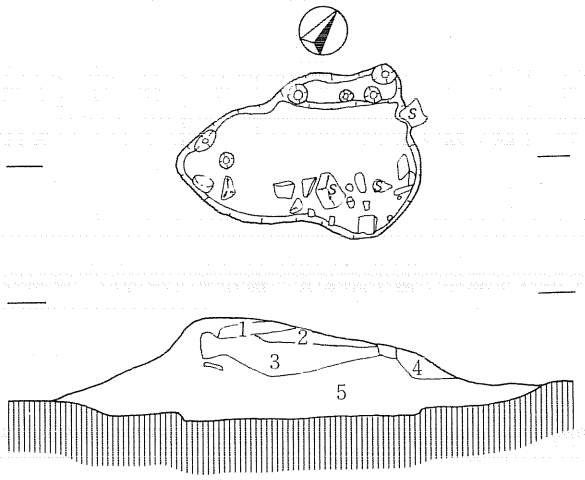
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ０７	26－Ｉ	165×54.5	103×51.5				N111°W
形態	楕円形						
時期							
備考	Ⅱ層下面での確認。上面で焼土が円形に広がる。壁高は23cmで垂直に立ち上がる。遺物の出土はない。						

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ０８	19－Ｆ	95×37	85×26.5				N113°W
形態	楕円形						
時期							
備考	Ⅱ層下面で確認。上面に土器片・焼土がある。掘りこみは浅い。底面はほぼ平である。						

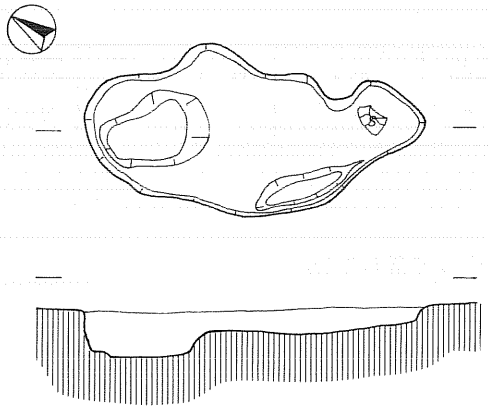
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ０９	22－Ｇ	116×55	87×38				N94°W
形態	楕円形						
時期							
備考	地山直上での確認。中央部に向って落ちこむ。						



1．黒色土(10YR2/1)



1．焼土；炭化物を含む
2．黒色土；焼土を含む
3．黒褐色(7.5YR2/2)
4．明黄褐色(10YR6/6)
5．黒色土(7.5YR2/1)



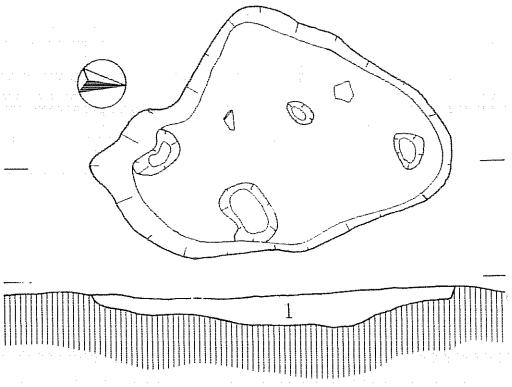
1．黒色土(7.5YR1.7/1)

第36図　SK11・12・13

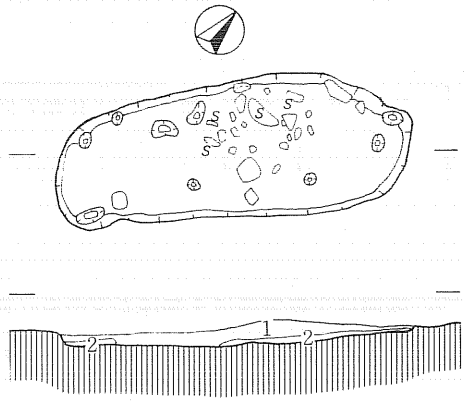
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ１１	22－Ｉ	109.5×36	94.5×16.5				N49°W
形態	楕円形						
時期							
備考	地山直上での確認。底面は平坦壁高５cmほどでゆるく立ち上がる。						

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ１２	21－Ｉ						
形態	楕円形						
時期	大洞Ｂ						
備考	地山直上での確認。上部構造をもつ。底面は平坦壁高は４cmほどである。壺形上器の砂片が、ＳＫ14・ＳＩ24出土の破片と接合する（77図24）。棒状土製品（同25）３点の石器（90図３～５）が出土している。						

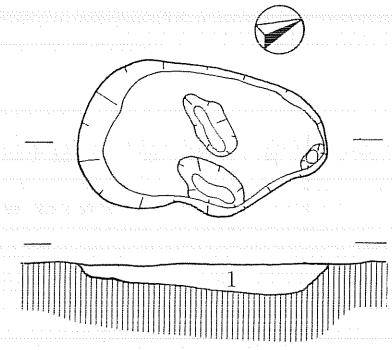
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ１３	20－Ｆ	135.5×56	131×55.7				N123°W
形態	楕円形						
時期							
備考	地山直上での確認。底面は北西に一段落ちこむ。壁高は北西で25cm、北東では５cmほどである。遺物は出土していない。						



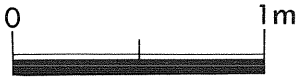
1．(7.5YR 2/1)黒色土(10YR 5/8)明黄
褐色土が混入



1．黒 色 土(7.5YR 2/1)
2．明褐色土(7.5YR 5/8)



1．黒色土(10YR 2/1)

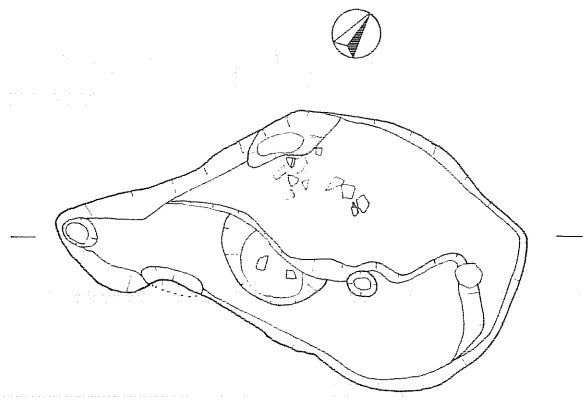


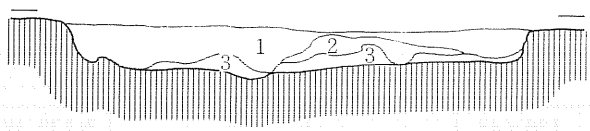
第37図　SK14・15・16

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ１４	24-I、25-I	143.5×100	123×89				N110°W
形態	楕円形						
時期	後期末						
備考	地山直上での確認。底面に小ピットあり。壁は南側はゆるく立ち上り、北側は垂直に立ち上がる。壺形土器の破片がＳＫ12・ＳＩ24とのものと接合（77図24）。						

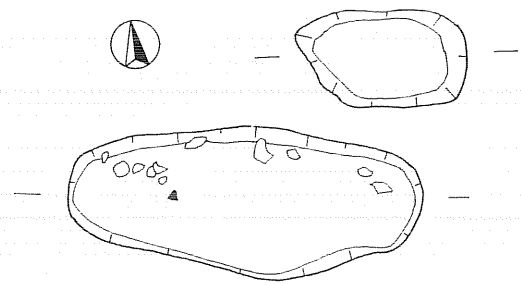
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ１５	21－Ｉ	143.5×52	136×48				N139°W
形態	楕円形						
時期	大洞Ｂ						
備考	地山直上での確認。底面は平坦で小ピットがある。壁高５cmほどである。土器片・礫が底面近くで出土する。						

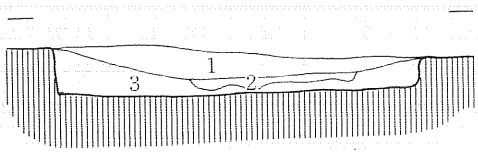
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ１６	26－Ｇ	100×55	85.5×50				N156°W
形態	楕円形						
時期							
備考	地上直上の確認。底面は北東から南にかけて浅くなり、中央にピットあり。壁はゆるく立ち上がる。						



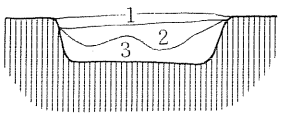


1．黒 色 土(7.5YR2/1)
2．黒褐色土(7.5YR2/2)
3．明褐色土(7.5YR5/8)





1．黒褐色土(10YR2/2・土器片・炭化物を混入)
2．黒 色 土(7.5YR2/1)
3．黒 色 土(10YR2/1)



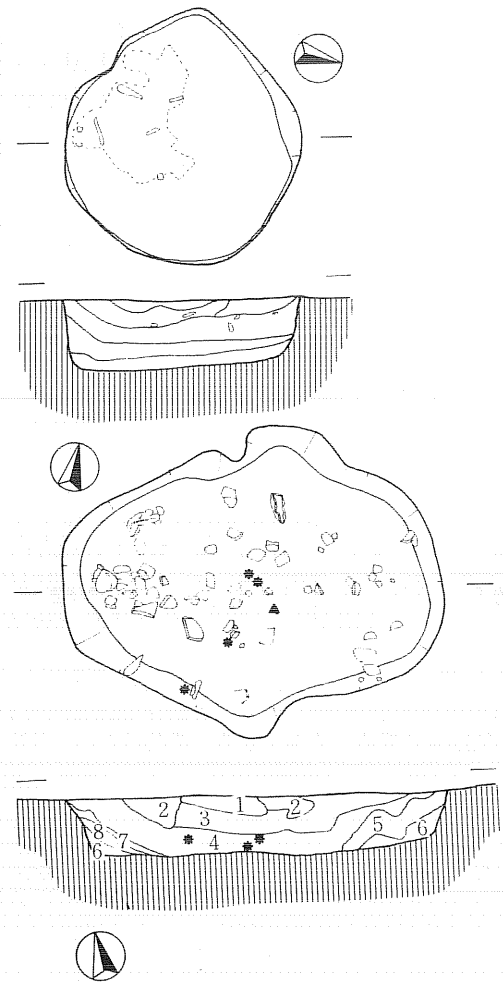
1．黒褐色土(10YR2/3・土器片と炭化物を混入)
2．黒 色 土(7.5YR)
3．赤黒色土(2.5YR2/1)

第38図　SK17・19・20

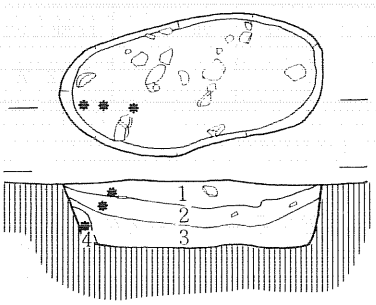
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ１７	25－G	188×98	180×90				N123°W
形態	楕円形						
時期	大洞B						
備考	地山直上での確認。底面は凹凸で、壁高14cmで垂直に立ち上がる。土器・フレイクは北側に集中して出土する。						

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ１９	17－F	67×39	52.5×32.5				N82°W
形態	楕円形						
時期	大洞B						
備考	II層上面で確認。底面は平で壁高30cmで垂直に立ち上がる。遺物はない。ＳＫ20と併例している。						

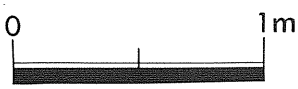
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ２０	17-F、17-G	142×58.5	136×50.5				N82°W
形態	楕円形						
時期	大洞B						
備考	II層上面での確認。底面は平坦で、壁高20cmほどで垂直に立ち上がる。土器・石鏃（90図６）が底面より出土している。						



1．黒　色　土(7.5YR 1/1)
2．黒　色　土(7.5YR 2/1・炭化物を混入)
3．黒褐色土(10YR 2/2)
4．黒　色　土(7.5YR 1/1・土器片と炭化物を混入)
5．黒褐色土(10YR 2/2)
6．黒褐色土(5YR 2/1)
7．黒褐色土(5YR 2/1)
8．黒　色　土(5YR 1/1)



1．黒　色　土(7.5YR 1/1・焼土・骨片・土器片・炭化物を含む)
2．黒　色　土(7.5YR 2/1・骨片を含む)
3．黒褐色土(7.5YR 2/2)
4．黒褐色土(10YR 2/1)

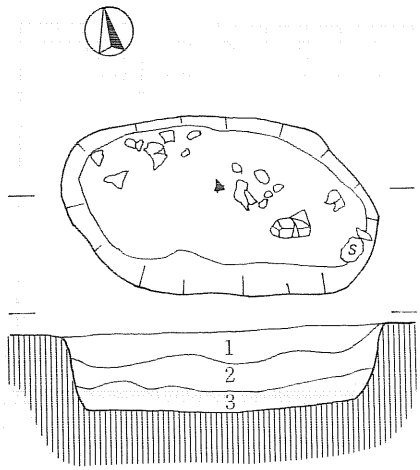


第39図　SK21・22・23

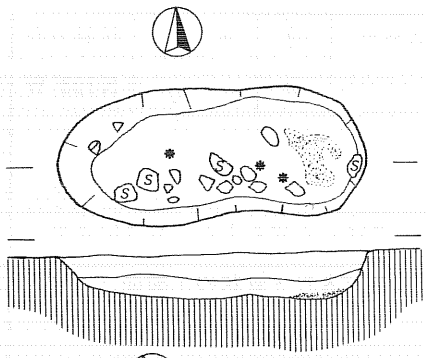
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ２１							
形態	円形						
時期							
備考	II層上面にて確認。底面は平坦で壁高27cmで垂直に立ち上がる。上層には炭化物・焼土が広がる。遺物の出土はない。						

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ２２	16-E、17-E	153×127	139×108		○		N103°W
形態	楕円形						
時期	大洞B						
備考	II層上面にて確認。底面は平坦で壁高22cmでゆるく立ち上る。骨片は底面近く５層中で検出。土器の他に石鏃や不定形石器（90図７～８）・管状の土製品（79図5）が出土している。						

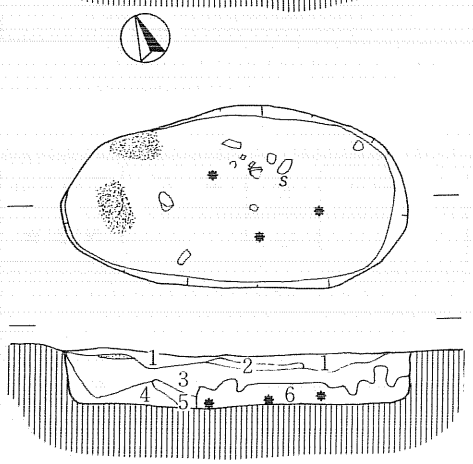
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ２３	17－E	106×53.0	97.5 × 45		○		N82°W
形態	楕円形						
時期	大洞B						
備考	II層上面にて確認。底面は平坦で、壁高25cmで垂直に立ち上がる。骨片は1・2・４層から確認される。						



1．黒褐色土(5YR2/1)土器片と炭化物を含む
2．黒 色 土(7.5YR2/1)
3．黒褐色土(10YR3/2)と黄褐色土(10YR5/6)の混入



1．赤褐色土(2.5YR2/1)炭化物、小礫骨片を含む
2．黒 色 土(7.5YR2/1)



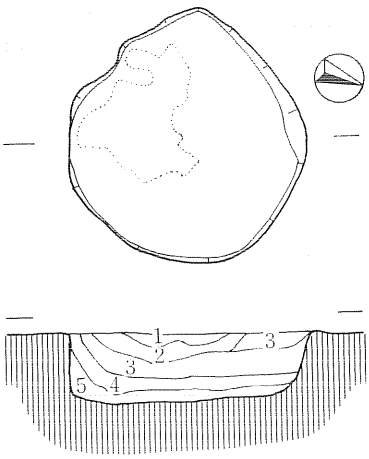
1．黒褐色土(7.5YR2/1)炭化物・土器片を含む
2．赤褐色土(5YR4/8)炭化物を混入
3．暗赤褐色土(2.5YR3/6)ベンガラ・炭化物を含む
4．黒褐色土(7.5YR2/2)
5．暗赤褐色土(5YR3/2)
6．黒褐色土(10YR3/2)と黄褐色土(10YR5/6)の混土

第40図　SK24・25・26

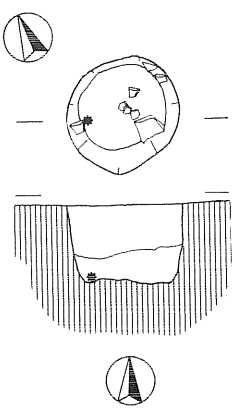
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ２４	17－E	128×71.5	116×53				N56°W
形態	楕円形						
時期	大洞B						
備考	II層上面での確認。底面は平坦で壁高30cmほどでほぼ垂直に立ち上がる。石鏃1点（90図10）、板状土偶（79図22）が出土している。						

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ２５	16－E	123×50	107×32	○	○	西	N85°W
形態	楕円形						
時期	大洞B						
備考	II層上面での確認。底面は平坦で壁はゆるく立ち上がる。骨片は底面より検出される。ベニガラは東側に20×30cmの範囲で底面に広がる。不定形石器（90図11）が出土している。						

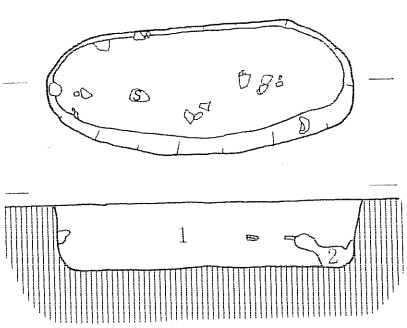
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ２６	16－E	138×72.5	130×66.5	○	○	北	N68°W
形態	楕円形						
時期							
備考	II層上面での確認。底面は平坦で壁高20cmで垂直に立ち上がる。ベニガラは北西に広がるが、2層中にある。骨片は底面より検出される。						



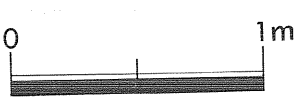
1．黒 色 土(7.5YR2/1)焼土・炭化物を含む
2．炭 化 物
3．黒褐色土(5YR2/1)小礫・土器片を含む
4．黒褐色土(5YR2/1)7.5YR6/8橙色土のブロックおよび粒子を含む
5．黒褐色土(10YR2/2)10YR4/6褐色ロームのブロックを含む



1．赤黒色土(2.5YR1.7/1)炭化物・骨片を含む
2．黒褐色土(5YR2/1)



1．黒 色 土
2．黒褐色土

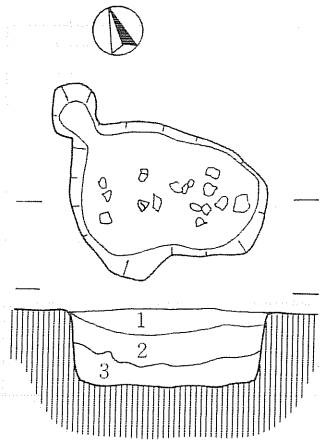


第41図　SK27・29・30

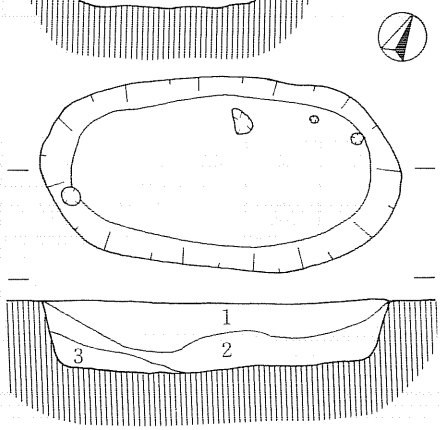
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ２７	15－Ｄ	98×96	92×86				
形態	円形						
時期	大洞Ｂ						
備考	Ⅱ層上面での確認。底面は平坦で壁高25cmで垂直に立ち上がる。２層上面で南側に50×50cmの範囲で炭化物の広がりが見られる。凹石（91図８）が出土している。						

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ２９	17－Ｄ	47×43	36×35		○		
形態	円形						
時期							
備考	Ⅱ層上面での確認、底面は平坦で壁高30cmでほぼ垂直に立ち上がる。骨片は床面より検出する。						

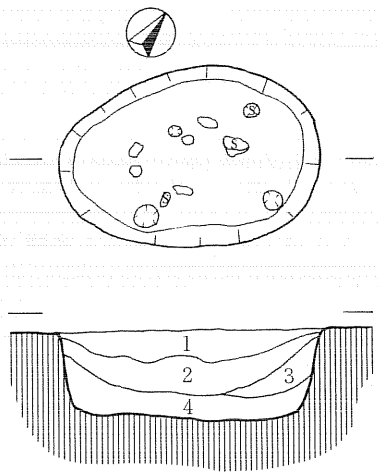
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ３０	17－Ｄ	122×52	117×42.5				N89°W
形態	楕円形						
時期	大洞Ｂ						
備考	Ⅱ層上面での確認。底面は平坦で壁高25cmで垂直に立ち上がる。土器・フレイクチップ出土。						



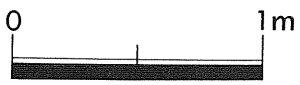
1．黒色土(7.5YR1.7/1)炭化物を含む
2．黒褐色土(10YR2/2)
3．黒褐色土(10YR2/2)



1．黒色土(7.5YR1.7/1)焼土・炭化物を含む
2．黒褐色土(7.5YR3/1)
3．黒褐色土(5YR2/1)



1．(7.5YR2/1)黒色土
2．(7.5YR2/1)黒色土
3．(7.5YR2/1)黒色土
4．(7.5YR1.7/1)黒色土

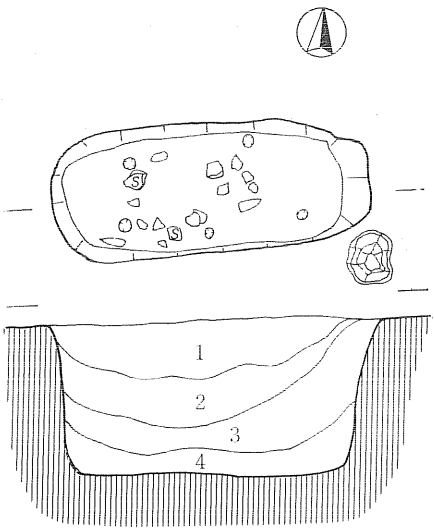


第42図　SK31・32・33

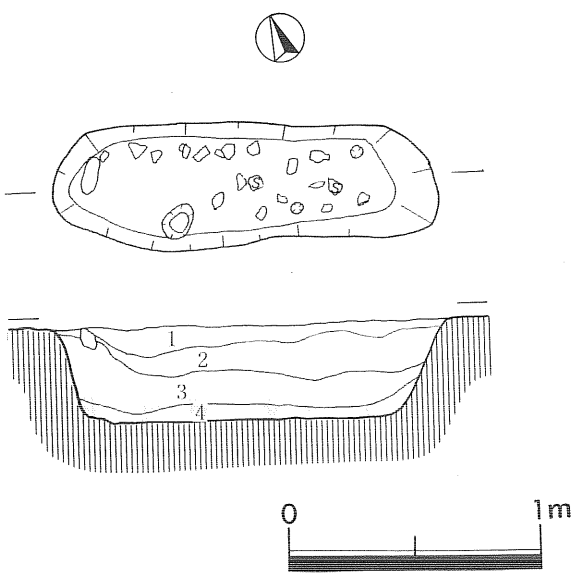
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ３１	16－D	80×51.5	70×43				N61°W
形態	楕円形						
時期	大洞B						
備考	II層上面での確認。壁高30cmで垂直に立ち上がる。土器片・フレイク・チップが出土。不定形石器（90図12）が出土している。						

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ３２	16-B、17-B	134.5×58	125.5×42				N109°W
形態	楕円形						
時期	大洞B						
備考	II層上面での確認。壁高25cmでほぼ垂直に立ち上がる。小ピットあり。土器片・フレイク・チップが出土している。						

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ３３	16－C	88×66	82×60.5				N51°W
形態	楕円形						
時期	大洞B						
備考	II層上 面での確認。底面は平坦で壁高35cmで垂直に立ち上がる。小ピットあり土器片・フレイク出土。						



1．黒褐色土(5YR 3/1)と黄橙砂質土(7.5YR7/8)の混合土
2．黒色土(7.5YR2/1)
3．黒褐色土(10YR3/2)
4．黒色土(7.5YR1.7/1)

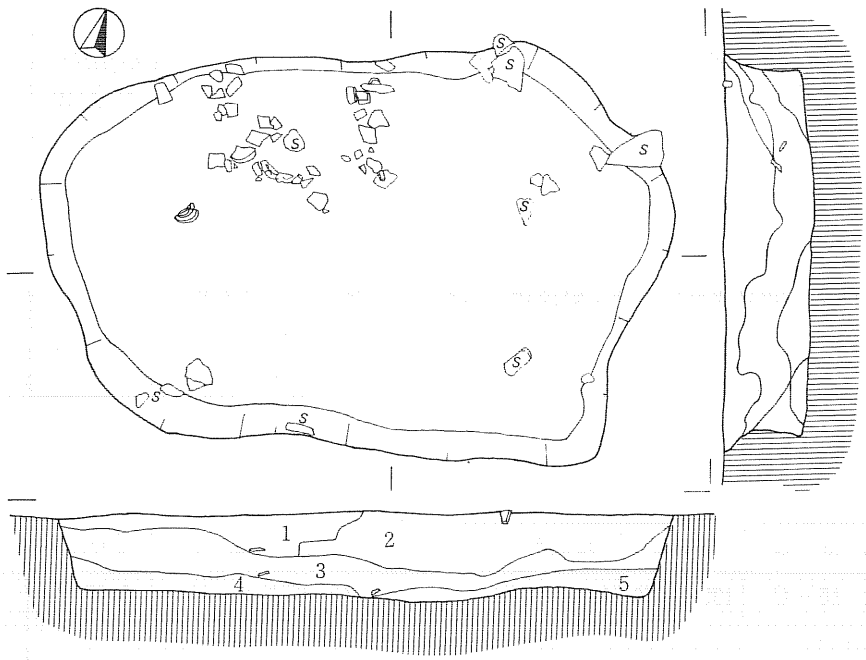


1．黒色土(5YR 2/1)
2．黒褐色土(YR2/1)
3．黒色土(7.5YR2/1)
4．黒色土(10YR1.7/1)

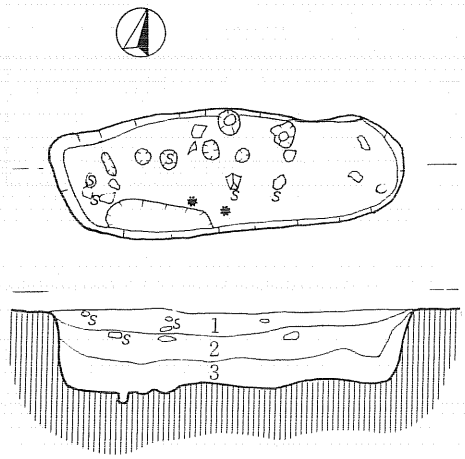
第43図　SK34・35

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ３４	16－C	111×57.5	105.5×43.5				N98°W
形態	楕円形						
時期	大洞B						
備考	II層上面での確認。底面は平坦で小ピットがある。壁高60cmで垂直に立ち上がる。南側に埋甕（粗製深鉢形土器・81図17）があり、土器・フレイクが出土している。						

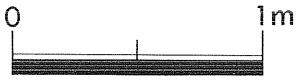
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ３５	15－C	135.5×50	132.5×36				N65°W
形態	楕円形						
時期	大洞B						
備考	II層上面での確認。底面は平坦で小ピットがある。壁高30cmで垂直に立ち上がる。底面北側より壺形土器(82図６)、三脚石器・石ベラ(90図13・14)・凹石（92図1）が出土している。						



1．黒色土(7.5YR2/1)炭化物・土器片を含む
2．黒褐色土(5YR3/1)炭化物と焼土を少量含む
3．黒褐色土(5YR2/1)炭化物・土器片を含む
4．暗褐色土(10YR3/3)炭化物を含む
5．黄橙色砂質土(7.5YR7/8)
6．黒色土(7.5YR2/1)炭化物を含む



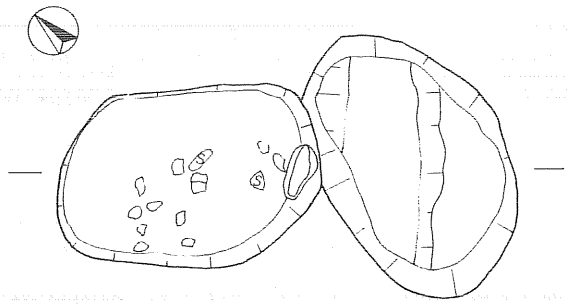
1．黒色土(7.5YR2/1)
2．黒色土(7.5YR2/1)
3．黒色土(7.5YR1.7/1)

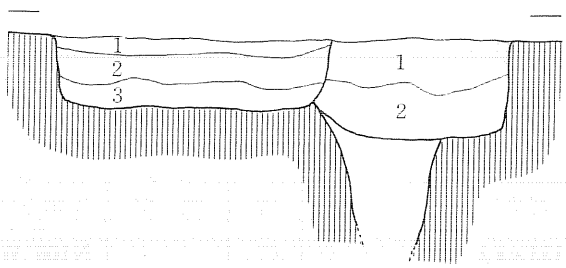


第44図　ＳＫ36・39

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ３６	16－G	250.5×153	230.5×137				N108°W
形態	隅丸方形						
時期	大洞B						
備考	II層上面での確認。底面は平坦で壁高30cmほどでほぼ垂直に立ち上がる。全体的に炭化物が混入し、土器片・礫等は北側に集中。土製の玉と小形土器（82図33･34）が出土している。						

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ３９	16－D	148.5×54	133×42		○		N106°W
形態	楕円形						
時期	大洞B						
備考	II層上面での確認。底面はやや凹凸があり壁高25cmで垂直に立ち上がる。 底面には小ピットがあり、骨片は２層中より検出。						



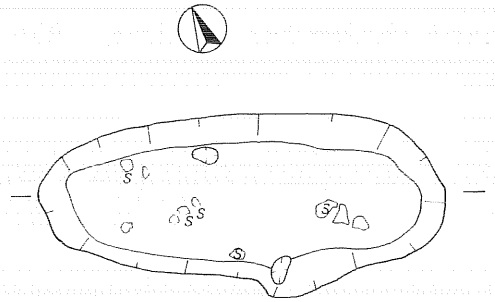


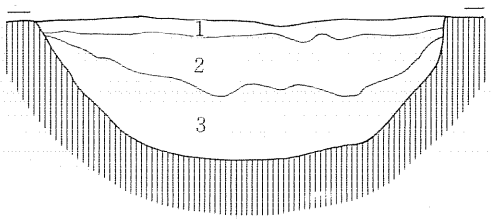
SK040

1．赤黒褐色土(2.5YR1.7/1)炭化物を含む
2．黒褐色土(5YR1.7/1)

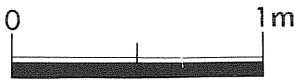
SK 041

1．赤黒色土(2.5YR1.7/1)焼土・炭化物を含む
2．赤黒色土(2.5YR1.7/1)焼土粒子を含む
3．黒褐色土(5YR2/1)





1．黒色土(7.5YR2/1)炭化物を含む
2．黒色土(5YR1.7/1)
3．黒色土(10YR2/1)



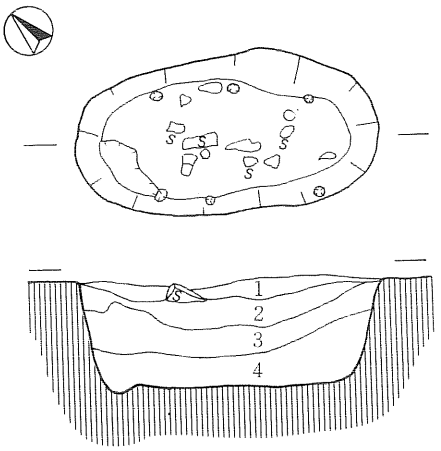
第45図　SK40・41・42

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ４０	16－Ｄ	112×69.5	94×55				N97°W
形態	楕円形						
時期							
備考	Ⅱ層上面での確認。底面は平坦で壁高35cmでほぼ垂直に立ち上がる。						

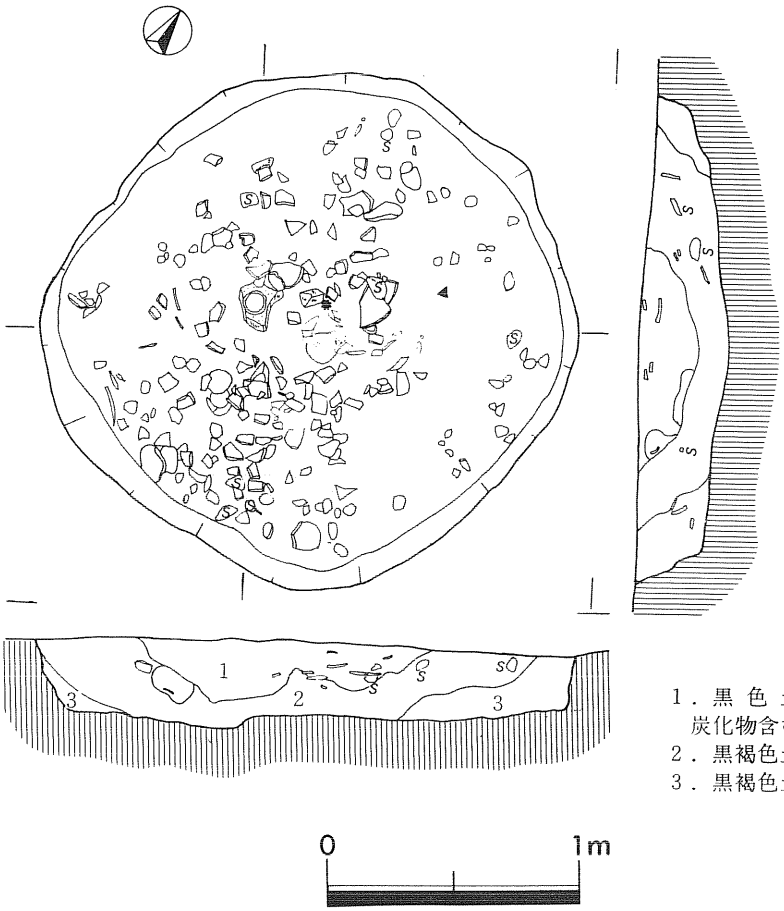
ＳＫ088（Ｔピット）→ＳＫ040→ＳＫ041 。

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ４１	16－Ｄ	107×73.5	99.5×66				N60°W
形態	楕円形						
時期	大洞Ｂ						
備考	Ⅱ層上面での確認。底面は平坦で壁高25cmでほぼ垂直。全体的に焼土粒子・炭化物が検出される。土器片、フレイクの他凹石（92図２）が出土している。						

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ４２	16－Ｃ	145×73	142×62				N106°W
形態	楕円形						
時期	大洞Ｂ						
備考	Ⅱ層上面での確認。底面はすり鉢状を呈する。小ピットがあり、壁はなだらかに立ち上がる。土器片・フレイク出土。						



1．赤黒色土(2.5YR1.7/1)
2．黒　色　土(5YR1.7/1)
3．黒褐色土(5YR2/1)
4．黒褐色土(5YR2/1)

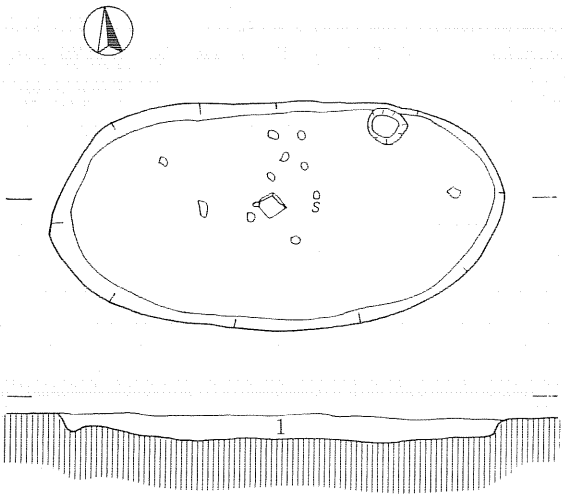


1．黒　色　土(7.5YR2/1)
　炭化物含む
2．黒褐色土(7.5YR3/2)
3．黒褐色土(5YR3/1)

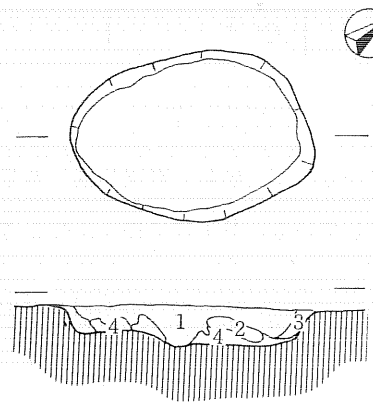
第46図　SK43・45

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ４３	16－C	105×56	79×39.5				N43°W
形態	楕円形						
時期	大洞B						
備考	II層上面での確認。底面は平坦で壁高35cmで垂直に立ち上がる。小ピットは壁際にある。土器片が出土している。						

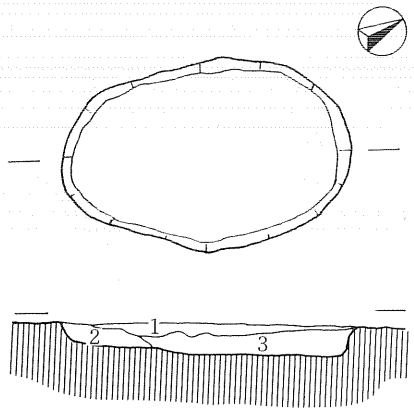
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ４５	9－G	213×208	200×191		○		
形態	円形						
時期	十腰内Ｉ						
備考	ローム面での確認。底面は中央部に向ってゆるやかに傾斜。壁高20cm。多量の土器片と、土製品（83図23）、石鏃(90図15）が出土している。ＳＩ17に伴う土坑と考えられる。						



1．黒褐色土(7.5YR2/2)土器片・焼土ろ含む



1．黒色土(7.5YR2/1)炭化物と焼土粒子を含む
2．黒褐色土(10YR3/2)炭化物を含む
3．黒褐色土(10YR3/2)を黄橙色土(10YR7/8)の混合土
4．黄橙質砂質土(10YR7/8)



1．黒色土(10YR2/1)炭化物と焼土粒子を含む
2．黒色土(7.5YR2/1)
3．極暗褐色土(7.5YR2/3)と黄暗色土(7.5YR7/8)の混合土

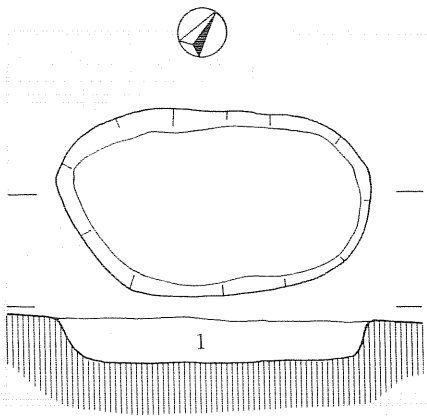
0　1m

第47図　SK46・48・49

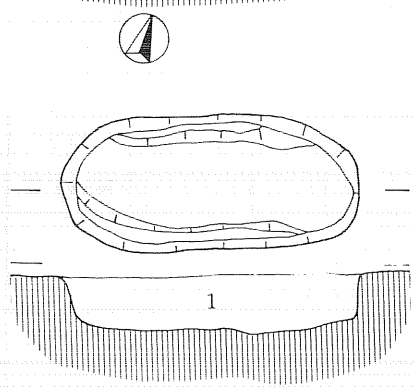
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ４６	13－Ｅ	180.5×90	167×81.5				N87°W
形態	楕円形						
時期	大洞Ｂ						
備考	Ⅱ層上面での確認。底面は平坦で壁高10cmほどで垂直に立ち上がる。土器片・フレイクが出土している。						

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ４８	12-E、13-E	96.5×65	87.5×58.5				N140°W
形態	楕円形						
時期	大洞Ｂ						
備考	Ⅱ層上面での確認。底面は凹凸しており、壁高15cmほどで垂直に立ち上がる。土器片・フレイク出土。						

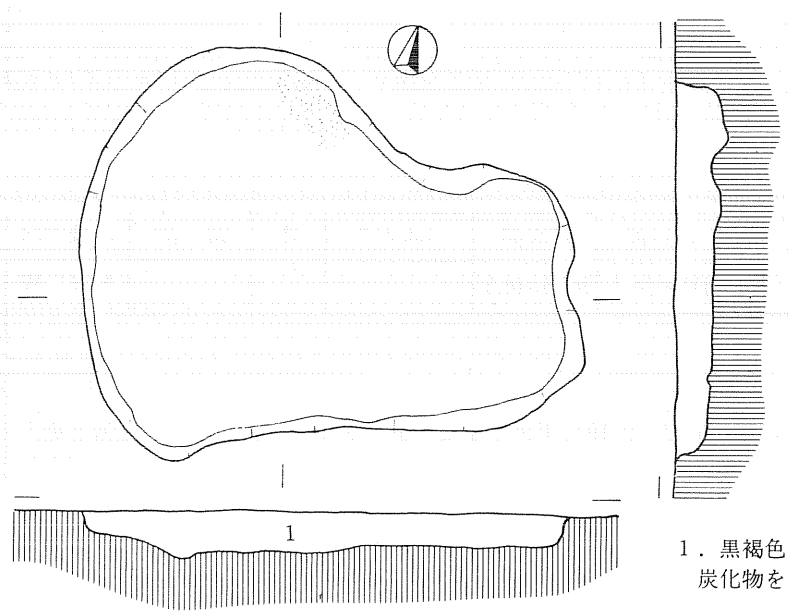
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ４９	12－Ｅ	115×74.5	105.5×66.5				N141°W
形態	楕円形						
時期							
備考	Ⅱ層上面での確認。底面は平坦で壁は垂直である。上面には、炭化物と焼土粒子が広がる。						



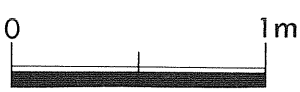
1．黒色土(10YR2/1) 横橙色砂質土(10YR7/8)のブロックと炭化物を含む



1．黒色土(10YR)炭化物を含む



1．黒褐色土(10YR2/2)焼土炭化物を含む

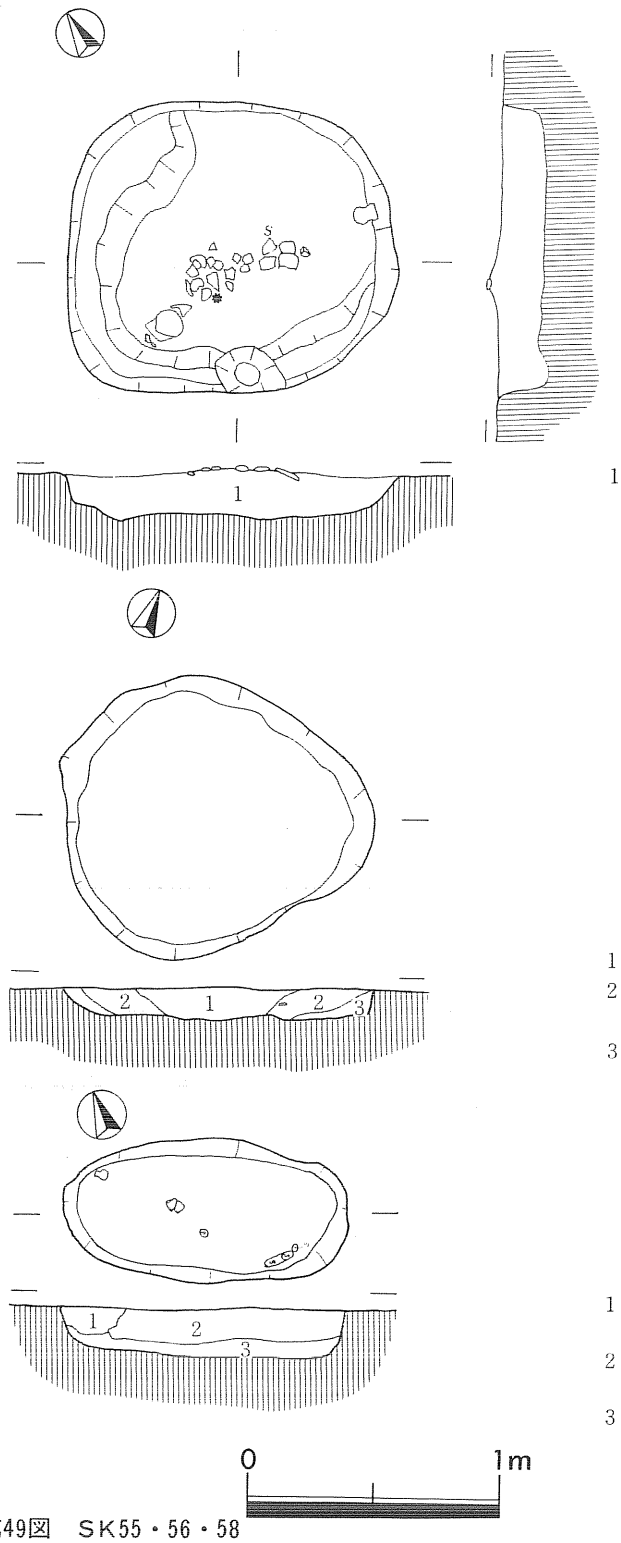


第48図　SK51・52・53

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ５１	11－Ｅ	125×75	113×64				Ｎ24°Ｗ
形態	楕円形						
時期	大洞Ｂ						
備考	Ⅱ層上面での確認。底面は平坦で壁高15cmほどでほぼ垂直に立ち上がる。土器片・フレイクが出土している。						

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ５２	11－Ｅ	118.5×52.5	110×45.5				Ｎ123°Ｗ
形態	楕円形						
時期							
備考	Ⅱ層上面での確認。底面はほぼ平坦で壁高20cmで垂直に立ち上がる。						

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ５３	11－Ｅ	209×120	193×110	○		西	Ｎ178°Ｗ
形態	不整円形						
時期	大洞Ｂ						
備考	Ⅱ層上面での確認。底面は凹凸で壁高15cmで垂直に立ち上がる。北側に40×20cmの範囲にベニガラが広がっている。						



1．黒褐色土(10YR2/2)炭化物10%、焼土少量を混入

1．黒色土(7.5YR2/1)炭化物混入
2．黒褐色土(7.5YR2/2)炭化物5%混入
3．黒褐色土(5YR2/2)

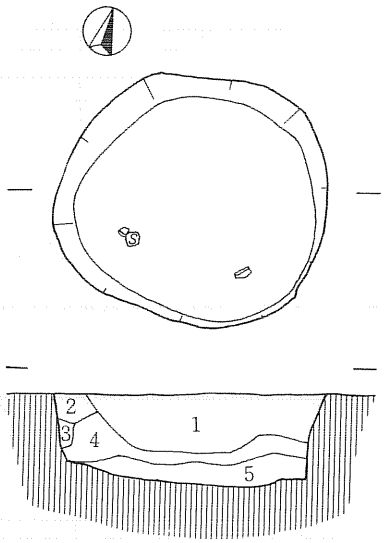
1．黒色土(10YR2/1)焼土・炭化物・チップを含む
2．黒褐色土(10YR2/2)炭化物を含む
3．黒色土(7.5YR2/1)

第49図　SK55・56・58

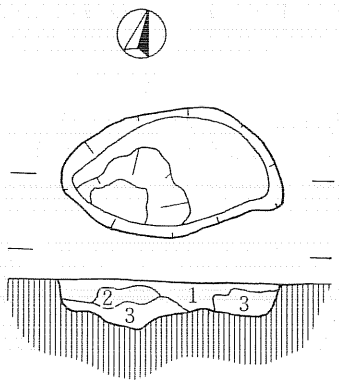
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ５５	11－D	141×126	126×120.5		○		
形態	円形						
時期	大洞B						
備考	II層上面で確認。底面は平坦であるが西側でいったん立ち上り壁高15cmほどで垂直に立ち上がる。土器片・礫が坑内中央部に集中する。骨片は底面で検出された。						

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ５６	11－D	120×109	108×101				
形態	円形						
時期	大洞B						
備考	II層上面での確認。底面は平坦で壁高10cmほどでほぼ垂直に立ち上がる。						

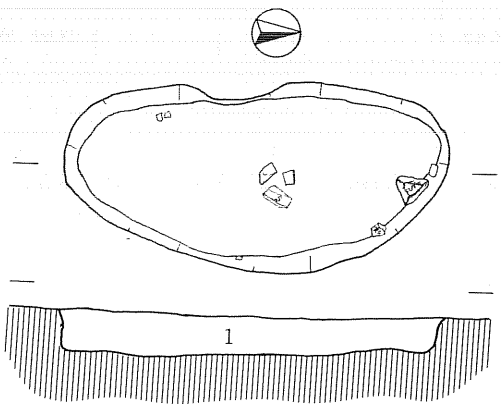
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ５８	12－C	112.5×57.5	102×45				N67°W
形態	楕円形						
時期	大洞B						
備考	II層上面での確認。底面は平坦で壁高20cmほどでほぼ垂直に立ち上がる。壺形土器（85図４）が出土している。						



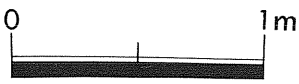
1．黒 色 土(10YR2/1)　炭化物を含む
2．黒 褐 色(10YR2/3)
3．黒 色 土(7.5YR2/1)
4．黒褐色土(10YR2/2)
5．暗褐色土(10YR3/4)



1．黒 色 土(10YR2/1)
2．黒褐色土(10YR2/2)
3．黒褐色土(7.5YR2/2)



1．黒褐色土(10YR2/2)炭化物を含む

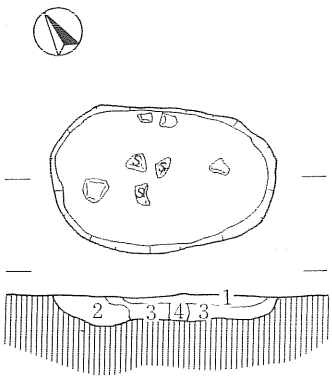


第50図　SK59・60・62

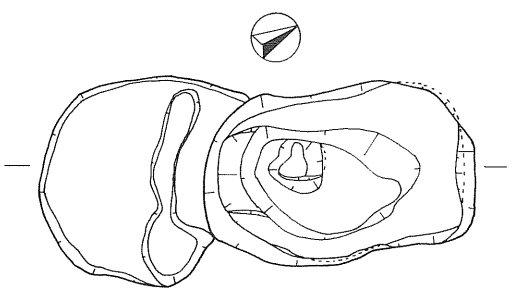
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ５９	12－Ｂ	111.5×105	96×92				
形態	円形						
時期							
備考	Ⅱ層上面での確認。底面は平坦で壁高35cmでほぼ垂直に立ち上がる。出土遺物はない。						

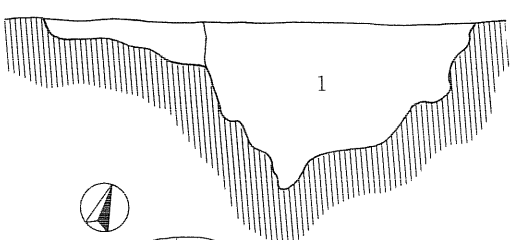
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ６０	12－Ｂ	91×53	80×44				N112°W
形態	楕円形						
時期							
備考	Ⅱ層上面での確認。底面は凹凸で南側は落ちこむ。壁高13cmでほぼ垂直に立ち上がる。						

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ６２	13－Ｂ	152.5×68.5	143×62				N177°W
形態	楕円形						
時期	大　洞Ｂ						
備考	Ⅱ層上面での確認。底面は平坦で壁高20cmで垂直に立ち上がる。土器片・礫は底面より出土。						

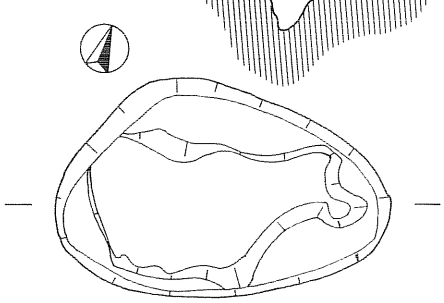


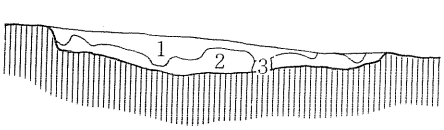
1．黒色土(10YR2/1)炭化物混入
2．黒褐色土(10YR2/2)炭化物を多量に混入
3．暗褐色砂質土(10YR3/4)炭化物を3％混入
4．黒色土(7.5YR2/1)炭化物・焼土を混入



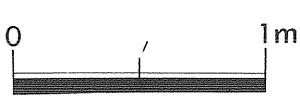


SK065
1．黒褐色土(7.5YR2/2)炭化物を3％混入





1．黒褐色土(10YR2/2)
2．暗褐色土(10YR3/3)炭化物を少量混入
3．明褐色砂質土(7.5YR5/8)

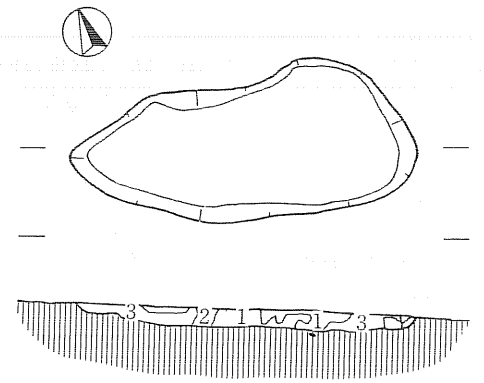


第51図　SK63・65・66

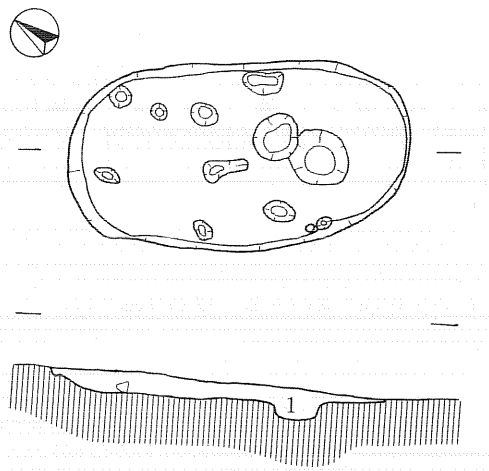
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ６３	13－Ｂ						N78°W
形態	楕円形						
時期	大洞Ｂ						
備考	ローム面での確認。底面は凹凸があり壁高は10cmでほぼ垂直に立ち上がる。土器片・礫は底面より出土。						

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ６５	10-E、10-F	89×90	77×87				
形態	円形						
時期							
備考	ローム面での確認。底面は東に傾き中央部に溝がある。壁高10cmでほぼ垂直に立ち上がる。						

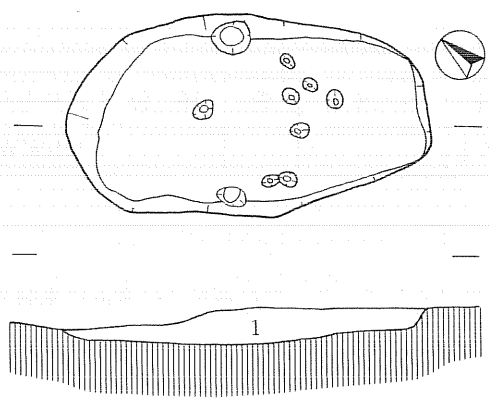
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ６６	９－Ｅ	134×87.5	125×76.5				N108°W
形態	楕円形						
時期							
備考	ローム面での確認。底面はやや凹凸をしている。壁は西側では垂直に東側ではゆるやかに立ち上がる。						



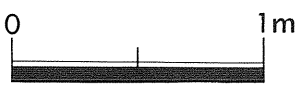
1．黒褐色土(10YR2/2)
2．暗褐色土(10YR3/3)炭化物を少量含む
3．明褐色砂質土(7.5YR5/8)



1．黒褐色土(5YR4)炭化物を含む



1．黒褐色土(5YR2/1)炭水物を含む

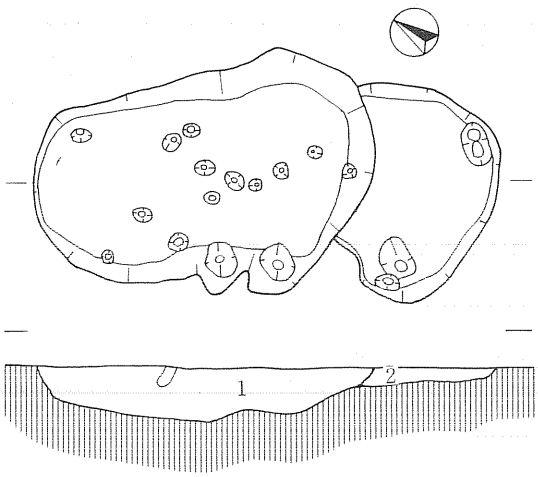


第52図　SK67・68・69

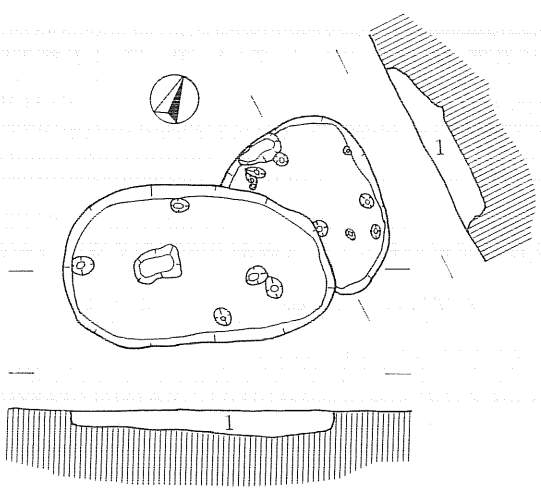
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ６７	９－Ｄ	137×52	122.5×41.5				N73°W
形態	楕円形						
時期							
備考	ローム面直上での確認。底面は平坦で壁はゆるく立ち上がる。						

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ６８	8-B、9-B	135×76.5	129×70				N123°W
形態	楕円形						
時期	大洞Ｂ						
備考	ローム面直上での確認。底面は平坦である。壁は西南ではゆるく立ち上がるが東南では壁はほとんどない。小ピットが壁際に、径20cmのピットが２つ東南よりにある。						

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ６９	8-B、9-B	145×80.5	132×65.5				N123°W
形態	楕円形						
時期	大洞Ｂ						
備考	ローム面直上での確認。底面は平坦であるが壁は東側のみにある。小ピットがある。土器片・フレイクが出土している。						

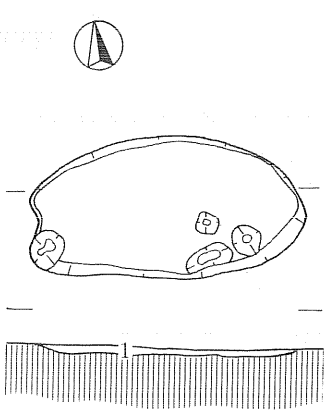


1．黒褐色土(5YR2/1)焼土混入
2．黒褐色土(5YR2/2)炭化物混入

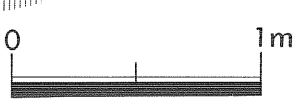


1．黒褐色土(10YR2/2)炭化物を3％混入

1．黒褐色土(10YR2/3)炭化物混入



1．黒褐色土(7.5YR2/2)



第53図　SK70・71・72・73

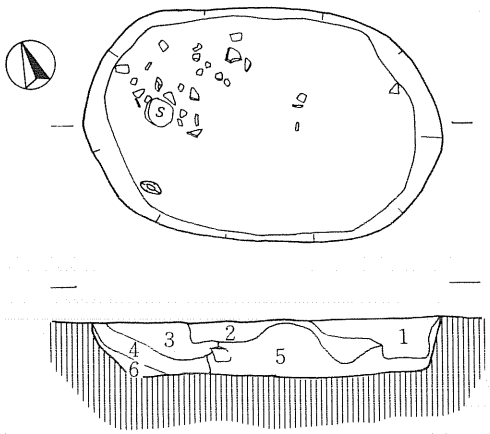
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
SK70(A)	9－A・B	186×88	180×58				N41°W
形態	楕円形						
時期	大洞B						
備考	ローム面直上での確認。底面は中央に向って傾斜し、壁高10cmほどで垂直に立ち上がる。小ピットは中央に集中する。土器片が出土。ＳＫ70(Ｂ)→ＳＫ70(Ａ)						

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
SK70(B)	9－A・B	(75×85)	(70×75)				
形態	円形						
時期							
備考	ローム面直上での確認。底面は平坦で壁高は南側で５cmほどである。東西の壁際にピットがある。ＳＫ70(Ｂ)→ＳＫ70(Ａ)						

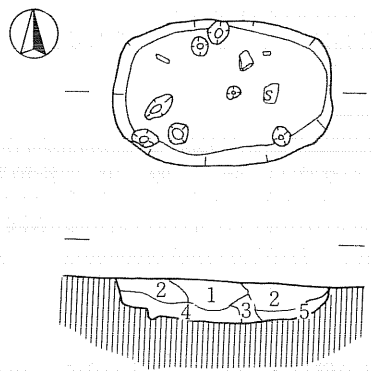
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ７１	９－Ａ	69×55	63×50				N94°W
形態	楕円形						
時期							
備考	ローム面直上での確認。底面はほぼ平坦で壁高５cmほどでゆるく立ち上がる。小ピットがある。ＳＫ71→ＳＫ72						

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ７２	９－Ａ	109×63	102×50				N109°W
形態	楕円形						
時期							
備考	ローム面上での確認。底面は平坦で壁高５cmで垂直に立ち上がる。中央に径15cmほどのピットがあり壁際には小ピットがある。ＳＫ71→ＳＫ72						

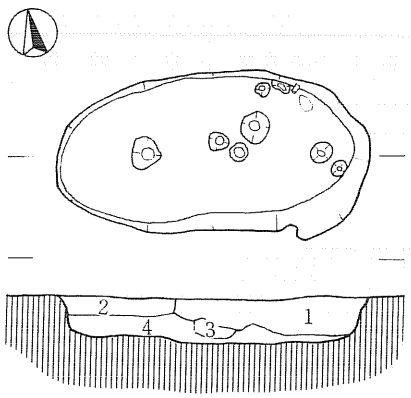
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ７３	９－Ａ	106×57	103×50				N84°W
形態	楕円形						
時期							
備考	ローム面直上での確認。底面は平坦で掘りこみは浅い。小ピットが南の壁際にある。						



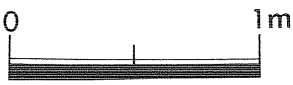
1．黒 色 土(7.5YR1/2)炭化物を含む
2．黒 色 土(7.5YR2/1)炭化物を含む
3．黒褐色土(10YR2/2)
4．黒褐色土(10YR2/2)と黄橙色砂質土の混合土
5．黒褐色土(10YR2/2)炭化物を含む
6．黒 色 土(10YR2/1)



1．黒 色 土(10YR2/1)
2．黒 色 土(7.5YR2/1)焼土を少量含む
3．黒褐色土(7.5YR2/2)と黄橙色砂質土の混合土
4．黒褐色土(5YR2/1)
5．黒色 土(7.5YR2/1)炭化物を含む



1．黒褐色土(10YR2/2)焼土・炭化物を含む
2．黒褐色土(10YR2/2)
3．黒褐色土(10YR2/2)と黄褐色砂質土(10YR7/8)の混合土
4．黒褐色土(10YR2/1)炭化物を含む

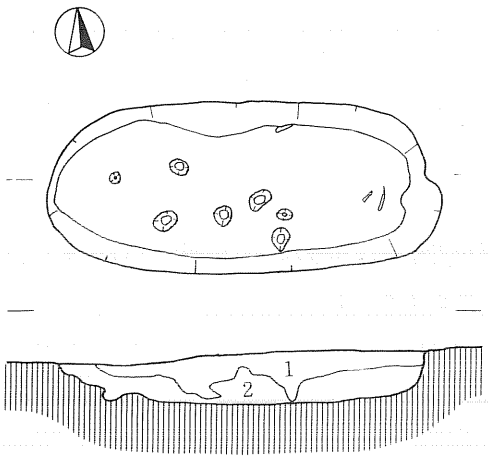


第54図 SK74・76・77

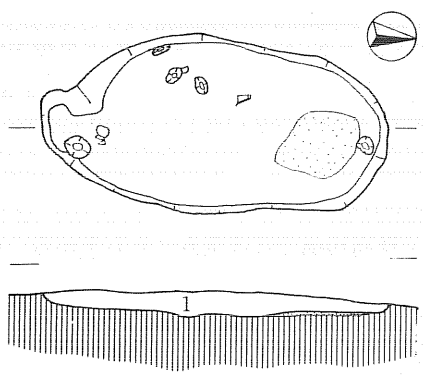
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ７４	９－Ａ	143×94	123×86.5				N57°W
形態	楕円形						
時期	大洞Ｂ						
備考	ローム面上での確認。底面は平坦で壁高は20cmほどだが西側ではゆるく、東側ではほぼ垂直に立ち上がる。土器片・フレイク・チップが出土している。						

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ７６	９－Ａ	88×58	78.5×48.5				N78°W
形態	楕円形						
時期	大洞Ｂ						
備考	ローム面直上での確認。底面は平坦で壁高10cmでほぼ垂直に立ち上がる。小ピットあり土器片・フレイクが出土している。						

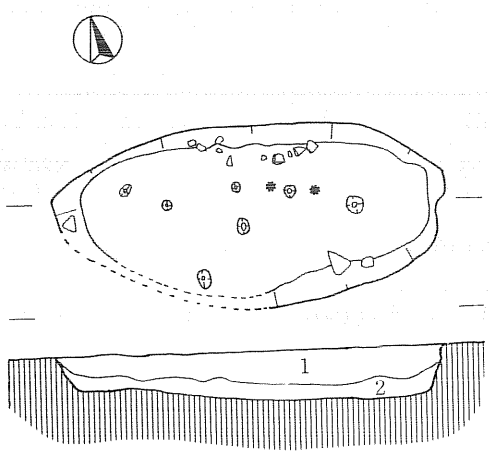
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ７７	８－Ａ	126×62	118×53				N80°W
形態	楕円形						
時期							
備考	ローム面直上での確認。底面は平坦で壁高15cmほどでほぼ垂直に立ち上がる小ピットがある。						



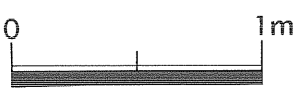
1．黒色土(7.5YR 2/1)炭化物・焼土・土器片を含む
2．黒褐色土(15YR 2/1)炭化物・焼土・土器片を含む



1．黒色土(7.5YR 2/1)炭化物焼土・ベンガラを含む



1．黒褐色土(7.5YR 2/2)炭化物を含む
2．黒 色 土(7.5YR 1.7/1)炭化物を含む

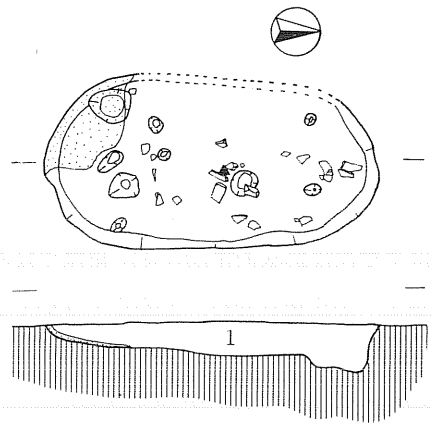


第55図　SK78・79・80

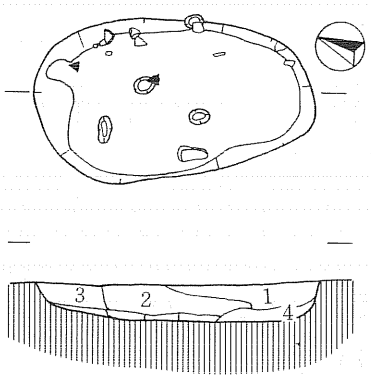
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ７８	８－Ａ	153×69	140×50				N83°W
形態	楕円形						
時期	大洞Ｂ						
備考	ローム面直上での確認。底面は平坦で壁高は25cm西側はゆるく東側では垂直に立ち上がる。小ピットあり。埋土全体に焼土・炭化物を含む。土器片・フレイクを出土。						

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ７９	８－Ｂ	139×70	131×65.5	○		北	N179°W
形態	楕円形						
時期	大洞Ｂ						
備考	ローム面直上での確認。底面は平坦で壁はほとんどない。小ピットがあり、ベニガラが坑内北側に25×25cmの範囲で広がる。土器片・フレイクが出土している。						

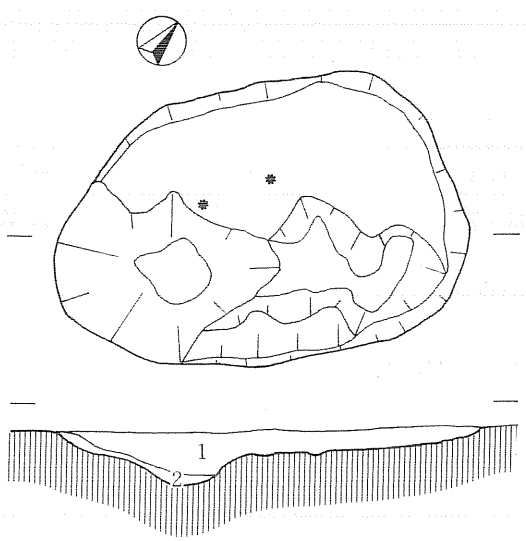
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ８０	８－Ａ	154×73	138×56		○		N77°W
形態	楕円形						
時期	大洞Ｂ						
備考	ローム面直上での確認。底面はほぼ平坦で壁高20cmでほぼ垂直に立ち上がる小ピットあり。骨片は埋土中より検出。土器片・フレイクが出土している。 ＳＫ80→ＳＫ81→ＳＫ82						



1．黒褐色土(7.5YR2/2)炭化物を含む



1．黒色土(7.5YR2/1)炭化物を含む
2．黒褐色土(10YR2/2)黄燈色土(7.5YR7/8)の混合土
3．黒色土(10YR2/1)炭化物混入
4．黒色土(7.5YR1.7/1)炭化物を多量に含む
5．黄燈色砂質土(7.5YR7/8)



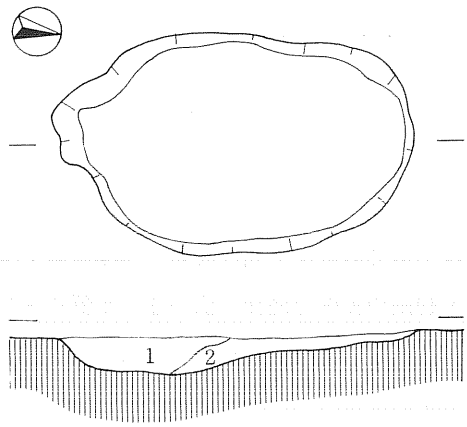
1．黒色土(7.5YR2/1)
2．黒褐色土(5YR3/1)

第56図　SK81・82・90

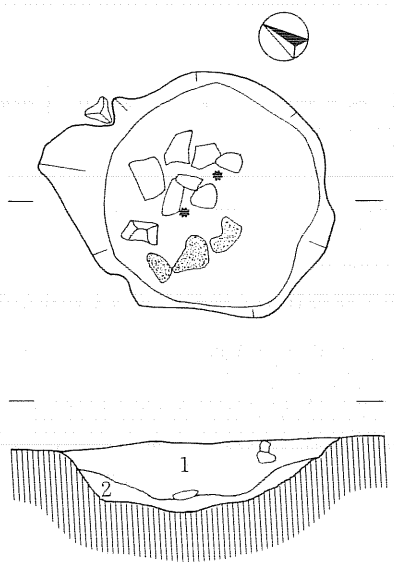
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ８１	８－Ａ	133×65	122×60	○		南	N176°W
形態	楕円形						
時期	大洞Ｂ						
	ローム面直上での確認。底面は平坦であるが壁高は北側で20cm南側７cmほどある。小ピットあり。ベニガラは南に25×40cmの範囲で底面に広がる。土器片・フレイク・石鏃（90図16）が底面より出土している。ＳＫ80→ＳＫ81→ＳＫ82						

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ８２	８－Ａ	112×62.5	90×58				N20°W
形態	楕円形						
時期	大洞Ｂ						
備考	ローム面直上での確認。底面は平坦で壁高15cmで垂直に立ち上がる。小ピットあり。石鏃２点（90図17･18）、凹石(92図３)、土器片が底面より出土している。ＳＫ80→ＳＫ81→ＳＫ82						

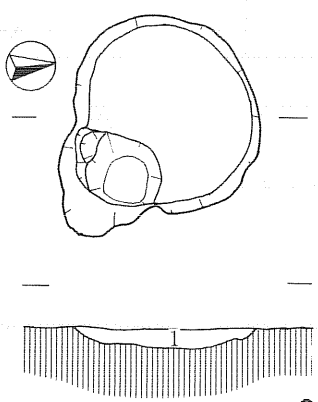
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ９０	11－Ｇ	164×110	155×101		○		N62°W
形態	楕円形						
時期	大洞Ｂ						
備考	ローム面直上での確認。底面は凹凸で壁はゆるやかに立ち上る。骨片は底面より出土。土器片・フレイクは埋土中より出土。						



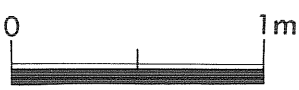
1．黒色土(7.5YR2/1)
2．褐色土(10YR4/4)



1．黒褐色土(10YR3/2)
2．暗褐色土(7.5YR3/4)炭化物を含む



1．黒褐色土(5YR3/1)北側に炭化物を含む

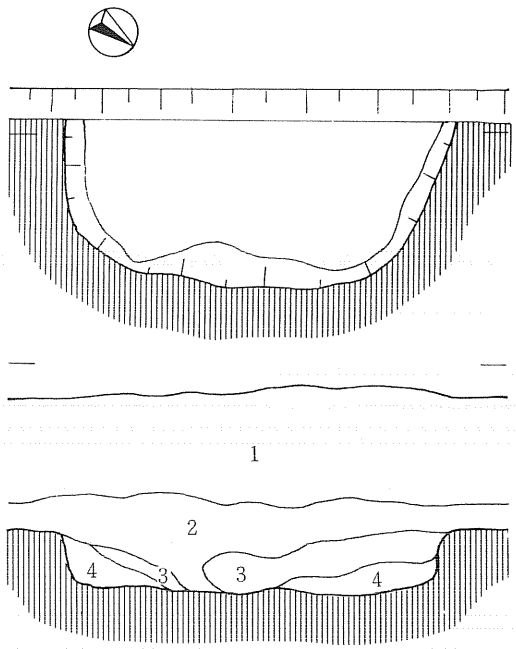


第57図　SK91・92・93

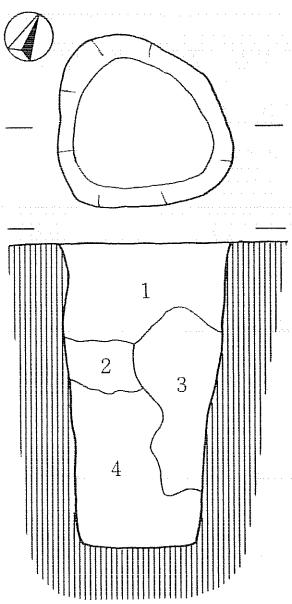
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ９１	10－G	141×86.5	128.5×77.5				N192°W
形態	楕円形						
時期							
備考	ローム面直上での確認。底面は南側で落ちこむ。壁は南側で垂直に北側ではゆるやかに立ち上がる。						

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ９２	10－G	118.5×98	81.5×86	○	○		
形態	円形						
時期	大洞B						
備考	ローム面直上での確認。底面はすり鉢状を呈する。骨片は埋土中より、ベンガラは西側に広がっている。土器片、不定形石器（91図５）が出土している。						

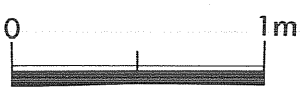
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　部	長軸方向
ＳＫ９３	11－H	97×78.5	77×69				
形態	円形						
時期							
備考	ローム面直上での確認。底面はほぼ平坦で壁はゆるく立ち上がる。						



1．黒褐色土（5YR2/1）
2．黒褐色土（5YR2/1）
3．黒褐色土（5YR2/1）
4．黒褐色土（10YR3/2）



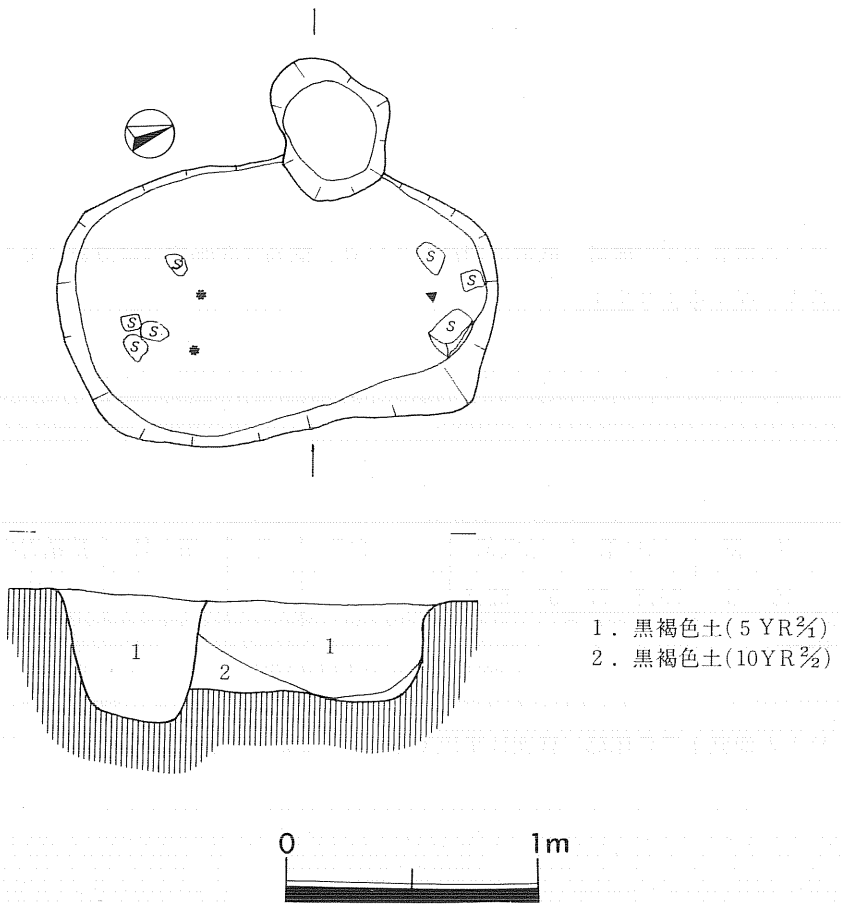
1．黒　色　土（7.5YR2/1）
2．黒　色　土（10YR2/1）
3．黒褐色土（10YR2/2）
4．黒褐色土（10YR3/2）



第58図　SK94・95

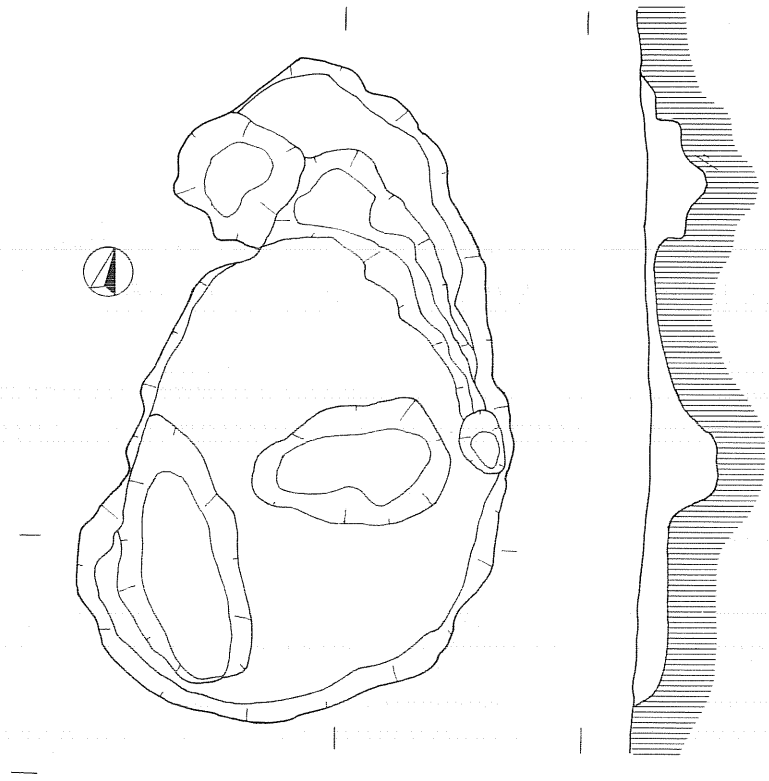
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ９４	10－H	156×60	141×55				N48°W
形態	楕円形						
時期	大洞B						
備考	ローム面直上での確認。底面は凹凸している。壁高は20cmでほぼ垂直に立ち上がる。土器片が埋土中より出土。						

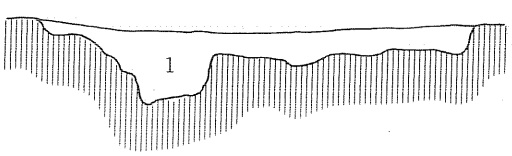
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ９５	10－G	78.5×70	57×52.5				
形態	円形						
時期							
備考	ローム面直上での確認。底面は平坦で壁高は1.2mで垂直に立ち上がる。						



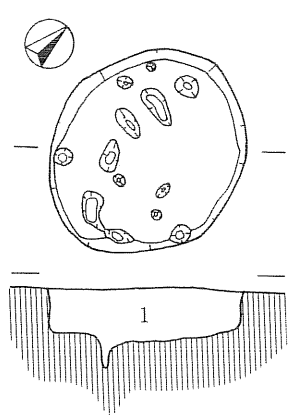
第59図　SK97

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ９７	10－Ｈ	58×43.5	40×33.7		○		N95°W
形態	楕円形						
時期							
備考	ローム面直上での確認。底面はほぼ平坦西側一部に攪乱を受ける。壁高は北側235cmで垂直に立ち上がる。骨片、石鏃（91図６）が底面より出土している。						

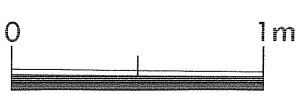




1．黒褐色土(7.5YR3/1)炭化物を含む



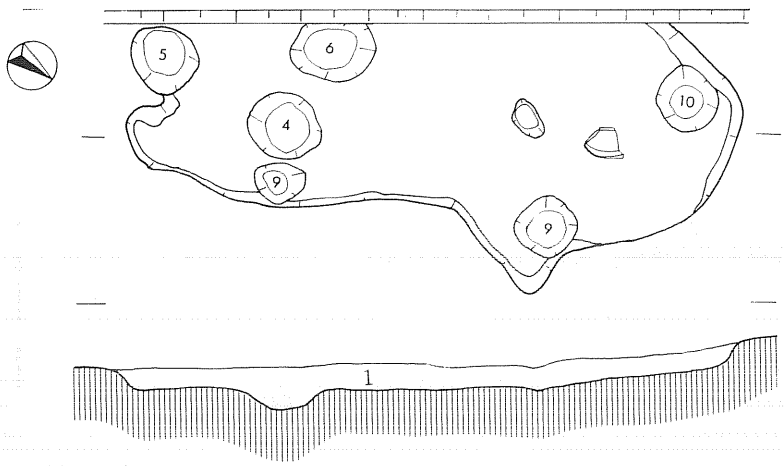
1．黒褐色土(7.5YR2/2)炭化物を含む



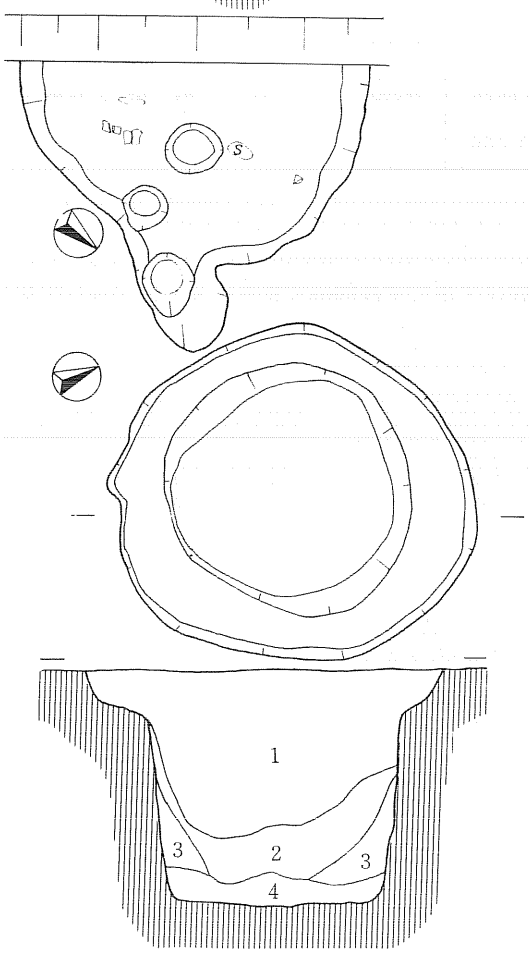
第60図　SK99・100

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ９９	９－Ｇ	48×44	21×30				
形態	不整円形						
時期	後期						
備考	ローム面直上での確認。底面は凹凸がはげしい。壁高は５cmほどで垂直に立ち上がる。						

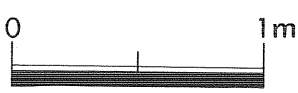
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ１００	10-C、11-C	83×77	73×69				
形態	円形						
時期							
備考	ローム面直上での確認。底面は平坦で壁高20cmで垂直に立ち上がる。小ピットあり。						



1．黒褐色土（5YR2/2）



1．黒色土（10YR1.7/1）
2．黒褐色土（10YR3/2）
3．黒色土（7.5YR1.7/1）
4．黄褐色土（10YR5/6）

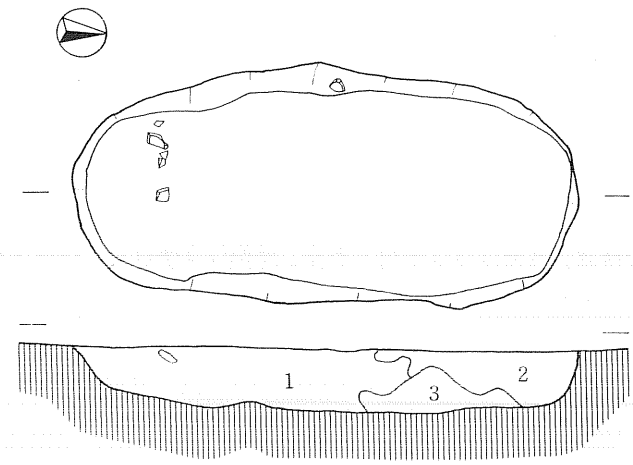


第61図　SK102・103・104

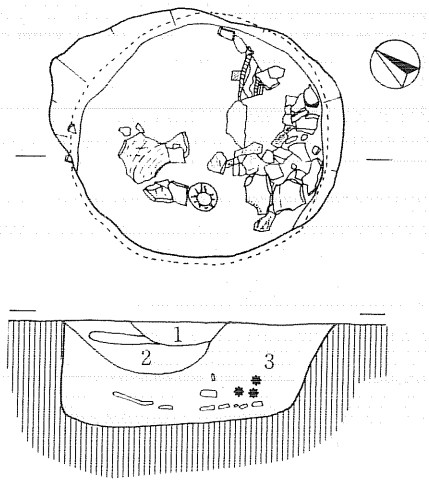
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ１０２	９－Ｈ	230×80	221×76				
形態	不整円形						
時期							
備考	ローム面直上での確認。底面はほぼ平坦である。壁高は５cmほどでほぼ垂直に立ち上がる。ピットあり。						

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ１０３	８－Ｈ	136×133.5	118×107				
形態	不整円形						
時期							
備考	ローム面直上での確認。						

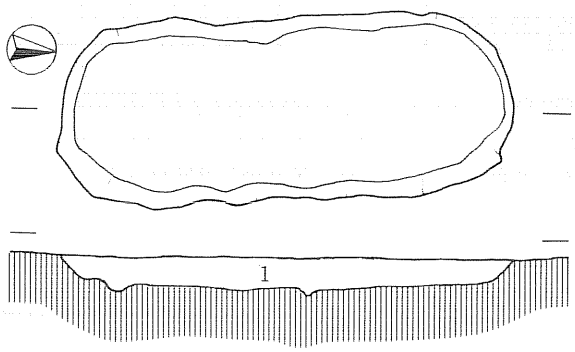
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ１０４	４－Ｃ	143.5×130	135.5×122				
形態	円						
時期							
備考	ローム面直上での確認。底面は平坦である。壁高は1.5ｍほど垂直で上部はゆるく立ち上がる。						



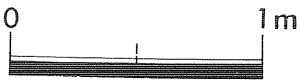
1．攪　乱
2．黒褐色土(5YR2/1)炭化物を含む
3．黒　色　土(10YR1/7)　炭化物を多く含む



1．黒　色　土(5YR1/7)
2．黒　色　土(10YR2/1)
炭化物を含む
3．黒　色　土(2.5YR2/1)
炭化物を含む



1．黒色土(10YR1/7)炭化物を少量含む



第62図　SK151・155・156

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ１５１	19-R、19-S	200×95	190×75				N15°W
形態	楕円形						
時期							
備考	ローム面での確認。底面は平坦で、壁高は20cmで南側はゆるく、北側では垂直に立ち上がる。						

土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ１５５	21－T	115×115	100×100		○		
形態	円						
時期	後期						
備考	ローム面での確認。底面は平坦壁高35cmで北側は垂直南側はゆるやかに立ち上がる。骨片は３層中より出土。出土土器で図のものは５つの花弁状の突起を有し、胴ですぼまり、胴部下半には縄文を施したものである。						

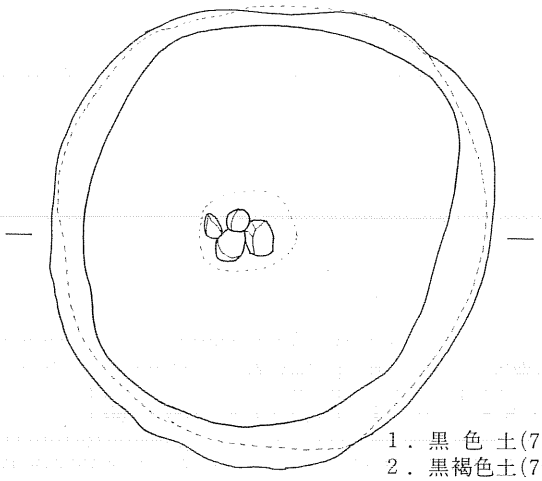
土坑番号	位　置	坑口部	坑底部	ベニガラ	骨	頭　位	長軸方向
ＳＫ１５６	19－Q	180×73	170×60				N10°W
形態	楕円形						
時期	後期						
備考	ローム面での確認。底面はやや凹凸しており壁は10cmほどでゆるく立ち上がる。						

4　その他の遺構

住居跡、炉跡、土坑の他に検出された遺構は、井戸１、Ｔピット２、埋甕１、配石遺構１である。

SE01　（第63図）

40－Ｌグリッドで検出されたもので、上面径2.3ｍで、上面から50cmほどで径1.7ｍにすぼまり、深さ２ｍで底面に達する。底面径は２ｍである。落ちこみがあり４コの石があるが、湧水が激しく、これ以上掘り進めることが出来なかった。出土遺物がなく、時代は不明である。



1．黒 色 土(7.5YR2/1)
2．黒褐色土(7.5YR3/1)
3．黒褐色土(10YR3/2)
4．黒褐色土(10YR2/3)
5．黒褐色土(7.5YR2/2)
6．黒 色 土(10YR2/1)

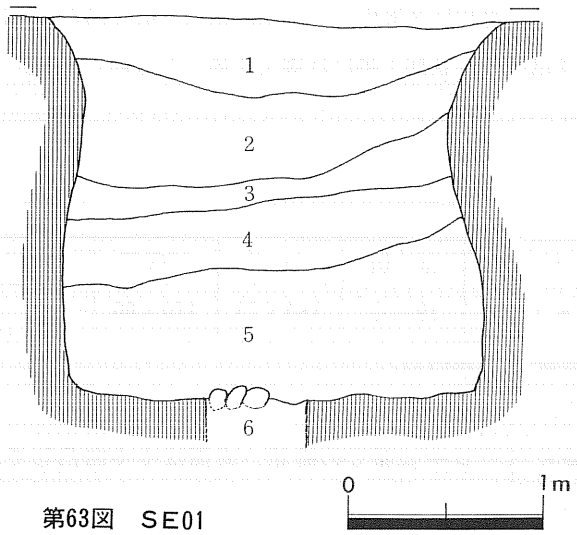
Ｔピット　（SK88・89）

SK88　（第64図）

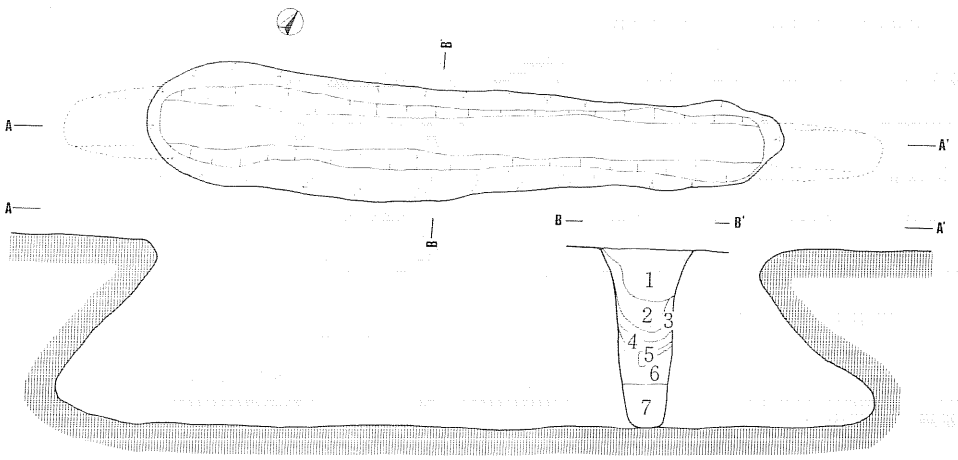
16－Ｄグリッドで検出された。長軸は東西方向で、上面0.65×4.65ｍ、底面0.25×5.95ｍで、深さ1.3ｍで底面に達する。底面は平坦で、両端は袋状になっている。

SK89　（第64図）

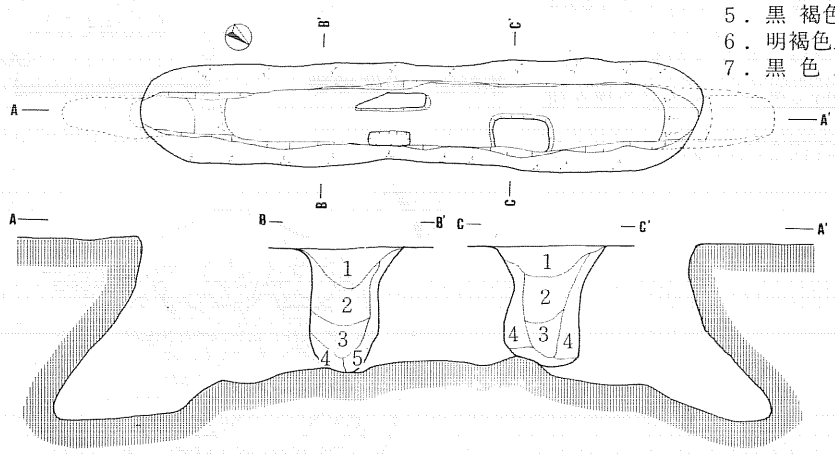
18・19－Ｈグリッドで検出され地山ローム直上で確認したものである。上面は0.8×4.1ｍ、底面0.4×5.2ｍで深さ0.8ｍである。底面の両端は袋状に深くなり、中央部が高くなっている。



第63図　SE01



1．黒褐色土(5YR1/2)
2．黒褐色土(5YR2/2)
3．褐 色 土(7.5YR3/4)
4．黒 色 土(7.5YR1/2)
5．黒 褐色土(7.5YR2/2)
6．明褐色土(7.5YR4/6)
7．黒 色 土(7.5YR1/17)



1．黒褐色土(5YR1/2)
2．黒褐色土(5YR1/2)
3．黒褐色土(5YR2/2)
5．暗褐色土(5YR2/3)

0 2m

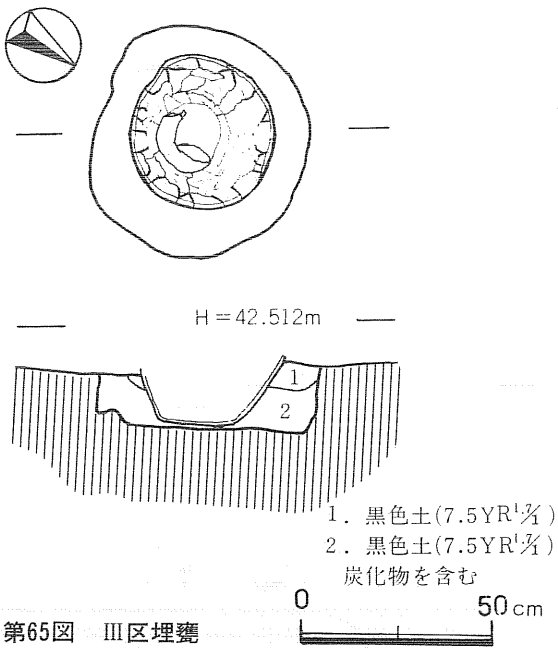
第64図　Tピット(SK88・89)

埋甕　（第65図、第90図３、図版20）

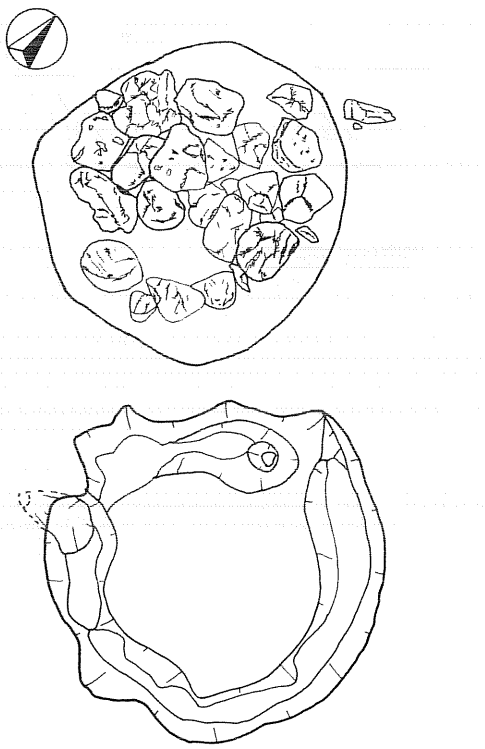
84－Ｈグリッド ＳＩ 07の東北で検出されたもので調査による埋甕は１つだけである。径5.5cmの黒色土に埋められたものである。埋甕は底径11cm、厚さ８cmの粗製深鉢形土器で口縁部はない。外面に条痕が引かれ、煤状炭化物が付着している。

配石遺構　（第66図、図版19）

84－Ｆグリッド検出されたもので、地山ローム面で確認出来た。およそ10－20cmの自然礫を25個ほどびっしりと径85cmの円形に敷きつめたものである。礫を除去すると、幅20cm深さ５cmほどの溝が確認されたが、時代を決める遺物は出土しなかった。



第65図　Ⅲ区埋甕



第66図　配石遺構

5 小 結

住居跡は計24軒、うち前期が7軒(円筒下層b・d)、後期5軒、晩期1軒、時期不明11軒である。前期の住居跡は楕円形か隅丸方形で周溝をもつものがＳＩ09、ＳＩ02である。特にＳＩ09からは、多量の石器が出土しており、その他の前期の住居跡からも石匙・石錘・凹石が出土しており、当時の生産形態がうかがえる。炉は中央部に落ちこみをもつ地床炉と考えられる。後期の住居跡5軒のうちプランの明確なものはＳＩ03･17･24である。プランは円形と考えられるが、ＳＩ17のごとく壁の外に柱穴をもち周溝がめぐっているものもある。ＳＩ24も周溝をもつが部分的で壁よりやや内側にある。又、ＳＩ17の西側にあるＳＫ45から出土した土器と同一個体のものが同住居跡より出土しており、ＳＩ17とＳＫ45が同時期のものと考えられる。その他の後期のＳＩ14・15は部分的に削平されているが、おそらく円形を呈するものであろう。時期不明の住居跡が11軒と多いがこれは、調査地域外にかかる住居跡が多かったことと、出土遺物が全くないことによるものである。

炉は8基検出されたが保存状態が必ずしも良好とは言えず、時期を判断出来る埋設土器などもなく、確認状態を記載するにとどめたが確認面がII層上面であって、晩期土器群と同一レベルであったことから炉も晩期のものと考えられる。

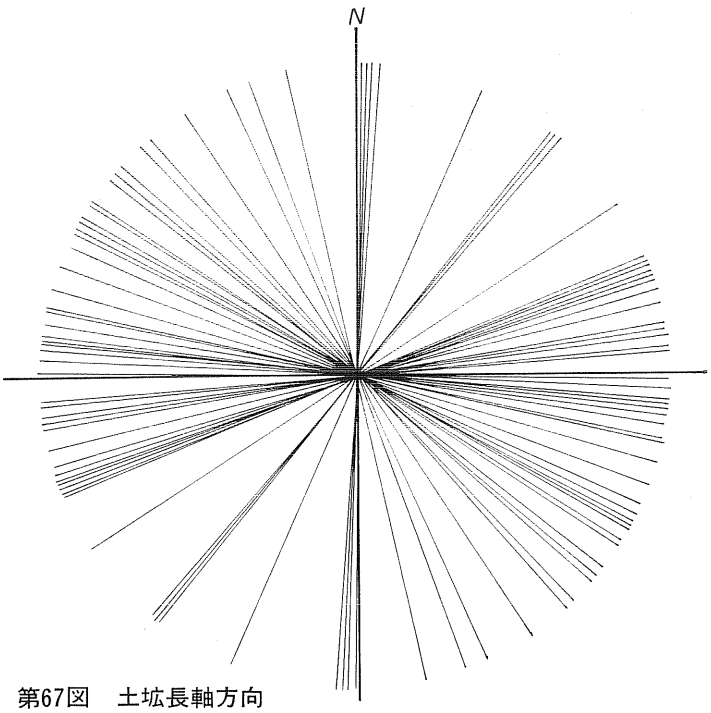
土坑は前述の通りＳＫ45を除けば86基である。そのうち77基がII区で検出されたものである。これら土坑群の形態は、楕円形61基、円形11基、不整円形4基、隅丸方形1基であり底面は平担で、壁も垂直に近いものが多い。土坑の数に比べて土器片・フレイク・チップを除く副葬品が出土した土坑は少なく石鏃の出土したものが5基(ＳＫ20・22・24・82・97)、土製品を出土したものが4基(ＳＫ12・22・24・36)、石製品を出土したものが1基(ＳＫ03)である。又埋甕を伴ったものが1基(ＳＫ34)である。ベニガラを検出出来たものは6基(ＳＫ25・26・53・79・81・92)であるが必ずしも、底面から検出されたわけではなく人為的に敷れたと判断するには資料に乏しいと思われる。骨を検出出来たのは12基(ＳＫ05・22・23・25・26・29・39・55・80 90・92・97)であるが、全てが底面に接して検出されたわけではなく、また骨そのものが人骨かどうか鑑定するには難しい細片ばかりである。II区で検出された土坑群77基の長軸方向はN40°W～N115°Wであるが、SK05だけは、この範囲外でN5°Wであり人骨の出土状況等からもこの土坑のみが特異であることがわかる。さらに77基の土坑群は15ラインを境にして北(Ａ群)、南(Ｂ群)とに分けられそうである。Ａ群はSK23・25・34・35・40・41を中心として、Ｂ群はSK70～83を中心として、その周辺を環状に土坑が並ぶものと考えられる。さらにＢ群のＳＫ80・81・82の切り合いは明確で古い順にＳＫ80→81→82となり、この3つの土坑出土の土器は同時期であるが、土坑の作られた時期には時間差があることがわかる。

III区検出の土坑は3基(ＳＫ151・155・156)であるが特にＳＫ155からは後期の深鉢形土器がほ

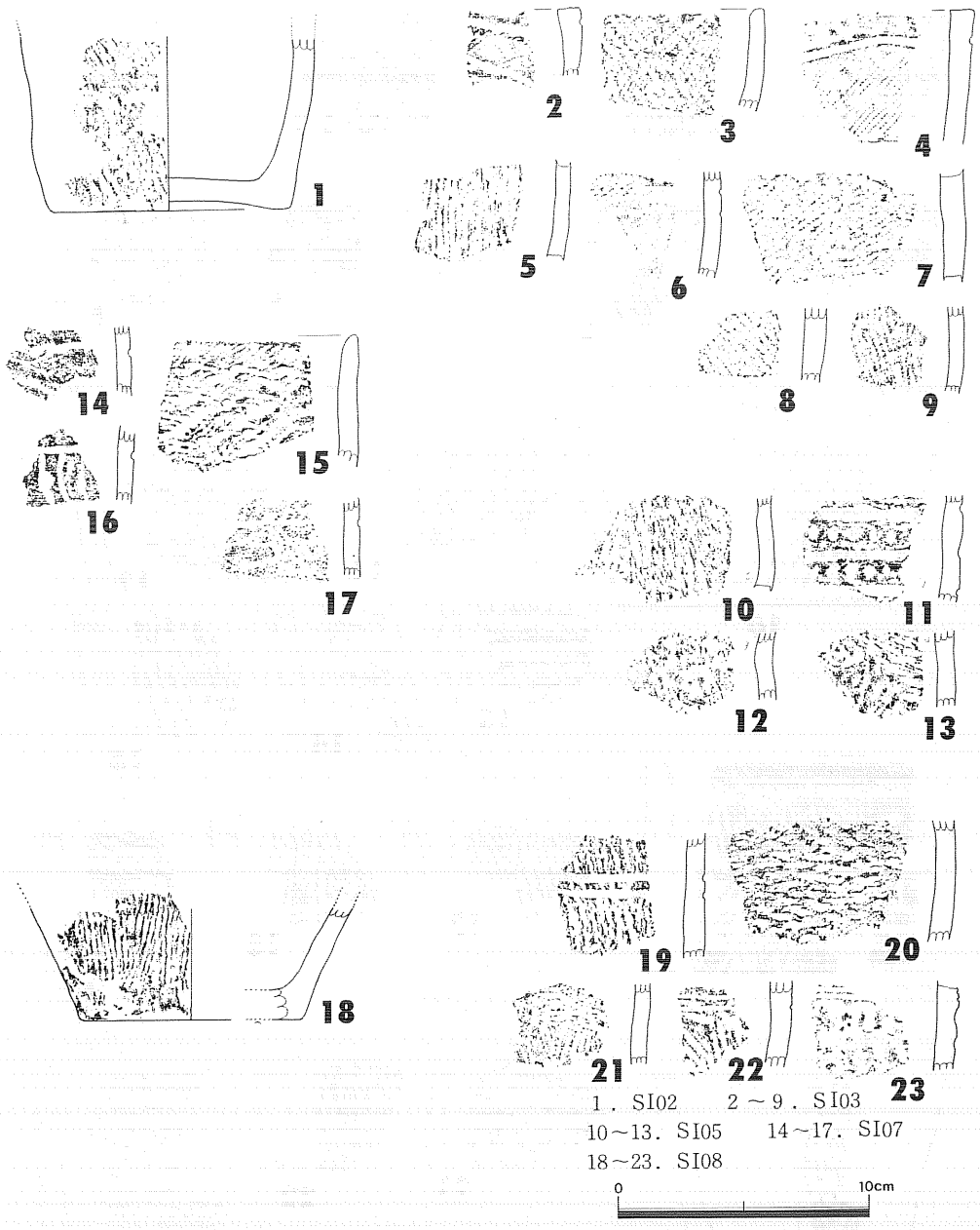
ぼ一個体まとまって骨片とともに出土している。

他に井戸跡・配石遺構の時期は不明であるが、Ⅲ区の埋甕は、後期の粗製深鉢形土器で胴部上半はないが条痕文が底部まで施されたものである。

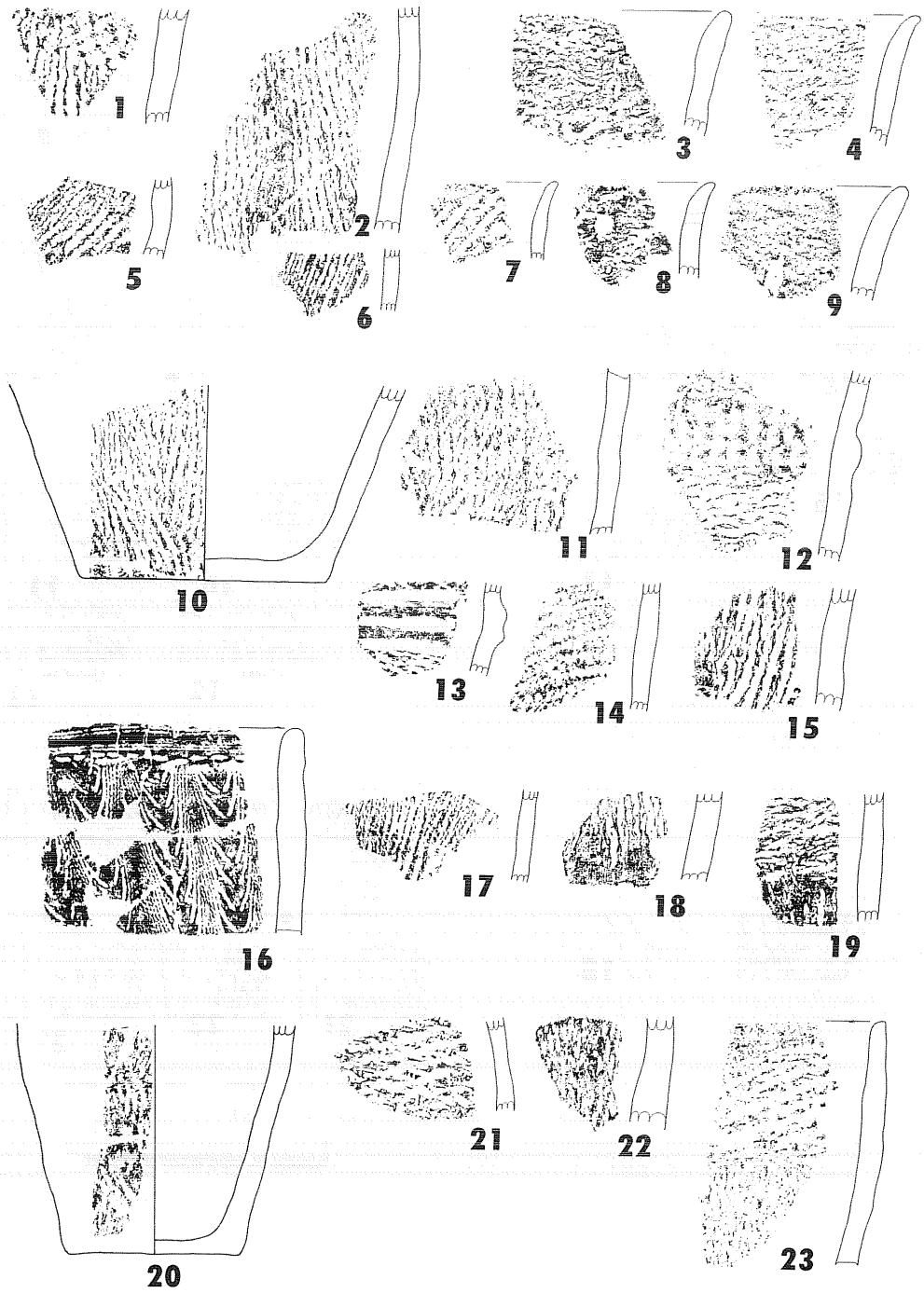
以上遺構について述べたが、藤株遺跡が縄文前・後・晩期に営まれていることがうかがえる。



第67図　土坑長軸方向



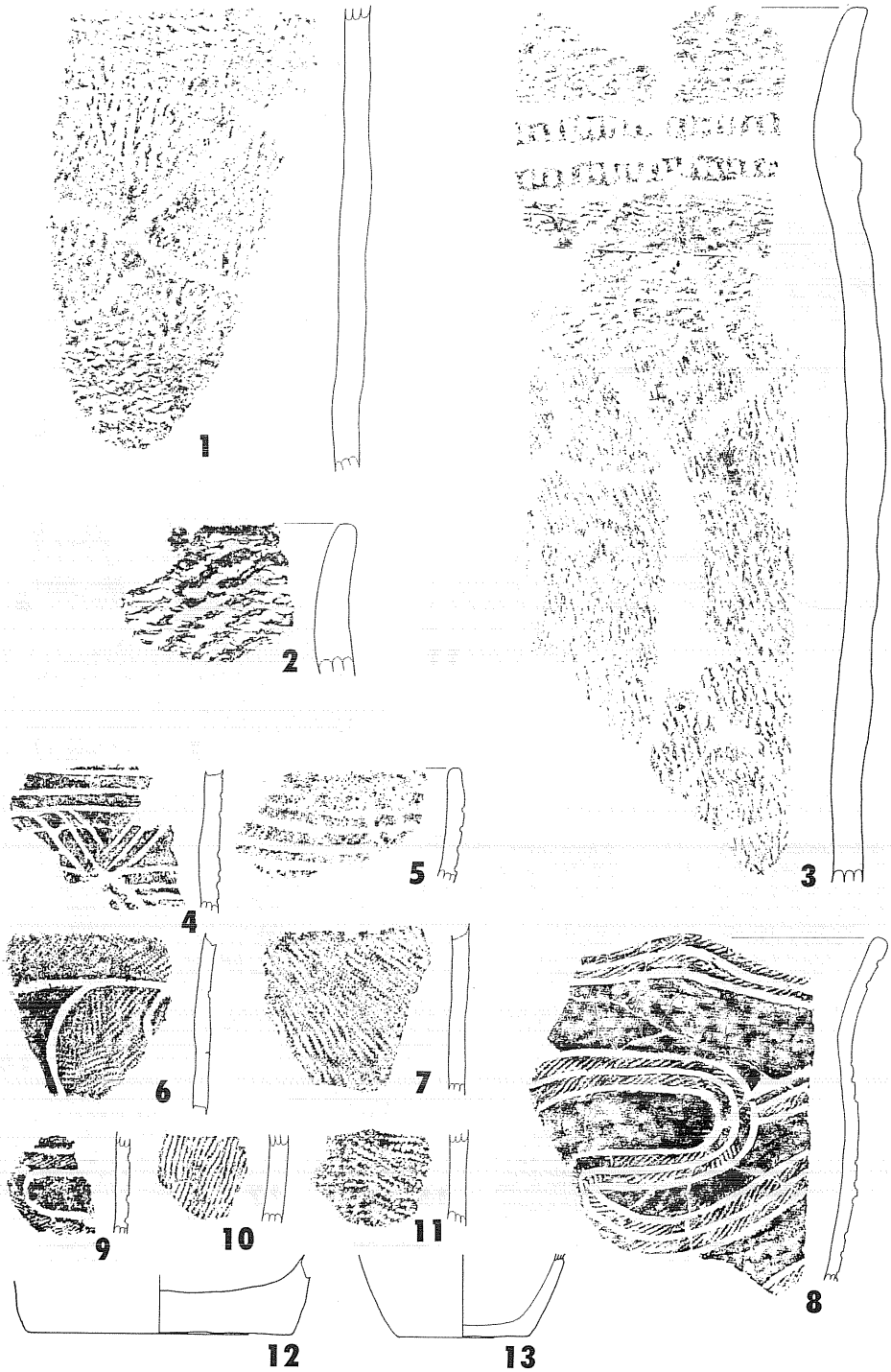
第68図　SI 01・03・05・07・08出土土器



1～15. SI09　16～19. SI12
20～23. SI13

0　10cm

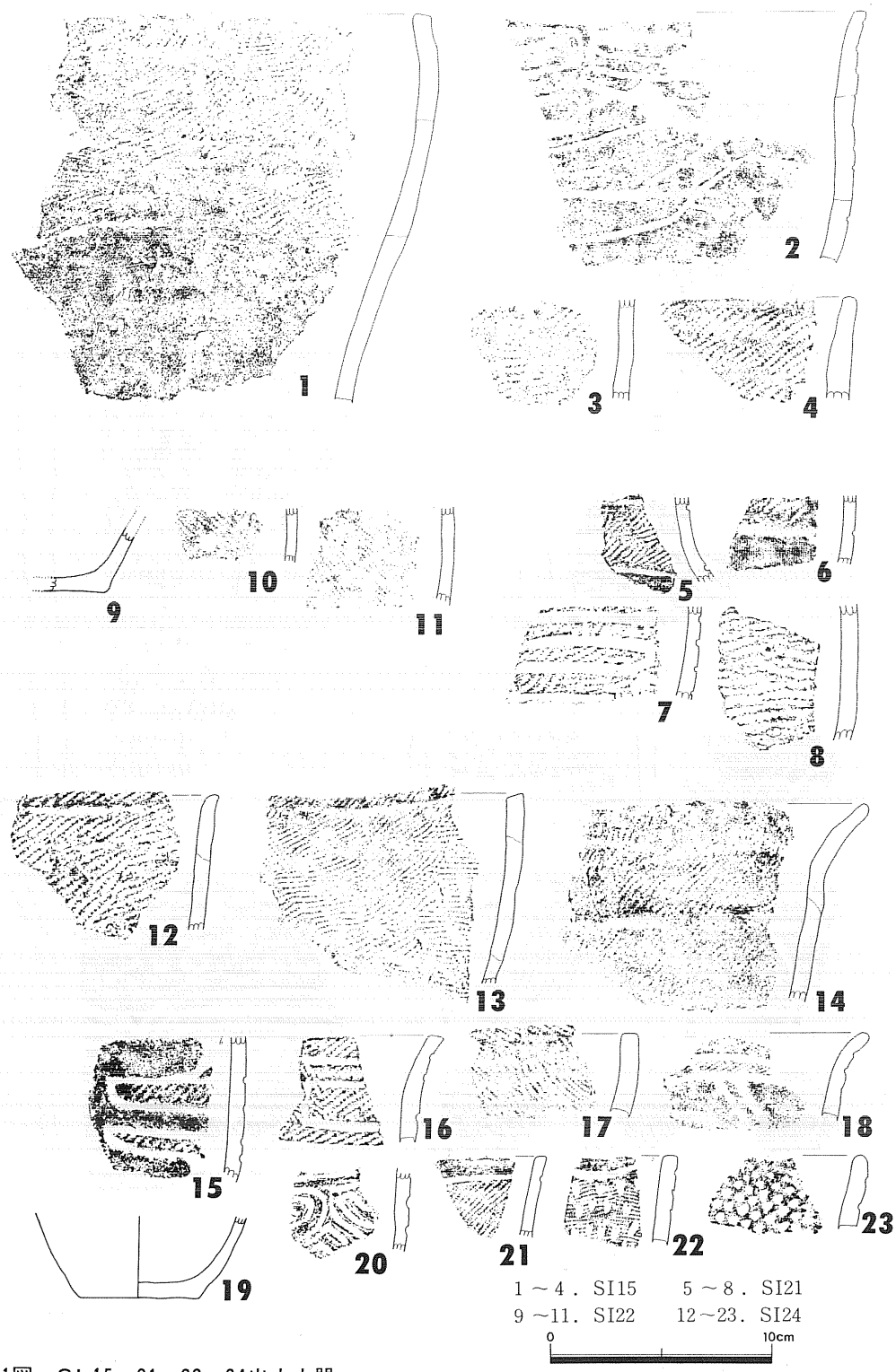
第69図　SI 09・12・13出土土器



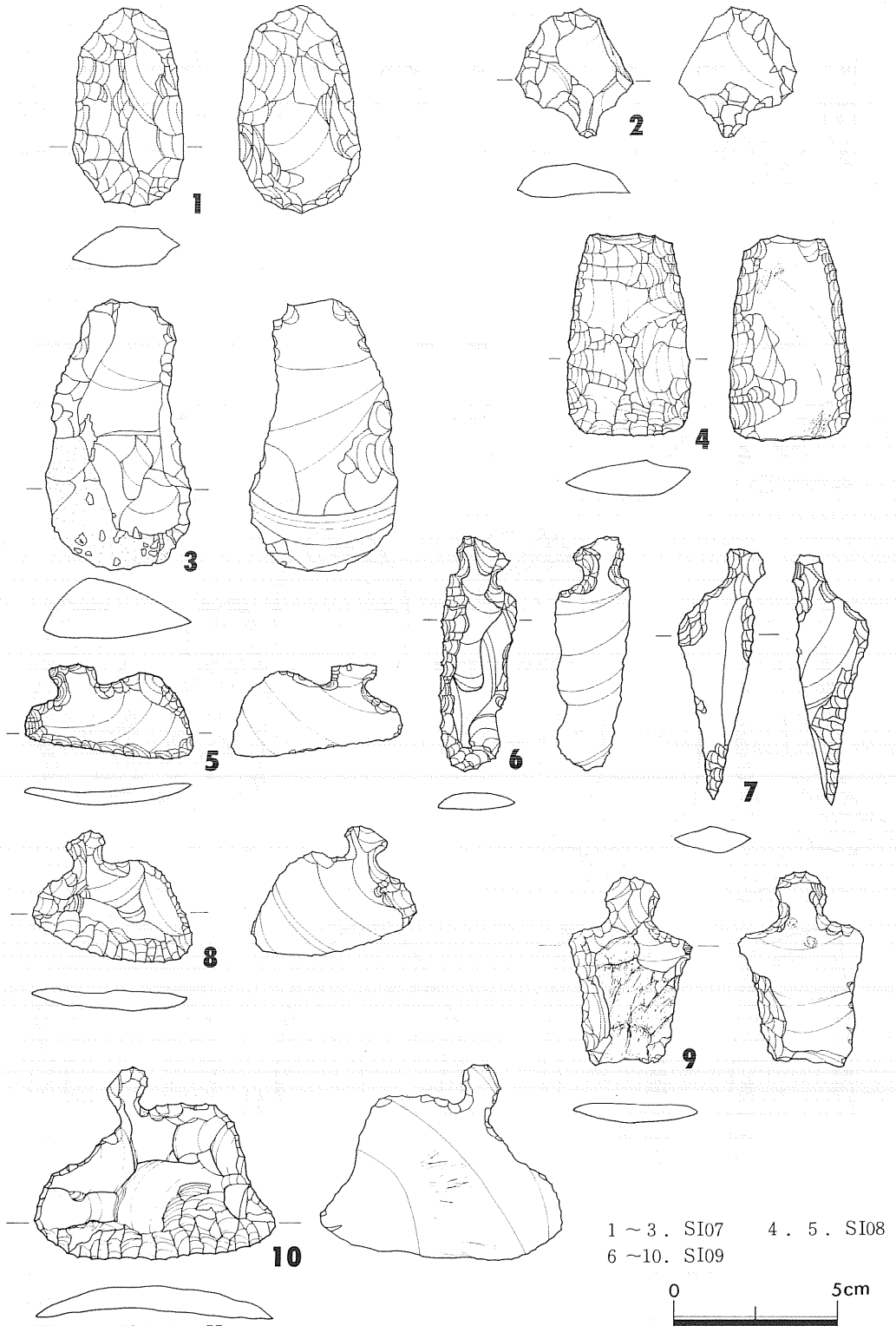
1～3．SI13　4～13．SI14

0　10cm

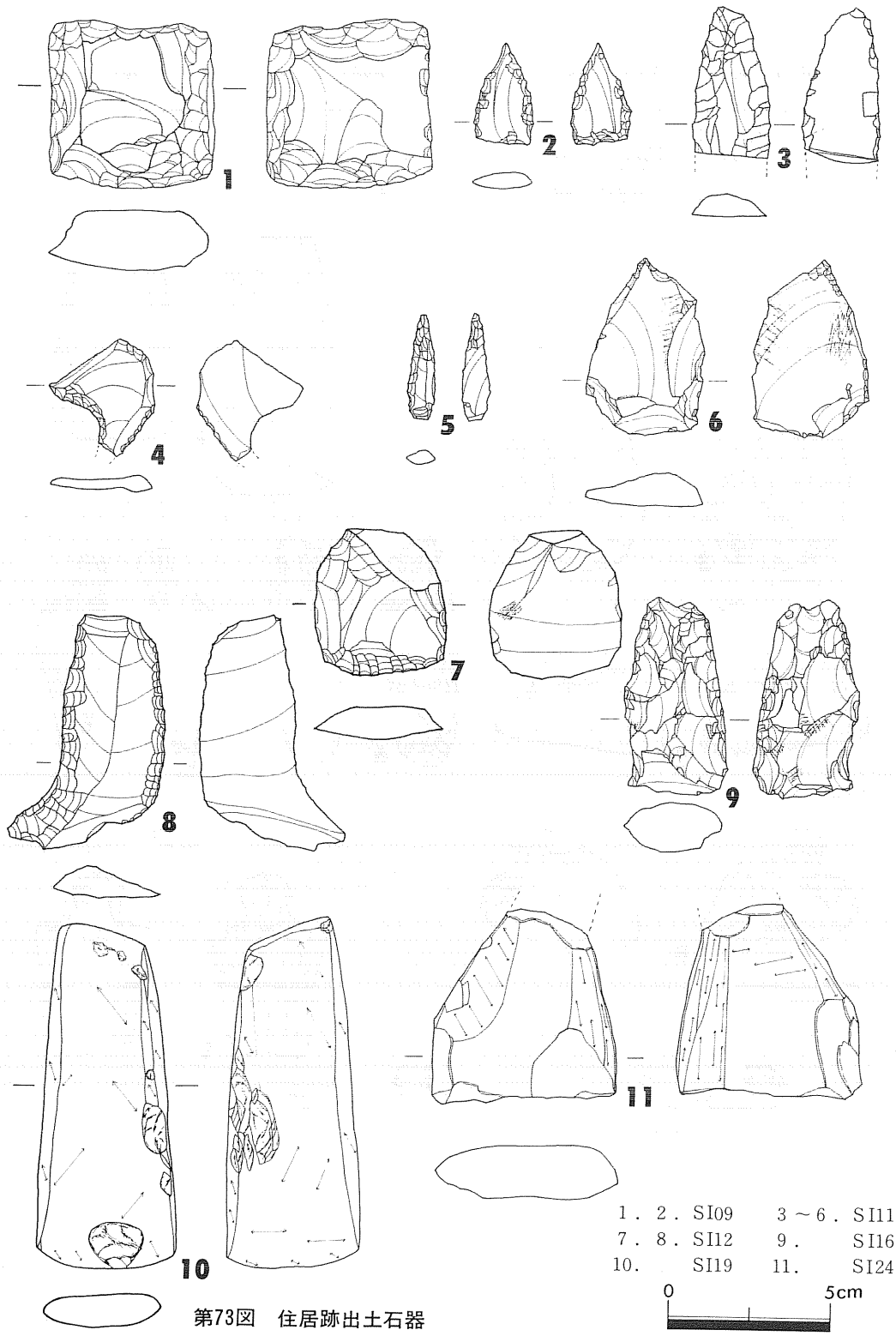
第70図　SI 13・14出土土器



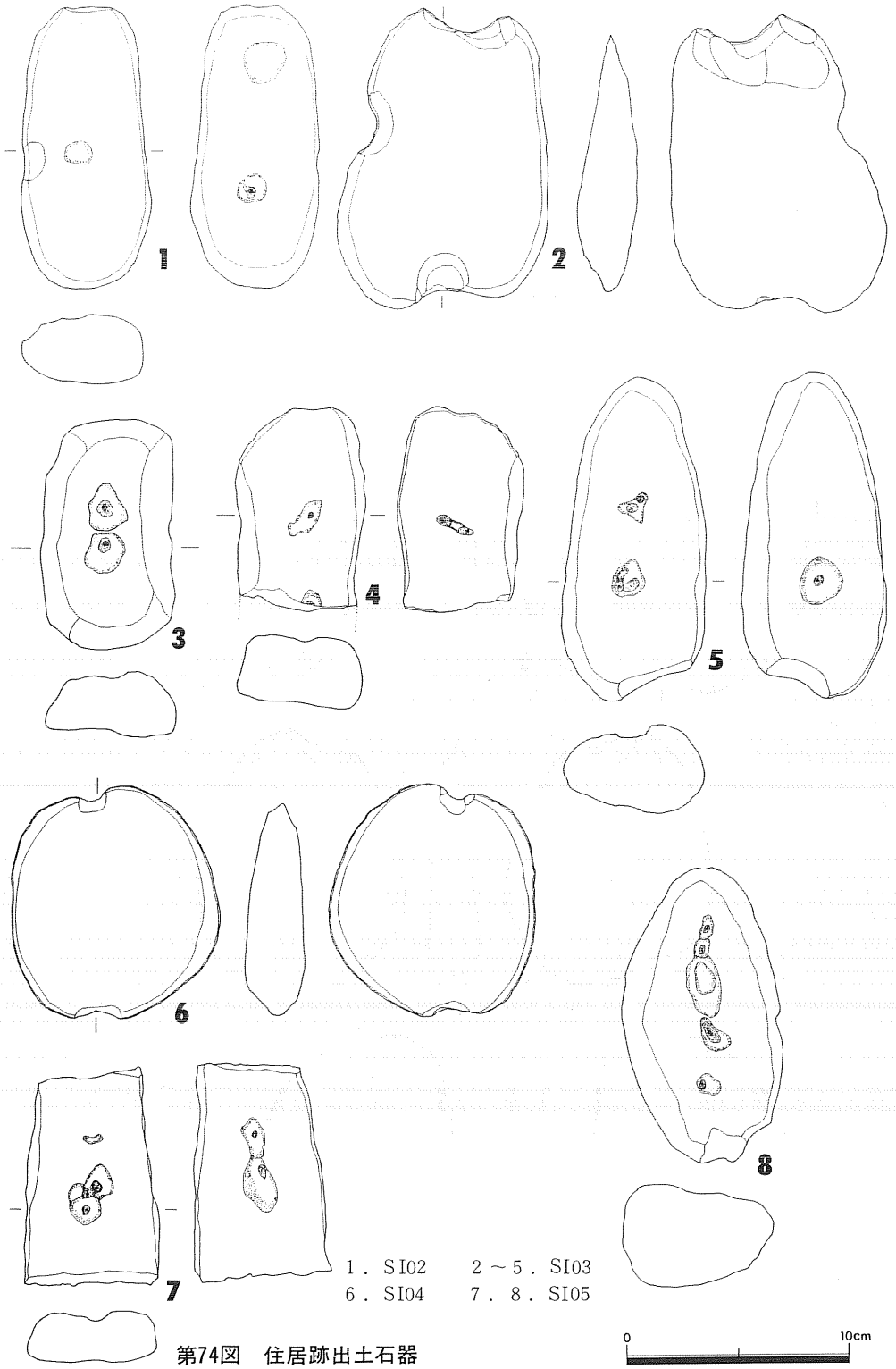
第71図　SI 15・21・22・24出土土器



第72図　住居跡出土石器

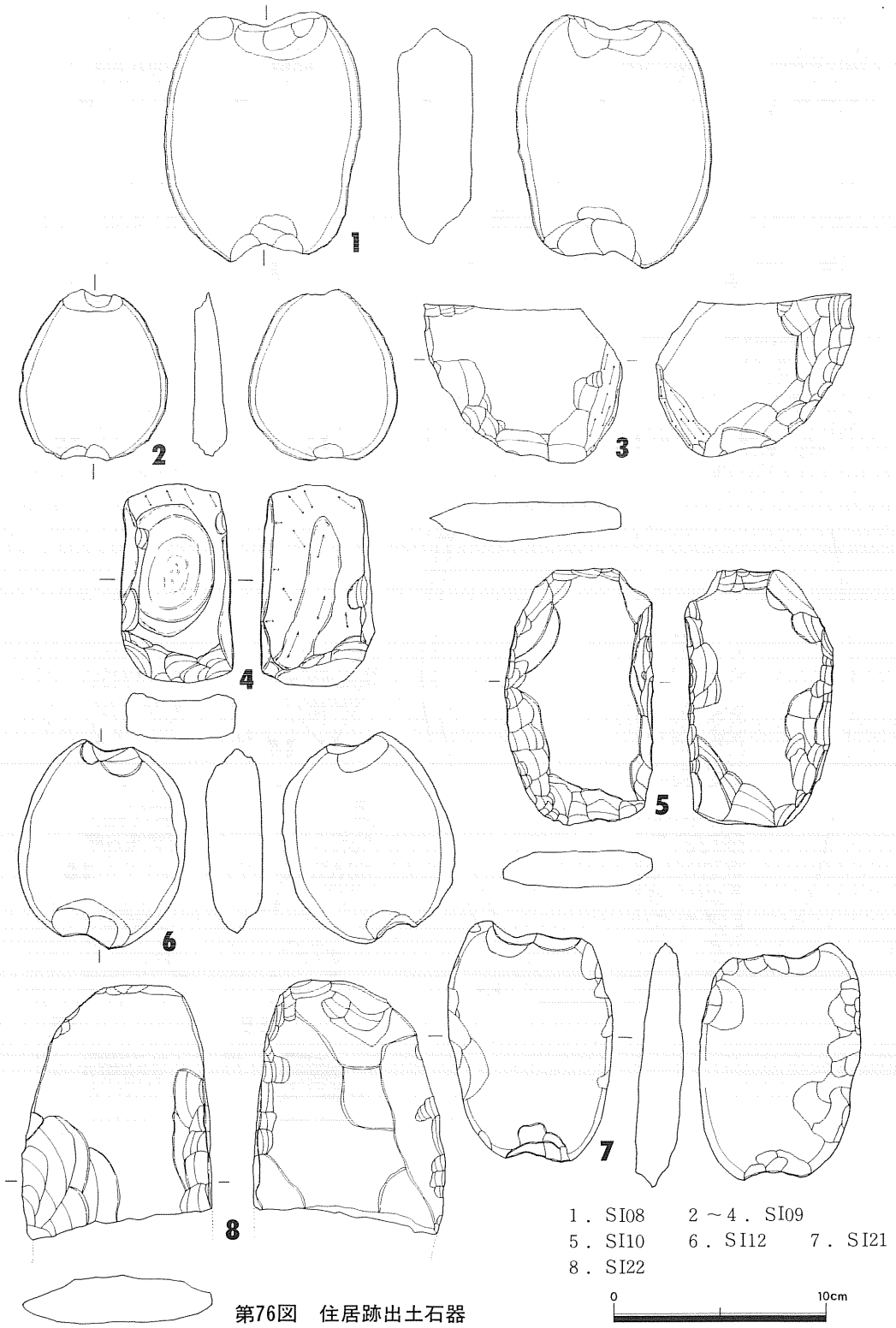


第73図　住居跡出土石器

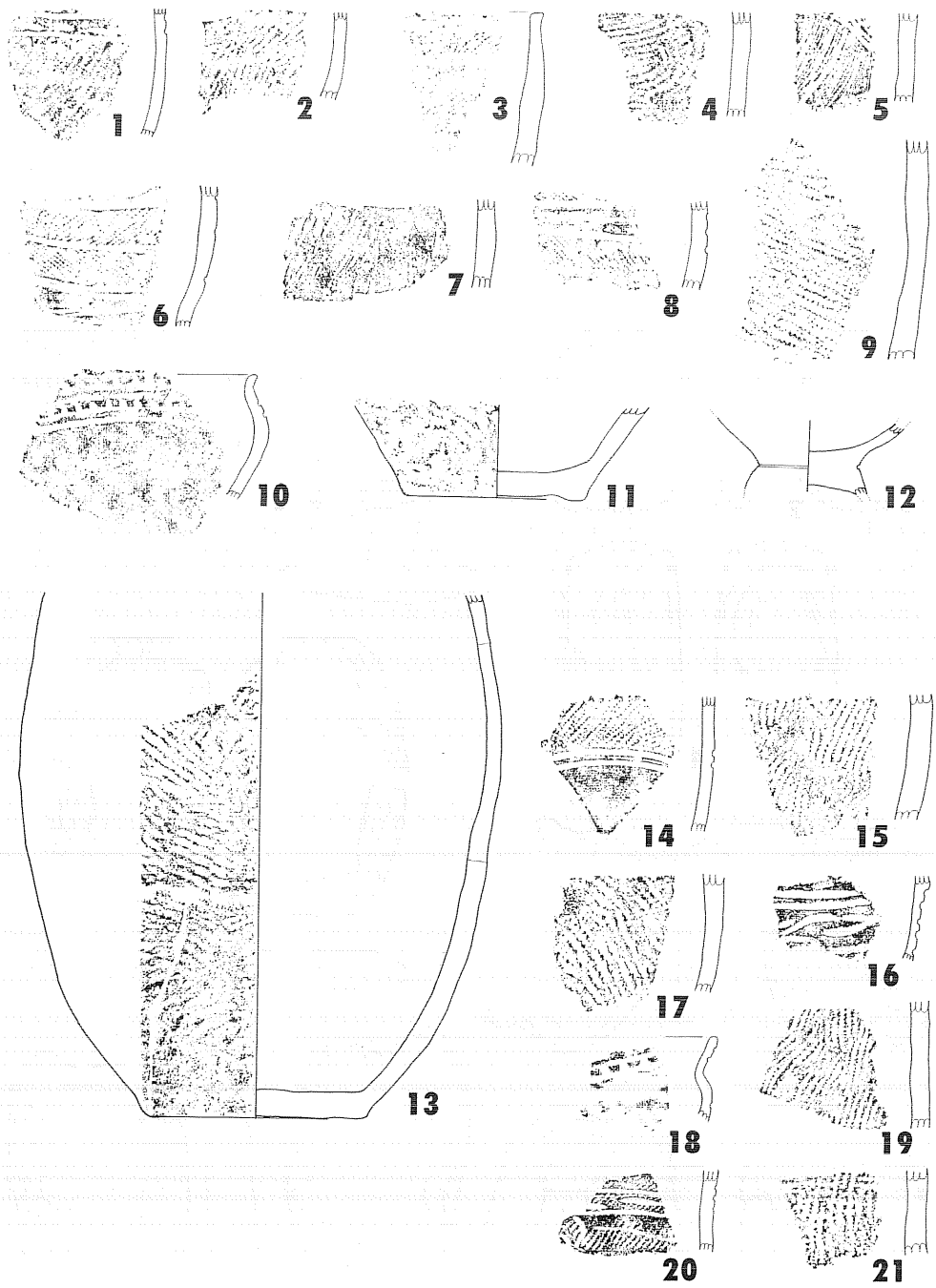


第74図　住居跡出土石器

第75図　住居跡出土石器



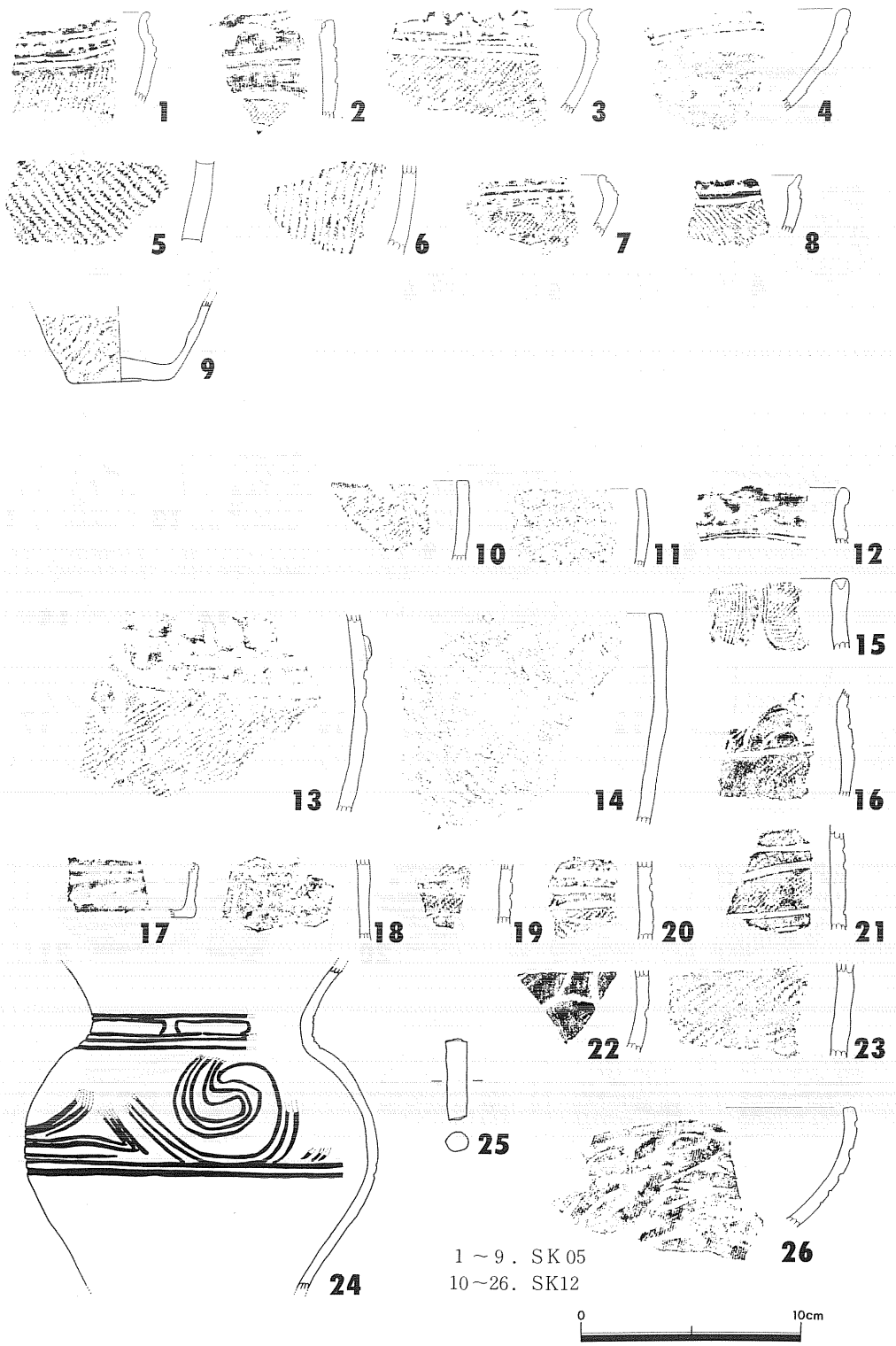
第76図　住居跡出土石器



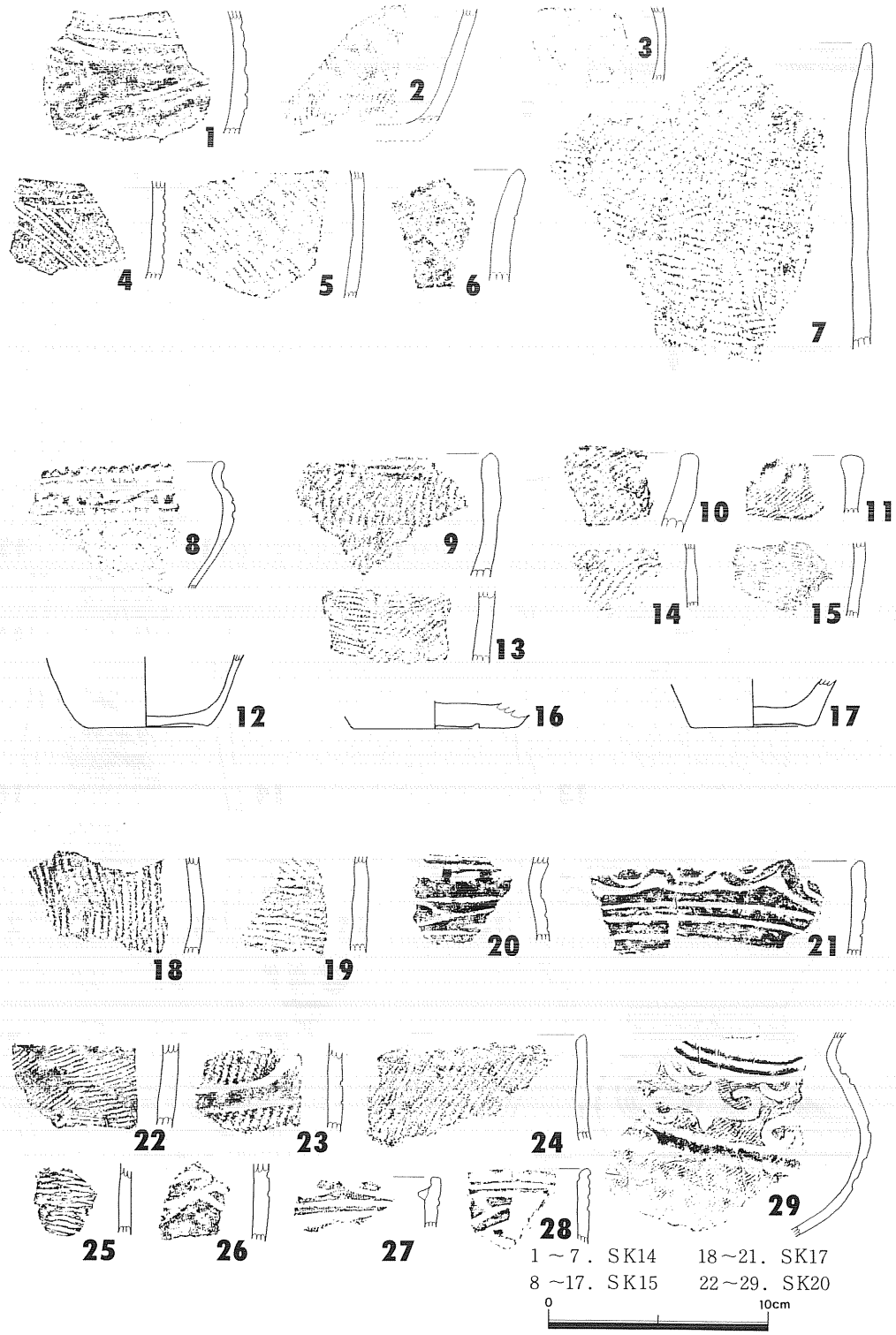
1 ～13. SK03
14～21. SK04

0 10cm

第77図　ＳＫ03・04出土土器



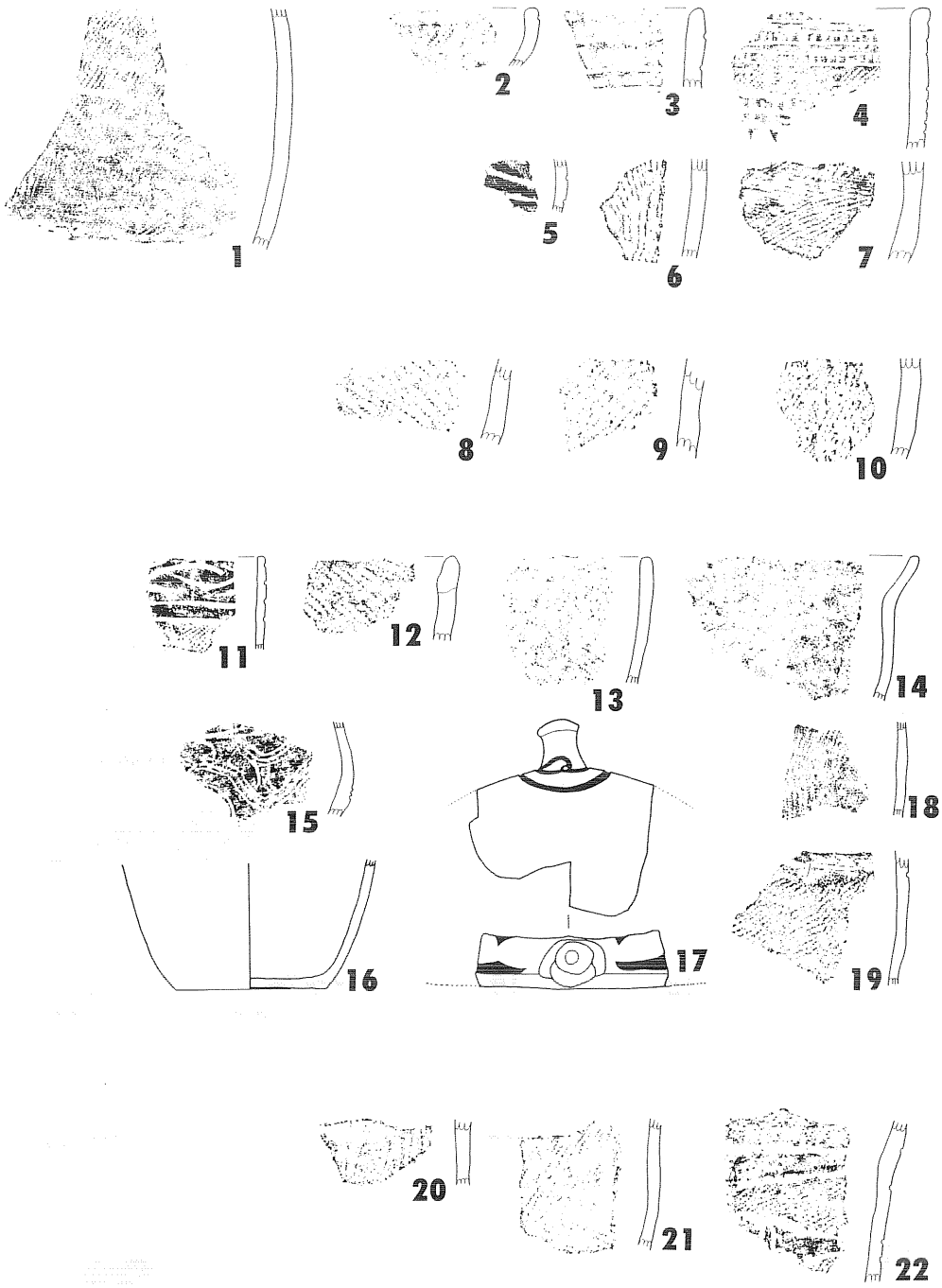
第78図　SK05・12出土土器



第79図　SK14・15・17・20出土土器

1～7．SK22　13～24．SK24
8～12．SK23　25～30．SK25

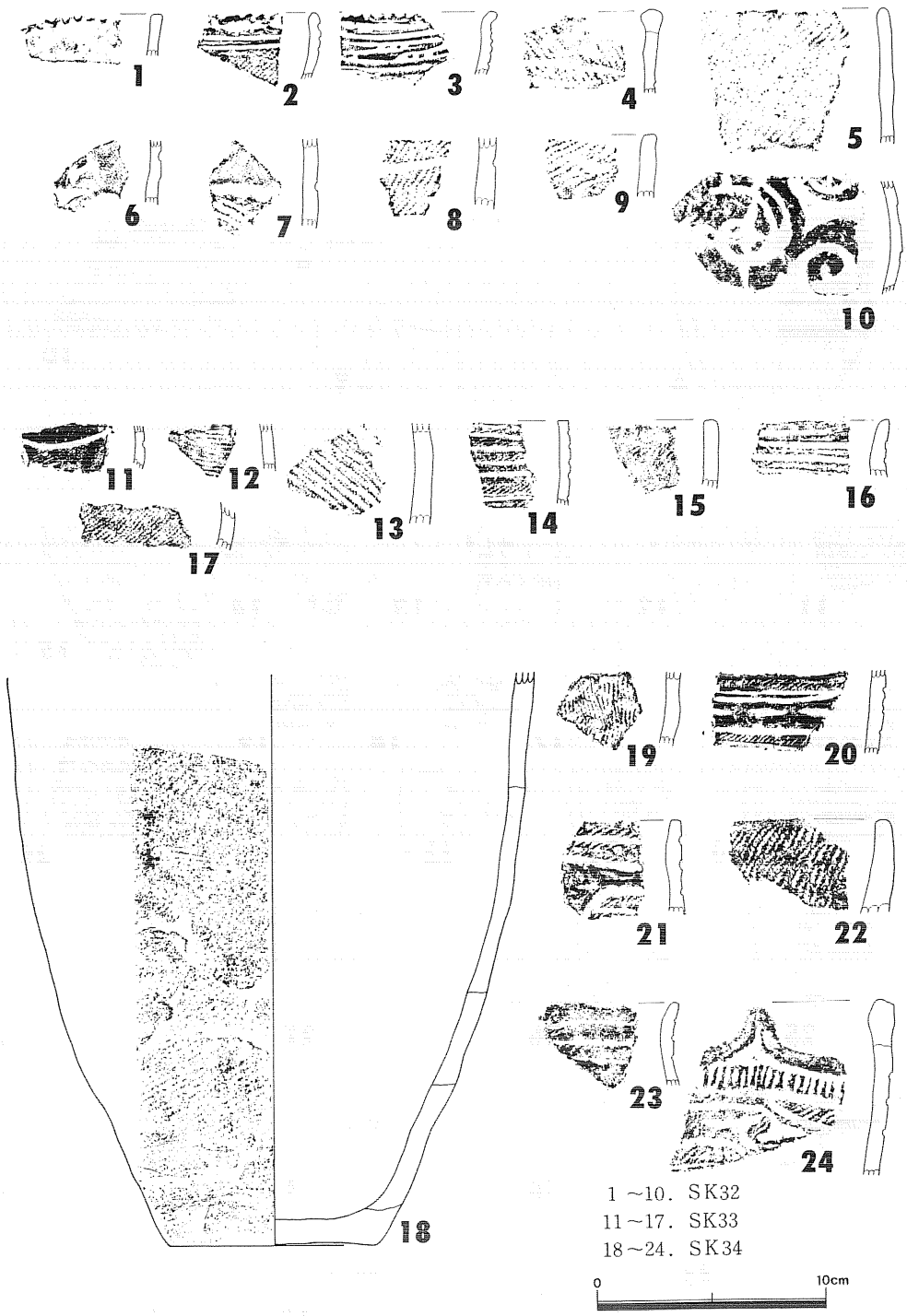
第80図　SK22・23・24・25出土土器



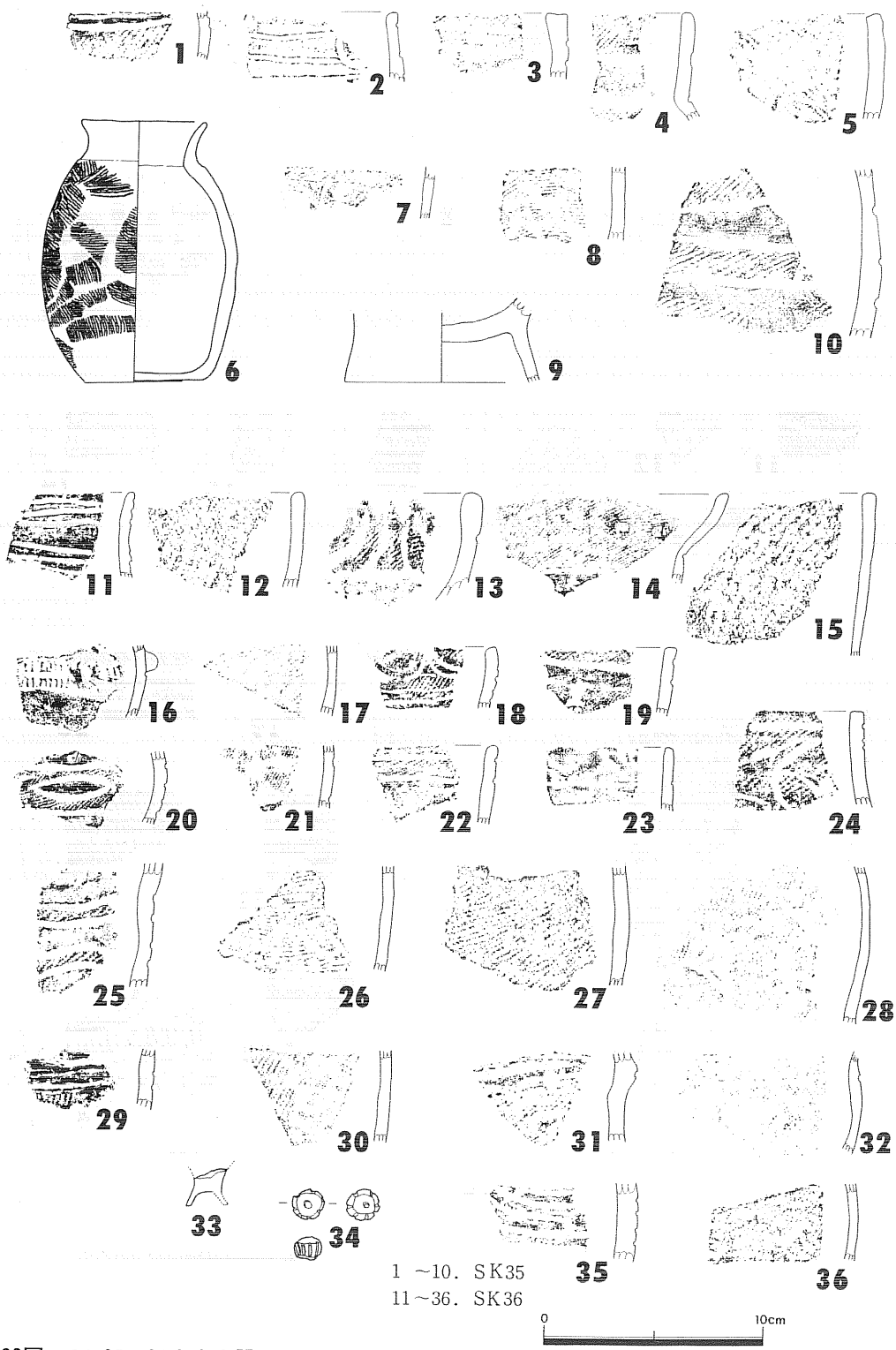
1．　SK26　　11～19．SK30
2～7．SK27　　20～22．SK31
8～10．SK29

0　10cm

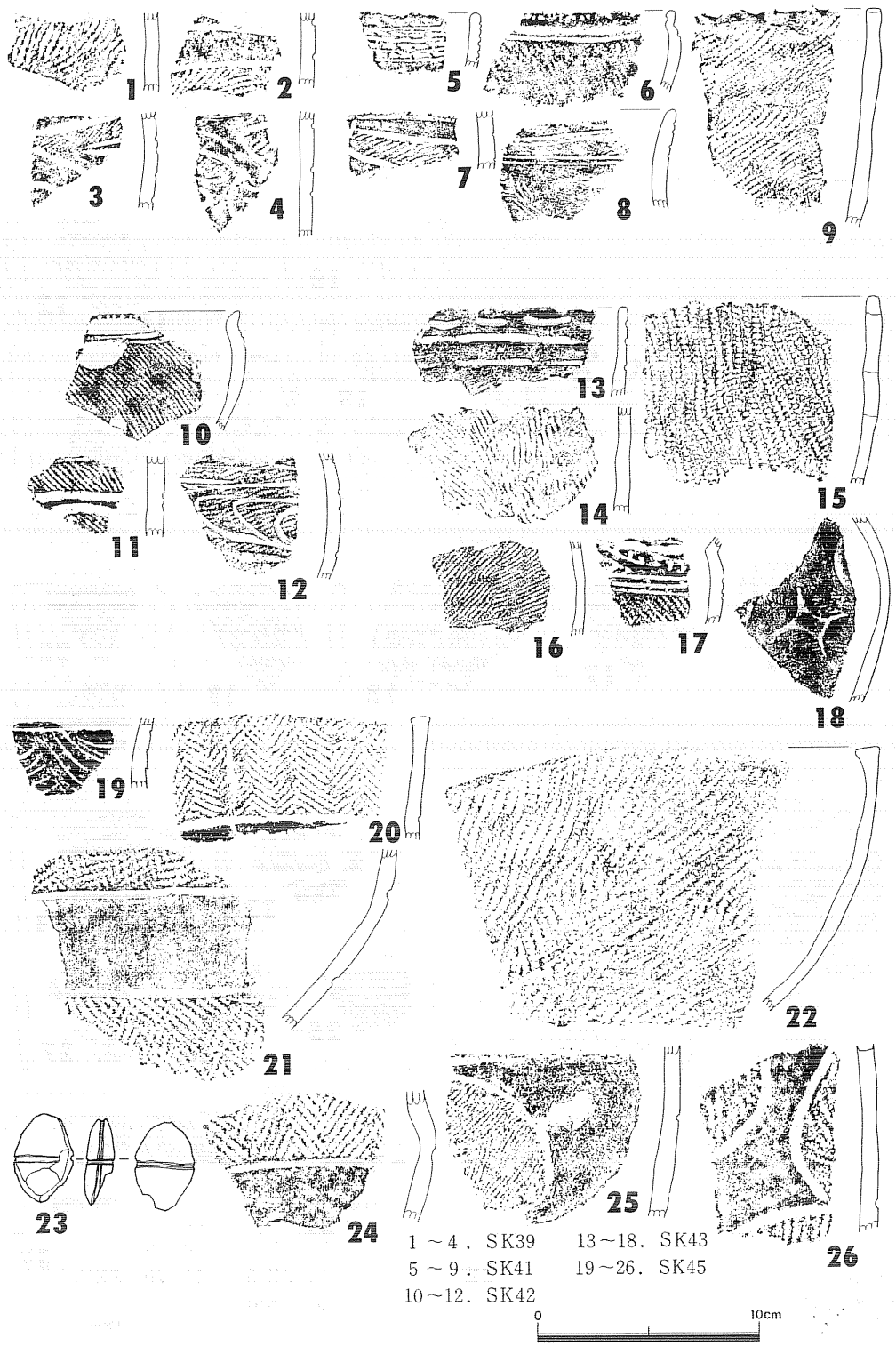
第81図　SK26・27・29・30・31出土土器



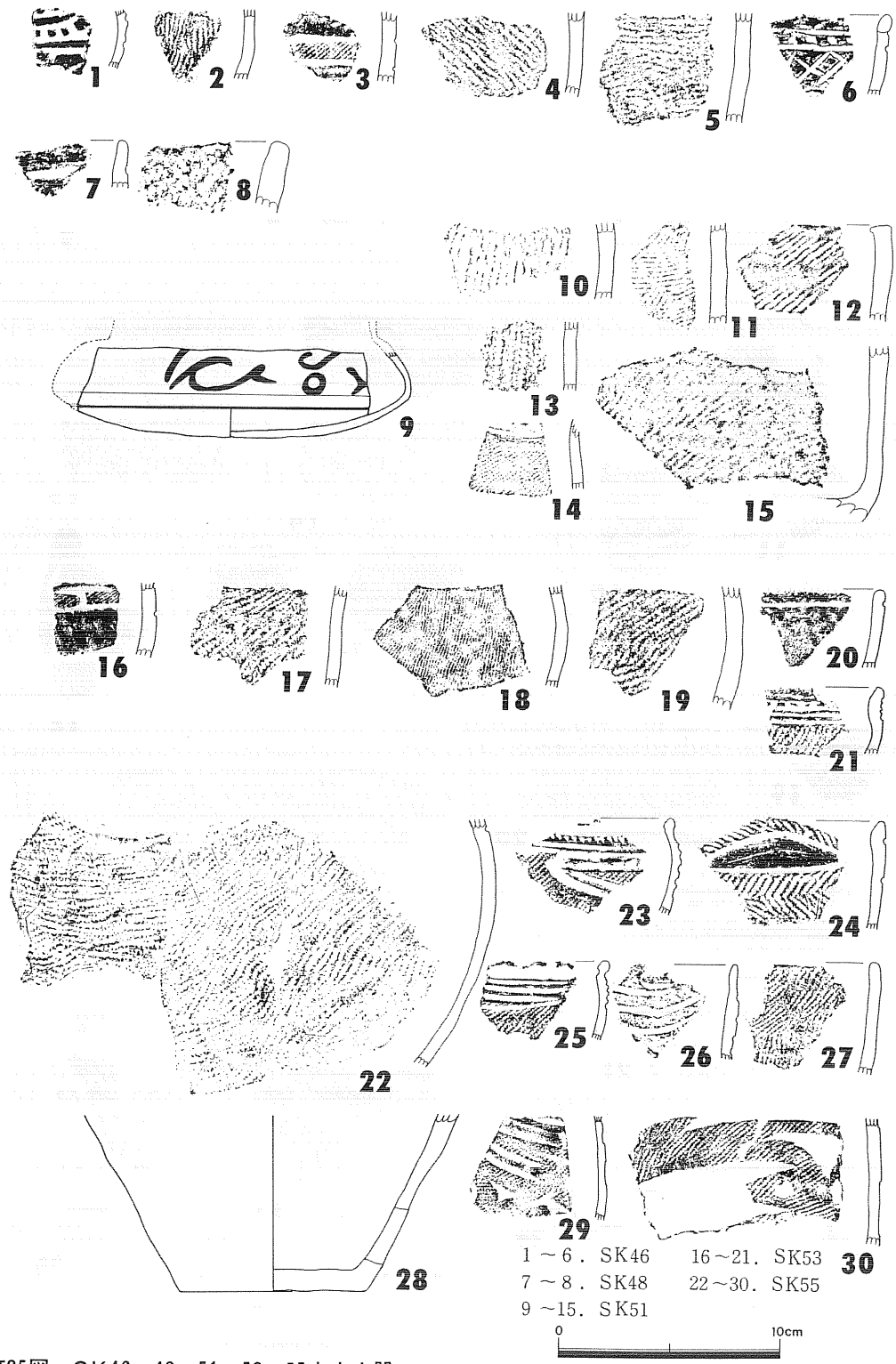
第82図　SK32・33・34出土土器



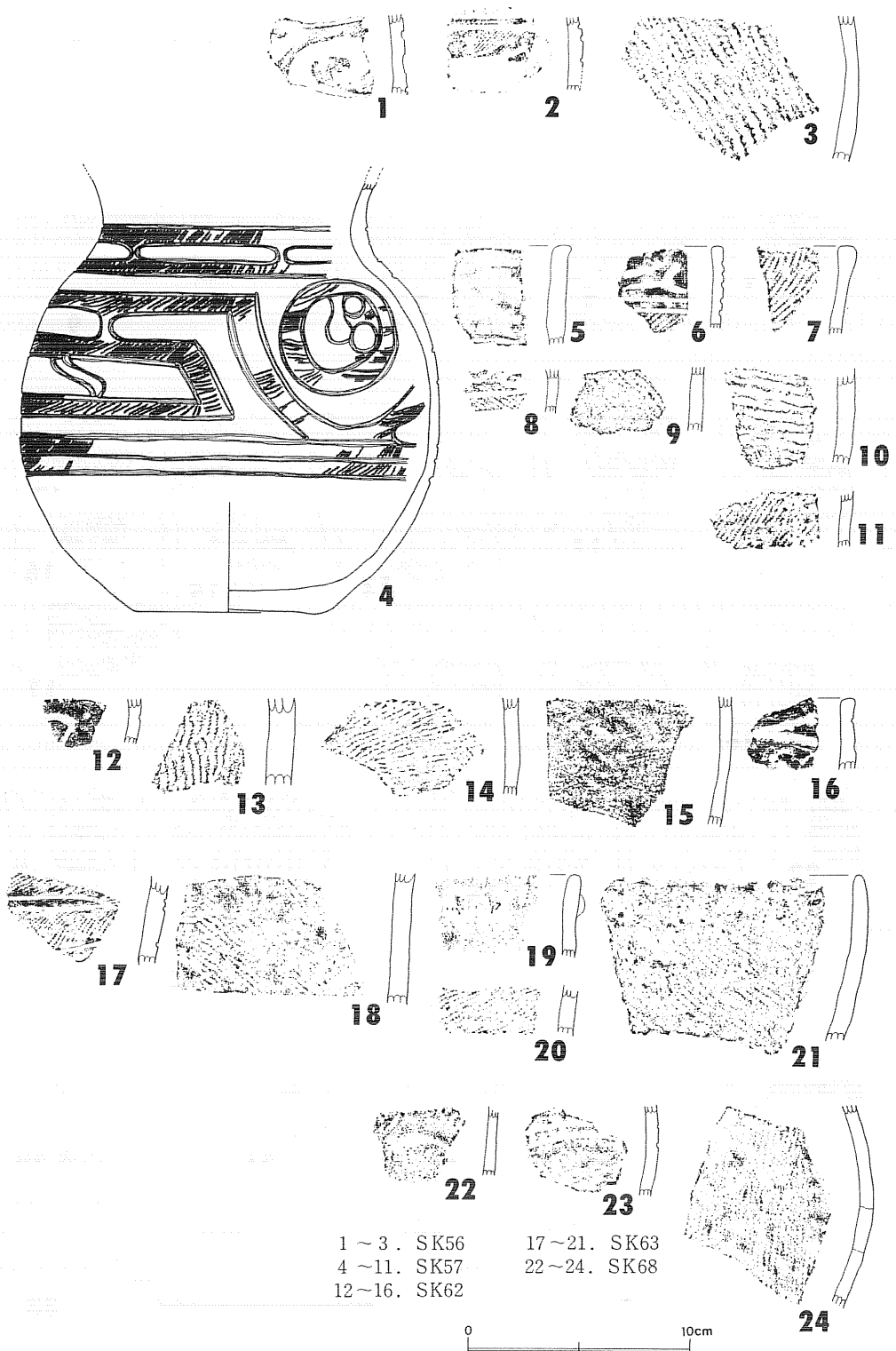
第83図　SK35・36出土土器



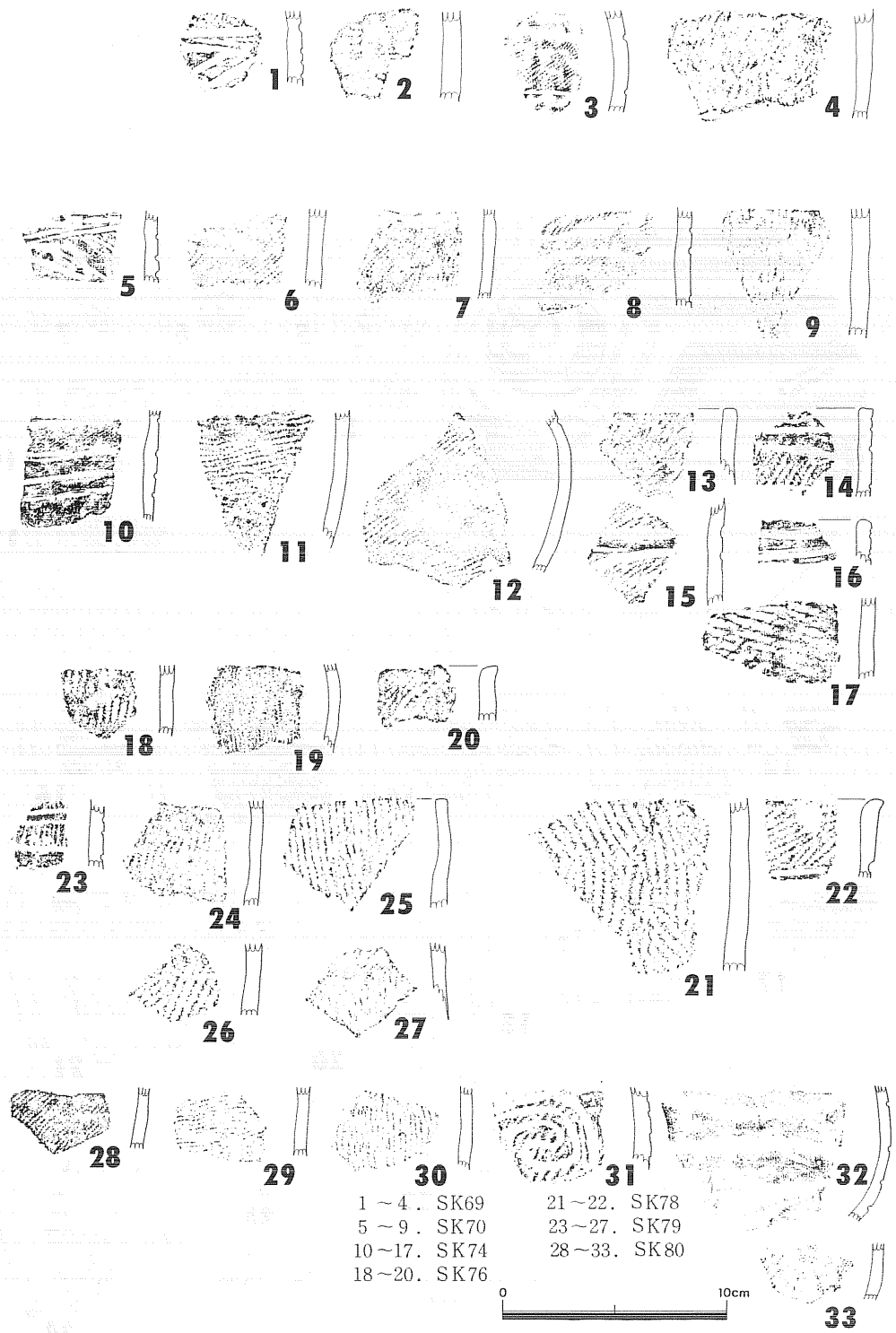
第84図　SK39・41・42・43・45出土土器



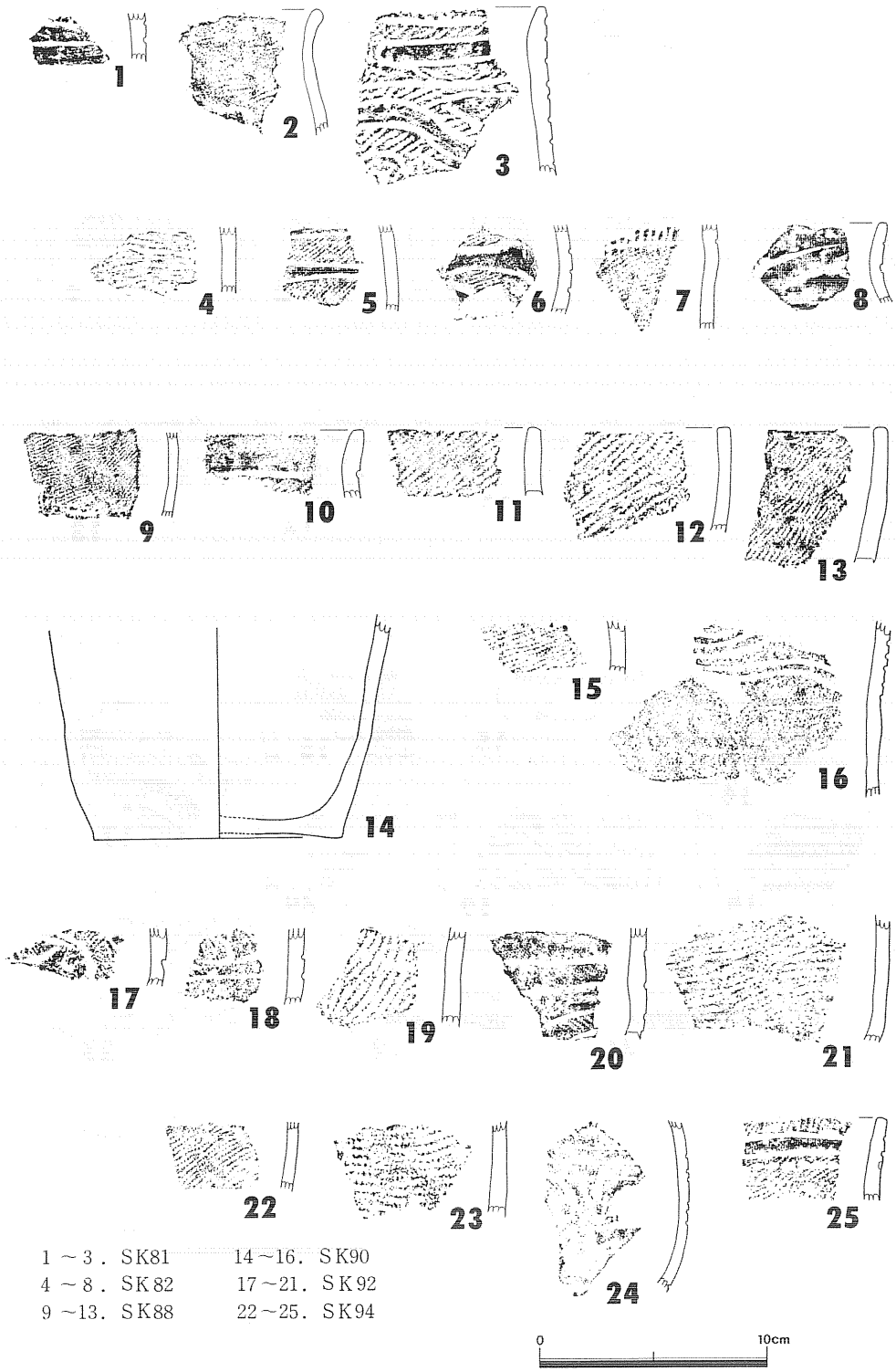
第85図　SK46・48・51・53・55出土土器



第86図　SK56・57・62・63・68出土土器

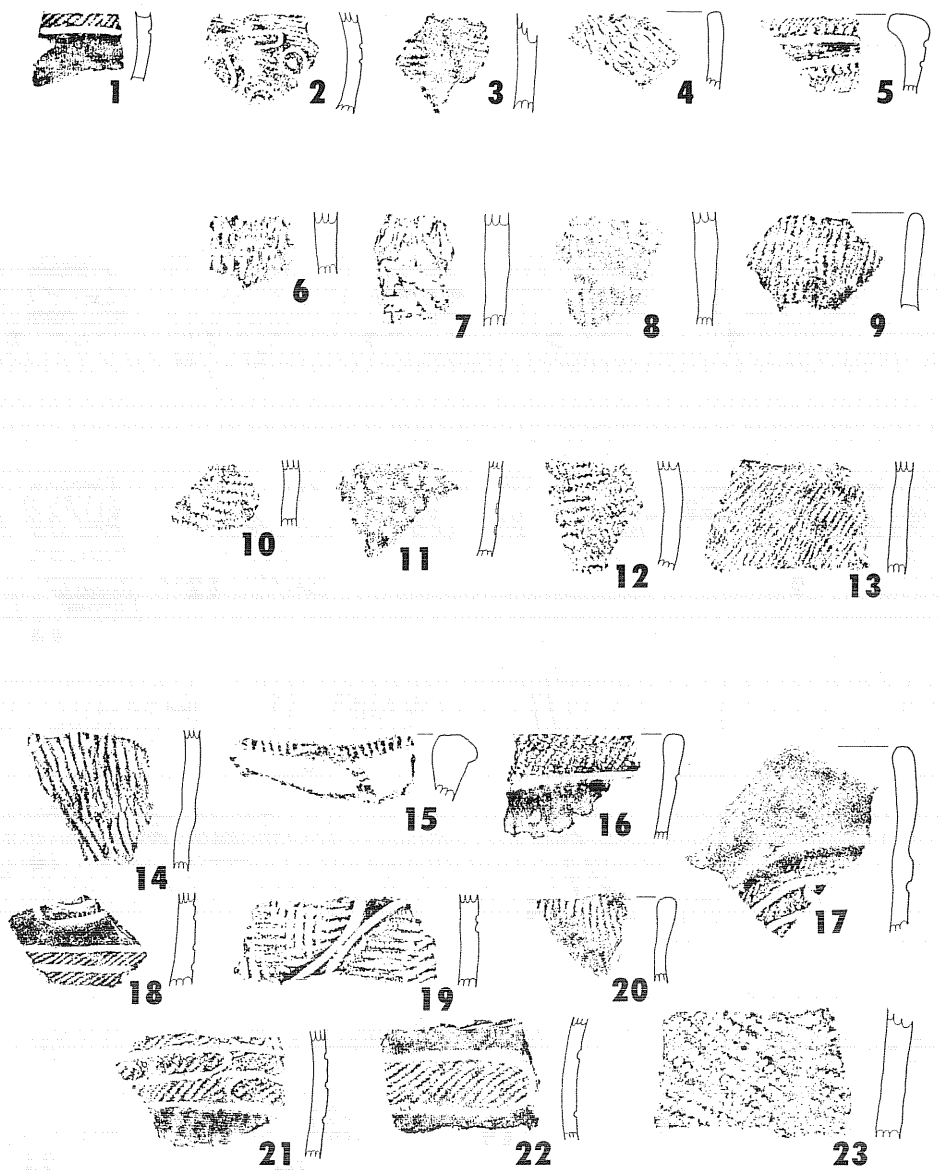


第87図　SK69・70・74・76・78・79・80出土土器



1～3．SK81　　14～16．SK90
4～8．SK82　　17～21．SK92
9～13．SK88　　22～25．SK94

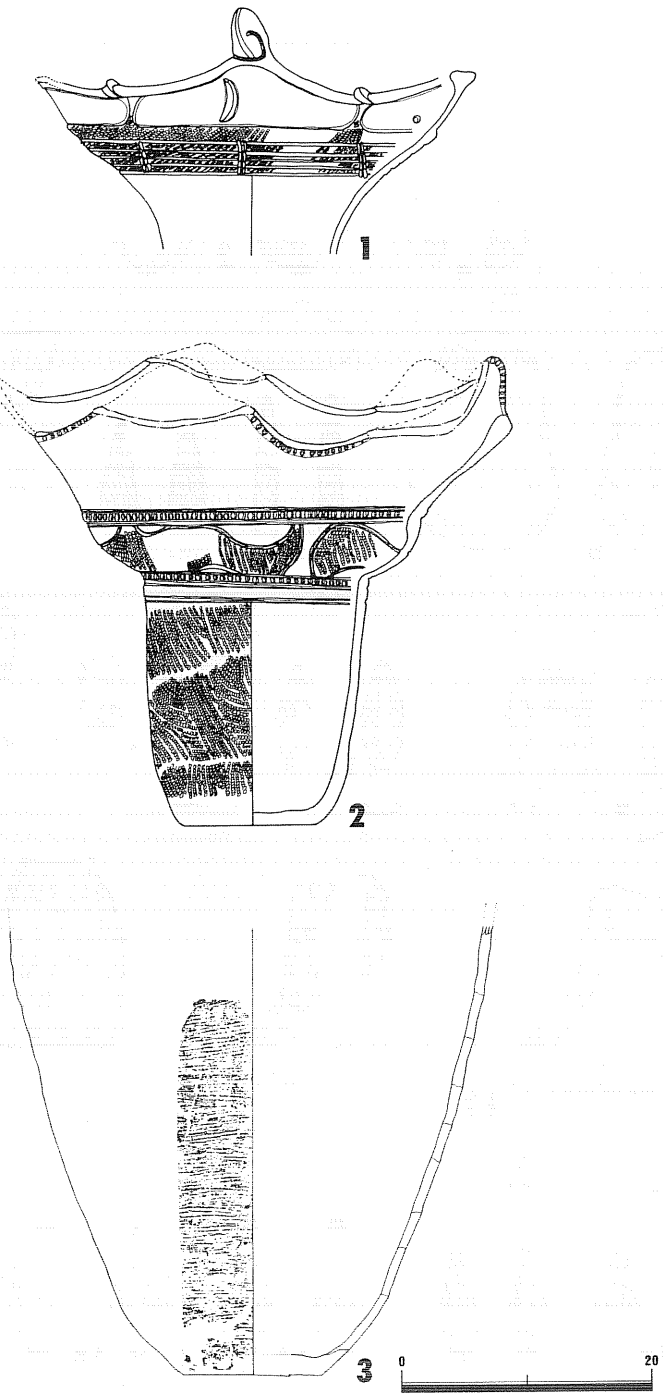
第88図　SK81・82・88(Tピット01)90・92・94出土土器



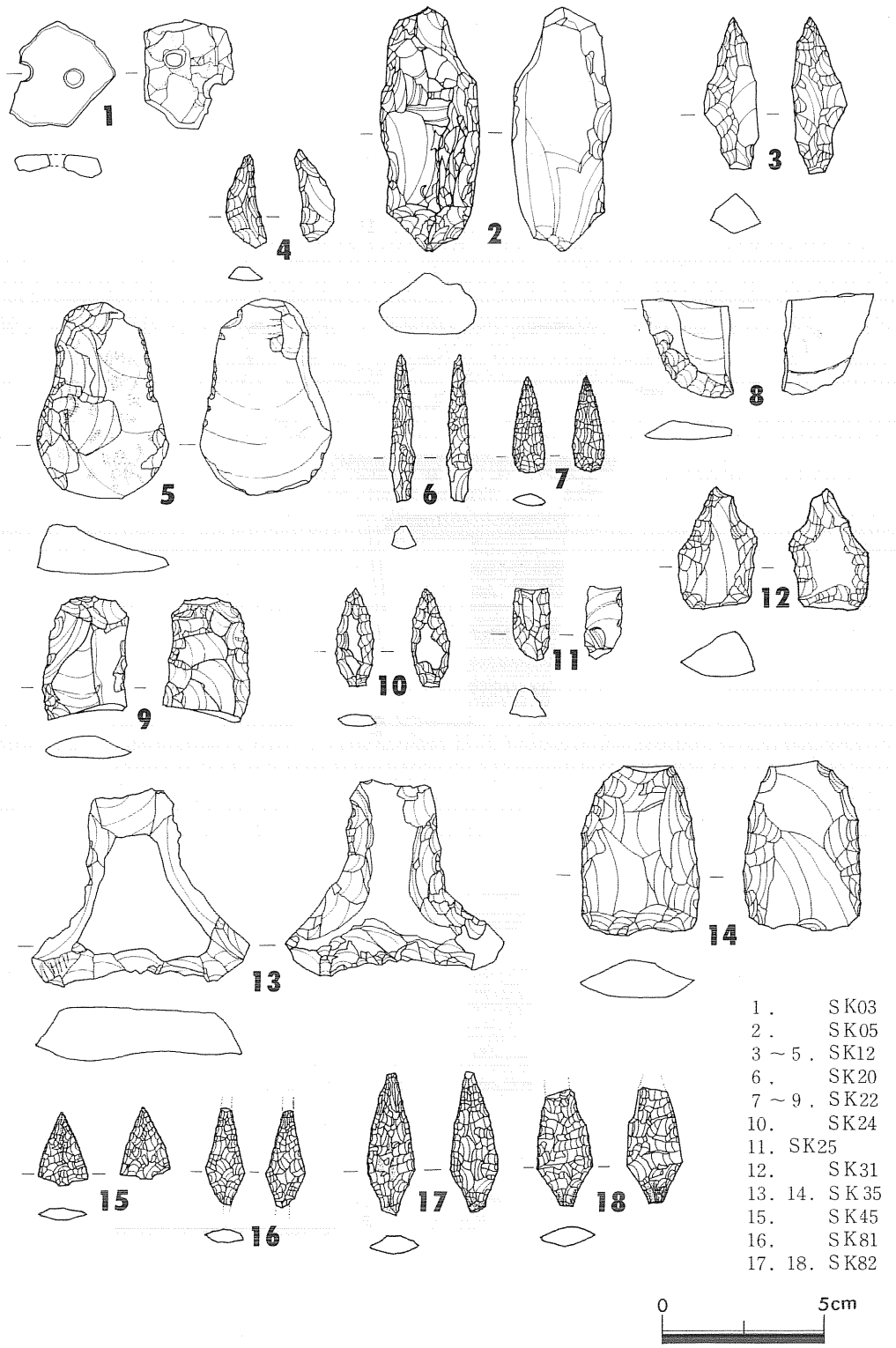
1～5．SK99　10～13．SK154
6～9．SK151　14～23．SK155

0　10cm

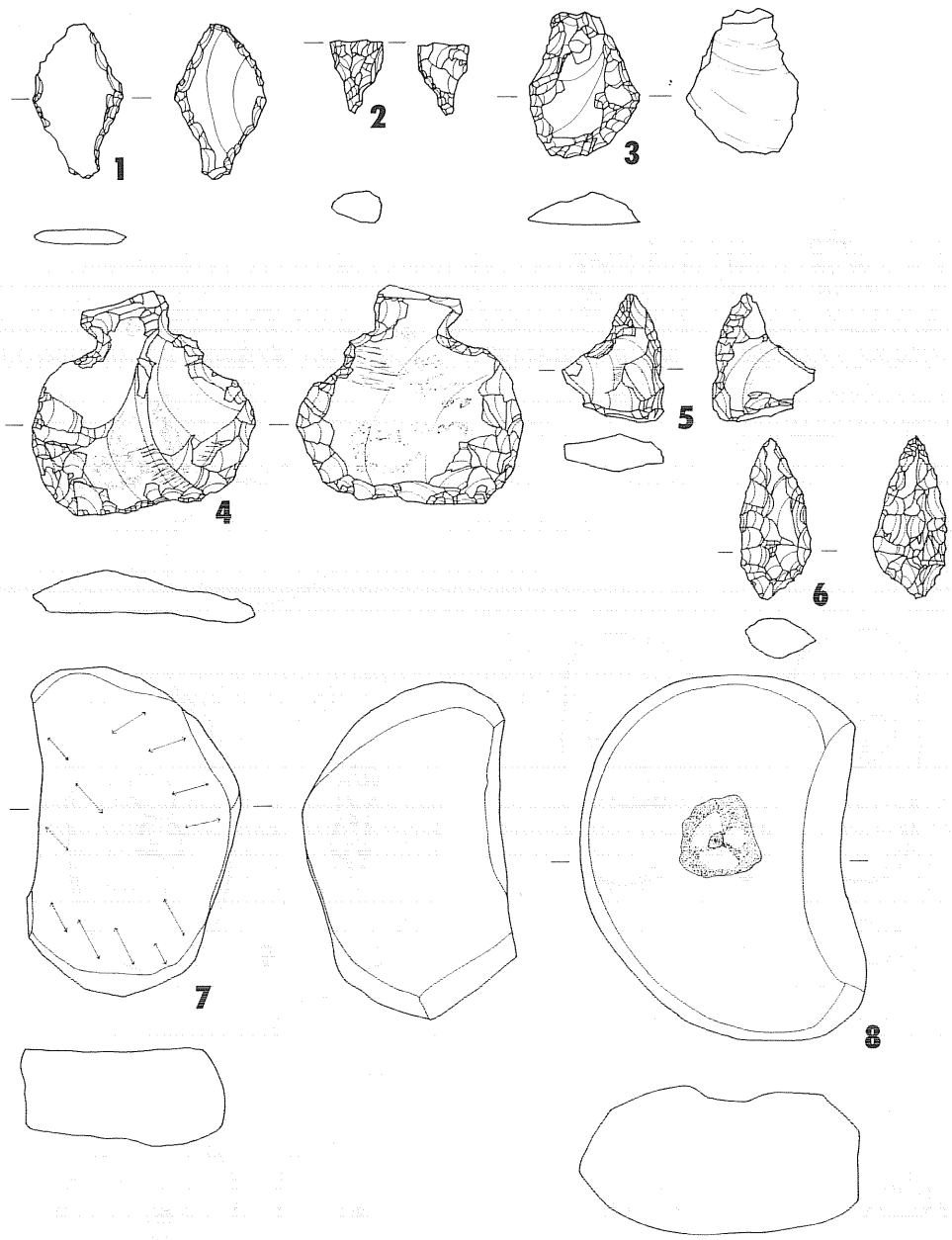
第89図　SK98・151・154・155出土土器



第90図　SI 15・SK155出土土器、Ⅲ区埋甕


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
1．　SK03
2．　SK05
3～5．SK12
6．　SK20
7～9．SK22
10．　SK24
11．SK25
12．　SK31
13．14．SK35
15．　SK45
16．　SK81
17．18．SK82
0
5cm

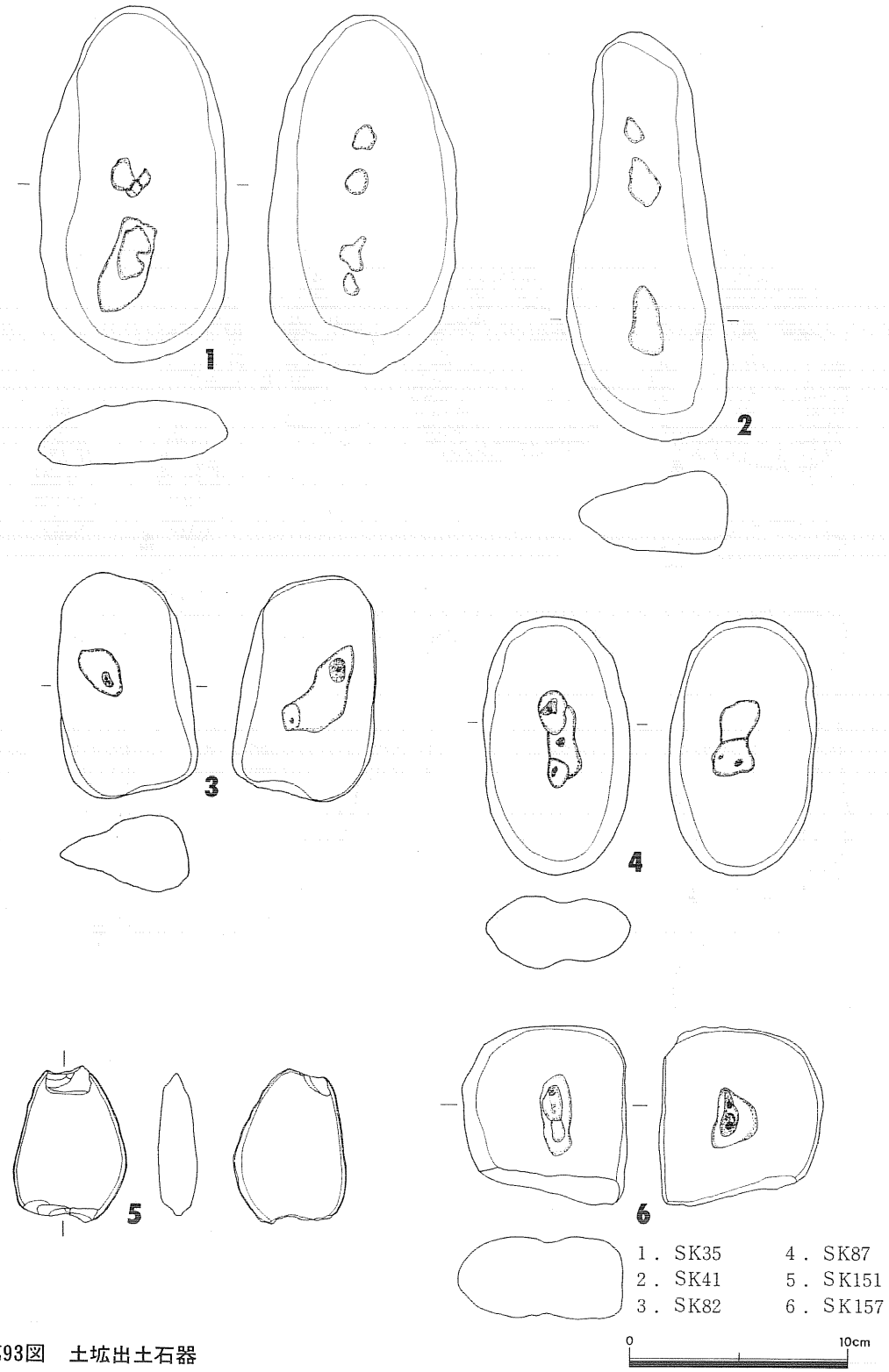
第91図　土坑出土石器



1～4．SK88　　7．SK12
5．　SK92　　8．SK27
6．　SK97

0　5cm

第92図　土坑出土石器



第93図　土坑出土石器

第2節　出土遺物

藤株遺物の出土品は遺跡の調査経過その他で記したとおり、遺構外からの出土品が多い。今回調査した地区は遺跡の一部にすぎないが、遺物の捨場が確認され、そこから多量の土器が出土した。その量はコンテナ（60×40×20cm）で約400箱ほどあり、これらの土器を単年度で整理し報告書にまとめあげることは無理であった。そこで遺物の完全な物を中心に図化し、それらを中心にここでは扱うこととした。また図化及び掲載資料については今回の調査で出土した遺物の大略が理解できるように配慮した。

土　器

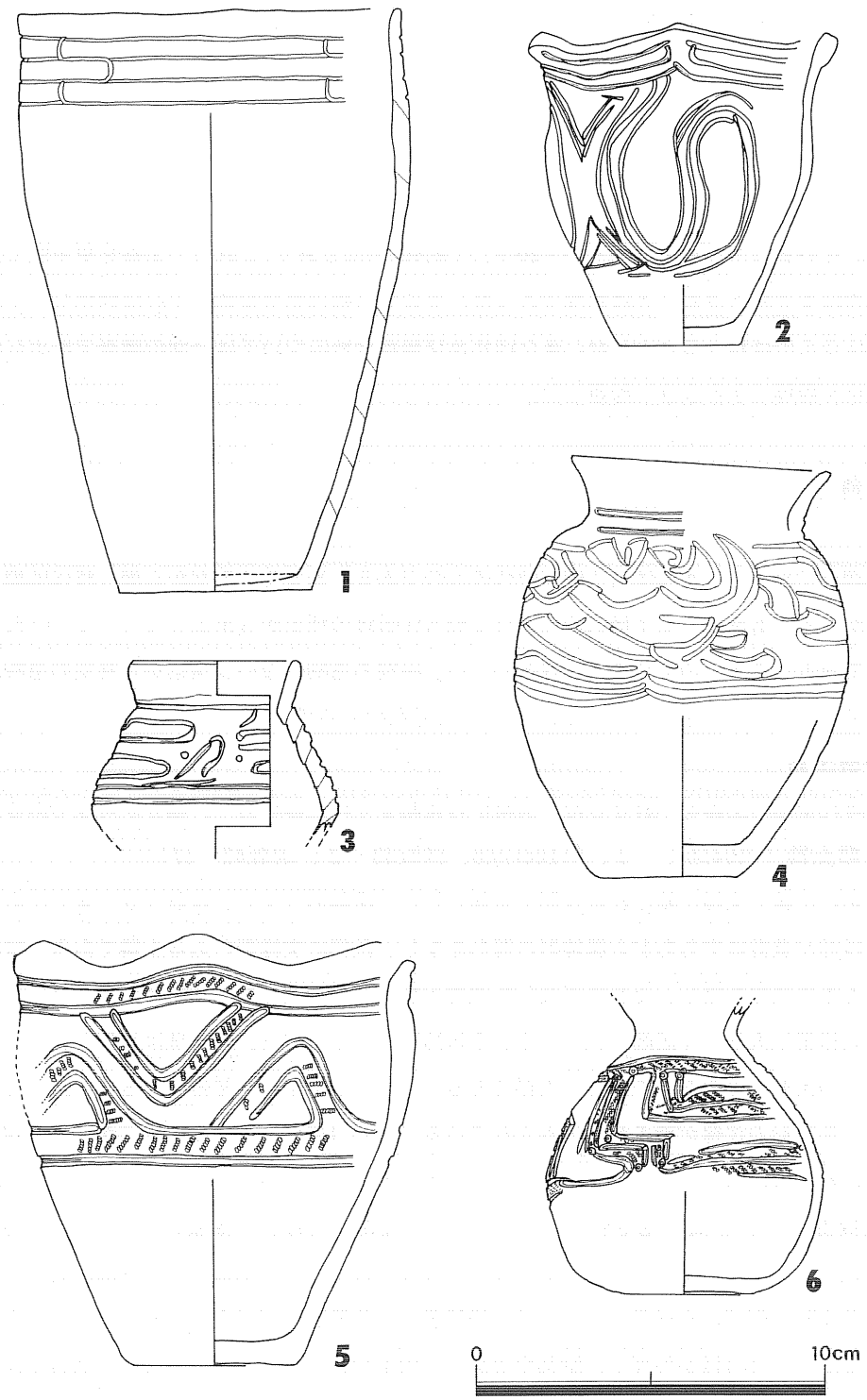
発掘調査で出土した土器は全て縄文時代のものである。縄文時代前期から縄文時代晩期までのものがある。前期の円筒下層式の土器群は竪穴住居跡の埋土から出土したもので、それは遺構の項で報告してあるのでここでは取扱わない。中期の遺物はない。後期から晩期の遺物がほとんどで、中でも主体をなす土器は大洞B、BC式期のものである。

第一群土器

縄文時代後期の土器を本群とした。前葉から後葉までの土器があり、細分が可能である。

第1類土器（第94図1～4、第106図86、図版33－2、図版42－57）

無文地に沈線で文様が施される仲間を本類とした。深鉢形（1）、壺形（3、4）がある。1は口縁部が垂直に立ちあがる深鉢形の器形をなし、頸部に文様帯のある土器である。口縁と平行に4本の沈線を施し、それに直交して沈線が数センチの間隔をとり交互に施され、これによって文様帯は大きく4区画されている。2は頸部が少しくびれ、口縁部は外反し、口縁がゆるい4つの山形口縁をなす深鉢形の土器である。口縁部と胴部に文様帯がある。頸部文様帯はせまく、長方形の沈線が施され4区画されている。山形口縁の直下に貼りコブが付く。胴部文様帯は山形口縁にあわせて2～3条一組の沈線で大きなS字文を横位に4回くりかえし施され、上の空間部に三角形文が施されている。3、4の壺形土器は、口縁部が「く」の字に外反し胴部が逆「く」の字に張り出した器形をなす。3は小形で頸部と胴部下端に沈線が施され、沈線にはさまれた胴部に文様帯がある。粘土紐積重ねの状態が内側でよく認めることができる。4は頸部がくびれ口縁が外反し、胴部中央部に最張部のある壺形土器である。文様帯は頸部と



第94図　深鉢形土器・壺形土器（1．2．4．6は½）

胴部下端の沈線にはさまれた胴部にあり、広い巾をもつ。文様帯の文様構成には規則制は認められない。器形から観ると晩期初頭のものとも考えられるが、沈線の様子からは本類の仲間と考えられる。時期については今後も検討を要する土器である。86は蓋である。末端部は山形をなし、そこに弧状文が施されている。

第2類土器　（第94図5・6、第96図16、図版33－4、図版34－10）

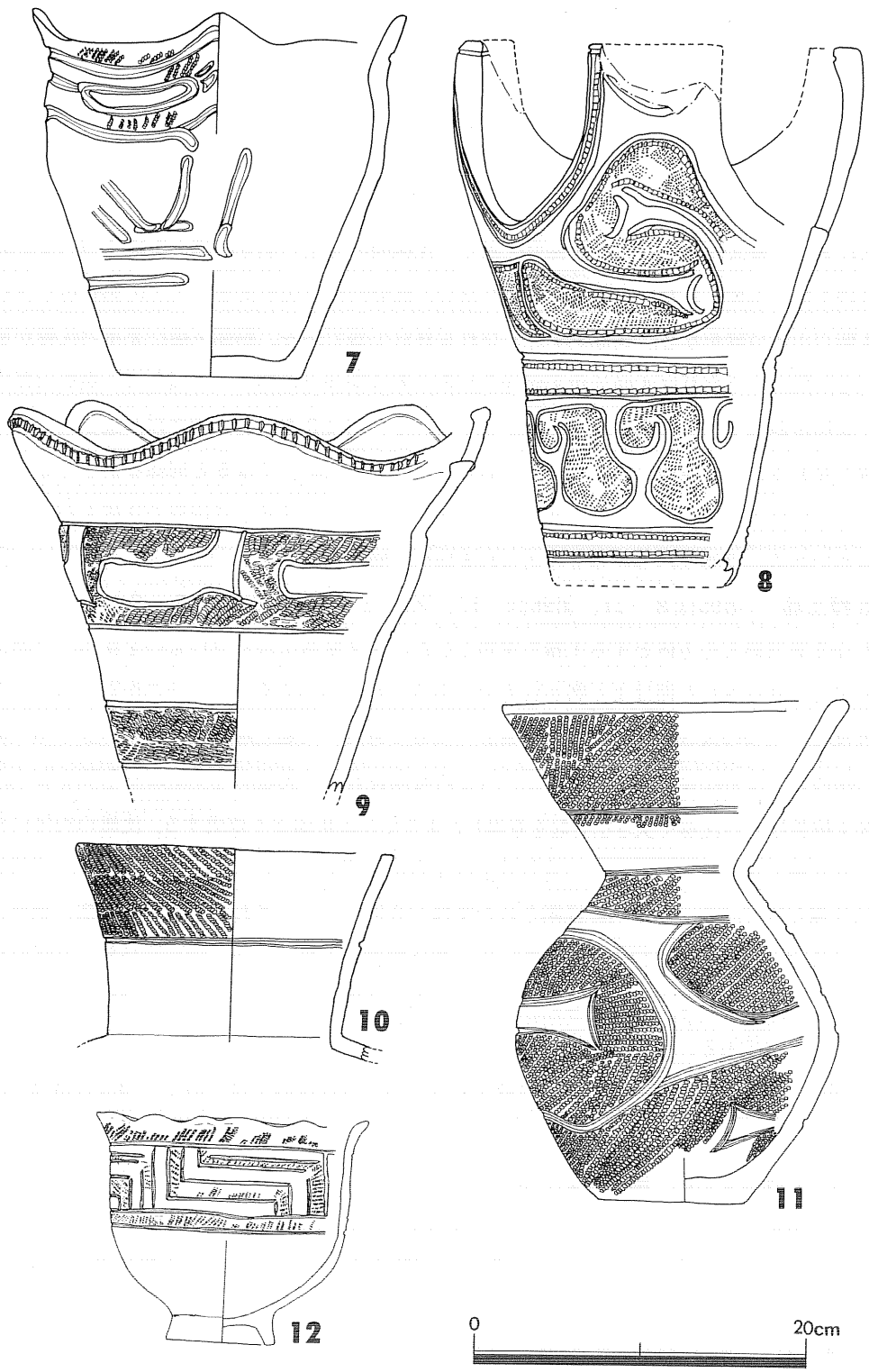
地文にあらい縄文を施し、太い沈線で区画し、沈線間のせまい部分に縄文を残すいわゆる磨消縄文の土器を本類とした。色調は灰白色を呈し、部分的に黒斑がある。胎土に細砂粒を含む。5は4個の山形口縁をなし、頸部が少しくびれる鉢形土器である。胴部下端に2本の沈線が施され、その間に上下交互に4回三角文が施される。6は胴部下端部に最大幅をもつ壺形土器である。5同様胴部上下に2本の平行沈線が施され、その間に3本の鍵状の文様が施され、上下の沈線と交わる点と、直角に曲る部分に円形竹管文が施される。7は5と同様な器形をなし文様構成も略同様である。違う点は上部の平行沈線が3本、中の沈線に長円形の沈線文が施されている点である。第96図16も本類と考えられる底部の破片である。

第3類土器　（第95図8～11、第96図－17、図版33－5、図版34－7・9）

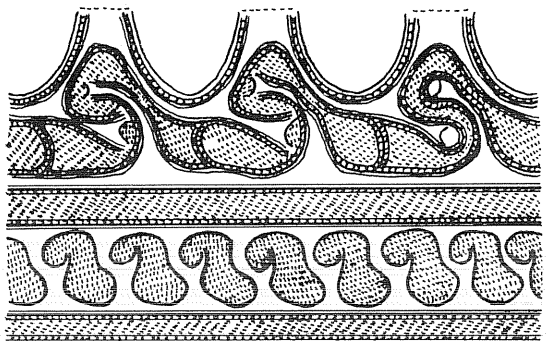
いわゆる磨消縄文を主体とする土器を本類とした。縄文原体は細く短いものを使用。色調は黒色を呈し、磨消された面はよく磨かれ光沢がある。8は胴部でくびれ、そこから口縁部にかけて外反し、三つの大きな突起をもつ深鉢形の土器である。突起上端は欠損しており不明であるが、図のように平になるか、またもう一つこの時期特有の小突起が付くかはっきりしない。口縁部文様帯は太い沈線で大きな突起を意識した大きな入組帯縄文を構成する。沈線の内側に背竹管文が沈線と平行に施され、この背竹管文は左右から押引きされて施文されている。胴部文様帯は沈線だけで「の」の字状に区画された文様が8回くりかえされている。口縁部、胴部、底部には沈線と背竹管が平行に施されている。9は胴部が外反しながら少しくびれ、肩部が少し張り出し頸部で再びくびれ、そこから口縁部に向って内湾しながら外側にのびて口縁に達する深鉢形の土器である。口縁は5個の波状に縁をなす。色調は8と同様。口縁部にキザミが施され、胴部上半と下半に磨消縄文の文様帯がある。10、11は壺形土器である。10は口縁部のみで詳細は不明。11は完全な土器である。胴部には模式図のように2回同様な文様がくりかえされている。口縁部と胴部の張り出しが略同一で頸部がくびれ、そこから口縁部にかけて直線的に外反する器形をなす。原体（LR）を横位に回転して施文されている。17は底部の破片で全体を推定することは不可能であるが、縄文及び胎土などから判断して本類の仲間と考えられる。

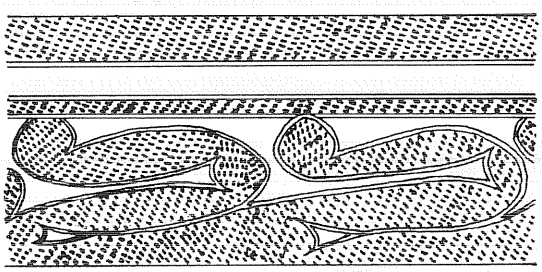
第4類土器　（第95図12、第96図13～15、図版34－6・8）

磨消縄文が主体をなし、縄文が3類より細かく、晩期の縄文に近い状態をなす仲間である。



第95図　深鉢形土器・壺形土器　（7．11は1/1）





深鉢・壺形土器模式図（8・11）

12は台付の鉢形土器である。胴部下端で大きく張り出しそこからゆるやかなカーブで頸部に達し、頸部から口縁部にかけて外反する。口縁は波状に縁をなす。胴部に文様帯がある。縄文の残した鍵状の文様が4回くりかえされている。器面内外にスス状炭化物が付着している。13、14は壺形土器、14は11と非常によく似た器形をなすが胴部の張りがまゐみを呈す点が異なる。13は頸部に面ができ巾をもつもので晩期の壺形や注口土器に受けつがれる器形である。口縁部と胴部上端の縄文の残し方に古い要素があり後期の仲間とした。15、18は底部の破片で詳細は不明である。

第5類土器　（第108図102、103、105、図版44－68）

いわゆるコブ付土器の仲間を本類とした。102は底部は尖底に近い丸底をなし少し上底になる。胴部下半に最大幅をもち、頸部が巾をもち、その上部で外反して口縁に達する注口土器である。口縁部、頸部、胴部に地文の縄文を残し、平行沈線3条一組として施し、その上にコブを貼り付ける文様が主体をなす。口縁部に比較的大形のコブが付き、これによって全体が4区画されている。これに対応して頸部文様帯は弧状に文様が施され、また胴部の大きめのコブも同様である。103は頸部に縄文、沈線、それにコブを貼り付けた注口土器である。104は晩期の注口土器にある口縁部をなすが、胴部上半に底い隆帯を垂下して区画し、その間に同じような隆帯で弧状に文様が施される。105は無文でコブは付かないが、底部の状態や全体の器形から後期のものと判断してよいであろう。

第二群土器

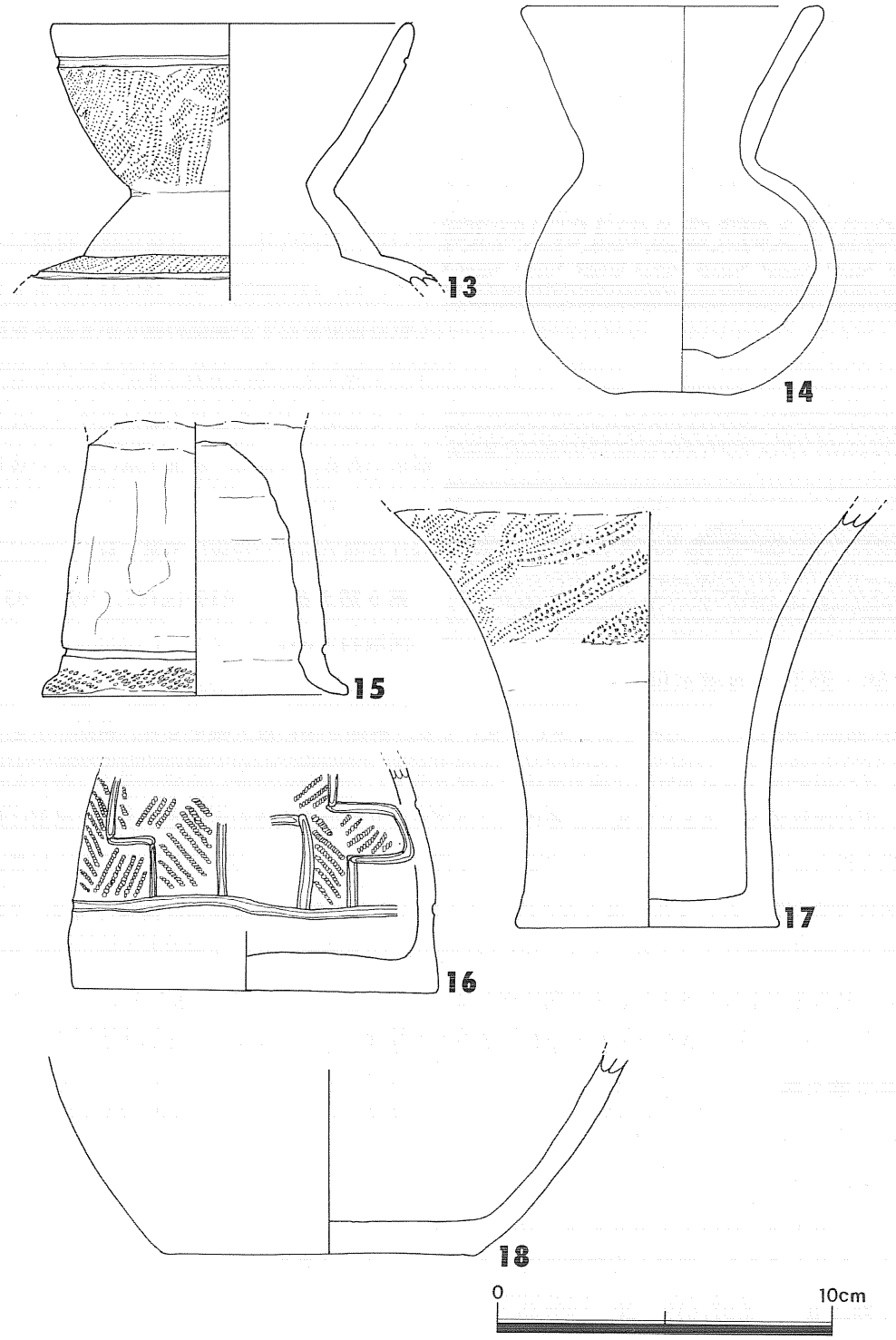
縄文時代晩期の土器を本群とした。器形文様等によって細分できる。

第1類土器

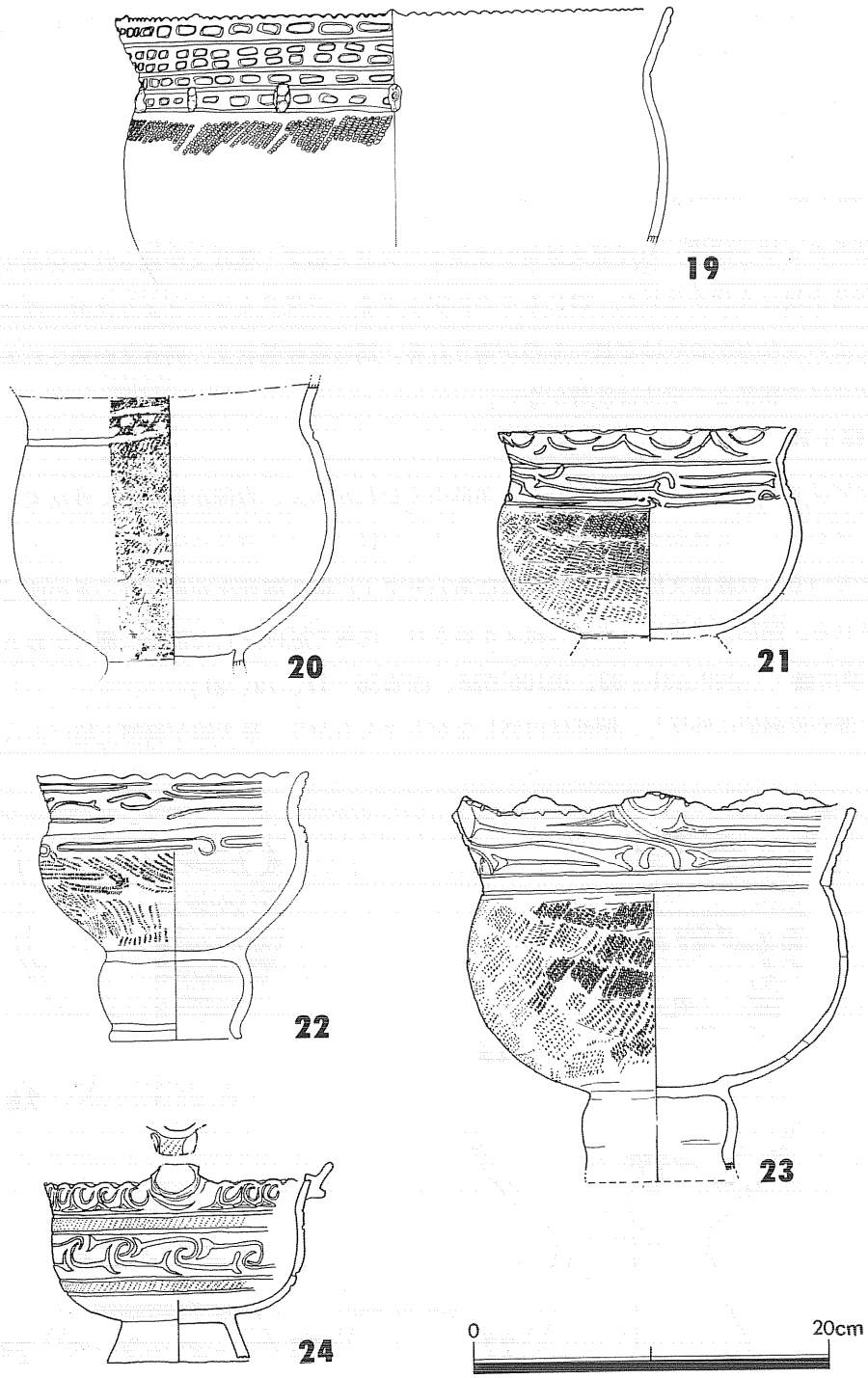
台付鉢形土器の仲間を本類とした。本類に共通する特徴は全ての土器にスス状炭火物が付着していることである。器形と文様等によってさらに細分が可能である。

a類土器　（第97図19～20、図版35－11）

台部が内湾して胴部中央がゆったり張り出し、頸部がくびれて、そこから口縁に向って直線的に外反する土器である。



第96図　壺形土器ほか



第97図　台付鉢形土器

文様は頸部以上に沈線と刺突文などが施され、胴部には縄文が施される。19は口縁部破片である。口唇にキザミを付け、一部に小突起が施される。文様は沈線と刺突によって構成され、下端には双頭のコブが縦に付けられる。コブの付き方は口縁部の小突起と対応する。20も略同様のものと思われる。この文様は32の鉢形土器のものと共通する。

b類土器　（第97図21～23、第97図25・26、図版35－12・13・15・16）

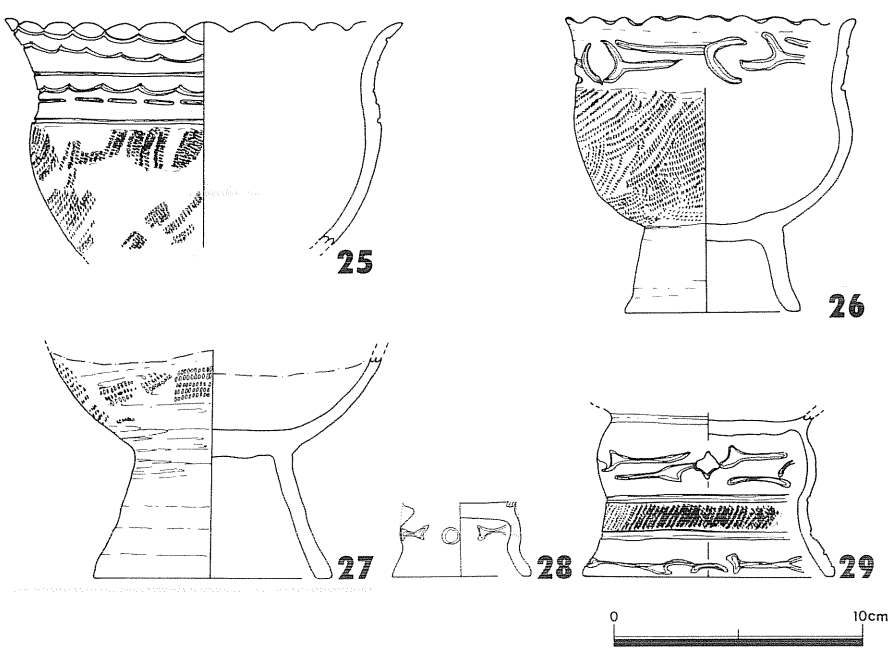
器形はa類と同様。口縁部文様帯が沈線と三叉状入組文・弧状文が施される仲間である。22は胴部上端に文様が施され、21にもその面影がある。三叉状文というより沈線の端に三叉文が付くといった方がよいほど長いものが施される。25は連続弧状文、列点文が施される。26は三叉文だけで胴部との境には沈線がない。

c類土器　（第97図24、図版35－14）

器形はa類、b類と同様であるが、頸部のくびれが弱く、台部が直線的に外反する特徴がある。24がそれで文様帯が口縁部と胴部にある。口縁は小さな波状口縁をなし一つの突起が付けられている。口縁部文様帯は波状口縁にあわせて上に開く弧状文が施され、その間に三叉文が施される。胴部文様帯は三叉状入組文が施され、沈線で区画された部分に縄文が施される。

d類土器　（第99図31・33、第100図36、図版36－17、19、21）

台部が直線的に外反し、胴部は内湾しながら立ちあがり、最大幅が胴部上端にあって頸部か



第98図　台付鉢形土器

ら口縁部にかけて内湾する鉢形土器である。31は口縁部に大小の上に開く弧状文が施され、上部のものが小さく、下部のものは上部の二つの弧状文をつつみこむように施される。32は口唇部にキザミと双頭突起が付けられ、双頭突起の中心から入組文が出てくる。頸部には細長い入組文が施され、その間に刺突が施され、いわゆる羊歯状文を思わせる文様がつくられる。33は口縁部が立あがる器形をなし、沈線3条と上と中の沈線間に刺突文が施される。台部は無文。

第2類土器

鉢形土器を本類とした。器形、文様などからさらに細分できる。

a類土器　(第99図30)

胴部上半部にくびれ部をもち、そこから直線的に外反する深鉢形土器である。口縁には大小2種の突起が付き、その中央部(上端)に刺突が施される。文様帯は胴部くびれ部の上部にあり、入組帯状文が右下りに三段施される。入組部分の沈線が三叉文をなす。

b類土器　(第99図32)

胴部上半部からまっ直ぐに立あがる器形をなし、頸部でいくぶんくびれる鉢形土器である。口縁に双頭突起が付き、口縁部には三叉状入組文、その下には3条の沈線が施され、沈線の間に先端方形の工具で刺突文が施される。この刺突文は19のそれとよく似たものである。

c類土器　(第99図34・35、図版36－20)

胴部下半が欠損して不明であるが鉢形をなすものと考えられる。底部からゆるいカーブをもって立ちあがり、口縁で少し内湾する器形をなす。口唇部にキザミが施され、その下に2条の平行沈線が施される。以下は縄文が施されている。

d類土器　(第100図37・39、図版36－22)

小形で底部から口縁部にかけてゆるいカーブをもって立ちあがる鉢形土器である。37、39は波状口縁をなす。37は帯状文が口縁部に施され、玉抱き三叉文風の文様が施されている。39は口縁部に連弧状文が施され底部に沈線が37が1条、39が2条施されている。

e類土器　(第100図)

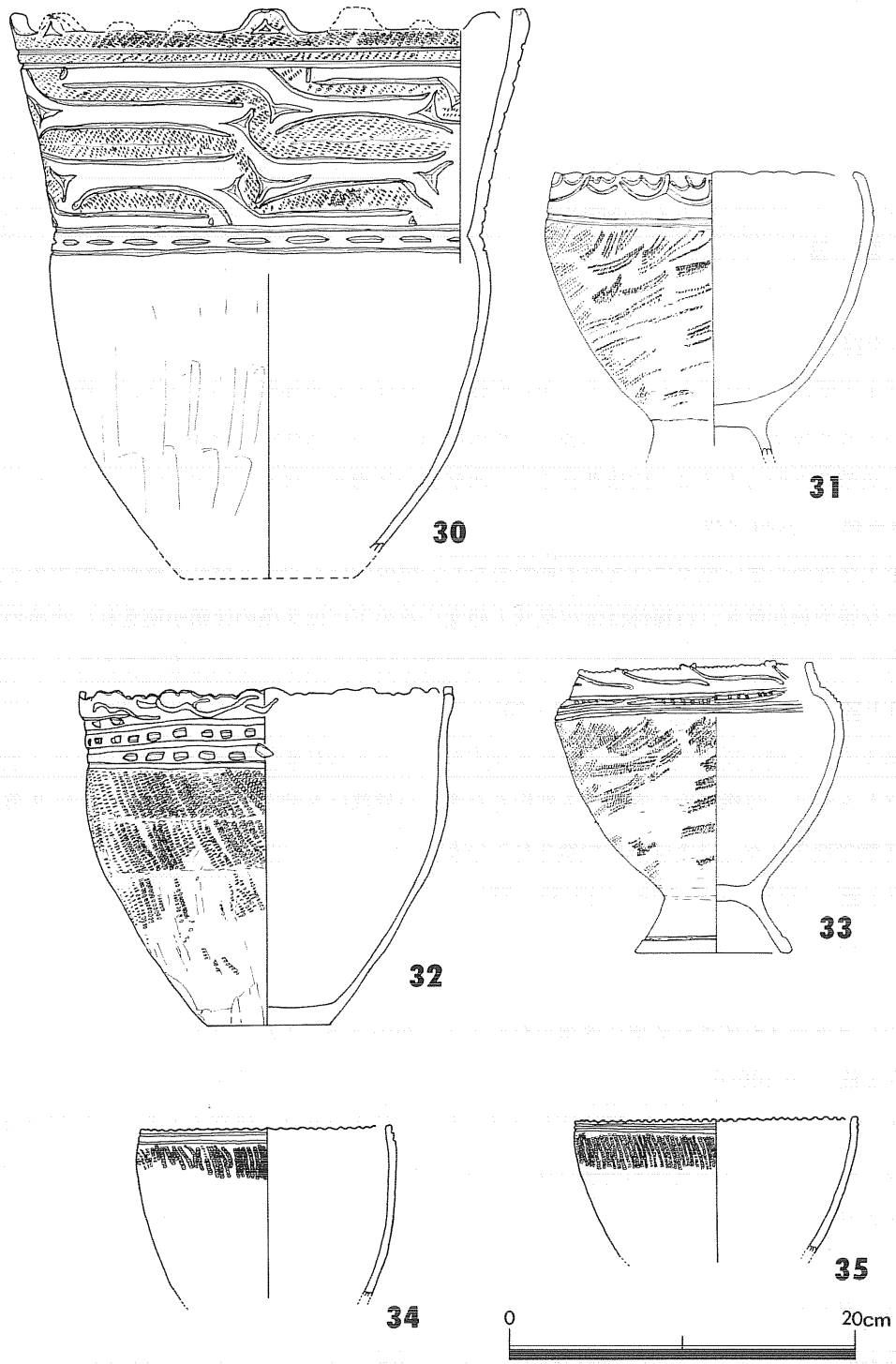
器形はd類と同様である。口縁は波状口縁をなし一部突起状に一段高くなる。文様帯は口縁部だけに限られ、三叉状入組文が施されている。

f類土器　(第100図40・41・43・44、図版37－26・27)

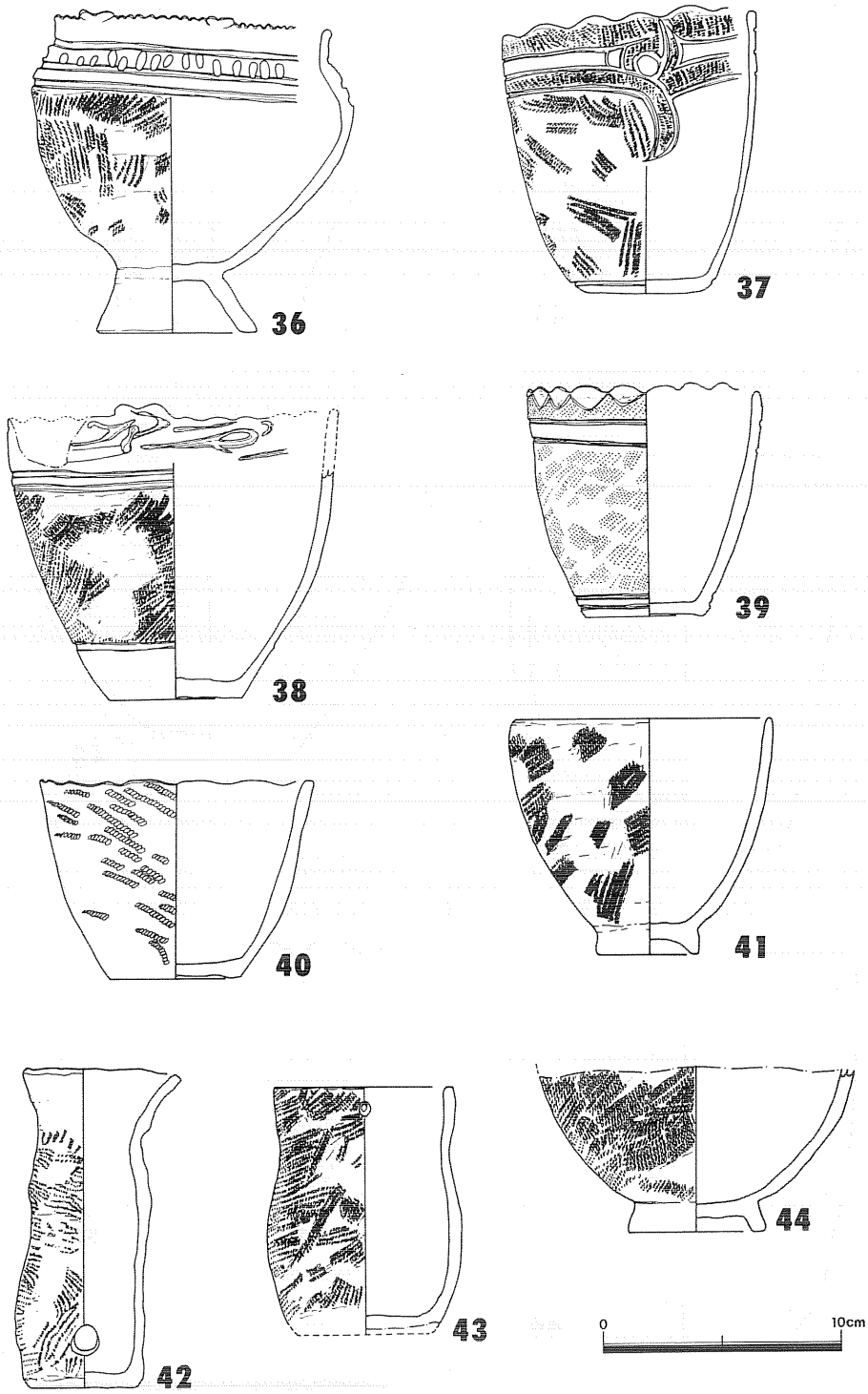
縄文の施された小形の鉢形土器で41、44のように台の付くものもある。43は頸部がくびれ、口縁部に貫孔がある。

g類土器　(第101図45～50、第102図59・62、図版37－28、図版38－29・30・31)

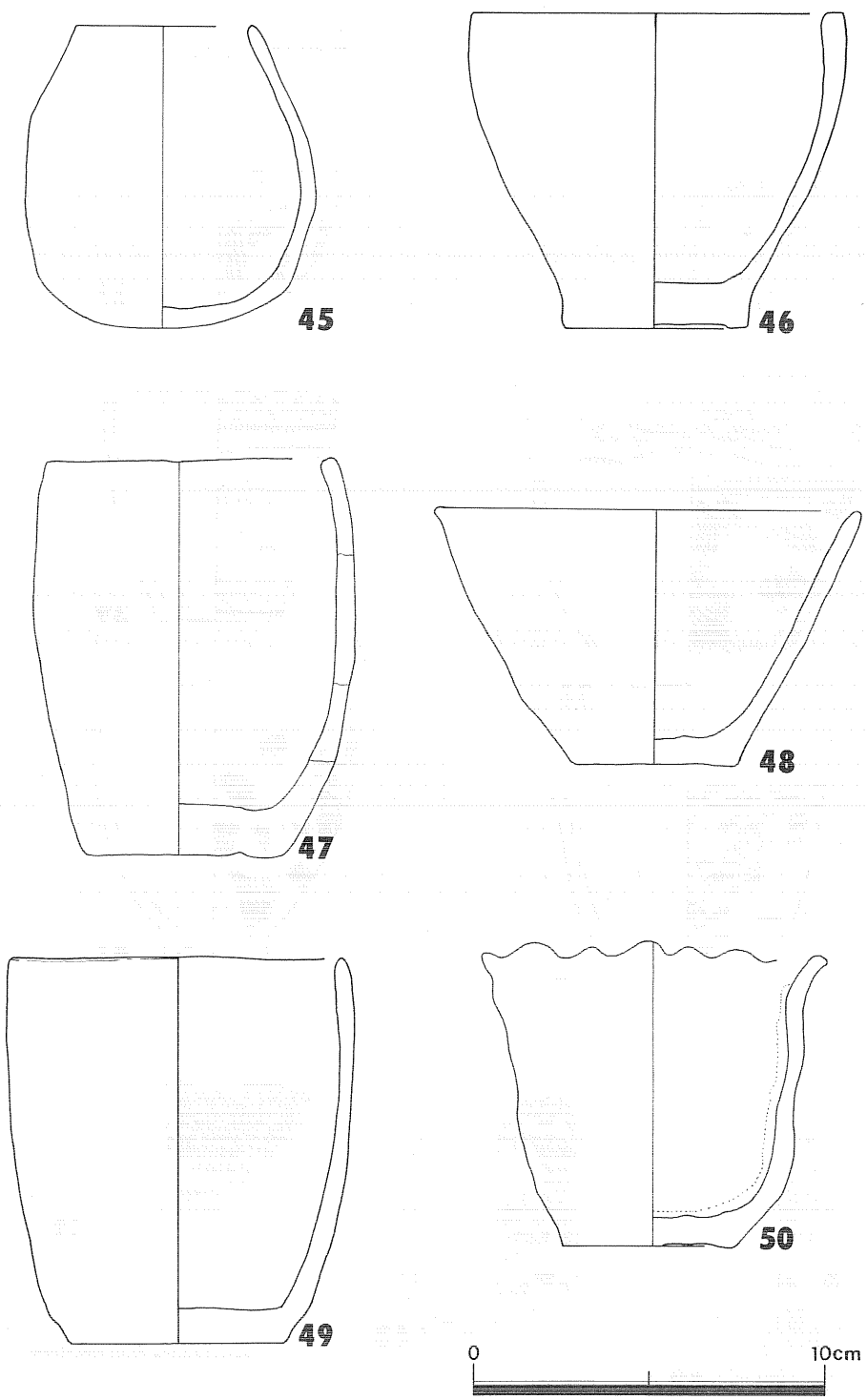
無文の小形鉢形土器を本類とした。器形によって①46、47、49、59、62のように少しカーブをもって立ちあがり口縁で若干内湾するもの。②48のように直線的に外反するもの。③50のよ



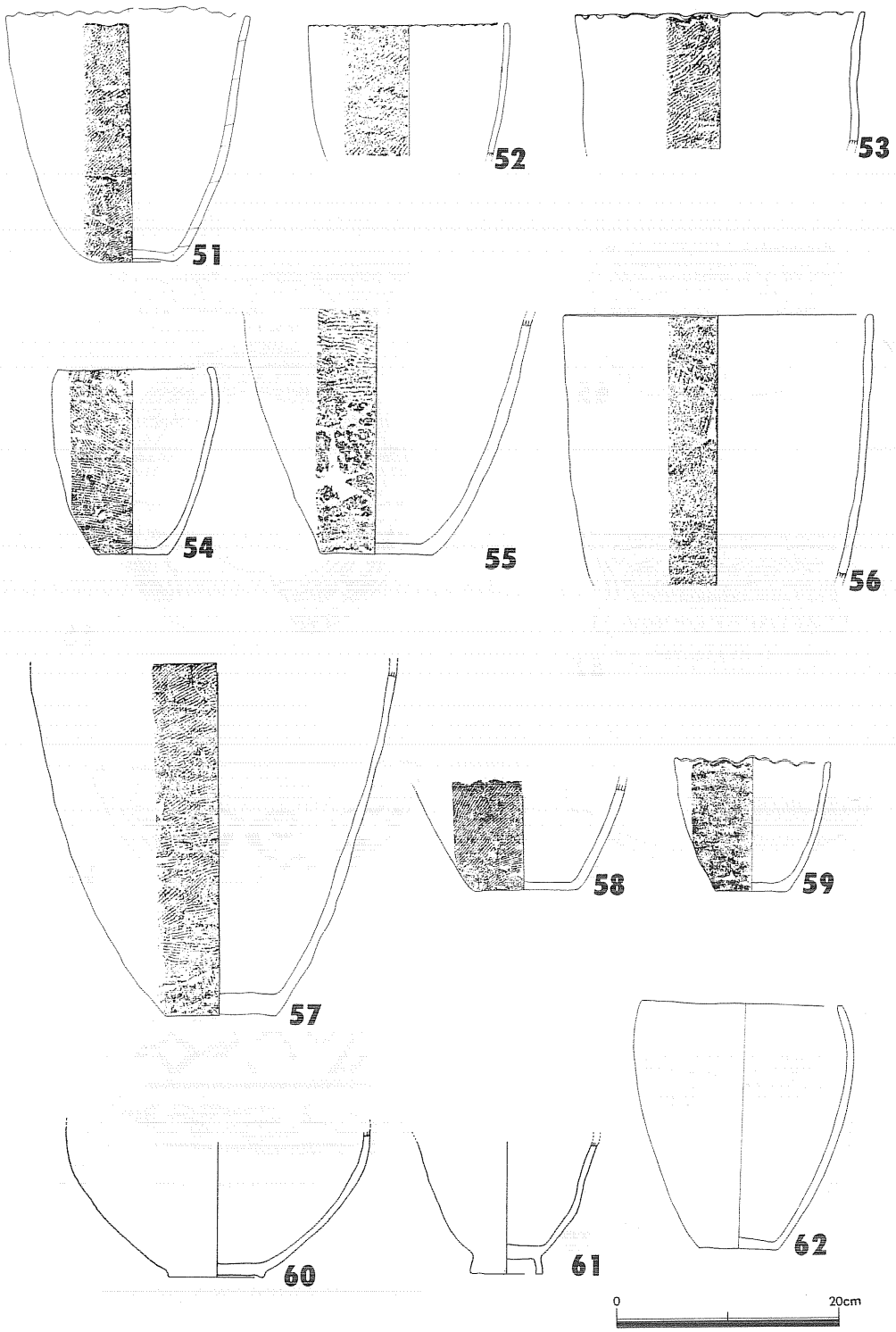
第99図　台付鉢形土器・鉢形土器



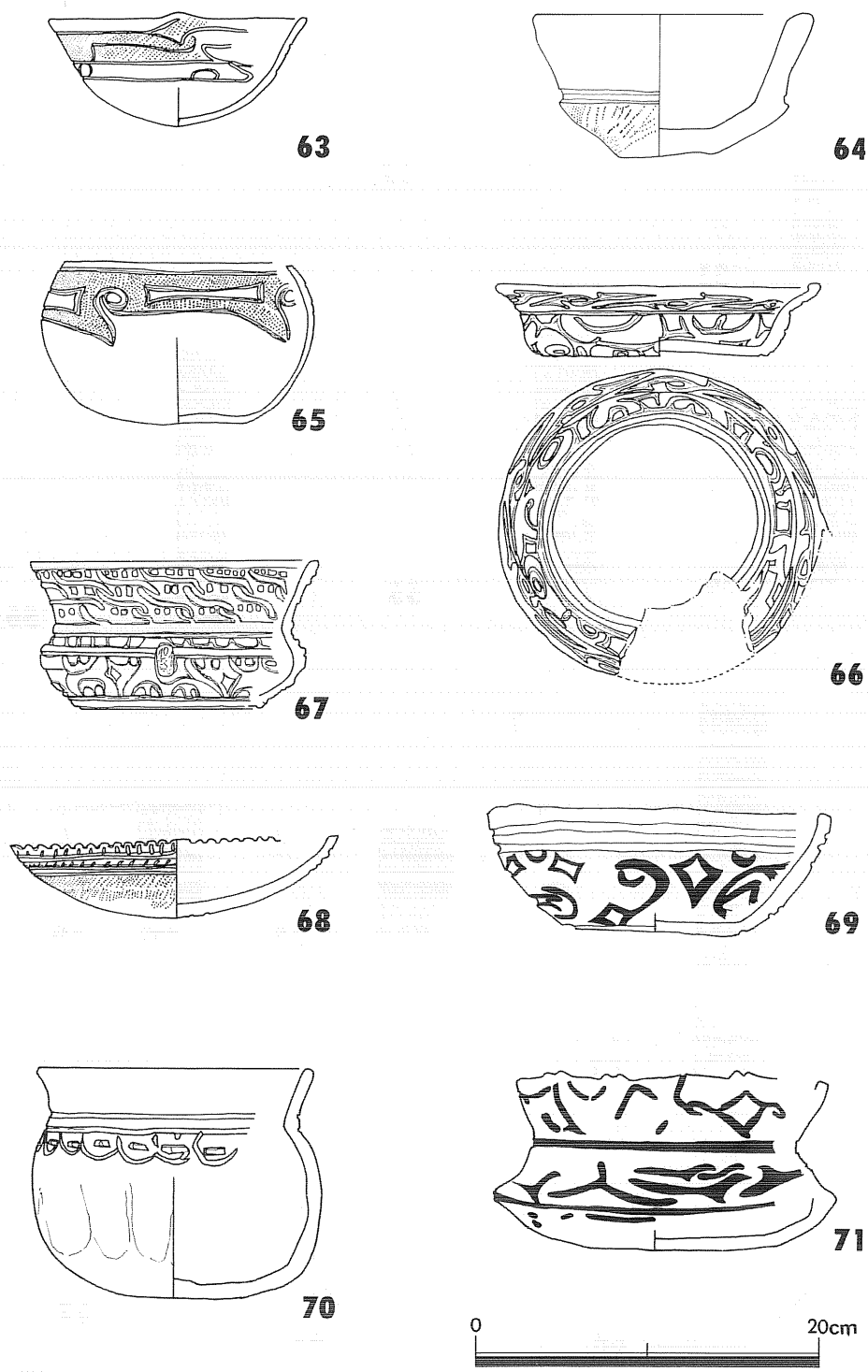
第100図　台付鉢形土器・鉢形土器



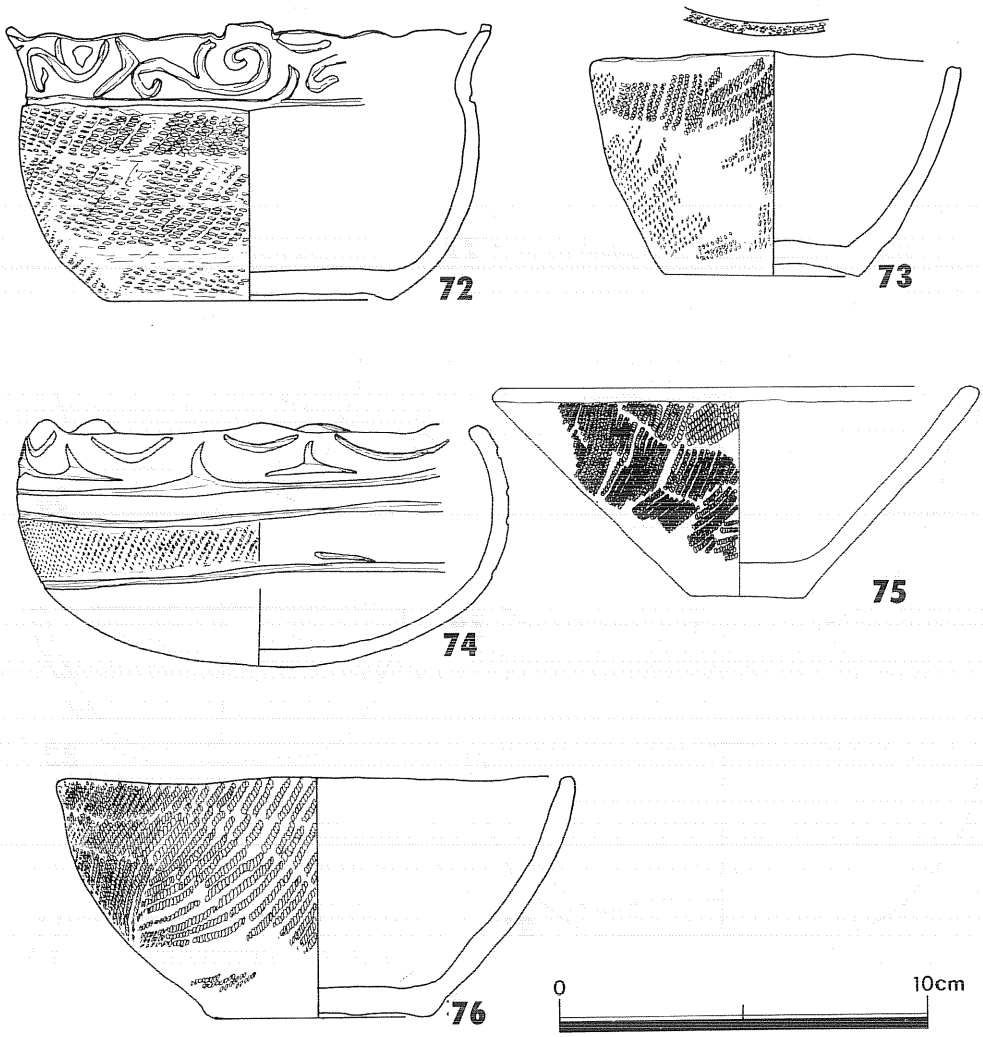
第101図　鉢形土器



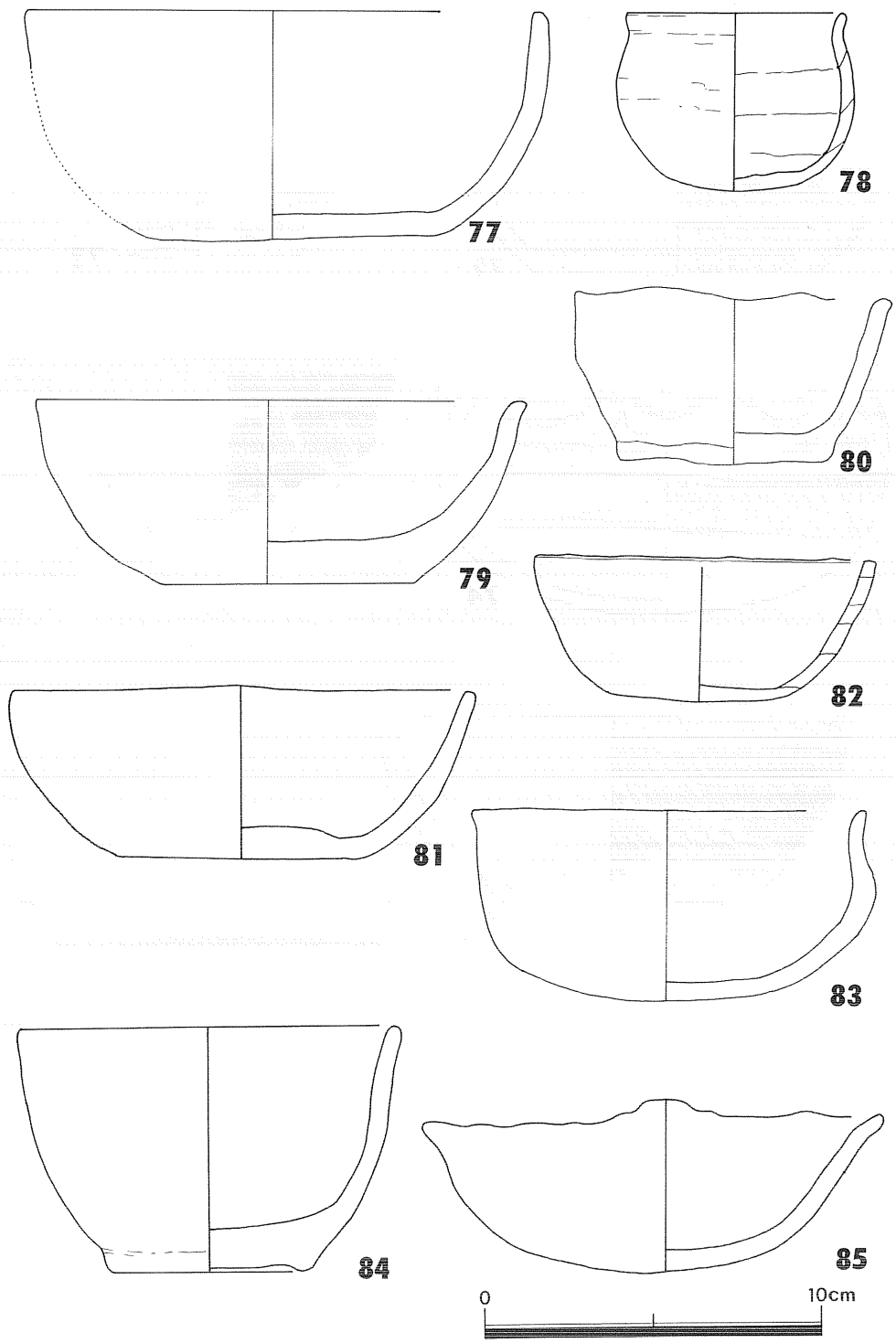
第102図　深鉢形土器



第103図　浅鉢形土器（69.70は1/1）



第104図　浅鉢形土器



第105図　浅鉢形土器

うに波状口縁をなし口縁が外反するもの、④45のように胴部から内傾して壺のような形をなすものなどがある。

h類土器　（第102図51～58、図版38－32・33・34、図版39－35・36・37・38・40）

いわゆる粗製の深鉢形土器である。g類土器同様器にバラエティがある。①51、53のように外反するもの。②54のように内湾するもの。③56のように直立するものなどがある。縄文は原体を斜に回転させて縄文が横位に走るもの（54、55）の他は斜縄文が多い。

第3類土器

浅鉢形の土器を一括して本類とした。器形、文様によって細分することができる。

a類土器　（第103図63・64・65、図版40－41・42）

沈線によって区画された入組文に縄文が伴うものである。63は二つの山形突起をもち、底部が丸底風のものである。64は口縁部が無文帯で胴部に沈線が施され、それより上半は外反する。65は底部が広く、胴部から口縁にかけて内湾する浅鉢形をなすものである。

b類土器　（第103図70、第104図72・74、図版40－45・47）

弧状文及び三叉文を主体とした土器である。70・72は頸部がくびれ、そこから口縁にかけて直線的に外反し、74は内湾する器形をなす。72・74は山形突起をもち、72は胴部に帯状文が施されている。70は胴部に連弧文があり、その中に刺突文が施されている。

c類土器　（第103図69・71、図版40－44・46）

縄文は全て施されず、器表面が美しく調整され、その上に変形文、三叉文の施された土器である。71は口縁に双頭突起が付き、胴部が「く」の字に張り出した器形をなす。

d類土器　（第103図67・68、図版40－43）

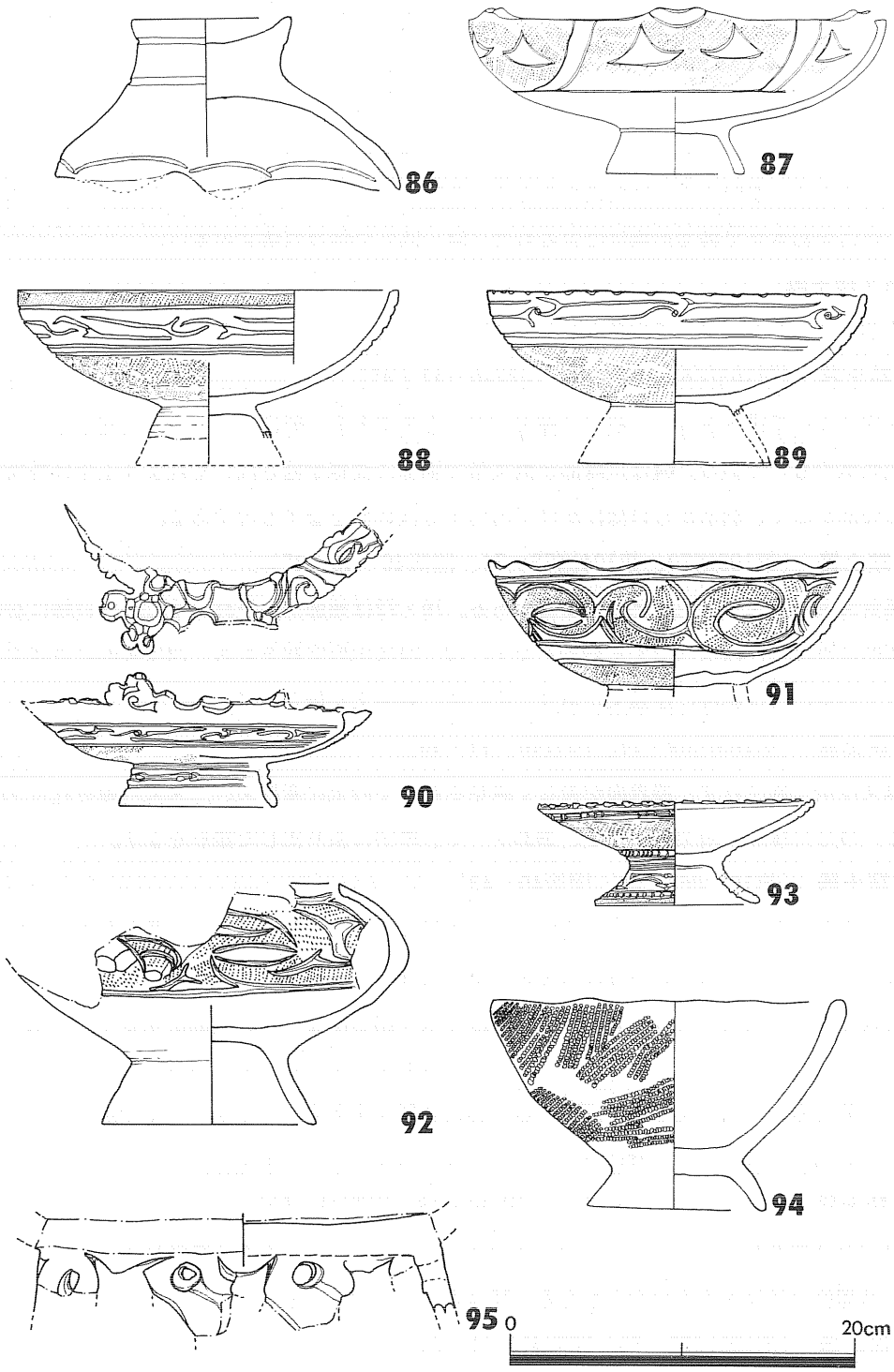
いわゆる羊歯状文の施された土器である。底部は広くつくられ、浅い土器である。66はゆるいカーブをもって外反し、口縁部文様帯、胴部文様帯、胴部下端と三つの文様帯からなる。文様帯は三叉状入組文が主体をなす。67は71ほど張り出しはないが、胴部がゆるやかに張り出し頸部でくびれ、そこから口縁にかけて外反する器形をなす。口縁部文様帯、胴部文様帯ともそれぞれ異なるが羊歯状文が施されている。68は底部が小さく、そこからゆるやかなカーブをもって立ちあがる浅鉢で、口唇にキザミが施され、口縁部に所謂羊歯状文が施された土器である。

e類土器　（第104図73・75・76、図版40－48、図版41－50）

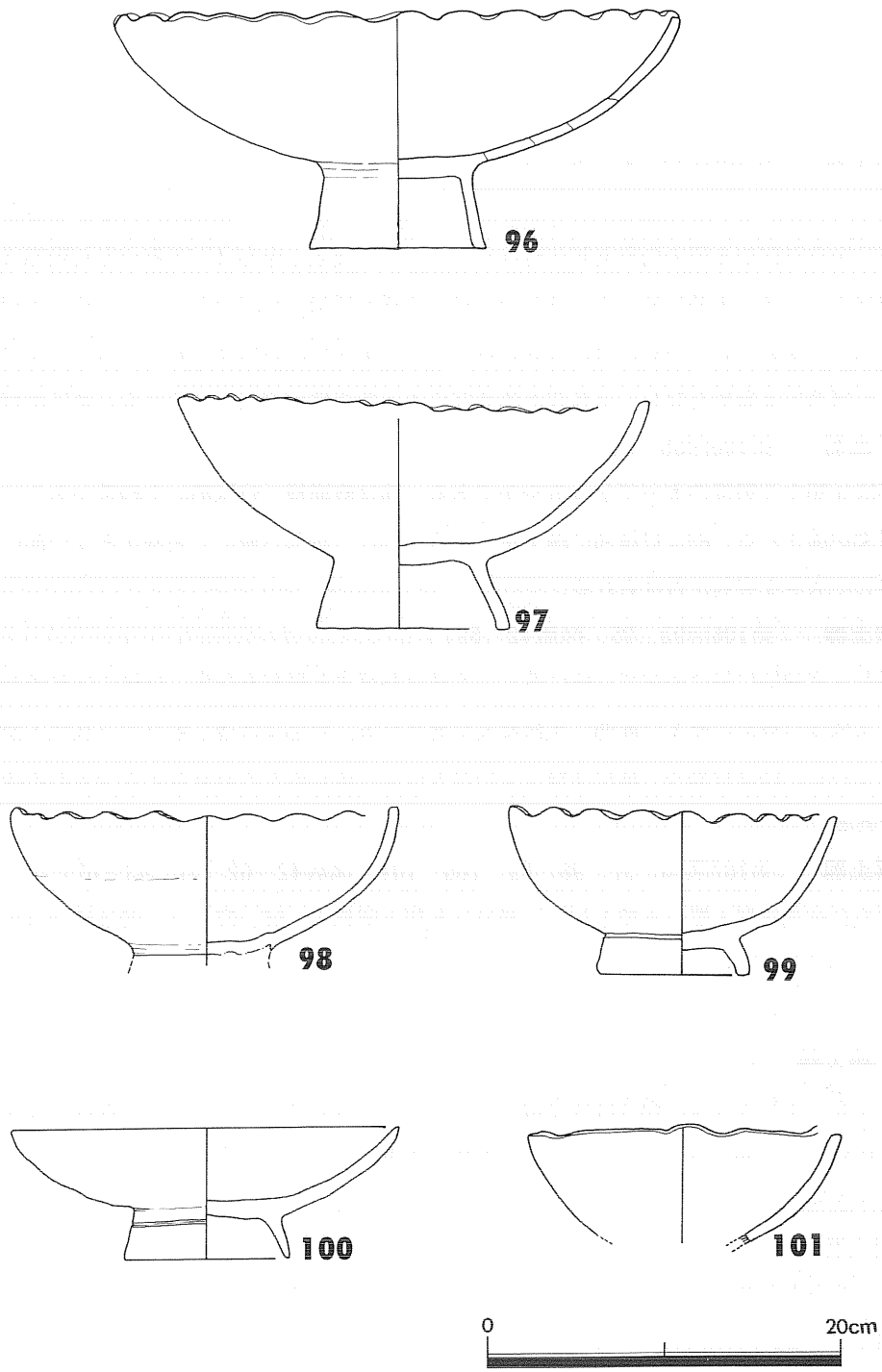
縄文だけ施された土器である。73・76のようにゆるいカーブをもって外反するもの、75のように直線的に外反するものなどがある。75は朱塗の土器である。

f類土器　（第105図77～85、図版41－51～56）

無文の浅鉢形を一括して本類とした。78・83のように頸部がくびれるもの、85のように外反し、口縁に突起の付くものもあるが、一般には77・79・81・82・84のようにゆるいカーブをもっ



第106図　台付浅鉢形土器　(95は1/1)



第107図　台付浅鉢形土器

って立ちあがる器形が多い。

第4類土器

台付浅鉢形土器を一括して本類とした。文様器形によって4つに分類できる。

a類土器　（第106図87、91、92、図版42－58、60）

縄文を多用し、台部が直線的に外反し、底部から口縁にかけてゆるいカーブをなす器形である。87は中央の凹む6個の山形突起が付けられる。山形突起を中心にしてその左右胴部に三叉状文が施され、その両側は斜に垂下された沈線で文様が区切られている。この文様は山形突起同様6回くりかえされている。91は波状口縁をなし、x字状に帯状文が施される。92は口縁部が大きく内湾する器形をなし、三叉文と弧状文によって文様が構成されている。コブが付く。

b類土器　（第106図88～90）

器形はa類より胴部のカーブがゆるやかである。他は略同様。口縁部に文様帯があり、三叉状入組文が施される。88は口縁部に縄文帯がある。90は口縁部内側にも装飾があり一部に三叉文を施した大きな突起が付けられる。

c類土器　（第106図93、95、図版42－59）

底部から直線的に斜にのびて口縁に達し、台部は外反する器形をなす。口縁には双頭突起がつき、文様は口縁部のせまい範囲に年歯状文が施される。台部には透し彫りの三叉状入組文が施されている。95は台部の一部だけ残っていたもので、透し彫りのある台をもつ大形の浅鉢形土器である。

d類土器　（第107図96、97、98、99、100、101、図版42－62、61－63～67）

無文の台付浅鉢形土器を本類とした。器形はb類と同様で、96、97、98、99は波状口縁をなし、101は4個の波状口縁をもち、100は平縁で、口縁にバラエティがある。99のように深い形をとるものもある。

第5類土器

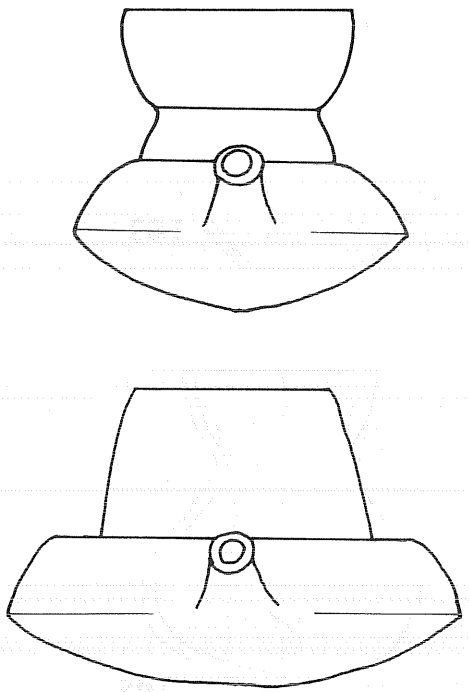
注口土器を本類とした。縄文時代を通して注口土器が最も多くつくられた時期にあたるため完全に近い注口土器の数は非常に多い。器形から大きくa、bの二つに大別できる。

（模式図参照）

a類土器　（第108図106～109、第109図110～117、第110図118～123、図版62－69～73、63－74～79、64－80～83）

頸部が巾をもち帯状になり、口縁部がその上に外反してのる器形で、胴部の器形によってさらに細分できる。

1）、106、107、110、111、112、116のように胴部が比較的長くつくられたものがある。これには111のように胴部上半に沈線を施すものがある。これらの注口部には三叉文などは施されずコブ状の凸部が注口部の下に付けられるだけである。文様は106を除いて沈線が施される



注口土器模式図

ものの他は無文である。

2)、胴部が短かくつぶれた状態をなし、胴部中央部に陵線をもち、いわゆるそろばん玉のような形をなすようになり、頸部と胴部の境、すなわち胴部上半が水平に近い形をなすもの108、109、113～115、117～123などがある。これには①口縁が水平なもので口縁部に平行沈線が2条施される108、113、118、119のようなもの、②注口部のある正面の口縁に突起を有し、文様の施される115、117のようなものとがある。この仲間には注口部に三叉文の施されるのが一般的となり、118、119、122、123のように注口部以外の胴部に三叉文及び入組文の施されるものがある。三叉文を二つ合わせて菱形文と化したものもある（119、123）。

b類土器　（第110図124～126、図版46－84、85）

a類の口縁部をすっぱり取り除いた器形を呈す。本類は3点でaより少ない。胴部下半がa類より外反し、その分だけ胴部の背たけが底くなっている。この仲間には①124、125のように頸部が直角に近い形で立ちあがるもので、125のように双頭突起をもち、正面に三叉状入組文が施され、背部は沈線だけのもの、②126のように頸部が内湾し、文様が器面全体に施されるものとがある。

第6類土器

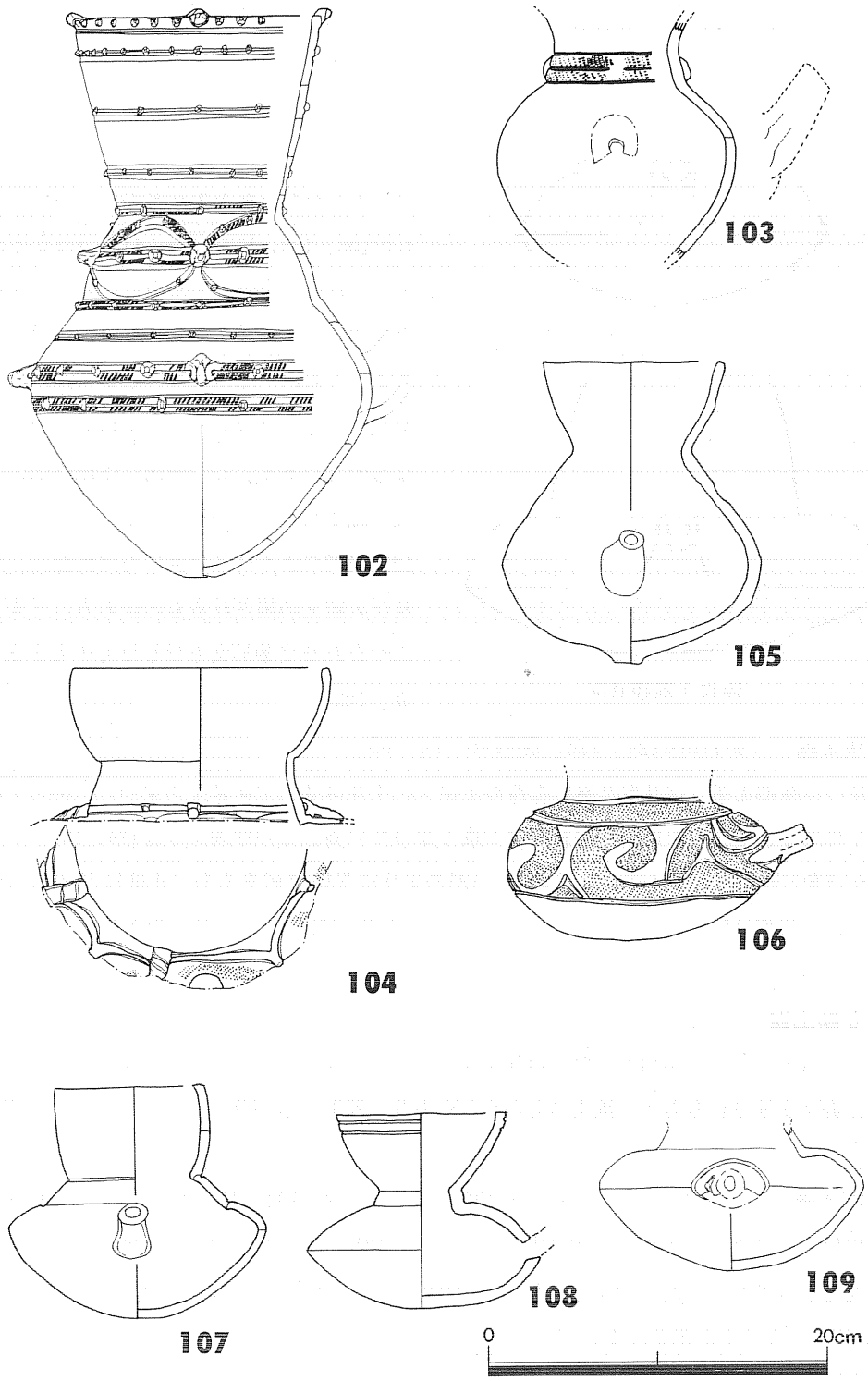
壺形土器を一括して本類とした。頸部を境に上半が無文で胴部以下に縄文が施されるもの、全体に縄文が施されるもの、無文のものなどがあり、器形にもバラェティがあり6類に細分できる。

a類土器　（第111図127～128、130、132～133、第112図134～135、図版47－86、90、87）

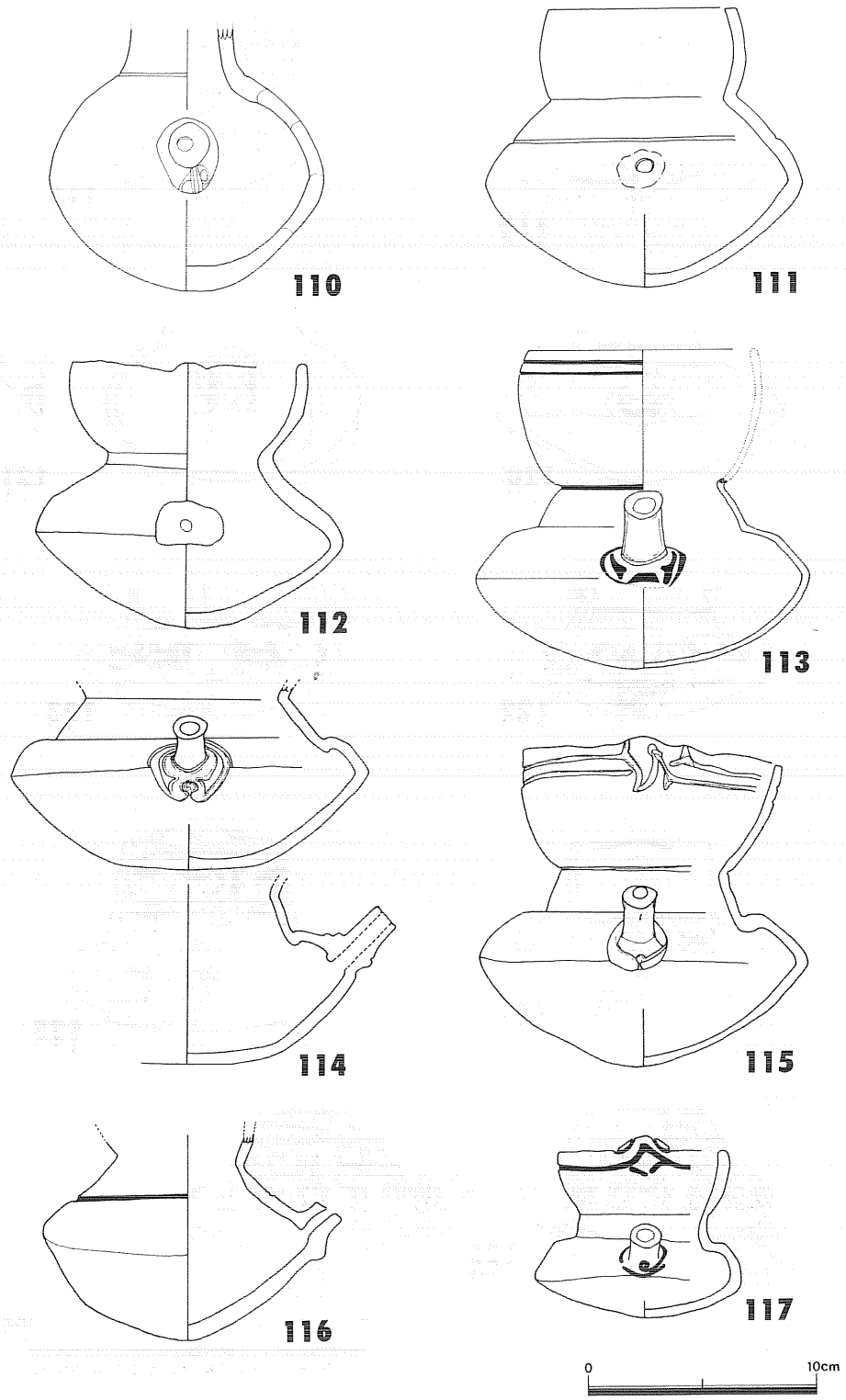
頸部以上が無文で、胴部に縄文の施されたもの。127、128、130、132～135などがあり、頸部に沈線が施された132、133などもある。133は口縁部内側にも一条の沈線が施されている。128は口唇にキザミが施される。

b類土器　（第111図129、131、図版47－89）

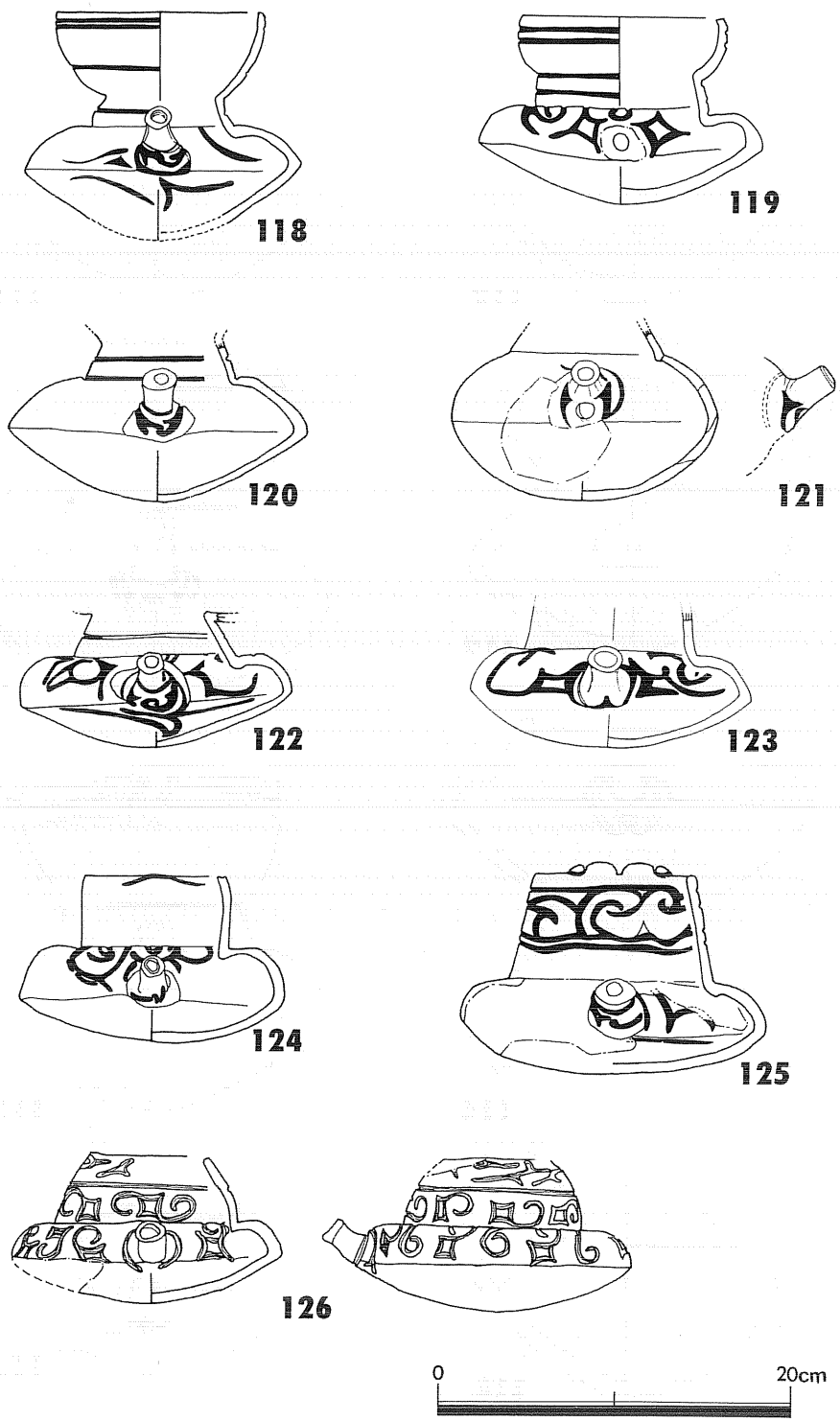
全体に縄文が施されたもので129、131がある。129の縄文は胴部以下は縦に、131は口縁



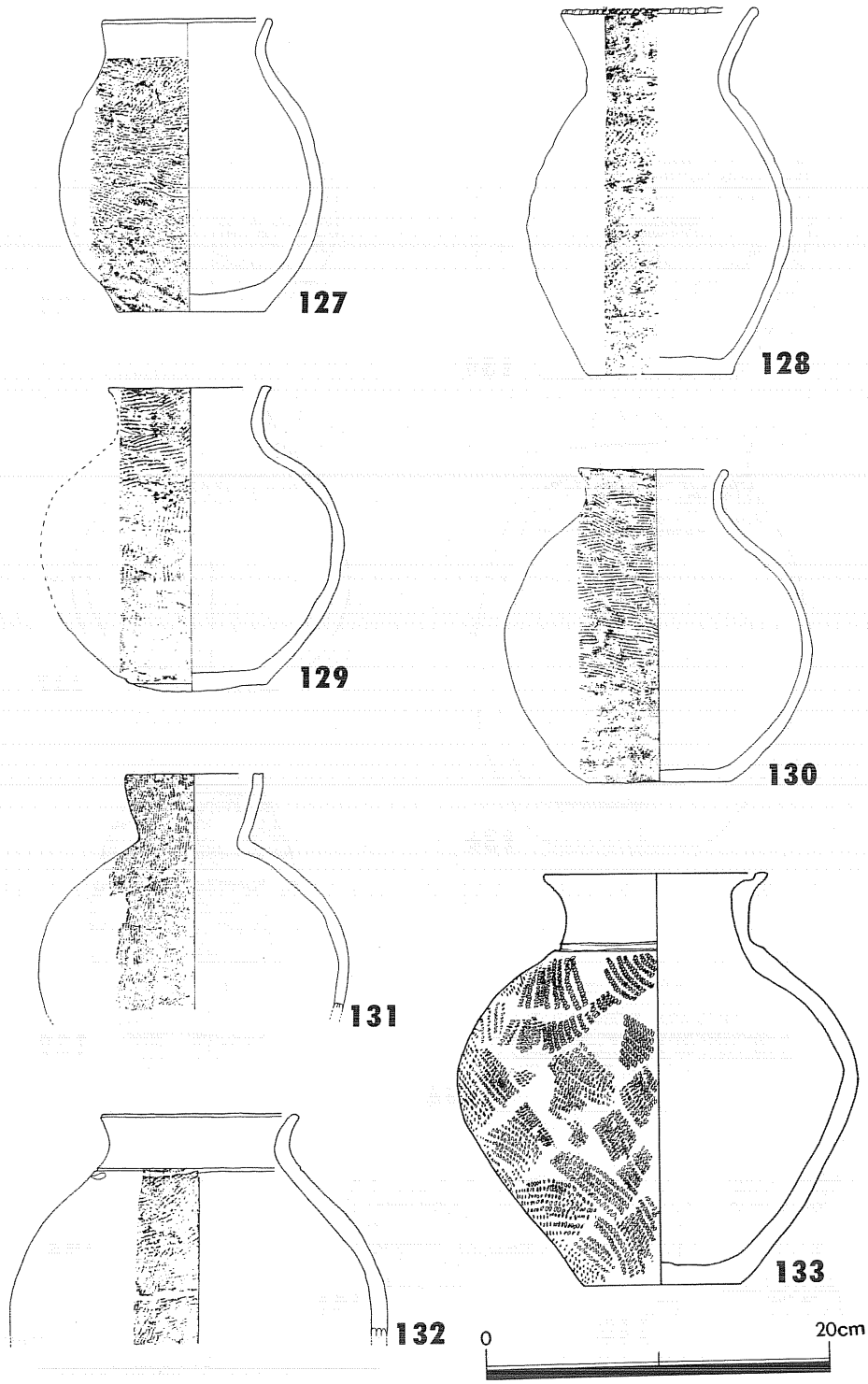
第108図　注口土器



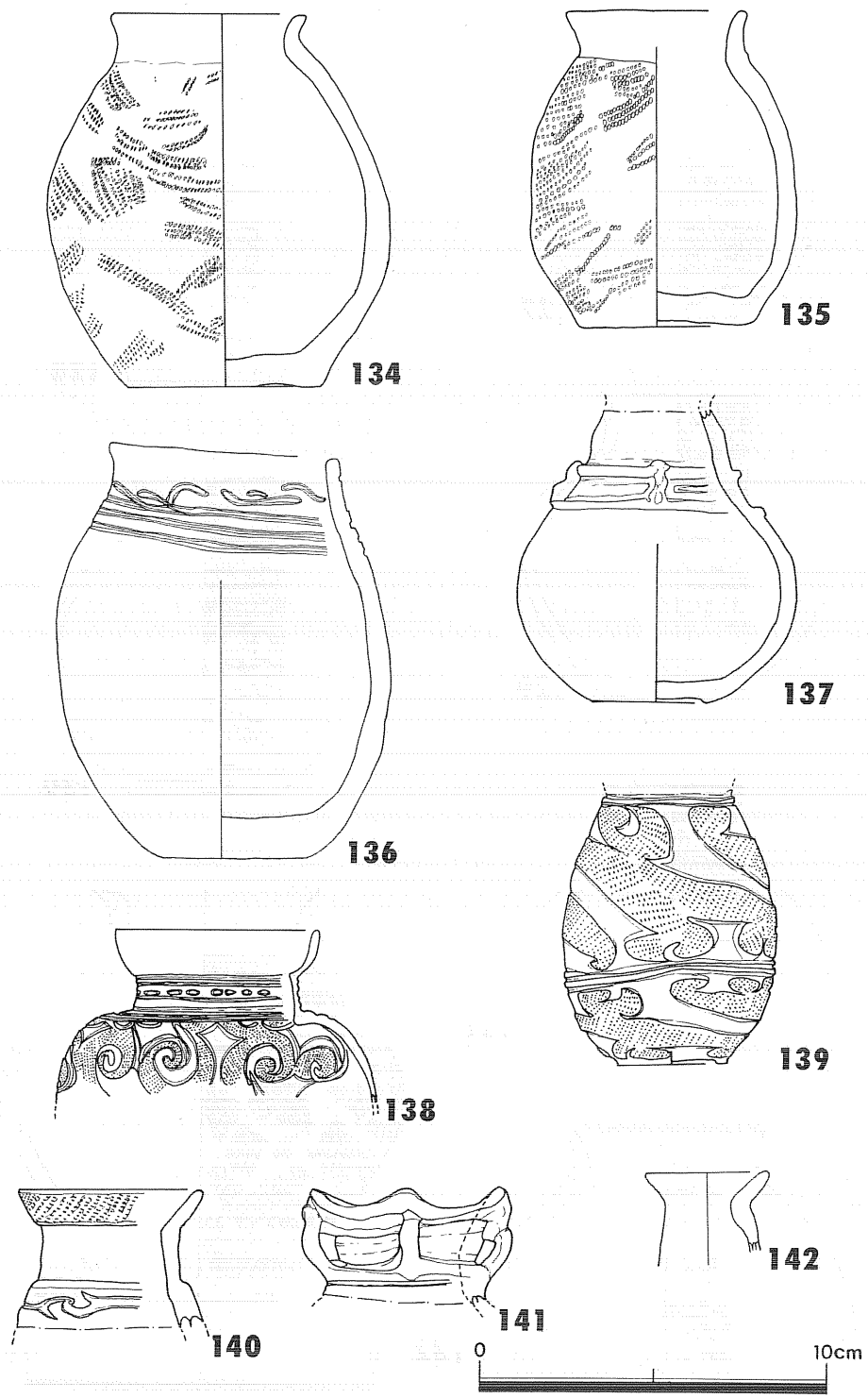
第109図　淫口土器



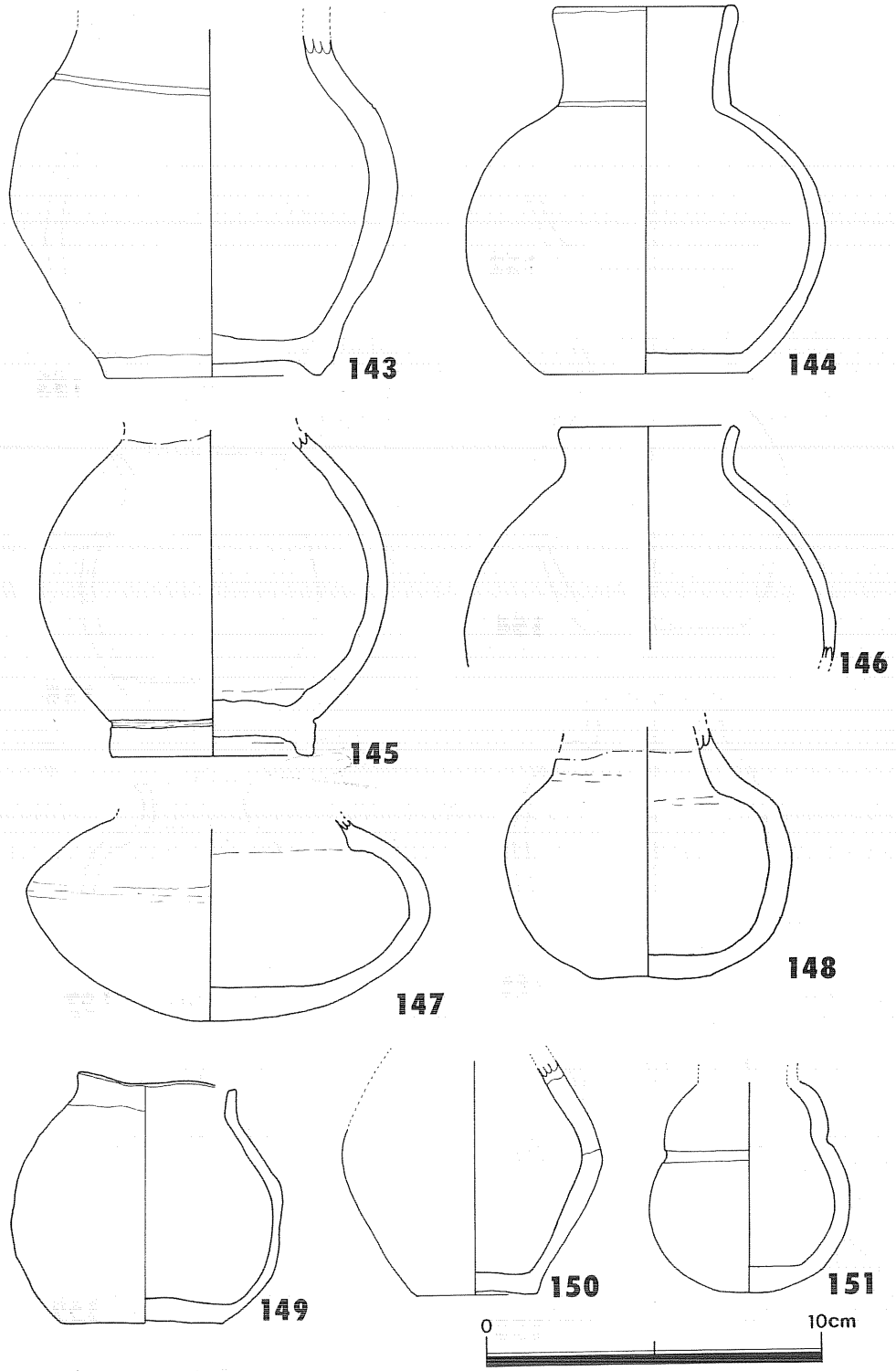
第110図　注口土器



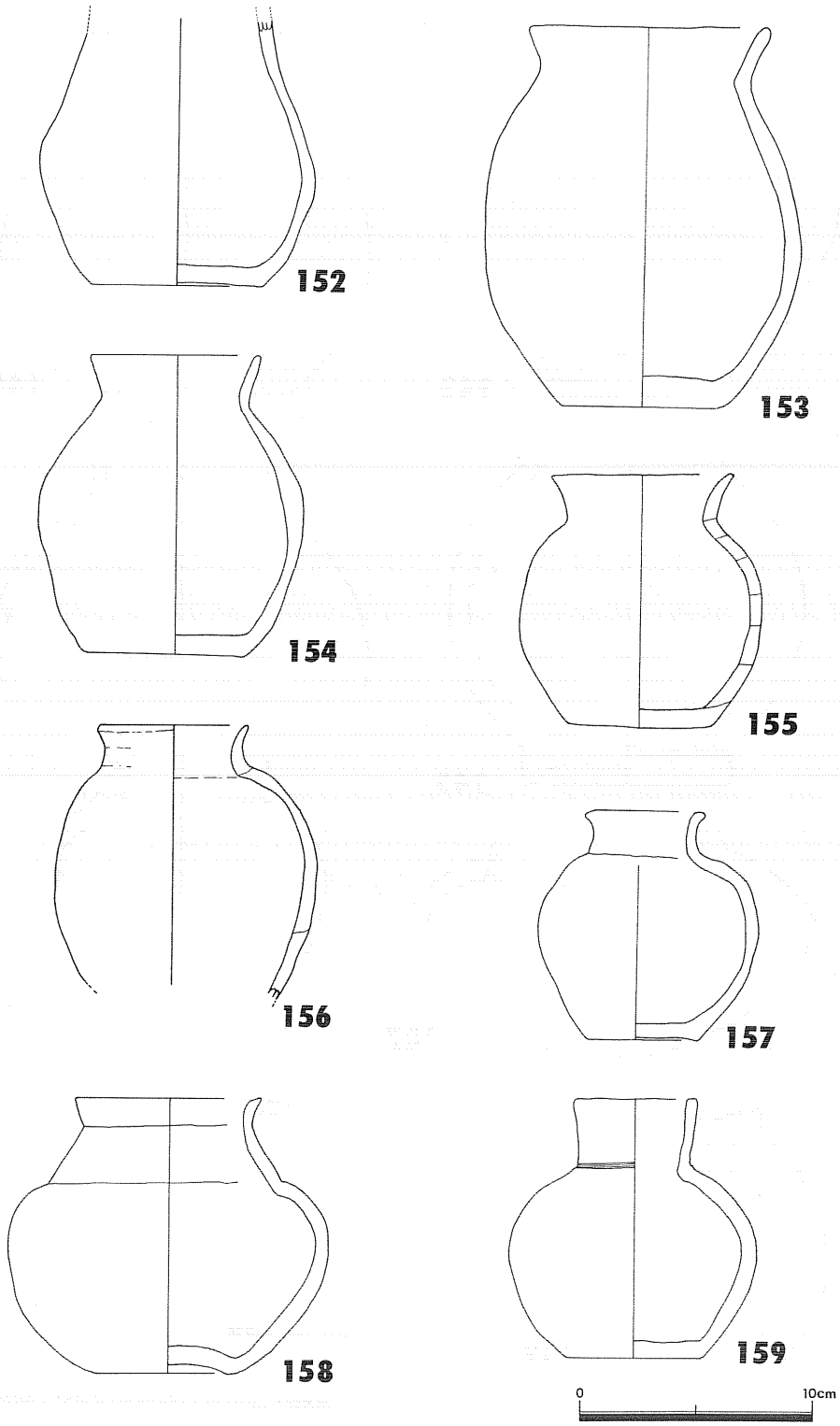
第111図　壺形土器（133は1/1）



第112図　壺形土器（138は½）



第113図　壺形土器



第114図　壺形土器

部が縦に走る。

c類土器　（第112図137～142、図版48－94～95）

精製土器の壺形土器で別名徳利形土器などと呼ばれている仲間である。137は無文で美しく調整された土器で、胴部上端に隆帯2条と縦に4個の双頭突起が付く。137の口縁部は140のような形をなすものと思われる。141、142も同様であろう。139は胴部に上・下2つの文様帯があり、模式図のようなx字状の、それぞれ同一の文様が2回くりかえし施文されている。

d類土器　（第112図138）

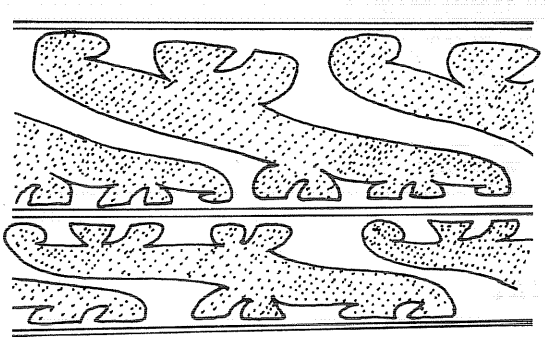
大形で胴部上端が張り出す壺形の土器である。頸部に列点文、胴部に雲形文が施されるものである。下半は欠損。

e類土器　（第112図136、図版48－93）

頸部に沈線文及び入組文が施されたものである。136がそれで器形は胴部から頸部にかけて内傾する変った器形をなす。

f類土器　（113図143～151、第114図152～159、図版48－96、図版49、図版50）

無文の壺形土器を一括して本類とした。①頸部に沈線の施されたもの（144、159）、②胴部上半に沈線の施されたもの（143、156）、③胴部の張り出しが下半にあるもの153、④147のように張り出すものなどがあり、器形にバラエティがある。



壺形土器模式図（139）

その他の土器　（第115図、図版51）

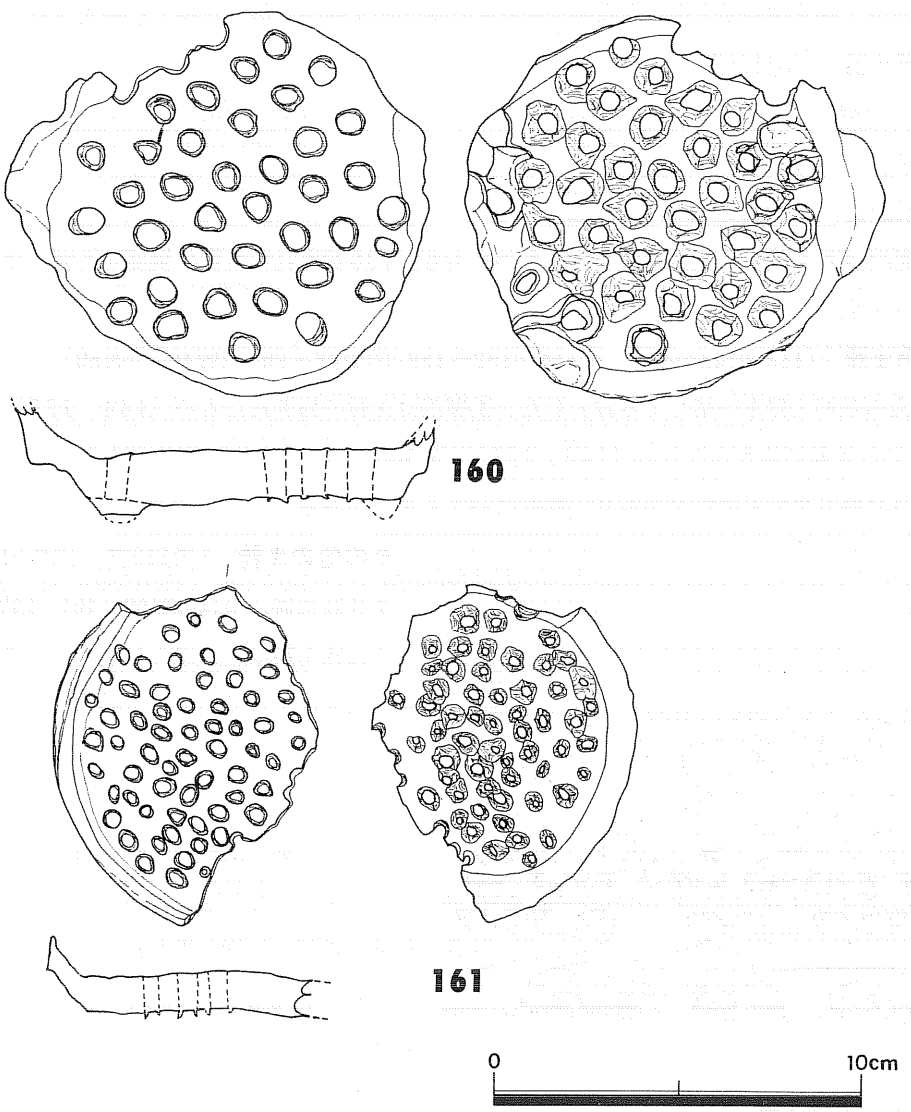
多孔底土器、第114図160、161、図版

多孔底土器は三点出土している。つくりは雑で焼成は不良である。土器は161の断面で見るとおり高さはこの程度で低くつくられている。160も同程度の高さの土器と考えられる。孔は内側（上）から外に向って穿たれ、外側（下）の孔の周囲はあらく凸部がある。160の底部には脚と思われるものが付けられている。多孔底土器は甑様土器とも呼ばれ甑のような働きを考えられている。実際甑のように器形は鉢形をなすものと、本遺跡のように板状に近い形のものと二種あり、使われ方にも2種あったことが想像される。

有孔壺形土器　（第100図42、図版37－25）

壺形の器形をなし、図のように底部に貫孔

が一つある土器である。土器のつくりは雑で、器面調整も行なわないで縄文が施されている。孔は焼成前に内側から外に穿たれている。孔に栓をした形跡などは全く認められず。用途ははっきりしないが、この孔に口唇をつけて横笛のように吹くとよい音が出た。楽器の一種とも考えられそうである。いくつかの遺跡から類例が出土している。



第115図　多孔底土器

土製品

袖珍土器　（第116図１～９、第117図10～15、図版52－１～９）

小型で手ずくねの土器が多い。１～２は台付で粗末なつくりのものである。３は反対にきれいに整形されている。８は壺形をなし中に石か何かが入っていてふると音がする。土鈴の一種とも思われる土器である。10～14は比較的大きめにつくられたもので11の器表面は黒の光沢がある。10～13までの土器は壺形をなすものであろう。

双口土器　（第117図16）

底部の破片であるため上部が本当に双口であったか否か明らかではない。正面から見ると中央部に凹みがあり、その両側が器となっている。立石遺跡に類似の土器が出土している。その土器は中にある壁の下部に両方に通ずる孔があるが、藤株出土のものにはそれがない。

鐸形土製品　（第118図17・18、図版52－10・11）

２点出土している。いずれも沈線で施された文様がある。18は小型のものである。

スタンプ状土製品　（第118図19～23、図版52図12～16）

従来からスタンプ状土製品と呼ばれていた22のようなものの他に、キノコ状の土製品も本土製品として扱った。22のいわゆるスタンプ状土製品には沈線で文様が施されるのが一般的で、キノコ状のものには全く文様が施されない。またスタンプ状土製品のように幹の部分に孔のないのが特徴。本当にキノコを模倣してつくったものかもしれない。23は異質なものであるが、スタンプ状土製品同様幹に孔のある土製品と思われる。

耳飾　（第119図24～31、図版52－17・18）

滑車形耳飾（24～28）と耳栓形の30・31とがある。25・26は表面に文様が施され、28は横に孔が施されている。30・31の耳栓形のものには朱が塗られている。

腕飾　（第119図32～34・36、図版53－20～23）

完全に近いもの２点、その他２点計４点出土している。32・33は朱が塗られ、側面から見ると弧状をなす点など共通点が多い。32は完形品で、中央部が一段高くつくられ、その上に渦巻文が施され、両端には粘土粒を貼り付け、その上に小さい刺突文が施される。粘土粒貼り付けた部分と渦巻文の施された部分の間には３条の沈線が走り、外側の沈線に貫孔された孔がある。孔は両側から穿たれている。33は右側端が欠損。文様は両端と中心に粘土紐と粘土粒の貼りつけがおこなわれ、両端は中心に１個、それを囲むように６個の粘土粒が貼られる。34は環状土製品と考えられる。36も同様の性格をもった土製品と考えられる。

貝形土製品　（第119図35、図版52－19）

先端部が欠損し全体は不明であるが、頂部に貫孔があり、そこから螺旋状に突起を施しなが

ら粘土帯が廻る。一見してサザエの貝を想起させる遺物である。

有孔土製品　（第120図37）

頂部先端に貫孔のある土製品である。全体的に細身で偏平なものに粘土紐が貼りつけやれたものである。

土版　（第120図38、図版53－24）

いわゆる偏平な土版にならず、断面が図のように小判形をなす土版である。沈線で渦巻文、弧状文などを施している。表面は人面を表わしている。

三角形土製品　（第120図40～43、図版53－26～29）

40、43は完形、他は一部欠損している。40はＹ字状の沈線を施し、その間に弧状文が施されている。41は横位の沈線が施されたもの、43は無文である。

円盤状土製品　（第120図44～49、図版53－30～34）

土器片を円形に加工して円盤状にしたもので、縄文時代後期の土器を再利用したものである。

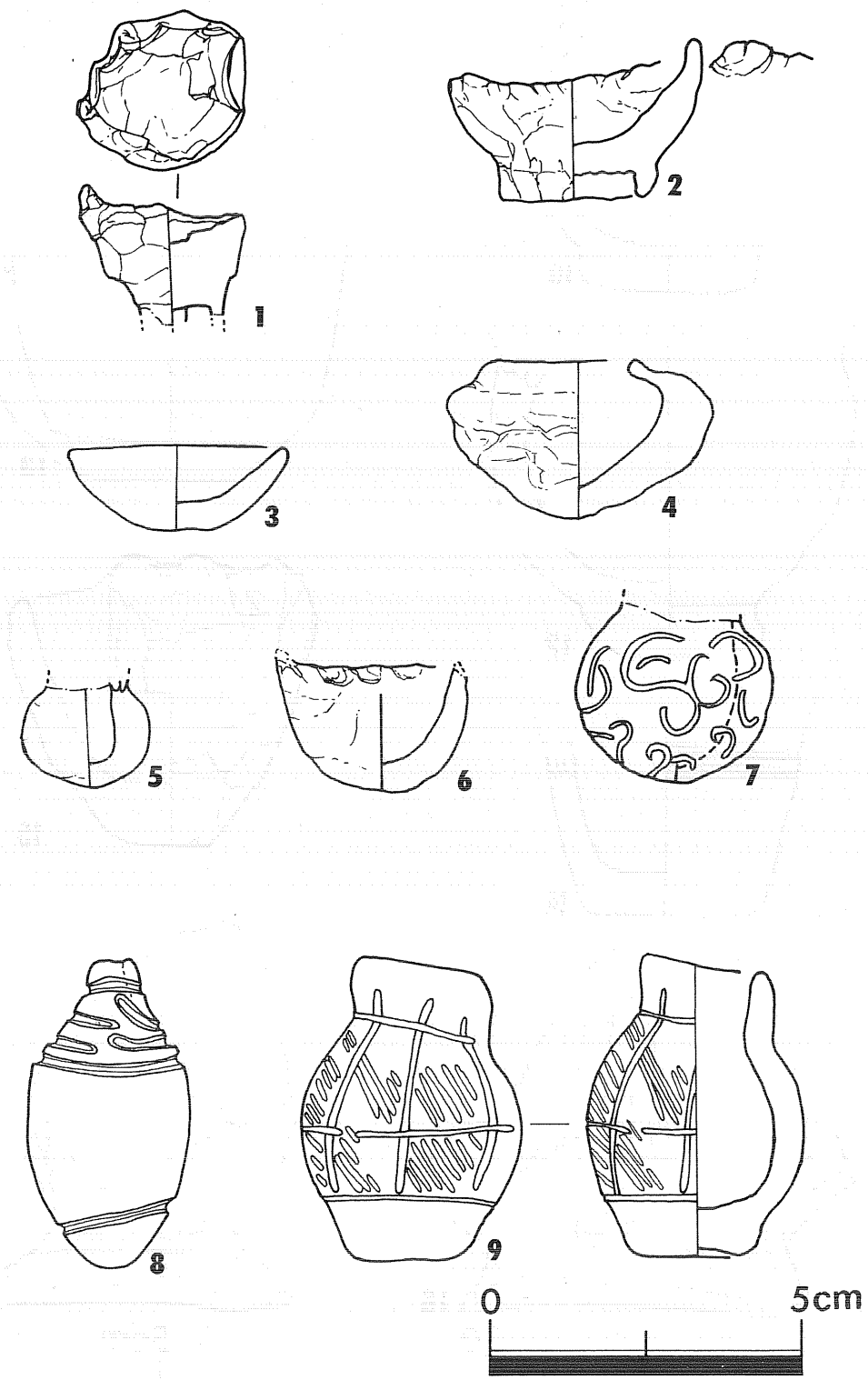
土偶　（第121図50～57、第122図58～65、図版53－35、36、図版54、図版55）

調査で発見された土偶総数は30点である。全て手足、首などが欠損したものである。全体を推測できるのは１点だけである。大きく後期の土偶と晩期の土偶に分けることができる。

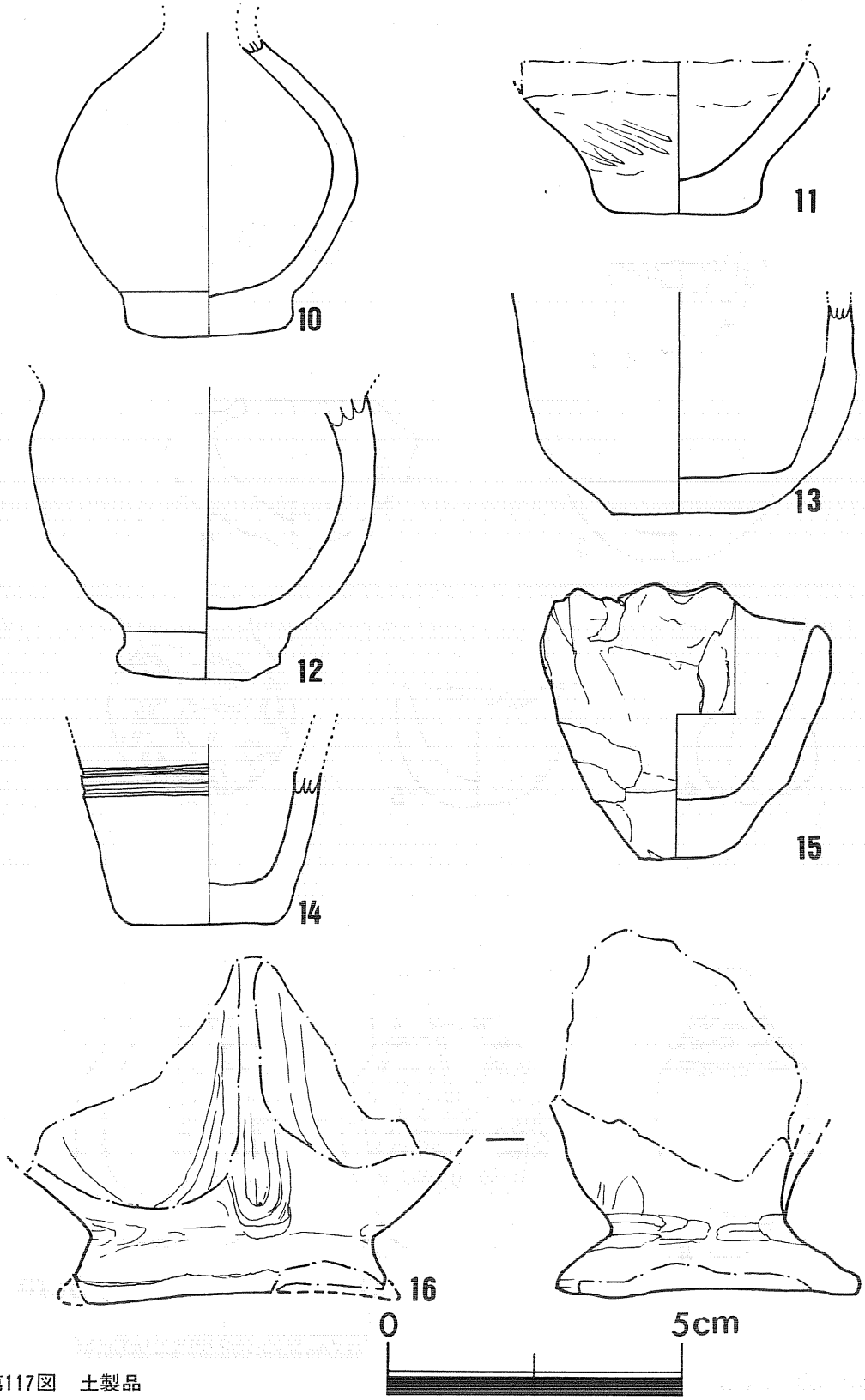
（後期の土偶）この時期の土偶は人体を写実的に表現したものと（51）と抽象化された土偶（54、57）との二種がある。50は最も完全に近い状態の土偶である。体部を一段高く隆帯状にした所に円形竹管文が施されている。両手、両足は欠損しているが、首は最初から造られなかった土偶である。首なし土偶としては古い部類に入るものであろう。51は体部に全く文様が施されず50同様写実的に作られた典型で、乳部の乳首までしっかり表現されている。

54は頭部が前に突き出た形をなし、顔は眉から鼻にかけてｒ状に造られ、口は十字に切られ抽象的に造られた土偶である。前頭部上端には粘土紐を撚ったものを貼り付けている。52、53 57のように小形のものもある。他に手、足が多く出土している。

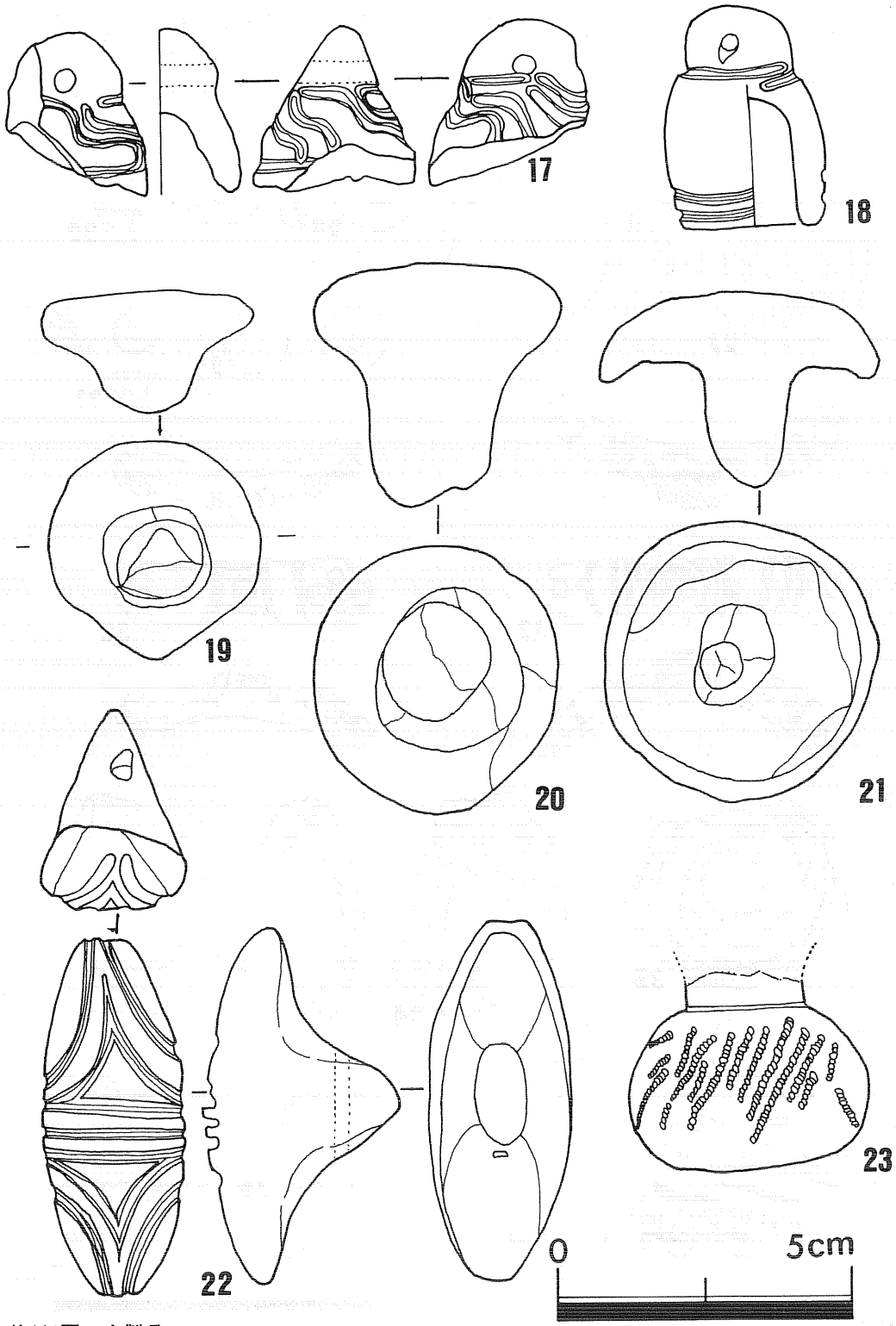
（晩期の土偶）121図58、59、60、74、76、77などがこの時期のもので、いわゆる遮光器土偶である。中空のもので59は口が透し彫りにつくられている。60は腕の破片。74、76、77はこれらの土偶の頭部に付く装飾の一部と考えられる。76は動物の顔を形どった風に見えるものである。



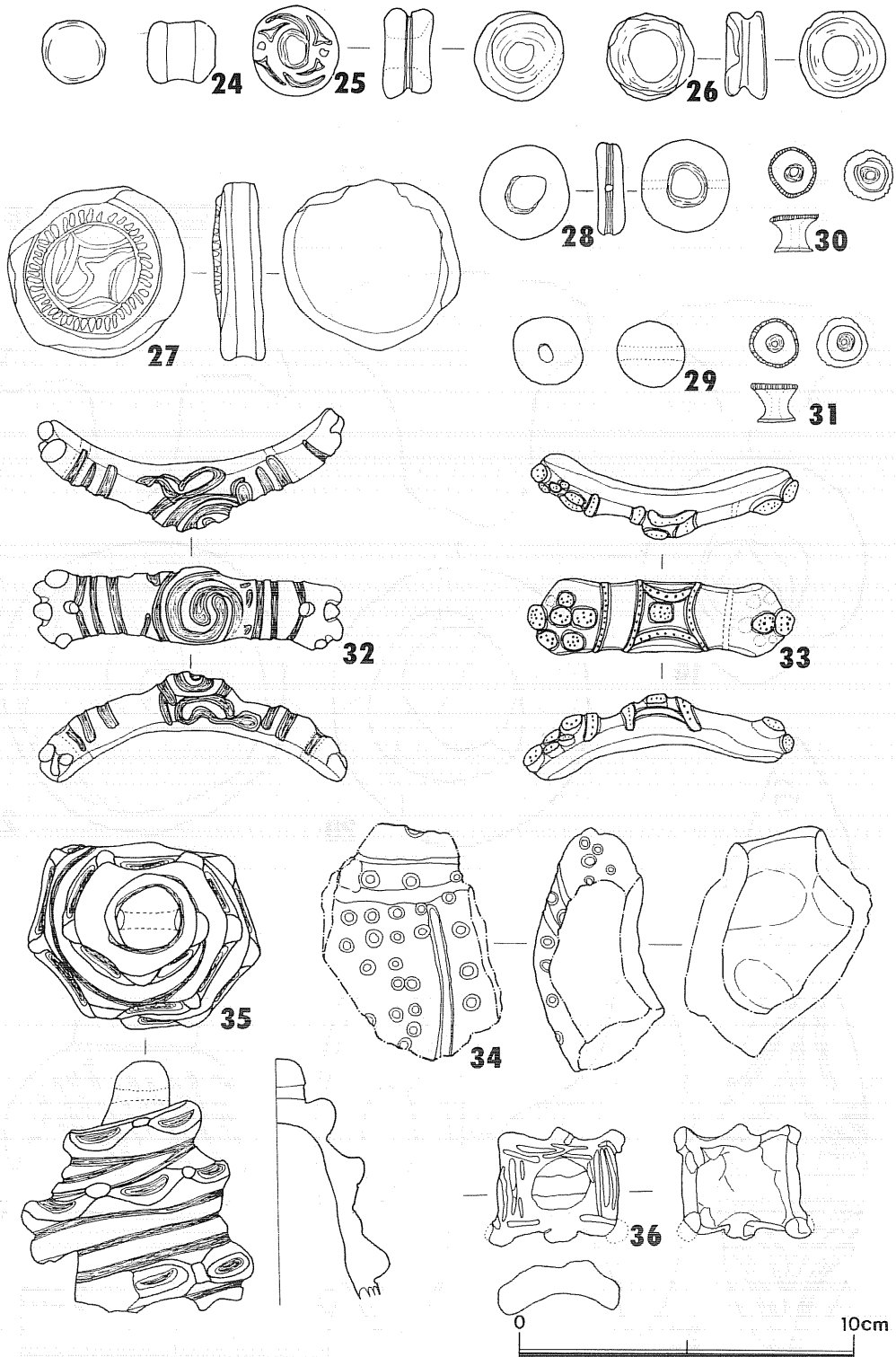
第116図　土製品



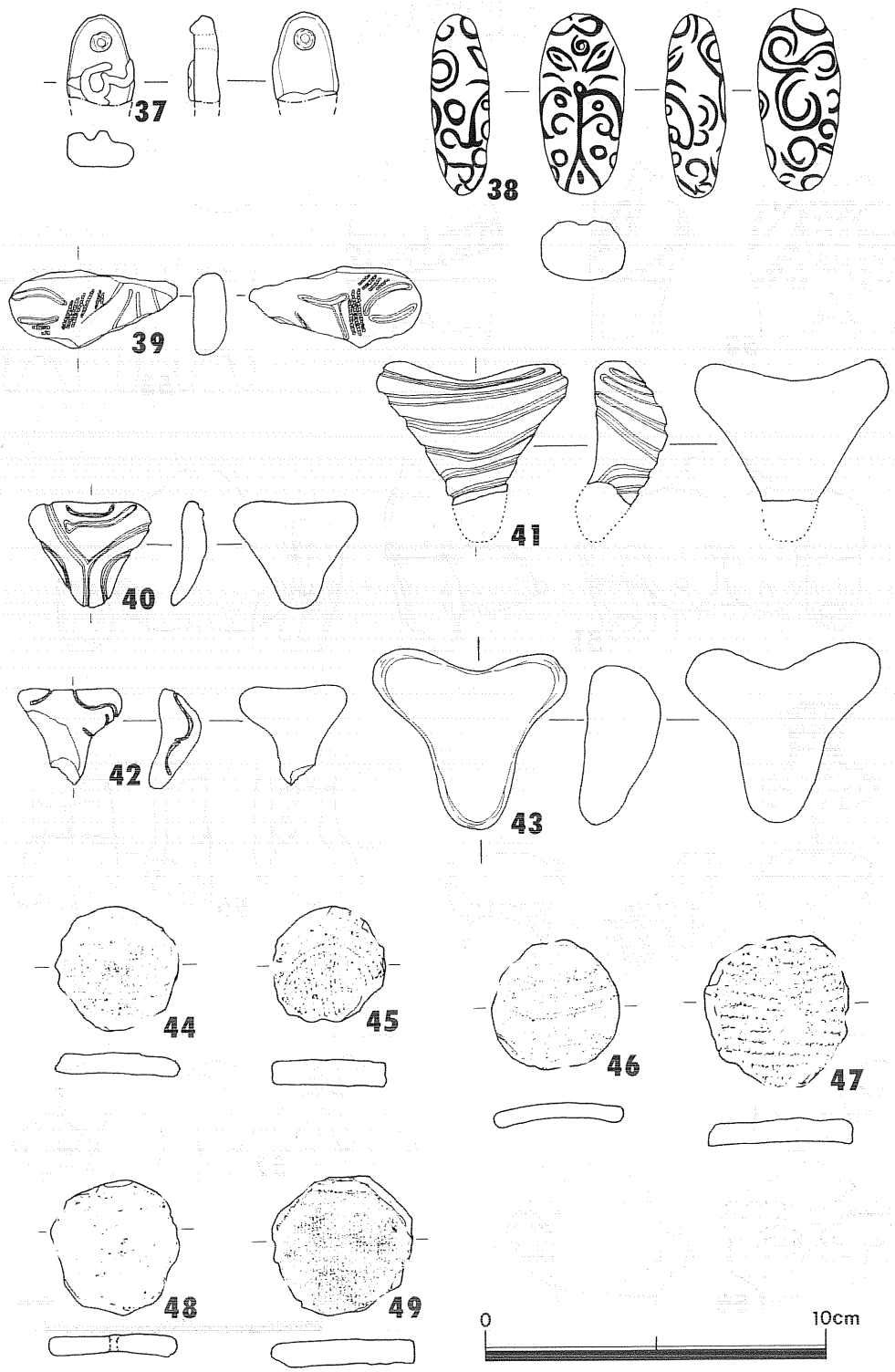
第117図　土製品



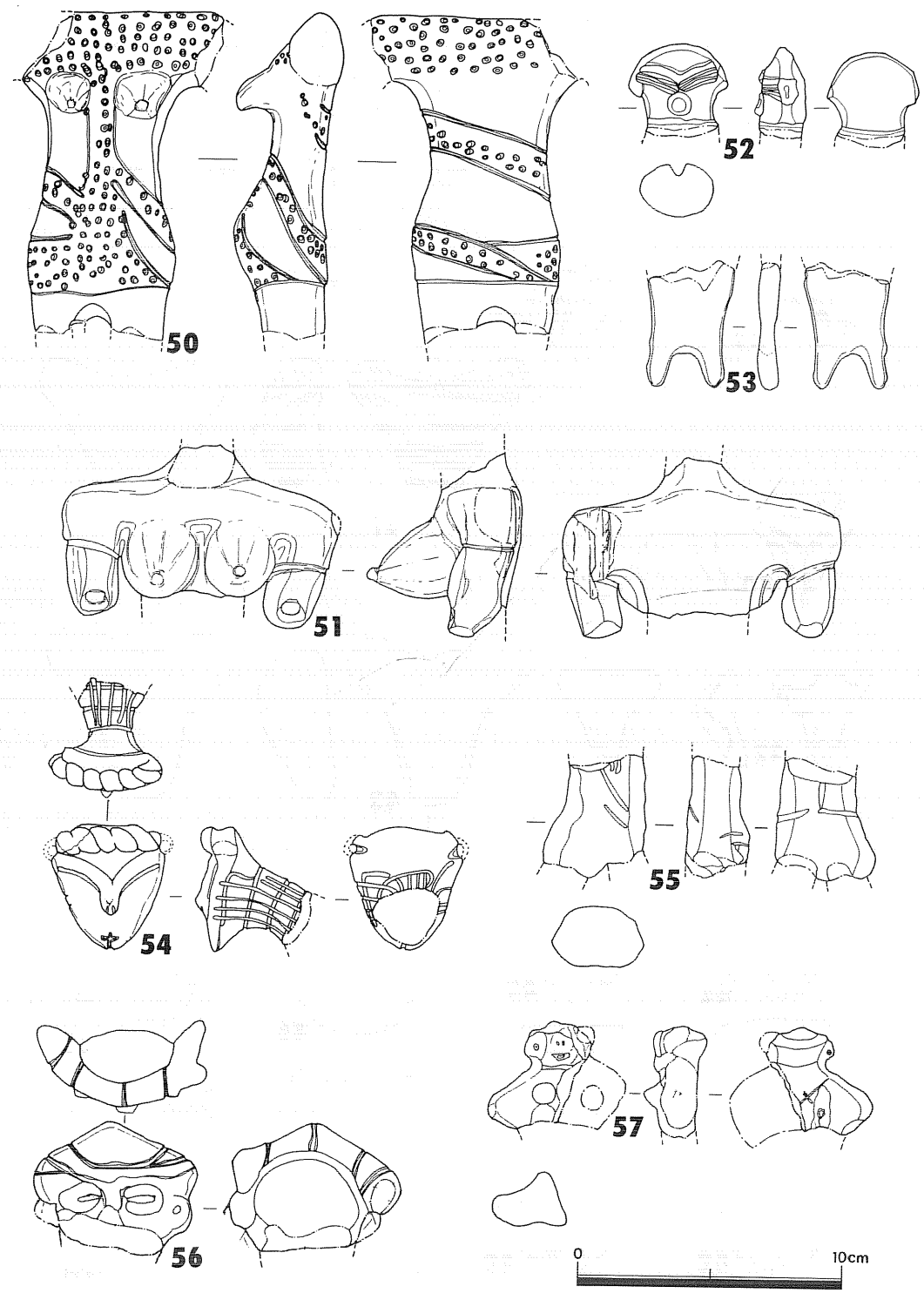
第118図　土製品



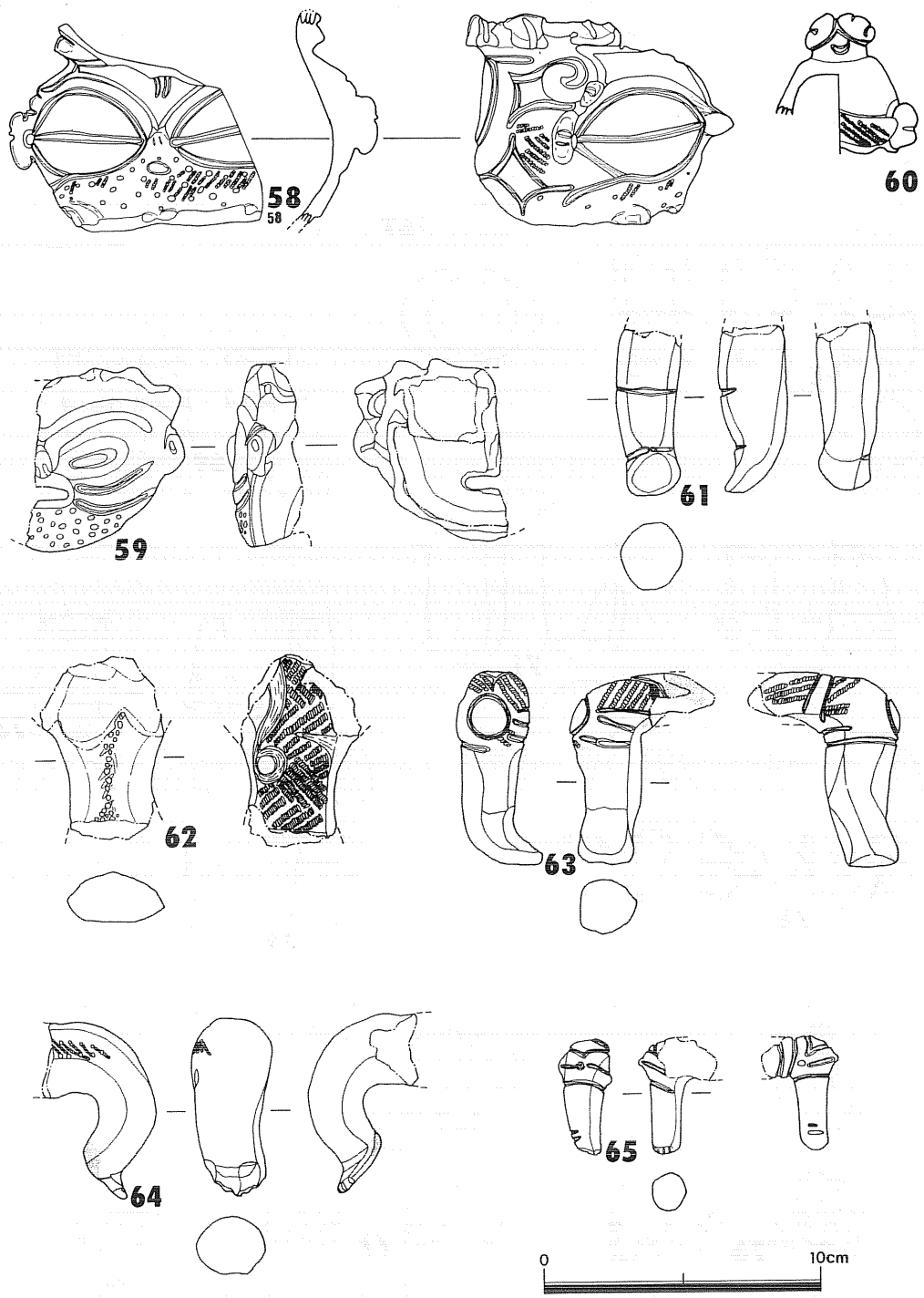
第119図　土製品



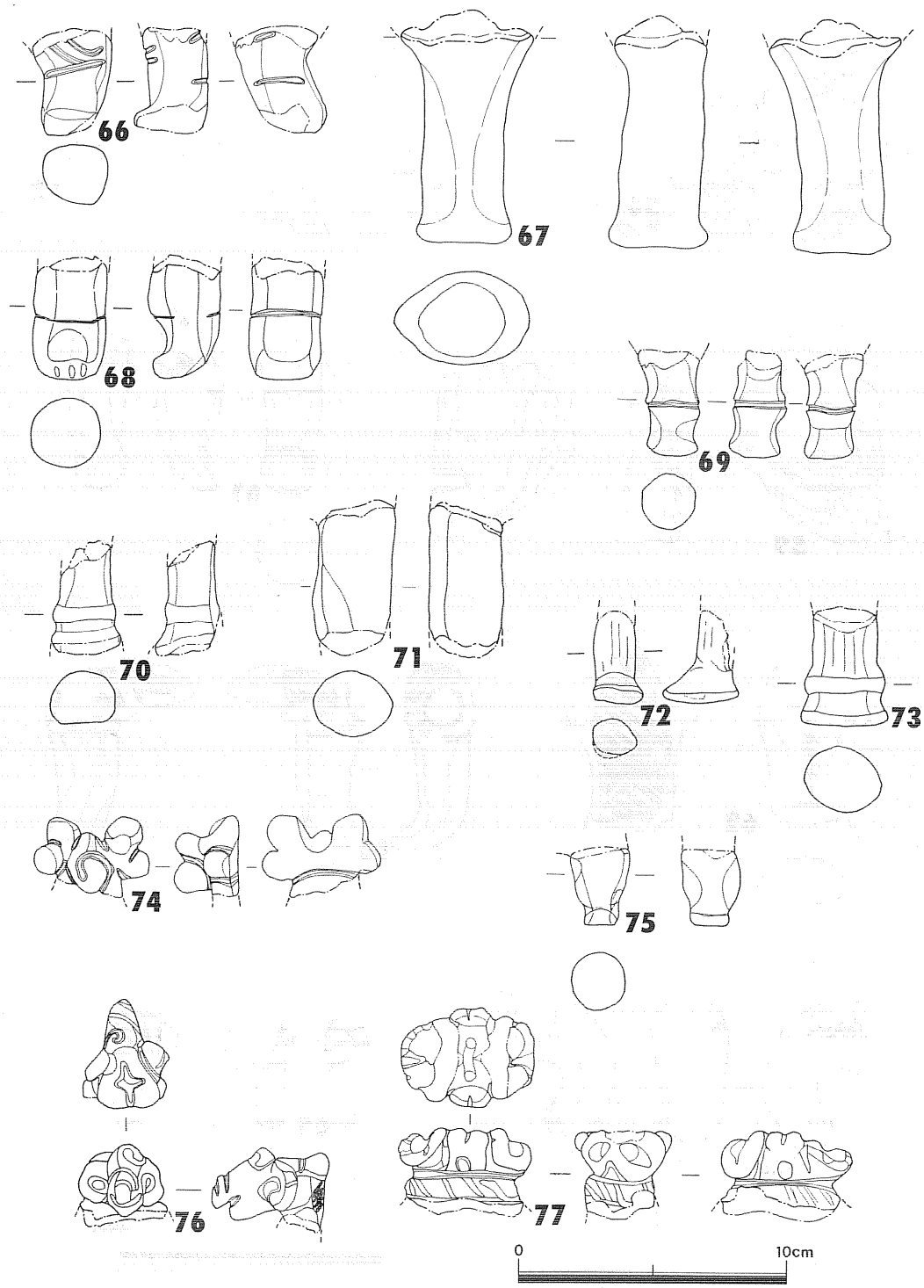
第120図　土製品



第121図　土偶



第122図　土偶



第123図　土偶

第1表　土器計測表　(　)内は現存値

図番号	器　形	寸法			出土地区	出土層	摘　要
		口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)			
1	深鉢形	22.0	11.0	34.0	4－B	II下	
2	深鉢形	15.9	6.8	18.6	23－E	II下	
3	深鉢形	5.1			8－C	II	
4	壺　形	13.0	8.2	24.6	22－B	II下	
5	壺　形	11.6	4.8	12.4	14－E	II	
6	深鉢形		8.0		4－C	II下	
7	壺　形	11.3	5.5	11.0	14－E	II	
8	深鉢形	23.5	(11.0)	(33.0)	4－B	II下	
9	深鉢形	29.0			9－E	II下	
10	深鉢形	19.0			6－E	II下	
11	壺　形	10.4	4.4	5.1	2－E		
12	壺　形	16.4	7.0	13.7	6－B	II下	
13	台付鉢形	10.6			6－B	II下	
14	壺　形	8.5	4.2	11.6	6－D	II下	
15	壺　形		9.1		7－A	II下	
16			10.8		3－B	II	
17			7.8		6－E	II下	
18			9.5				
19	台付鉢形	32.4					
20	台付鉢形				7－A		
21	台付鉢形	16.8			5－B	II下	
22	台付鉢形	15.4	7.4	15.0			
23	台付鉢形	22.8	(8.5)	(22.0)	4－B		
24	台付鉢形	15.0	8.2	11.2	5－B	II下	
25	台付鉢形	16.0			5－E	II	
26	台付鉢形	17.7	7.1	12.0	5－B		
27	台付鉢形		9.5		4－A	II	
28			5.6		3－B	II	
29			10.1		4－A	II	
30	深鉢形	30.0	(10.0)	(33.0)	6－D	II	
31	台付鉢形	17.8			6－C	II	
32	鉢　形	21.6	7.0	19.6	6－A		
33	台付鉢形	13.5	9.4	16.9	24－B	II	
34	鉢　形	14.5			19－H	II	
35	鉢　形	16.4			19－H	II	
36	台付鉢形	11.6	6.8	13.5	14－C.D	II	
37	鉢　形	10.7	5.3	11.8	17－F	II	
38	鉢　形	(14.0)	5.6	12.5	4－A	II	
39	鉢　形	9.8	5.0	9.8	7－A	II下	
40	鉢　形	11.4	5.6	8.5	5－B	II	
41	台付鉢形	10.8	4.2	10.0	17－G	II	
42		6.7	4.6	13.5	3－B	II	
43	鉢　形	7.6	(5.7)	(10.5)	18－H	II	
44	台付鉢形		5.7		4－C	II	
45	鉢	5.1	6.2	8.6	4－B	II	
46	鉢　形	10.6	5.2	9.0	17－G	II	
47	鉢　形	8.1	5.7	11.2	4－B	II	

図番号	器　形	寸法			出土地区	出土層	摘　要
		口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)			
48	鉢　形		4.6	7.3	6－C	II下	
49	鉢　形	9.6	6.0	1.1	18－H	II	
50	鉢　形	9.8	5.0	8.7	5－B	II	
51	深鉢形	22.0	7.2	23.1	6－E	II	
52	深鉢形	18.2			19－H	II	
53	深鉢形	26.4			18－H	II	
54	深鉢形	14.0	6.5	16.7			
55	深鉢形		10.0		17－F	II	
56	深鉢形	28.0	11.0		5－D	II	
57	深鉢形		10.0		6－A		
58	深鉢形		9.2		5－B	II下	
59	深鉢形	14.1	6.4	12.5	6－B	II下	
60	深鉢形		9.0		18－H	II	
61	深鉢形		6.5		8－B	II下	
62	深鉢形	18.6	7.0	22.3	4－B	II	
63	浅鉢形	15.0		6.7	6－E	II	
64	浅鉢形	8.3	2.8	4.0	19－I	II	
65	浅鉢形	13.5	7.0	9.5	18－H	II	
66	浅鉢形	19.0	13.2	4.2	4－C	II	
67	浅鉢形	16.8	10.7	8.6	19－C	II	
68	浅鉢形	19.0		4.4	24－B	II	
69	浅鉢形	9.9	4.2	3.7	33－H	II	
70	浅鉢形	8.0	3.0	6.8	4－B	II	
71	浅鉢形	9.0	10.0	5.3	6－A	II	
72	浅鉢形	13.0	8.0	7.5	17－E	II	
73	浅鉢形	10.0	5.0	6.2	6－B	II下	
74	浅鉢形	12.6	3.0	6.6	5－D	II下	
75	浅鉢形	13.1	3.1	5.8	13－H	II	
76	浅鉢形	14.0	6.0	6.5	24－B	II	
77	浅鉢形	15.3	8.1	6.8	18－H	II	
78	浅鉢形	6.4	7.0	5.4	5－E	II	
79	浅鉢形	14.6	6.5	5.5	5－B	II下	
80	浅鉢形	9.3	6.1	5.3	5－E	II	
81	浅鉢形	13.5	7.0	5.2	5－A	II	
82	浅鉢形	20.3	9.5	8.6	18－H	II	
83	浅鉢形	11.7	5.4	5.7	7－A	II	
84	浅鉢形	11.4	5.8	7.3	5－E	II	
85	浅鉢形	13.5	2.5	5.2	4－C	II	
86	蓋	10.0	4.6	5.0	18－H	II	
87	台付浅鉢形	22.2	8.0	9.6	18－H	II	
88	台付浅鉢形	22.0	(9.0)	(10.0)	22－E	II	
89	台付浅鉢形	20.0	(11.2)	(10.0)			
90	台付浅鉢形	20.4	9.0	8.0	18－C	II	
91	台付浅鉢形	21.7	5		6－B	II下	
92	台付浅鉢形		6.5	(7.0)	6－D	II下	
93	台付浅鉢形	16.0	9.3	6.0	24－B	II	
94	台付浅鉢形	10.3	5.	6.0	18－H	II	
95	台付浅鉢形		10		6－E	II下	
96	台付浅鉢形	32.0	10.0	13.0	6－B	II下	
97	台付浅鉢形	24.8	10.8	12.7	6－B	II下	

図番号	器　形	寸　法			出土地区	出土層	摘　要
		口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)			
98	台付浅鉢形	22.0			5－C	II下	
99	台付浅鉢形	18.4	8.4	9.4	18－H	II	
100	台付浅鉢形	22.0	9.4	7.4	18－G	II	
101	台付浅鉢形	18.0			8－A	II	
102	注口土器	15.0	20.	33.8	33－H	II	
103	注口土器				18－F	II	
104	注口土器	15.0				II	
105	注口土器	10.8	13.1	17.8	18－H	II	
106	注口土器		13.0		18－H	II	
107	注口土器	8.8	15.3	13.7	14－F	II	
108	注口土器	10	13.	11.4	6－B	II下	
109	注口土器		15.4		5－E	II	
110	注口土器		12.0		6－D	II下	
111	注口土器	8.3	13.8	12.2	18－H	II	
112	注口土器	10.2	13.6	11.8	6－E	II	
113	注口土器	(20.0)	14.6	14.0	17－G	II	
114	注口土器		15.7		6－E	II	
115	注口土器	11.5	14.4	14.6	5－E	II	
116	注口土器		11.3		5－D	II下	
117	注口土器	7.4	8.9	7.8	4－C	II	
118	注口土器	11.9	15.7	13.0	18－E	II	
119	注口土器	11.8	16.	10.7	3－B	II	
120	注口土器		16.9	9.6	8－B	II下	
121	注口土器		15.0		6－E	II	
122	注口土器		15.4		7－B	II	
123	注口土器		16.0		4－B		
124	注口土器	8.1	14.9	9.5	6－C	II下	
125	注口土器	9.1	17.4	12.2	4－A	II	
126	注口土器	6.7			8－B	II	
127	壺形土器	9.8	8.7	17.2	16－B	II	
128	壺形土器	11.6	8.3	21.5	6－C	II下	
129	壺形土器	(9.4)	7.9	19.6	6－A	II	
130	壺形土器	8.6	8.5	18.4	5－C	II下	
131	壺形土器	8			5－C	II下	
132	壺形土器	11.5			4－B		
133	壺形土器	13.0	4.6	12.0	10－C	II	
134	壺形土器	5.7	5.5	10.8	3－C	II	
135	壺形土器	5.2	5.	9.1	5－E	II	
136	壺形土器	6.6	4.1	5.1	5－A	II	
137	壺形土器		3.4		16－D	II	
138	壺形土器	5.8			18－B	II	
139	壺形土器		3.2		16－B	II下	
140	壺形土器	5.2			5－C	II下	
141	壺形土器	5.4			16－G	II下	
142	壺形土器	5.2			5－C	II下	
143	壺形土器		6.4		10－D	II	
144	壺形土器	5.4	6.1	11	7－D		
145	壺形土器		6.				
146	壺形土器		10.9		4－B		
147	壺形土器		12.1				

図番号	器　形	寸　法			出土地区	出土層	摘　要
		口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)			
148	壺形土器		8.5		5－E	II	
149	壺形土器	9.5	9.4	15.0	4－C		
150	壺形土器		3.7		7－C	II	
151	壺形土器		4.0		18－C	II	
152	壺形土器		7.4		6－E	II	
153	壺形土器	10.4	7	16.4	8－B	II	
154	壺形土器	7.3	6.9	12.9	4－B		
155	壺形土器	7.8	6.2	11.0	5－E		
156	壺形土器	6.5			18－E	II	
157	壺形土器	5.3	4.9	9.8	14－B	II	
158	壺形土器	8.	5.9	11.8	6－A		
159	壺形土器	5.3	5.7	11.2	7－D		
160	多孔底土器				5－B	II下	
161	多孔底土器				4－D	II下	

第2表　土製品計測表　(　)内は現存値

番号	名　称	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	出土地点	層位	時期	摘　要
1	小形台付鉢形土器		(14)		7－C	II下		
2	小形台付鉢形土器	41	25	26	17－D	II		
3	小形浅鉢形土器	36	11	14	22－D	II		
4	小形鉢形土器	24		25	5－D	II下		
5	小形壺形土器				表　採			
6	小形鉢形土器	(31)		(20)	8－B	II		
7	小形壺形土器				4－A	II	晩期	
8	土　鈴				16－E		後期	
9	小形壺形土器	20	16	49	14－F	II		
10	小形壺形土器		28		3－D	II下		
11			27		5－F	II		
12	小形鉢形土器		23		14－E	II		
13			25		26－D		後期	
14		50	26	48	3－D	II	後期	
15	小形鉢形土器		14		6－B	II下		
16			59		25－H	II		
17	鐸状土製品				16－H	II		
18	鐸状土製品		25	37	10－G			
19					18－D			直径3.6センチ、高さ2.0センチ
20					16－D			直径4.2センチ、高さ4.1センチ
21					12－H			直径4.8センチ、高さ3.3センチ
22	スタンプ状土製品				9－E	II		長さ6.0センチ、幅2.4センチ、高さ3.4センチ
23	壺状小形土製品		25		18－H	II下		
24	耳　飾				8－C	I		直径1.9センチ、厚さ2.1センチ
25	耳　飾				8－D	II下	晩期	直径2.6センチ、厚さ1.6センチ
26	耳　飾				3－C	II		直径2.6センチ、厚さ0.7センチ
27	耳　飾				14－C	II	晩期	直径5.3センチ、厚さ1.5センチ
28	耳　飾				16－H	II		直径2.7センチ、厚さ0.8センチ
29	玉				10－E	II		直径2.0センチ
30	耳　飾				16－D	II下		直径1.5センチ、厚さ1.0センチ

番号	名　　称	口径(mm)	底径(mm)	器高(mm)	出土地点	層位	時期	摘　要
31	耳　　飾				24－B	II		直径1.5センチ、厚さ1.1センチ
32	土製腕輪				5-A、4-A	II	晩期	朱塗り,長さ9.1センチ,幅2.3センチ,厚さ1.9センチ
33	土製腕輪				5－B	II下	晩期	長さ8.0センチ,幅2.2センチ,厚さ1.4センチ
34					5－E	II		
35	貝状土製品		62	73	7－A	II	後期	
36					III区			一辺約3.5センチ
37					5－C	II下		
38					5－C	II		長さ5.3センチ,幅2.5センチ,厚さ1.8センチ
39								
40	三角形土製品				5－D	II下		一辺約3.0センチ、厚さ0.7センチ
41	三角形土製品				4－C	II		一辺推定約5センチ,厚さ2.0センチ
42	三角形土製品				11－H	II下		一辺推定約3センチ,厚さ1.2センチ
43	三角形土製品				12－G	II下		一辺約5.5センチ、厚さ2.1センチ
44	円盤状土製品				4－D	II		直径約3.5センチ、厚さ0.7センチ
45	円盤状土製品				5－C	II下	後期	直径約3.5センチ、厚さ0.7センチ
46	円盤状土製品				18－H	II	後期	直径約4センチ、厚さ0.5センチ
47	円盤状土製品				4－C	II下		直径約4.5センチ、厚さ0.6センチ
48	紡錘車				16－C	II下		直径約4.0センチ、厚さ0.5センチ
49	円盤状土製品				3－C	II下		直径約4.0センチ、厚さ0.7センチ
50	土　偶				7－E	II下		胴部長さ11.5センチ,肩幅推定8センチ
51	土偶偶				4－D	II		肩幅10.0センチ
52	土偶頭部				4－D		後期	頭部幅3.5センチ
53					8－B	II		
54	土偶頭部				17－I	II	後期	頭部幅推定5センチ
55	土偶胴部				14－I			
56	土偶頭部				6－E		後期	頭部幅6.5センチ
57	土偶				4－C	II	後期	
58	土偶頭部				4－A		晩期	遮光器土偶、朱塗り
59	土偶頭部				21－C	II	晩期	頭部幅推定11センチ
60	土偶頭部				6－A	I		
61	土偶腕部				6－D	II下		
62	土偶体部				6－E	II下	後期	
63	土偶腕部				16－F	II		アスファルト付着
64	土偶腕部				6－F	II下		アスファルト付着
65	土偶腕部				24－C	II		朱塗り
66	土偶脚部				19－H	II		
67	土偶脚部				4－B			
68	土偶脚部				16－C	II		アスファルト付着
69	土偶脚部				19－G			
70	土偶脚部				15－F	II		
71	土偶脚部				17－H	II		
72	土偶脚部				9－E	II下		
73	土偶脚部				8－C	I		
74	土偶頭部				8－C	II		
75	土偶脚部				17－H	I		
76	動物土偶				17－G	II		
77	土偶頭部				8－B	II		幅5.0センチ

石　器

石器は石鏃・石錐・石匙・三脚石器・磨製石斧・石棒等である。

石鏃

出土した石鏃は794点である。うちアスファルトの付着したものが90(11%) 点である。石質は頁岩が圧倒的に多く、メノウ・黒燿石などもあるがわずかである。石鏃を形態別に次の様に分類してみた。

Ⅰ類　無茎鏃（第125図１～20、第126図１～29、図版56、57）

a、平基のもの（１～９）で19点出土している。基部が丸みをもつもの（１～５）と直線的になるもの（６～９）とがある。

b、凹基のもの（10～20）である。小型のものが一般的であるが、大型の断面の厚いもの（19～20）もある。

c、凹基で側辺部に抉りのあるもの（21～29）である。抉りの深く大きいものにはアスファルトが多量に付着している。

Ⅱ類　茎部が明確でないもの（第126図30～43、図版57）

断面形が菱形かそれに近いものである。中には石錐と思われるものもあるが、ここで一括した。棒状のもの（36・43）と柳葉形のもの（40・41・42）などがある。

Ⅲ類　有茎のもの（第127図44～64、第128図65～80、図版58・59）

a、鏃身が、三角形か二等辺三角形に近いもの（44～57）である。また、鏃身が極めて細くなるもの（58・59）もある。

b、いわゆる柳葉形のもの(60～72)。最大長が最大幅の３倍以上で茎部も長く作り出されている。72の断面は薄くなる。

c、鏃身が丸みをおびているもの（第128図73～80)。アスファルトが多量に付着している。断面も厚い。茎部も太く抉りも深くない。

第３表　石鏃計測表　(　)内は現存値

番号	分類	出土地点	層位	石　質	最大幅(mm)	最大長(mm)	厚さ(mm)	備　　考
1	Ⅰa	6－E	Ⅱ	頁　岩	22	30	6	
2	Ⅰa	16－H	Ⅱ	頁　岩	22	33	10	
3	Ⅰa	15－F	Ⅰ	頁　岩	19	34	11	
4	Ⅰa	3－D	Ⅰ	頁　岩	21	37	7	
5	Ⅰa	25－E		メノウ	21	40	8	
6	Ⅰa	12－H	Ⅱ	頁　岩	26	37	11	
7	Ⅰa	6－C	Ⅱ下	頁　岩	22	48	11	
8	Ⅰa	6－C	Ⅱ下	メノウ	17	39	4	
9	Ⅰa	21－B		頁　岩	32	45	11	
10	Ⅰa	10－C	Ⅱ	頁　岩	15	18	4	

番号	分類	出土地点	層位	石　質	最大幅(mm)	最大長(mm)	厚さ(mm)	備　　考
11	Ⅰb	14－F	Ⅰ	頁　岩	12	23	4	
12	Ⅰb	16－D	Ⅱ	メノウ	15	25	5	アスファルト付着
13	Ⅰb	14－E	Ⅱ下	頁　岩	21	29	5	アスファルト付着
14	Ⅰb	14－E	Ⅰ	頁　岩	13	33	4	
15	Ⅰb	6－B	Ⅱ下	頁　岩	18	32	5	
16	Ⅰb	16－G	Ⅱ	頁　岩	18	33	5	
17	Ⅰb	9－H	Ⅱ	頁　岩	17	(48)	6	欠損
18	Ⅰb	15－E	Ⅱ	頁　岩	18	46	4	
19	Ⅰb	5－A	Ⅱ下	頁　岩	29	45	9	
20	Ⅰb	23－E		頁　岩	28	68	14	
21	Ⅰc	8－C	Ⅱ	頁　岩	14	21	3	
22	Ⅰc	13－D	Ⅰ	メノウ	15	(21)	5	欠損
23	Ⅰc	5－E	Ⅱ下	頁　岩	16	(27)	10	アスファルト付着　欠損
24	Ⅰc	18－F		メノウ	11	(26)	3	欠損
25	Ⅰc	25－I		頁　岩	19	(36)	9	欠損
26	Ⅰc	6－D	Ⅱ下	頁　岩	20	53	9	アスファルト付着
27	Ⅰc	4－B		頁　岩	19	48	7	
28	Ⅰc	16－E	Ⅱ		23	(58)	5	アスファルト付着　欠損
29	Ⅰc	16－E		頁　岩	28	56	8	アスファルト付着
30	Ⅱ	8－A	Ⅱ	頁　岩	7	22	3	
31	Ⅱ	19－H	Ⅱ下	頁　岩	12	26	3	
32	Ⅱ	24－B	Ⅱ	頁　岩	13	33	6	アスファルト付着
33	Ⅱ	8－A	Ⅰ	頁　岩	12	36	6	
34	Ⅱ	6－E	Ⅱ	頁　岩	9	32	3	アスファルト付着
35	Ⅱ	6－C	Ⅱ	頁　岩	9	36	4	
36	Ⅱ	15－E	Ⅱ	頁　岩	16	37	4	
37	Ⅱ	8－B	Ⅰ	頁　岩	10	37	5	
38	Ⅱ	17－E	Ⅱ	頁　岩	10	37	4	
39	Ⅱ	22－C		頁　岩	10	(38)	6	欠損
40	Ⅱ	5－E	Ⅱ	頁　岩	9	(49)	5	欠損
41	Ⅱ	15－C	Ⅰ	頁　岩	10	47	7	
42	Ⅱ	16－H	Ⅱ	頁　岩	12	61	8	
43	Ⅱ	9－D	Ⅱ下	頁　岩	8	57	8	
44	Ⅲa	7－D		メノウ	15	31	4	
45	Ⅲa	12－B	Ⅰ	頁　岩	14	(27)	5	欠損
46	Ⅲa	6－E	Ⅱ	頁　岩	17	37	5	アスファルト付着
47	Ⅲa	5－B	Ⅱ	メノウ	16	(24)	3	アスファルト付着　欠損
48	Ⅲa	13－E	Ⅰ	メノウ	14	25	4	アスファルト付着
49	Ⅲa	5－E	Ⅱ	頁　岩	15	(28)	3	アスファルト付着　欠損
50	Ⅲa	18－C		メノウ	17	(24)	4	欠損
51	Ⅲa	6－E	Ⅱ	頁　岩	13	24	4	アスファルト付着
52	Ⅲa	6－E	Ⅱ	頁　岩	15	(25)	4	欠損
53	Ⅲa	16－H	Ⅱ下	頁　岩	19	24	3	
54	Ⅲa	5－E	Ⅱ下	メノウ	17	(23)	4	アスファルト付着　欠損
55	Ⅲa	4－B	Ⅱ	メノウ	16	23	5	
56	Ⅲa	5－C	Ⅱ下	メノウ	13	(33)	4	欠損

番号	分類	出土地点	層位	石　質	最大幅(mm)	最大長(mm)	厚さ(mm)	備　　考
57	Ⅲa	5－E	Ⅱ	メノウ	15	(26)	4	欠損
58	Ⅲa	15－F		メノウ	15	(37)	5	欠損
59	Ⅲa	6－E	Ⅱ	黒燿岩	12	(27)	4	欠損
60	Ⅲb	25－G	Ⅱ	頁　岩	13	(47)	4	欠損
61	Ⅲb	25－F	Ⅱ	頁　岩	12	47	5	
62	Ⅲb	6－E	Ⅱ下	頁　岩	17	49	4	アスファルト付着
63	Ⅲb	17－B	Ⅱ	頁　岩	15	49	4	
64	Ⅲb	8－B	Ⅱ	頁　岩	11	48	5	アスファルト付着
65	Ⅲb	5－E		頁　岩	11	51	5	
66	Ⅲb	23－D	Ⅱ	頁　岩	11	(53)	6	欠損
67	Ⅲb	25－C	Ⅱ	頁　岩	9	(52)	6	アスファルト付着　欠損
68	Ⅲb	23－D		頁　岩	13	(45)	8	欠損
69	Ⅲb	18－H	Ⅱ下	頁　岩	15	52	6	アスファルト付着
70	Ⅲb	21－C	Ⅱ	頁　岩	12	(56)	7	欠損
71	Ⅲb	3－A	Ⅱ	頁　岩	15	(64)	7	欠損
72	Ⅲb	22－C	Ⅱ	頁　岩	12	56	7	
73	Ⅲc	6－E	Ⅱ	頁　岩	24	(41)	7	欠損
74	Ⅲc	26－C	Ⅱ	頁　岩	20	44	7	アスファルト付着
75	Ⅲc	19－F	Ⅰ	頁　岩	23	49	6	アスファルト付着
76	Ⅲc	17－F		頁　岩	23	50	10	アスファルト付着
77	Ⅲc	5－A	Ⅱ	メノウ	25	47	6	
78	Ⅲc	15－E	Ⅱ		27	50	10	
79	Ⅲc	19－B	Ⅱ	頁　岩	25	54	11	アスファルト付着
80	Ⅲc	24－D		頁　岩	23	57	8	アスファルト付着

石錐（第129図、図版59）

石錐は全部で106点であり、全て頁岩でアスファルトの付着したものが1点ある。錐部が短いもの（6・7）と長いもの（1～5、8～10）に分けられる。つまみ部から四方に錐部があるもの（11）つまみ部の上にさらに突起を作り出しているもの（12）もあり、これにはアスファルトが付着している。

第4表　石錐計測表　（　）内は現存地

番号	分類	出土地点	層位	石　質	最大幅(mm)	最大長(mm)	厚さ(mm)	備　　考
1	Ⅰ	24－F		頁　岩	5	30	4	
2	Ⅰ	17－C	Ⅱ下	頁　岩	6	(39)	4	欠損
3	Ⅰ	4－B		頁　岩	6	47	4	
4	Ⅰ	8－B	Ⅱ	頁　岩	6	47	4	
5	Ⅰ	17－E	Ⅱ	頁　岩	5	55	5	
6	Ⅰ	18－G	Ⅱ	頁　岩	7	53	5	
7	Ⅰ	7－A	Ⅱ	頁　岩	5	49	4	
8	Ⅰ	7－C	Ⅱ下	頁　岩	7	66	4	
9	Ⅰ	12－F	Ⅱ	頁　岩	7	58	3	
10	Ⅰ	4－A	Ⅱ	頁　岩	6	67	4	
11	Ⅱ	5－D	Ⅱ	頁　岩	3	(32)	8	欠損
12	Ⅱ	6－E	Ⅱ	頁　岩	3	(43)	5	アスファルト付着　欠損

石匙（第130図、図版60）

石匙は全部で162点うちアスファルトの付着したものが22点である。

Ⅰ類　横型石匙（1～11）58点（アスファルト付着13点）

a、主要剥離面を残し背面はつまみ部周辺にのみ加工を加えているもの（1、3、4、5）両面加工のもの（2、7、8、9）等がある。（6）は光沢をもち、ていねいな剥離を施している。

b、つまみが二つついているもので、（10、11）の2点のみであるが、（11）のつまみ部にはアスファルトが付着している。

Ⅱ類　縦型石匙（12～19）104点（アスファルト付着9点）

刃部が曲線的なもの（12～15）、直続的なもの（16～19）がある。（12）は両面加工をしているが、（13～18）は主要剥離面を残し、片面加工のものである。（19）は石槍とも考えられる。

第5表　石匙計測表　（　）内は現存値

番号	分類	出土地点	層位	石質	最大幅(mm)	最大長(mm)	厚さ(mm)	備考
1	Ⅰ	9－G	Ⅱ	頁岩	63	45	7	
2	Ⅰ	24－D	Ⅱ	頁岩	56	40	14	アスファルト付着
3	Ⅰ	19－Ⅰ	Ⅰ	頁岩	72	41	11	アスファルト付着
4	Ⅰ	19－G	Ⅱ	頁岩	70	36	9	アスファルト付着
5	Ⅰ	5－E	Ⅱ	頁岩	80	43	8	アスファルト付着
6	Ⅰ	7－B	Ⅱ下	頁岩	77	49	12	アスファルト付着
7	Ⅰ	21－B	Ⅱ	頁岩	74	64	5	アスファルト付着
8	Ⅰ	7－A	Ⅱ	頁岩	94	47	10	アスファルト付着
9	Ⅰ	8－A	Ⅱ	頁岩	76	48	13	
10	Ⅰb	24－C	Ⅱ	頁岩	56	40	5	
11	Ⅰb	25－C	Ⅱ	頁岩	69	41	10	アスファルト付着
12	Ⅱ	7－B	Ⅱ	頁岩	31	64	11	
13	Ⅱ	19－E	Ⅱ	頁岩	29	70	10	
14	Ⅱ	6－C	Ⅱ	頁岩	28	70	6	
15	Ⅱ	23－D		頁岩	25	79	8	
16	Ⅱ	3－D	Ⅱ	頁岩	15	87	6	
17	Ⅱ	22－H		頁岩	18	84	8	
18	Ⅱ	4－C	Ⅱ	頁岩	23	80	9	
19	Ⅱ	20－C	Ⅱ	頁岩	22	(91)	10	欠損

三脚石器（第131図、図版61）

46点出土している。石材は頁岩が主体。他に1点だけ凝灰岩質のものがある。表面に自然面を残し、脚部裏面に自然面を残しているもの（1、2、4、5、7～11、13～15）表裏面に自

然面を残さないもの（3、6）凝灰岩の自然礫を軽く打ち欠いたもの（12）がある。

第6表　三脚石器計測表　（　）内は現存値

番号	出土地点	層位	石質	最大幅(mm)	最大長(mm)	厚さ(mm)	備考
1	14－E		頁岩	38	39	12	
2	6－C	II下	頁岩	46	45	15	
3	9－D	II下	頁岩	45	(48)	11	
4	6－A	II下	頁岩	53	51	9	
5	3－B	II	頁岩	50	(38)	19	
6	14－B	II	頁岩	60	51	6	
7	18－H	II	頁岩	59	54	17	
8	13－E	I	頁岩	61	56	15	
9	17－C	II	頁岩	52	58	11	
10	15－C	II下	頁岩	55	52	13	
11	4－C	II下	頁岩	59	62	16	
12	3－D	II	頁岩	72	62	22	
13	17－I	II下	頁岩	72	67	19	
14	9－B	II	頁岩	84	73	15	
15	20－B	I	頁岩	89	81	19	

磨製石斧（第132図、図版62図）

105点出土している。石材は玉ズイ、凝灰岩、凝灰質泥岩を使用している。刃部先端が丸みをもつもの（1～6、8、9、12～17）と直線的なもの）7、10、11）、全体に細長く石のみ的なもの（18、19）などがある。（51）は基部に着柄の際使用されたアスファルトが残っている。

第7表　磨製斧計測表　（　）内は現存値

番号	出土地点	層位	石質	最大幅(mm)	最大長(mm)	厚さ(mm)	備考
1	15－D	II	凝灰岩	13	24	4	
2	18－F		玉ズイ	15	34	6	
3	5－E	II	玉ズイ	19	42	5	
4	5－A	I	玉ズイ	15	(44)	5	欠損
5	16－H	II	凝灰岩	21	54	7	アスファルト付着
6	8－C	II下	玉ズイ	25	(58)	7	欠損
7	20－E	II	玉ズイ	25	53	7	
8	26－E		玉ズイ	29	52	9	
9	9－G	II	玉ズイ	24	51	10	
10	19－F		凝灰岩	34	(37)	9	欠損
11	17－B	II下	凝灰岩	38	(35)	9	欠損
12	26－E	II	凝灰岩	41	91	17	
13	5－B	II下	凝灰岩	43	(68)	17	欠損
14	21－H	I	凝灰岩	49	92	20	
15	9－Q	III	凝灰岩	59	112	20	

番号	出土地点	層位	石　質	最大幅(mm)	最大長(mm)	厚さ(mm)	備　　考
16	35－K	I	凝灰質泥岩	44	12	20	
17	III区南畑	I	凝灰質泥岩	51	106	27	
18	III区水田中部	I	凝灰質泥岩	25	118	13	
19	III区水田中部	I	凝灰質泥岩	35	125	15	

石棒（第133図、図版63）

113点出土しており、いずれも安山岩を使用しているが、完成品はない。（1～3）は、石棒というよりは、石剣と考えられる。（1～2）は断面形が角ばっている。石棒はくびれており、中にはX字状沈線を連続させているもの（4、5、7、8）もある。

第8表　石棒計測表　（　）内は現存値

番号	分類	出土地点	層位	石 質	最大幅(mm)	最大長(mm)	備　　考
1	石剣	18－D	II	安山岩	20	(105)	
2	石剣	3－C	II	安山岩	28	(95)	
3	石剣	15－C	II	安山岩	22	(143)	
4	石棒	6－E	II	安山岩	29	(136)	
5	石棒	7－B	II	安山岩	28	(138)	
6	石棒	3－B	II	安山岩	27	(139)	
7	石棒	20－E	II	安山岩	28	(192)	
8	石棒	7－D	II	安山岩	29	(148)	
9	石棒	23－B	II	安山岩	29	(150)	
10	石棒	18－B	I	安山岩	26	(268)	

異形石器（第139図、図版70）

異形石器としたもので（1、2）は石ベラ状石器、（3、4）は刺突具と考えられ、いずれも頁岩である。（5～13）は利器としては考え難い。特に（2、5、8）は細かな調整を加えている。（3、8）のメノウを除けば全て頁岩である。

石製品

岩偶（第134図、図版64）

（1）は凝灰岩製で眉、目、鼻、口を浮き彫りにして作り出されている。口の下には、髭と思われるものも浮き彫りにされている。右側頭部には穿孔があり、頭頂部右側にも孔がある。左側にも同様に孔が穿たれていたものと思われる。裏面には渦巻文が施されている。（2）は凝灰岩製で8つの段を作り出したものである。裏面には、成形のための道具の使用痕跡（幅3～10mm）がはっきりしている。凹石に転用されたと考えられる。

岩版　（第135図、図版65、66）

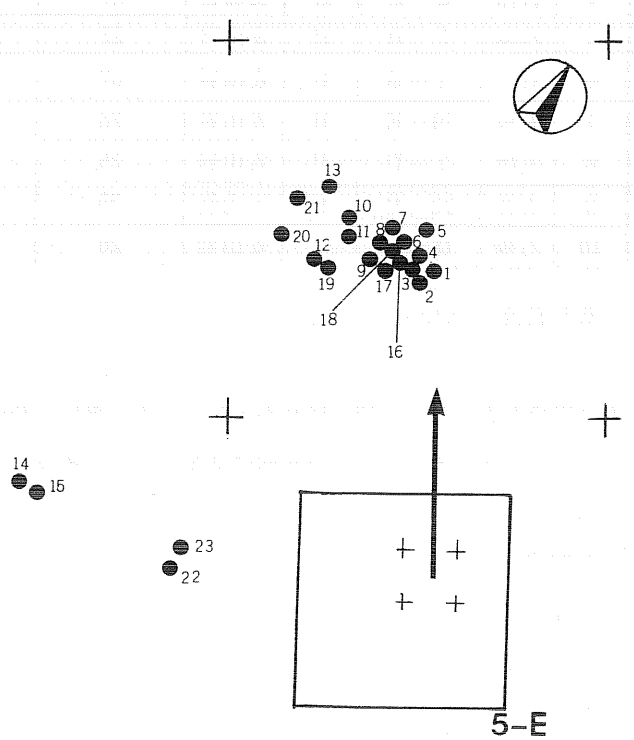
いずれも凝灰岩製のもので、方形のもの（１～４、６～８）、小判形（５）に分けられる。（１）は渦巻文を主体としているが、片面の文様ははっきりしない。（２、７）は渦巻文の変形である。（７）の片面には文様は施されていない。（３）も渦巻文の変形したものが施されているが、片面には直線が走る。（６）は大小の渦文が版面いっぱいに施される。（５）も渦巻文が施されるが、片面には中心に縦に線が引かれ上端に孔がある。（８）は刻線しているが摩滅が激しくまた文様ははっきりしない。

有孔石製品　（第136図、図版67）

いずれも凝灰岩製のものである。（１～９）は垂飾品であろう。（１～５）は中に溝をもつ（２）は動物の牙を模したようである。（７～９）は成形後２つの孔を穿っただけである。（10～15、17）は２つの穴を並列させており、おそらく何らかの締め具と考えられる。（16、17）は単孔で、（18）は未完成品であろう。

玉類　（第137図、図版68）

玉類は玉ズイ、凝灰岩、凝灰質頁岩を使用している。（1～23）までは５－Ｅグリッドの南側より集中して出土したものでいずれも一方向から穿孔しており、出土の際も穿孔面を上にむけて出土している（第124図参照）。（24～36）は個々に出土したものである。



第124図　５－Ｅ玉出土状態図

第9表　玉類計測表　(　)内は現存値

番号	出土地点	層位	種類	石　質	径(mm)	厚さ(mm)	備　　考
1	5－E	II	勾玉	玉ズイ		9	長さ27ミリ、幅17ミリ、片面穿孔
2	5－E	II	丸玉	玉ズイ	12	8	片面穿孔
3	5－E	II	丸玉	玉ズイ	13	10	片面穿孔
4	5－E	II	丸玉	玉ズイ	13	11	片面穿孔
5	5－E	II	丸玉	玉ズイ	13	10	片面穿孔
6	5－E	II	丸玉	玉ズイ	14	11	片面穿孔
7	5－E	II	丸玉	玉ズイ	14	11	片面穿孔
8	5－E	II	丸玉	玉ズイ	12	9	片面穿孔
9	5－E	II	丸玉	玉ズイ	13	8	片面穿孔
10	5－E	II	丸玉	玉ズイ	13	8	片面穿孔
11	5－E	II	丸玉	玉ズイ	13	10	片面穿孔
12	5－E	II	丸玉	玉ズイ	14	10	片面穿孔
13	5－E	II	丸玉	玉ズイ	11	8	片面穿孔
14	5－E	II	丸玉	玉ズイ	12	9	片面穿孔
15	5－E	II	丸玉	玉ズイ	11	9	片面穿孔
16	5－E	II	丸玉	玉ズイ	11	8	片面穿孔
17	5－E	II	丸玉	凝灰岩	14	10	片面穿孔
18	5－E	II	丸玉	玉ズイ	12	9	片面穿孔
19	5－E	II	丸玉	玉ズイ	10	7	片面穿孔
20	5－E	II	丸玉	凝灰岩	10	8	片面穿孔
21	5－E	II	丸玉	玉ズイ	11	7	片面穿孔
22	5－E	II	丸玉	凝灰岩	9	7	片面穿孔
23	5－E	II	丸玉	凝灰岩	8	5	片面穿孔
24	5－E	II下	勾玉	凝灰質頁岩		11	長さ34ミリ、幅21ミリ、両面穿孔
25	3－D	II	勾玉	凝灰岩		6	長さ29ミリ、幅15ミリ、両面穿孔
26	10－H	II下	玉	玉ズイ		9	長さ22ミリ、幅11ミリ、片面穿孔
27	8－E	I	玉	玉ズイ		8	一辺約13ミリ、片面穿孔
28	14－F	I	丸玉	凝灰岩	14	11	片面穿孔
29	7－C	I	勾玉	玉ズイ		5	長さ13ミリ、幅8ミリ、片面穿孔
30	15－G	II下	玉	玉ズイ		6	長さ12ミリ、幅7ミリ、片面穿孔
31	15－F	II	丸玉	玉ズイ	8	4	
32	16－G	II	玉	玉ズイ		5	長さ10ミリ、幅6ミリ、片面穿孔
33	16－G	II	丸玉	凝灰岩	8	7	両面穿孔
34	19－G	ベルト	玉	玉ズイ		7	長さ15ミリ、幅7ミリ、両面穿孔
35	13－E	II下	玉	凝灰質頁岩		11	長さ30ミリ、幅12ミリ、両面穿孔
36	4－D	II下	丸玉	凝灰質頁岩	16	13	

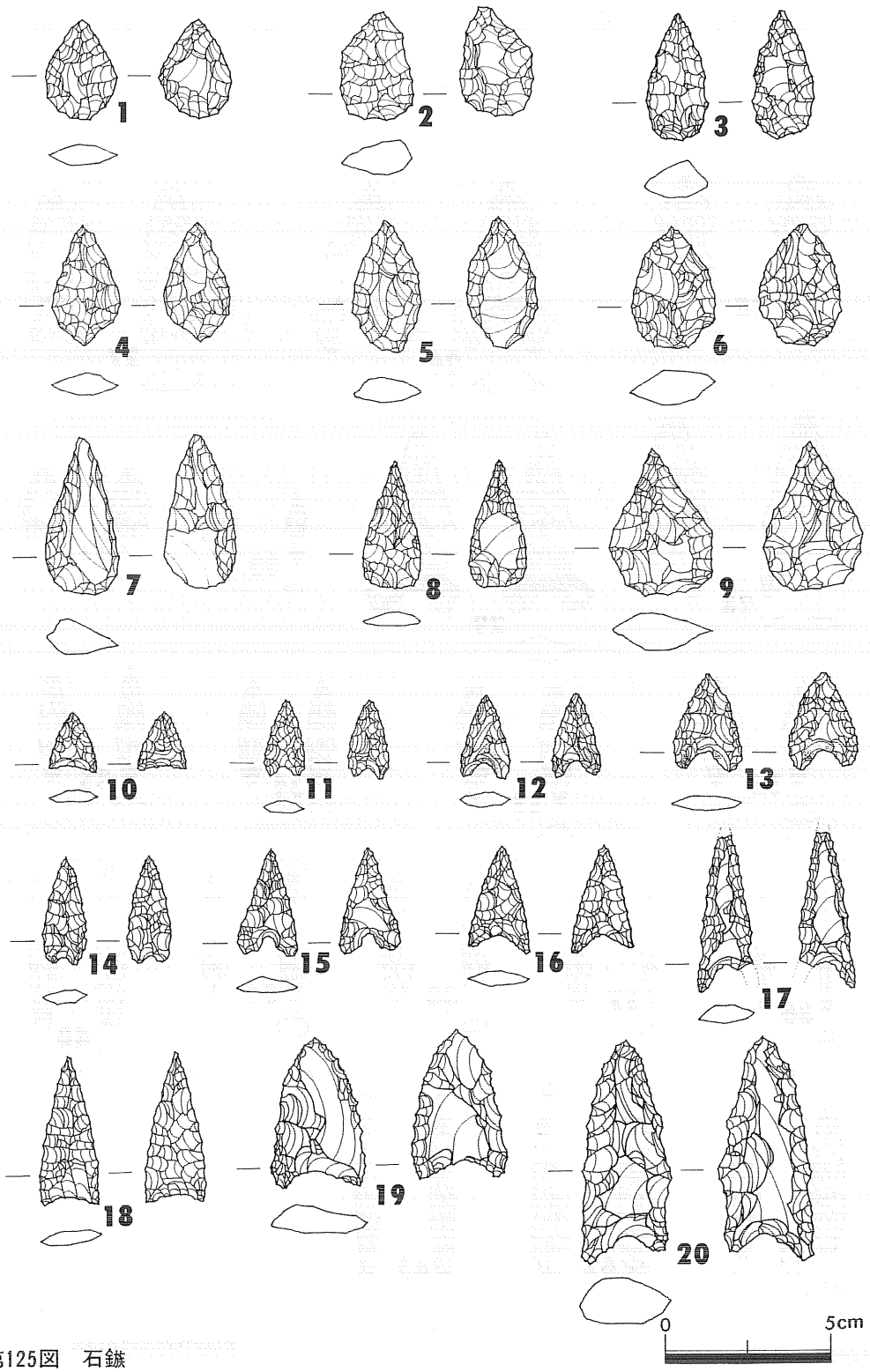
石刀（第138図1・2、図版69－1・2）

（1、2）とも安山岩製である。（1）は内ぞりで内側が薄くなっている。文様は入組文風

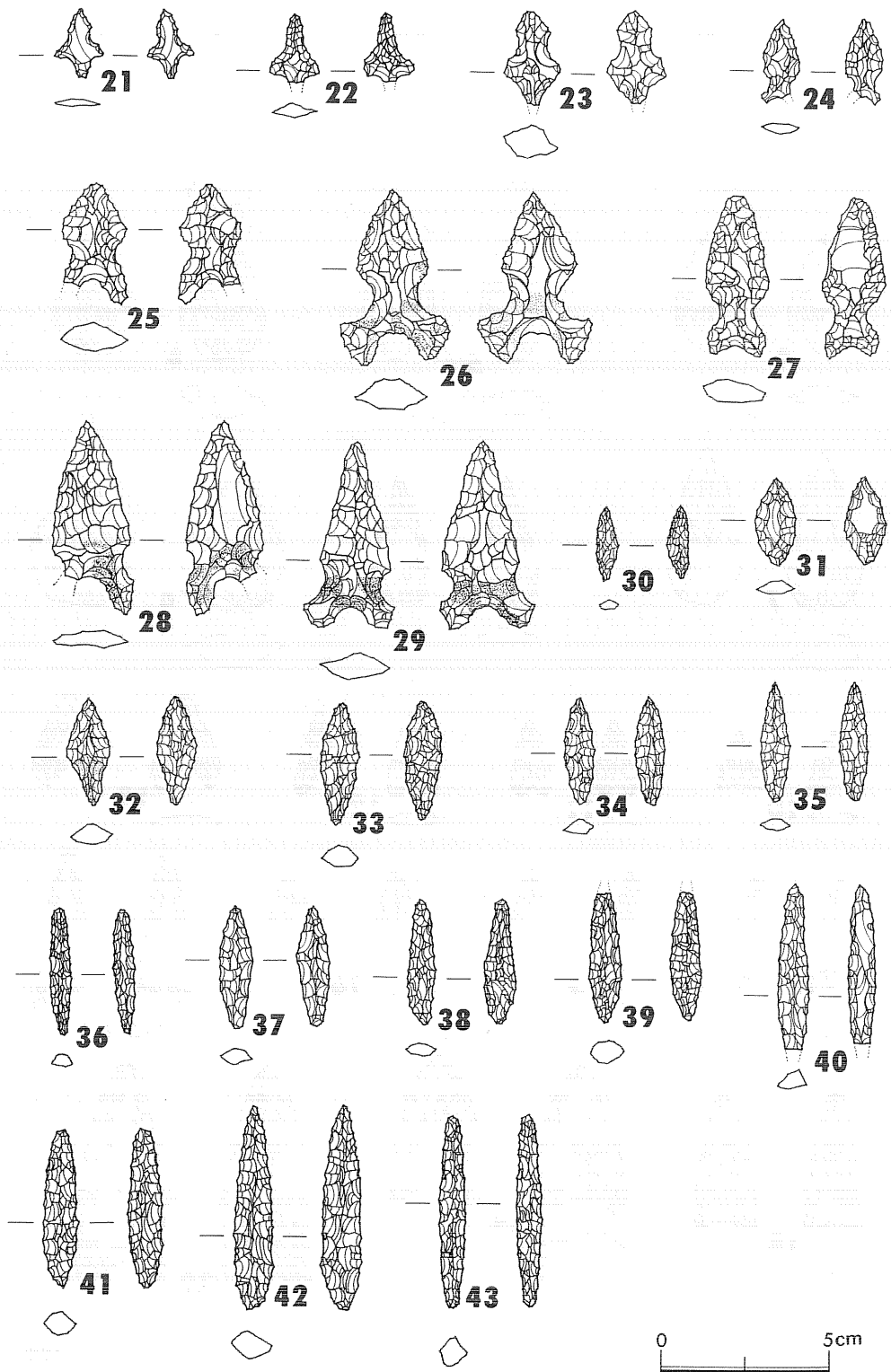
で、浮き彫りにされており、浮き彫りの手法、成形も精功なものである。（２）は、石刀の把の部分で、ていねいに磨いている。

男根状石製品（第140図、図版70）

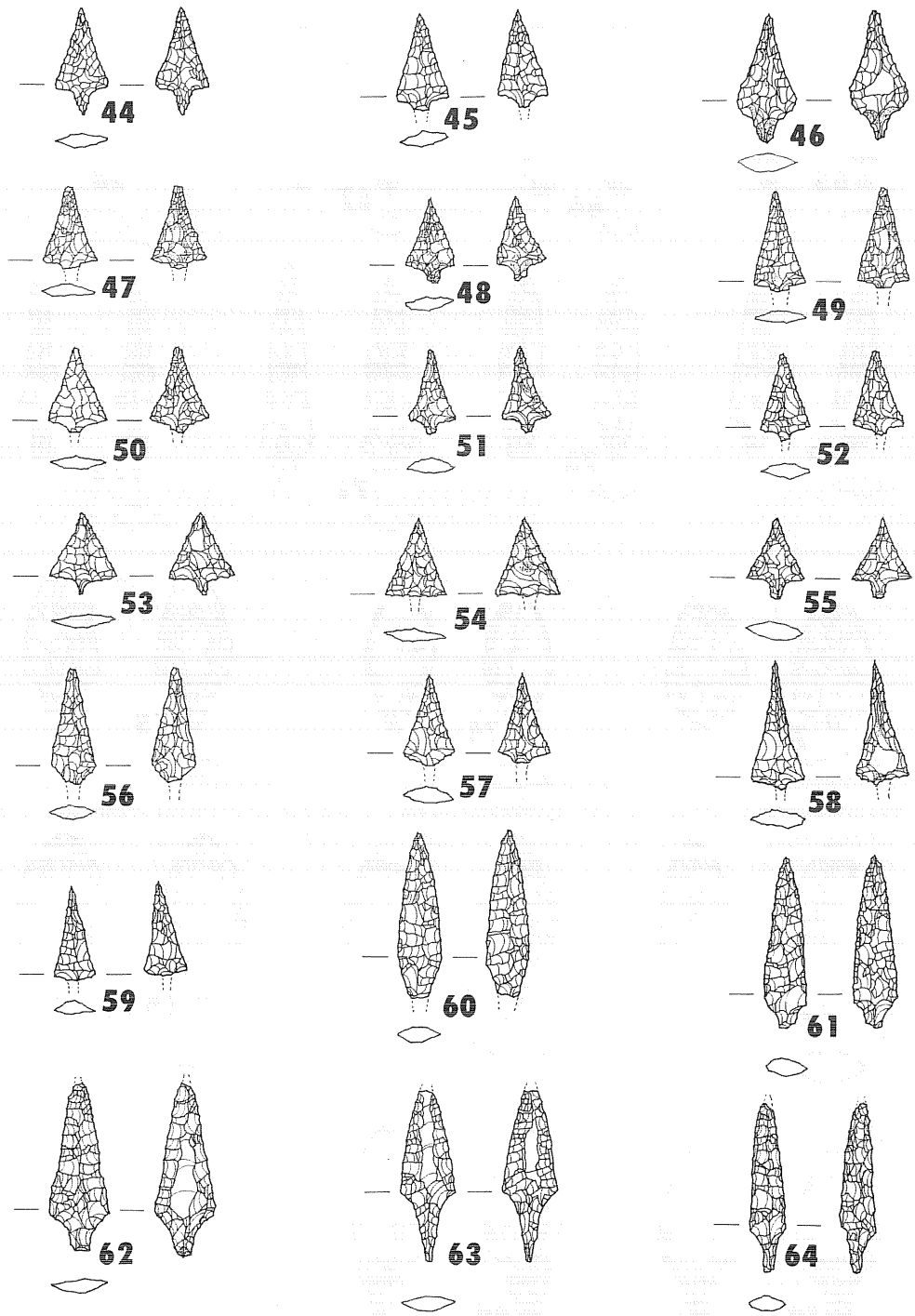
（１、３、４）は凝灰岩製で、（２）は光沢のある流紋岩であり、長方体の自然石に溝を入れたものである。（３）は溝を一本横に配し中央を扶っている。（４）は２本１組の溝を上、中、下に配しているが、中央の溝は片面だけである。



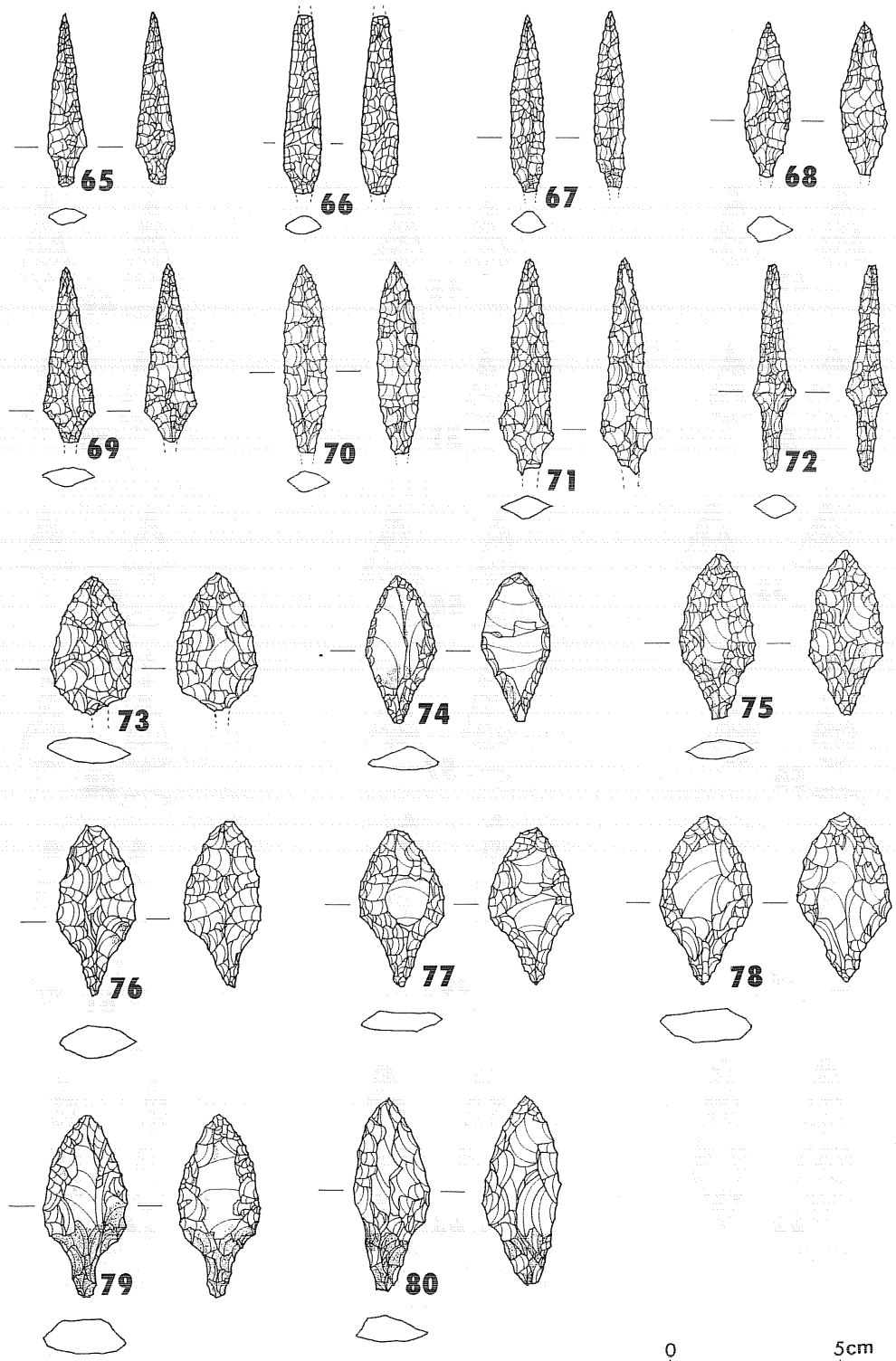
第125図　石鏃


21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
0
5cm

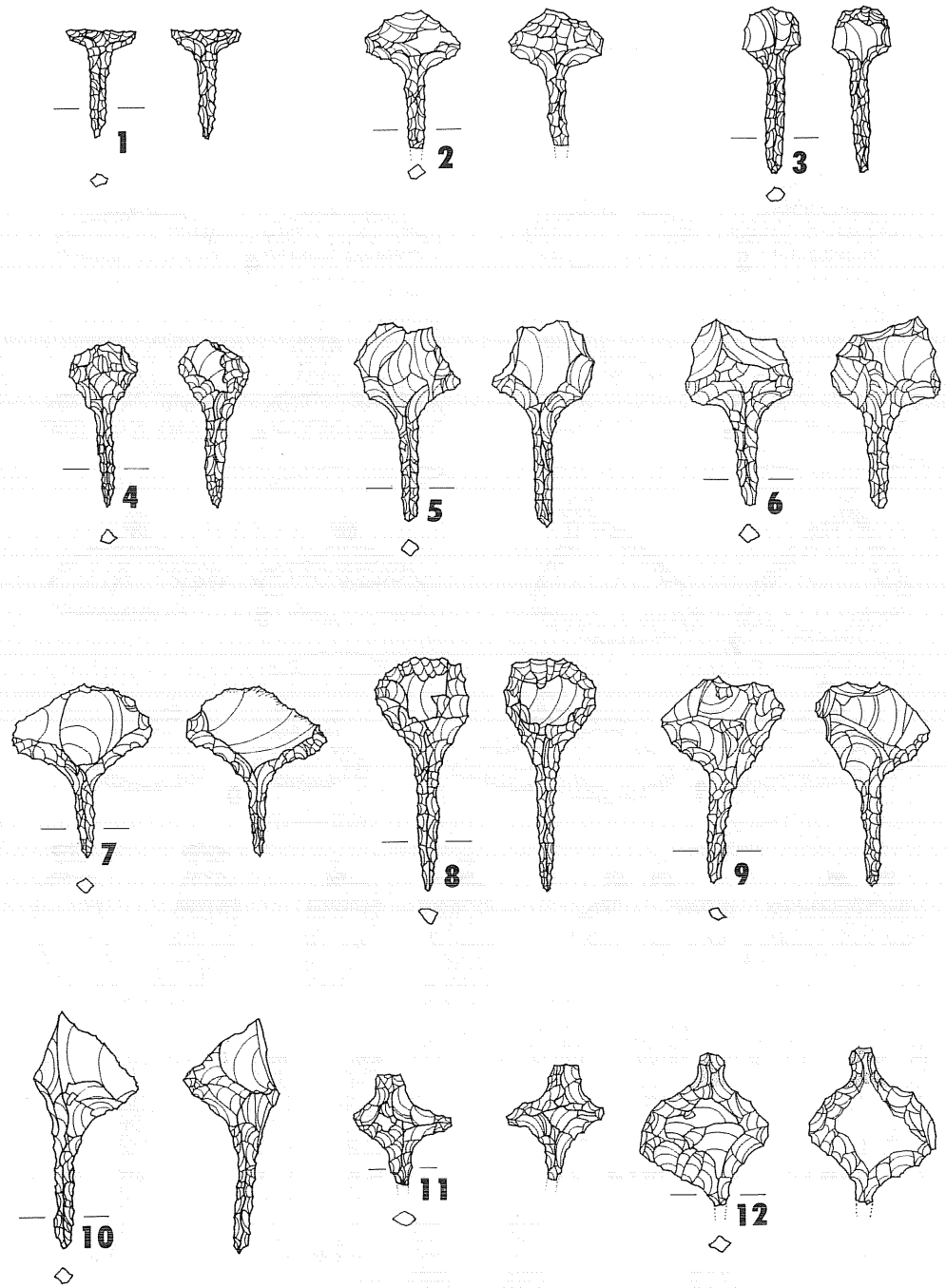
第126図　石鏃



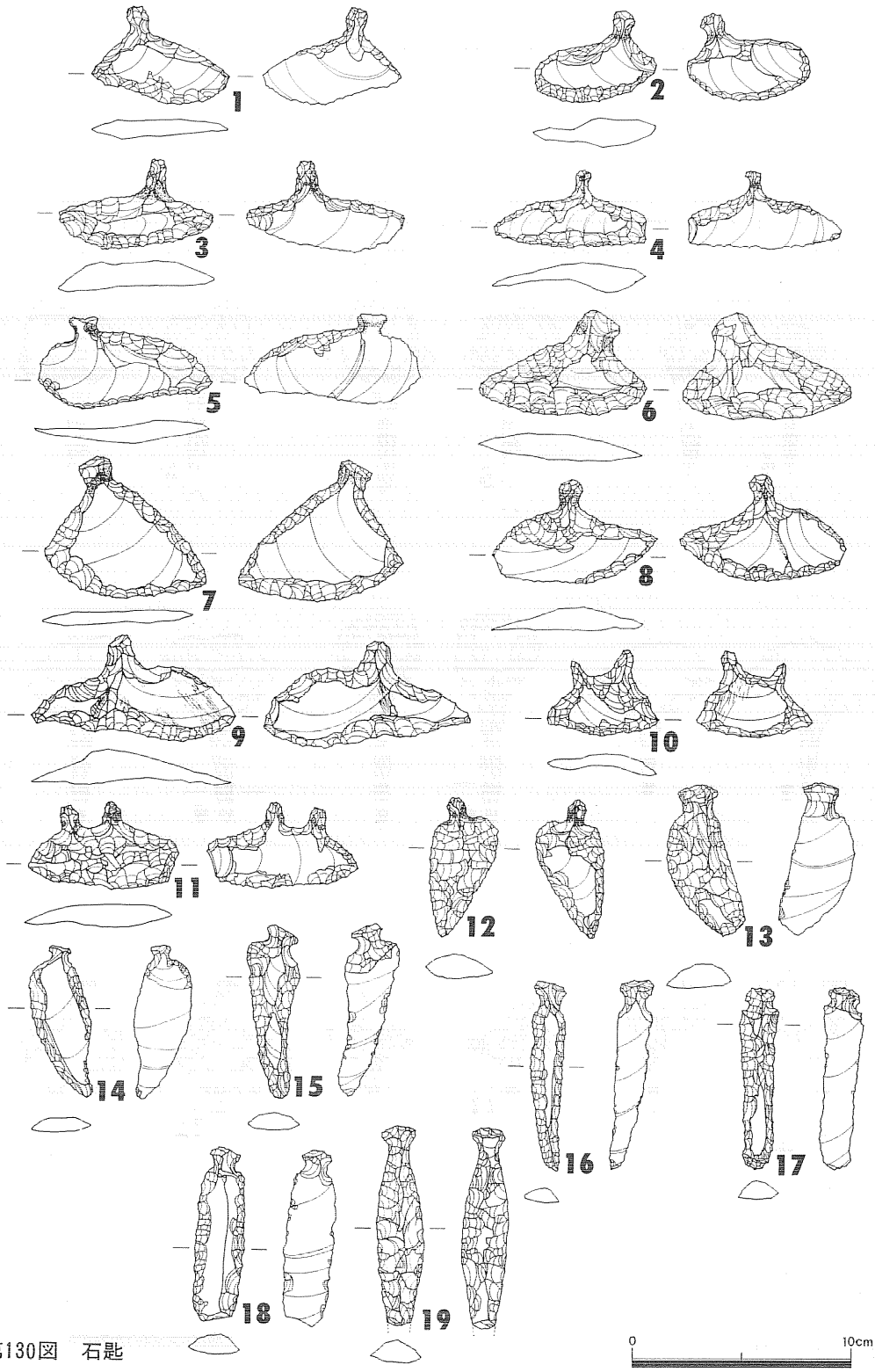
第127図　石鏃



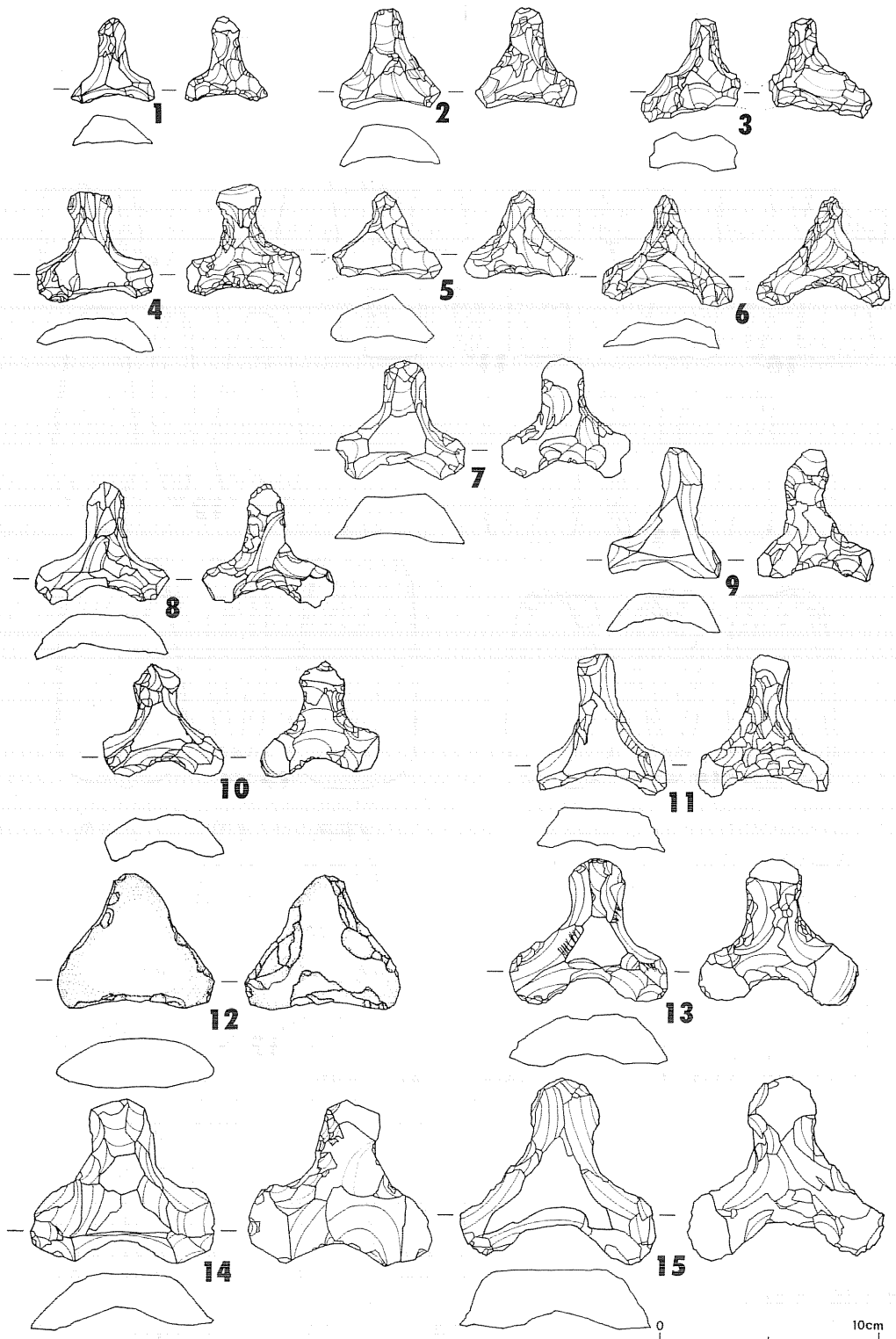
第128図　石鏃



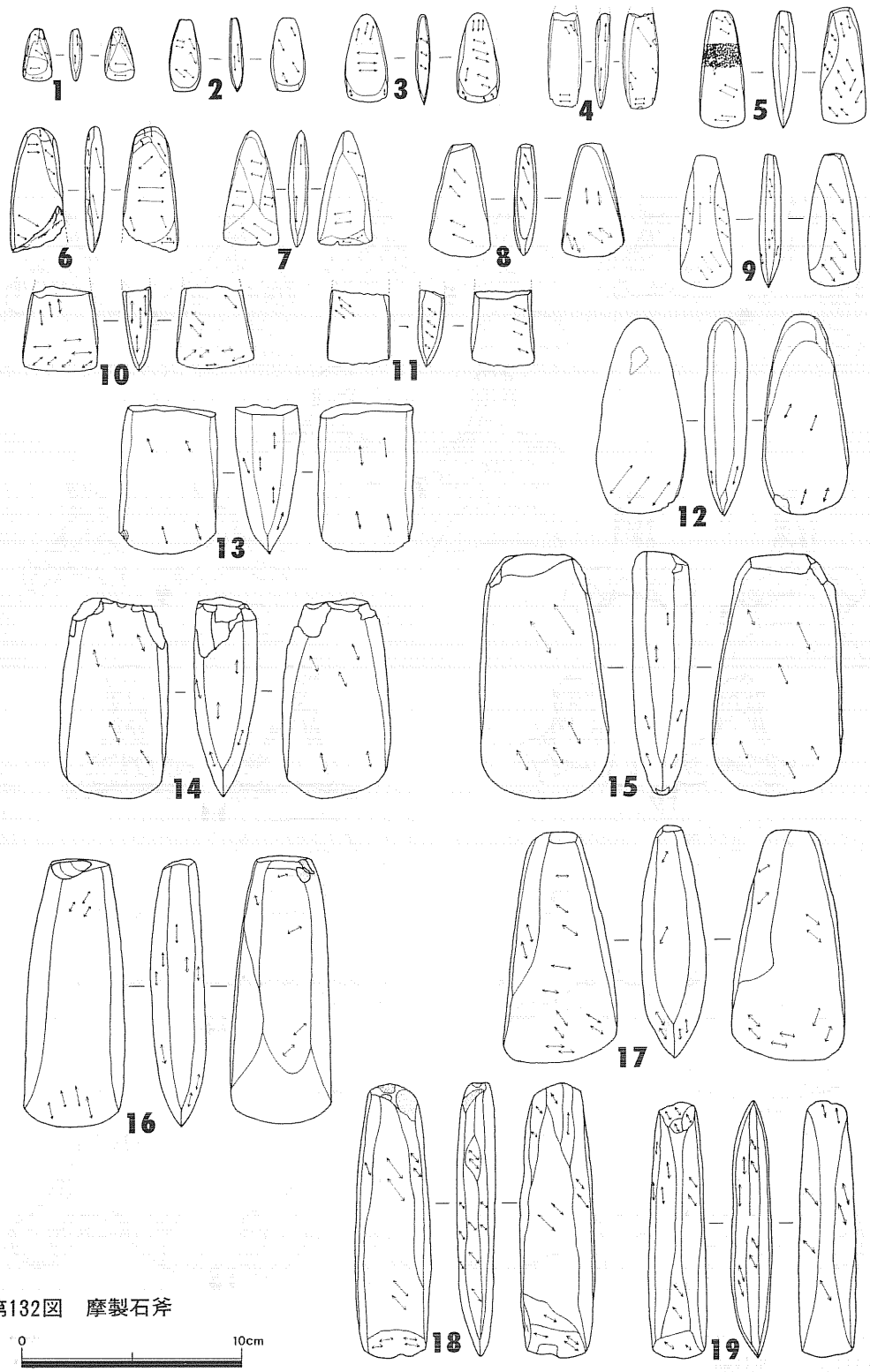
第129図　石錐



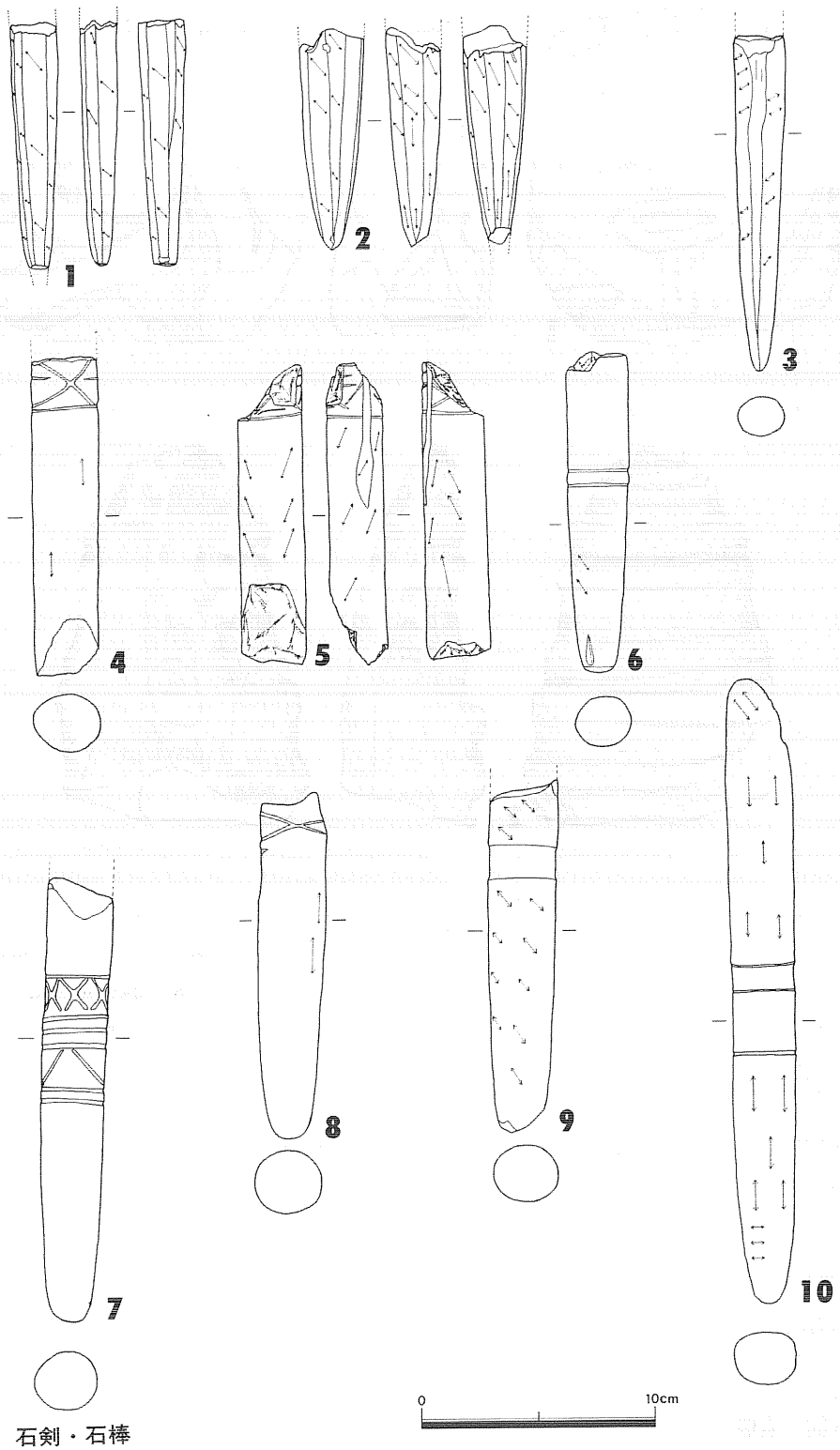
第130図　石匙



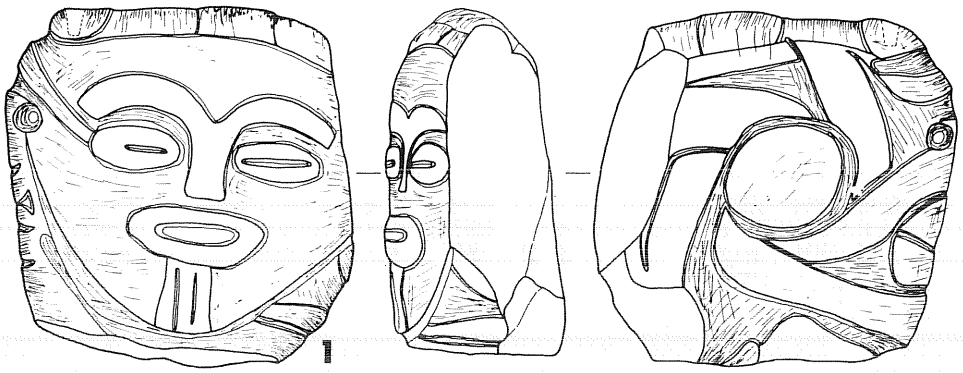
第131図　三脚石器

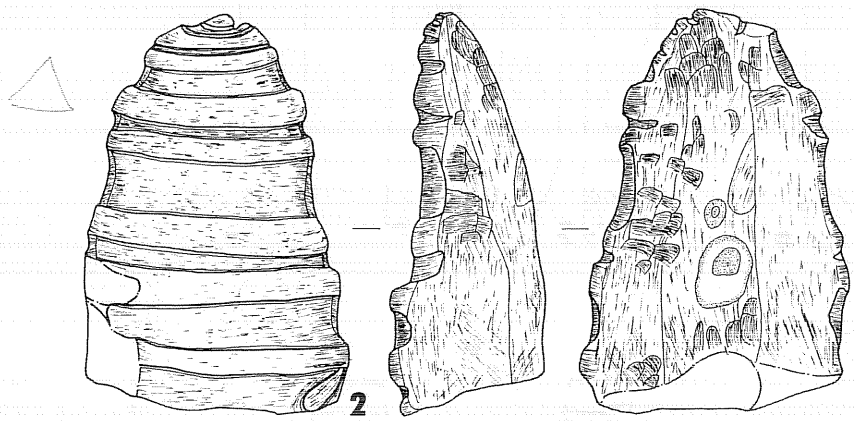


第132図　摩製石斧

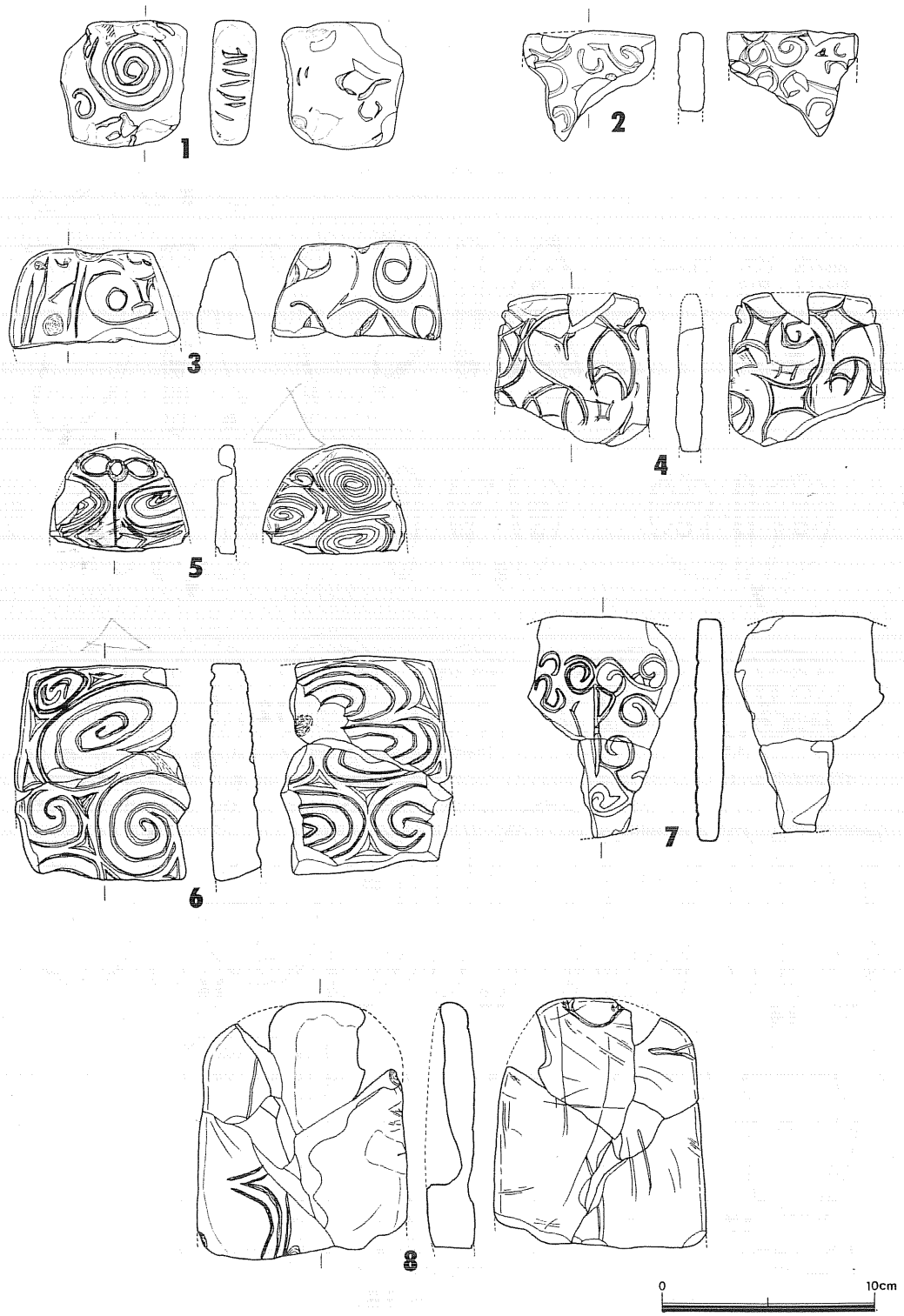


第133図　石剣・石棒

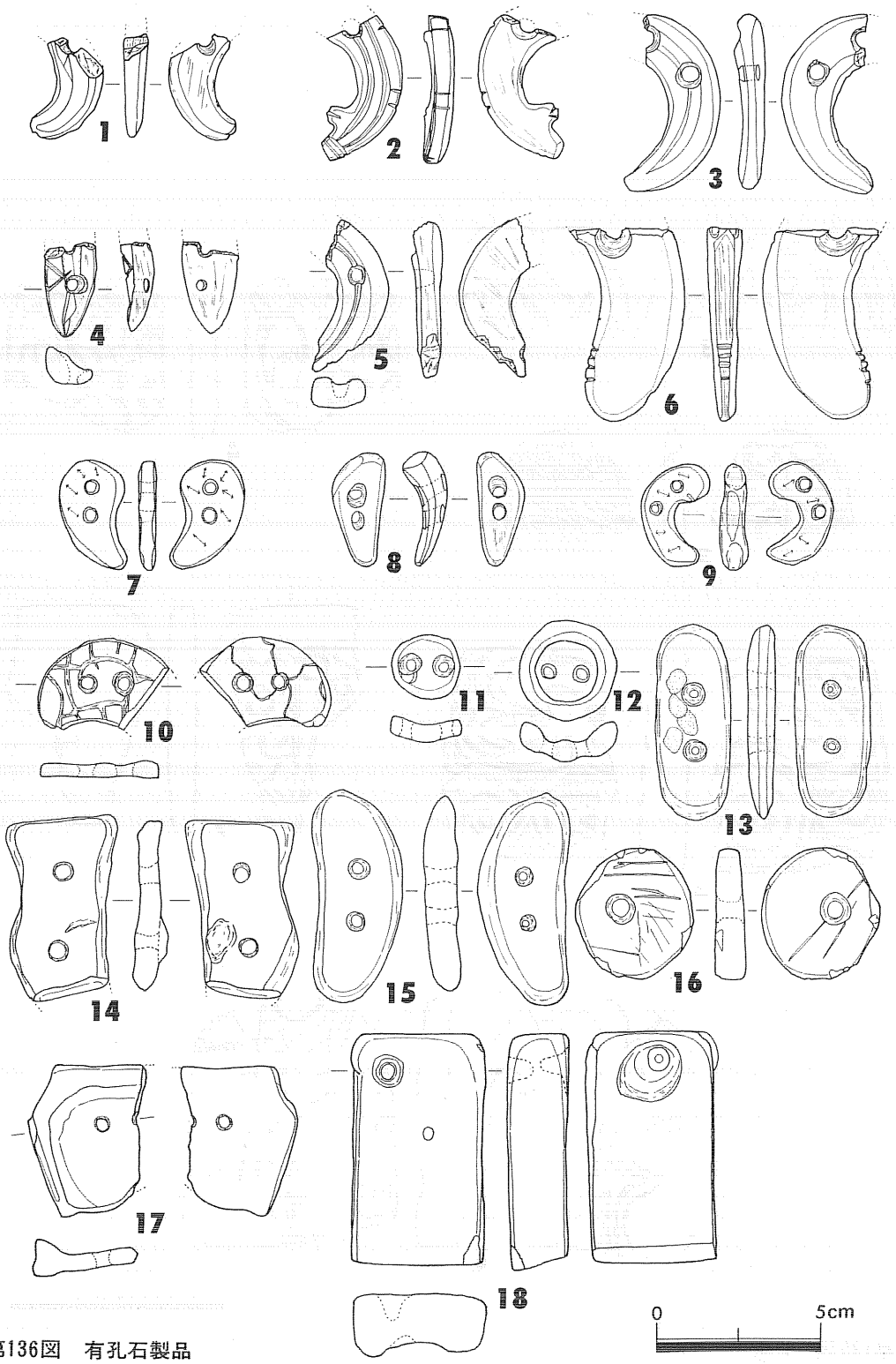




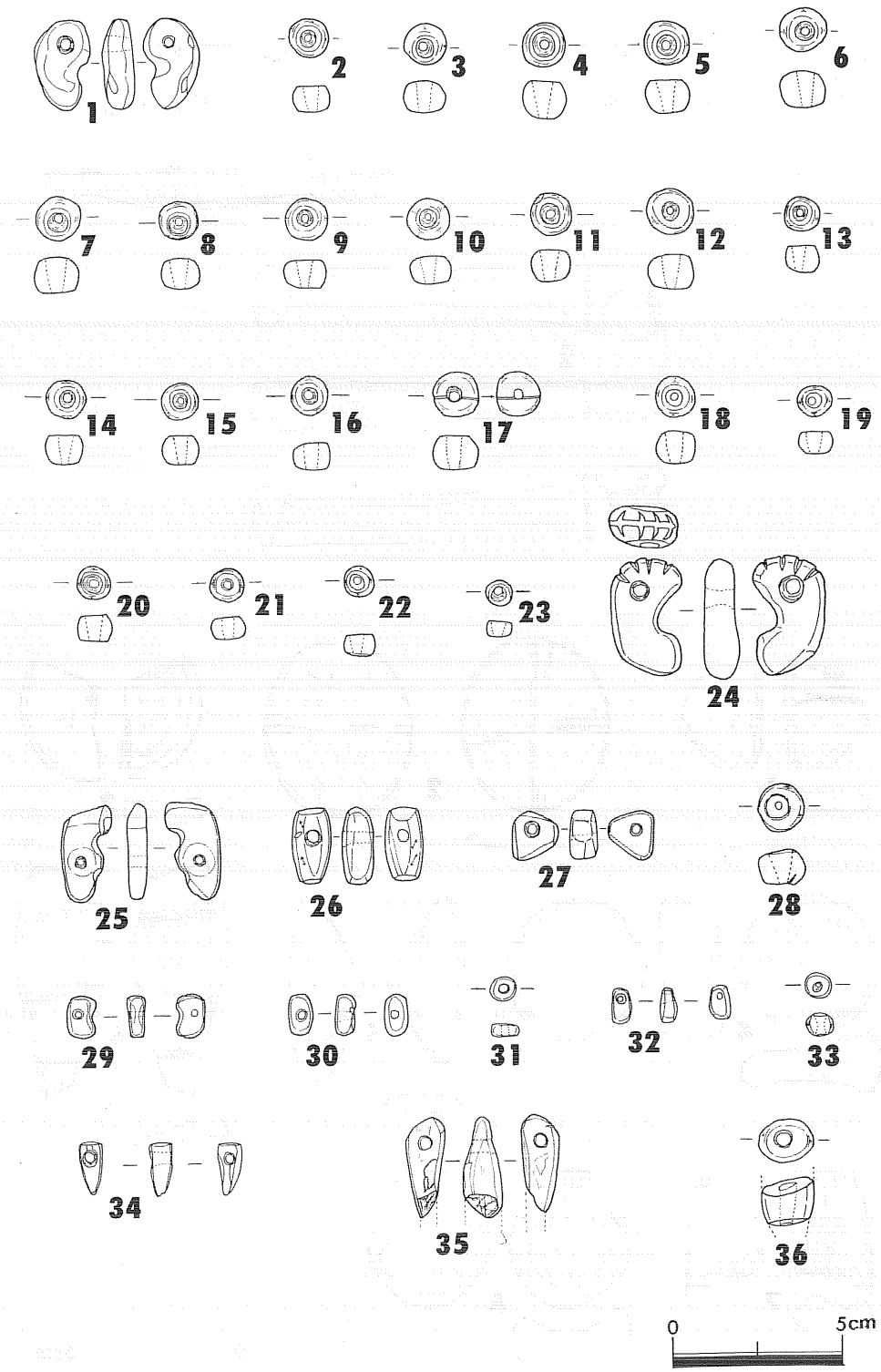
第134図　岩偶



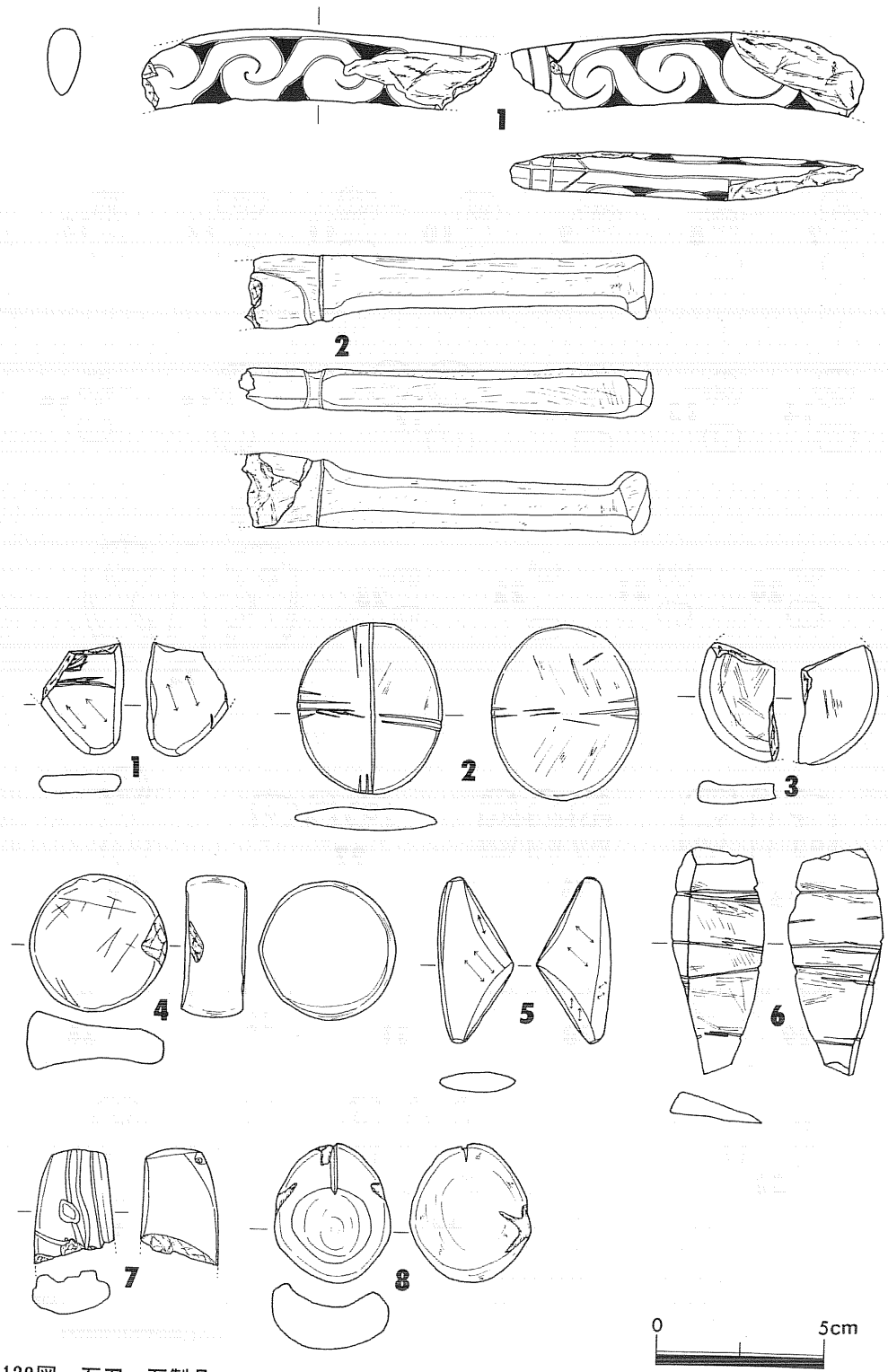
第135図　岩版



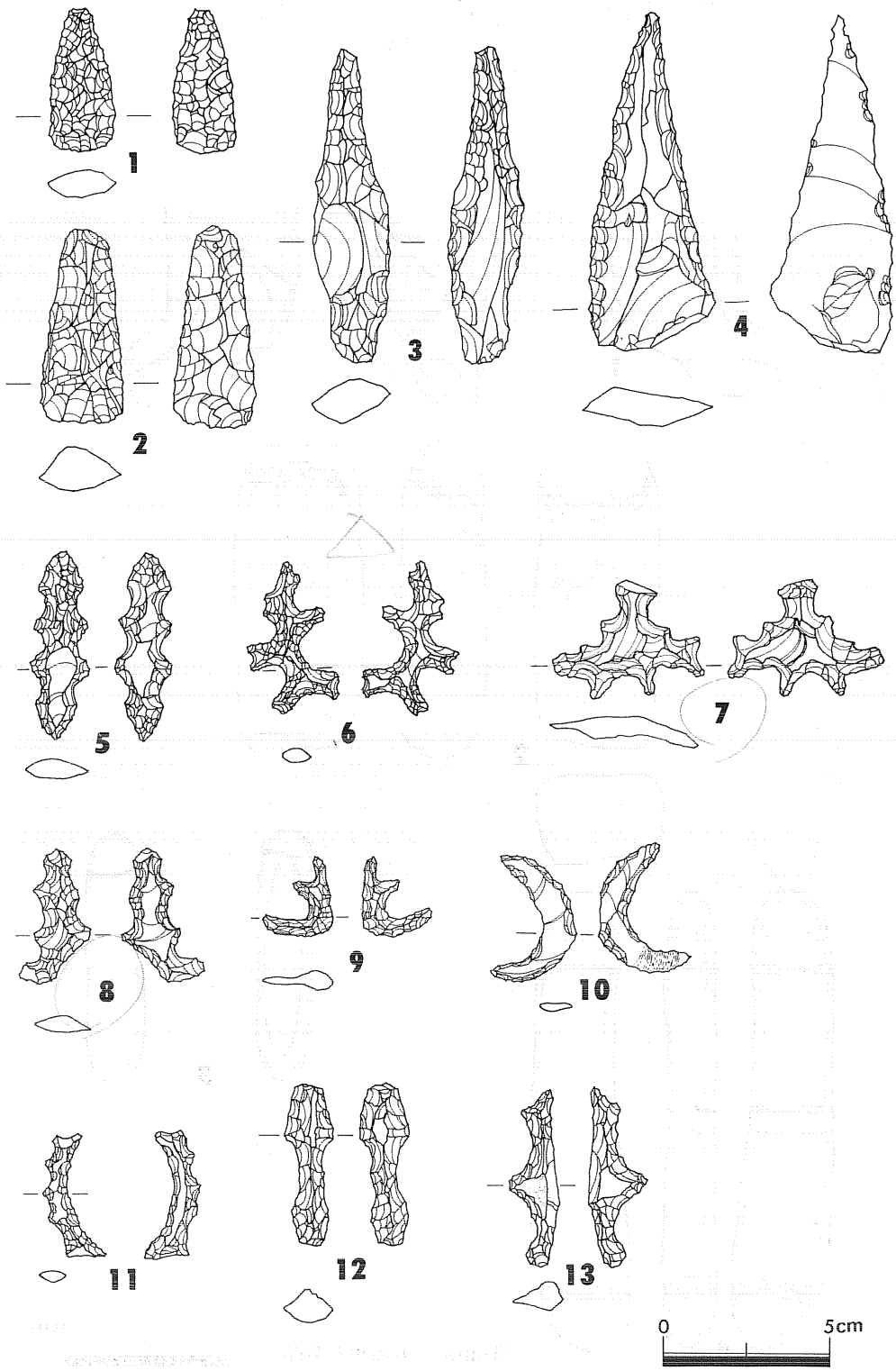
第136図　有孔石製品


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
0
5cm

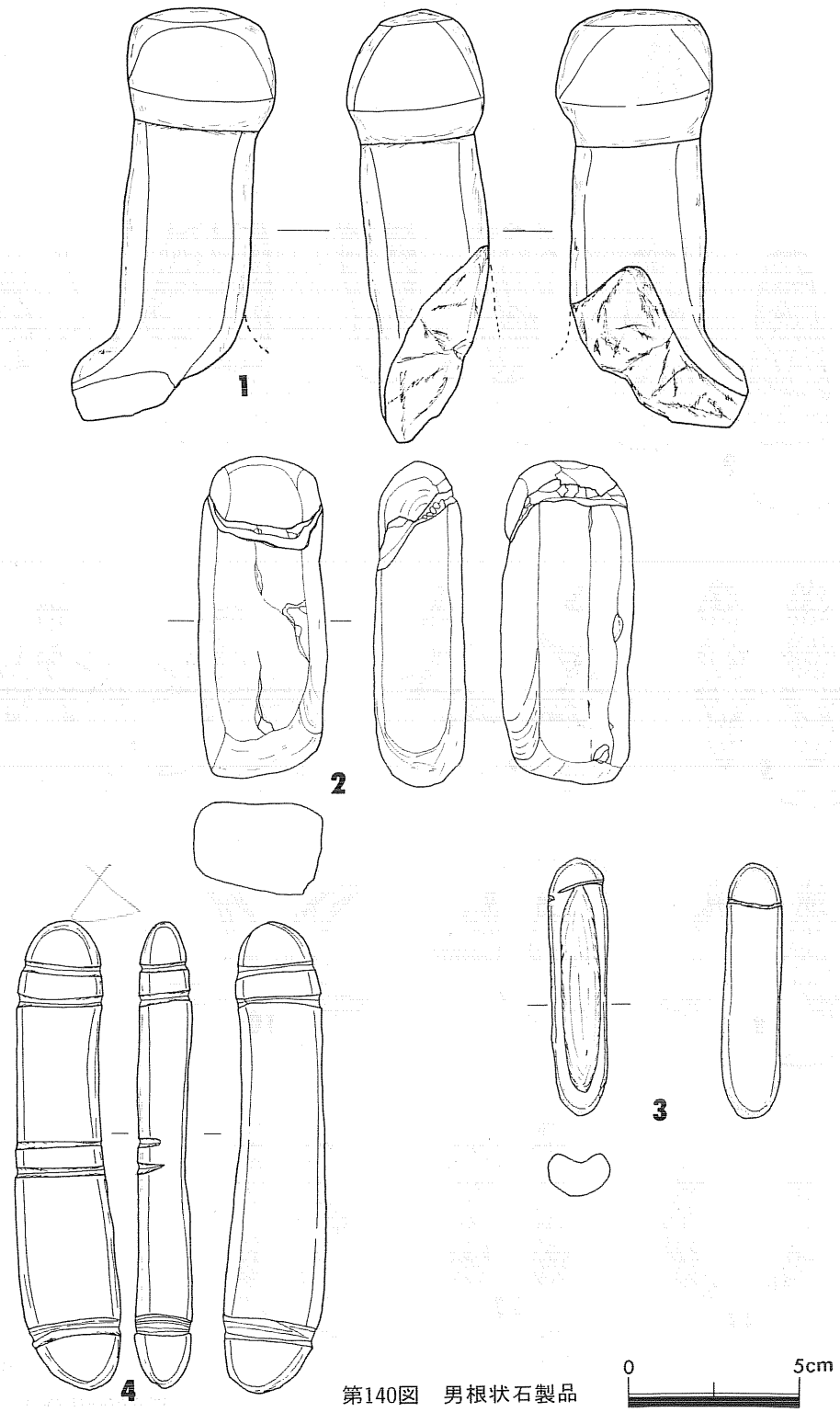
第137図　玉類



第138図　石刀・石製品



第139図　異形石器・男根状石製品



第140図　男根状石製品

第３節　藤株遺跡ＳＫＯ５出土の人骨

山口　敏　（国立科学博物館人類研究部長）

保存状態

人骨は１個体分と考えられるが、全身的に強い火熱をうけて変形し、白色ないし灰色に変じて、右上肢骨以外は、小片あるいは細片と化している。火熱による灰化の度合いの強い白色の骨片は、比較的よく保存されているが、灰化の度合いの弱い、黒灰色の骨片は、すべて保存状態が悪く、採りあげとともにくずれて、細片あるいは粉末と化したものが多い。

骨片の分布

ほぼ北北西－南南東を長軸とする。190cm×90cmの隅丸長方形のプランをもつ土坑の中で、人骨片は、上半身を北北西、下半身を南南東にして、およそ150cm×60cmの範囲内に分布していた（第34図、図版14参照）

人骨のうち、表層に位置した一部の骨片は、1980年５月14日に採りあげられたが、これには、右尺骨の下端部、大腿骨または脛骨の骨幹の破片数点、その他の長管骨骨幹の小破片数十点が含まれている。

人骨の大部分は、1980年７月31日に、第３４図に示した１～35の番号にしたがって採りあげられた。採りあげと同時に細片化して、骨の同定が不可能となったものもあるが、何らかの所見のえられた資料は、次のとおりである。

１、大腿骨または脛骨の骨幹の破片群。

２、同上。

３、同上。保存不良

４、長管骨骨幹小片群。保存不良。

５、腓骨骨幹と思われる破片。長さ約30mm。

６、長管骨骨幹片。脛骨か？

７、脛骨あるいは大腿骨と思われる長管骨の骨幹破片。細片群と化し、もろく、圧平されている。

８、長管骨骨幹細片群。燃焼が不充分で、保存状態悪く、骨幹の緻密管の厚さは１mm以下に

なっている。

9、長管骨骨幹破片。長さ約45㎜。厚さ3～6㎜。

10、大腿骨骨幹かと思われる、長さ約90㎜の破片。緻密管が薄くなり、髄腔がつぶれ、骨幹の前面と後面が平行な板のようにかさなっている。

11、腓骨骨幹の、長さ53㎜の破片。外側面の縦溝形成が認められる。破片中央部での最大径は15㎜。

12、大腿骨頭および頸の小破片群。

13、上腕骨と思われる骨幹の細片群。

14、上腕骨近位端の破片群。保存不良。

15、上腕骨骨幹遠位部と思われる破片群。

16、尺骨骨幹。約20㎝にわたるが、細片となっている。保存状態不良。

17、前腕骨と思われる、細い長管骨骨幹の破片。きわめてもろい。

18、寛骨の一部らしい破片を含む細片群。

19、左腸骨身状面、寛骨臼部片、大腿骨頭片を含む骨片多数。

20、右尺骨骨幹、保存良好。

21、右橈骨、保存良好。

22、右上腕骨遠位部約5分の2。長さ11㎝。小破片にわかれている。

23、長管骨骨幹の一部。保存不良。

24、同上。長さ20㎜。腓骨かもしれない。

25、保存不良の細片群。仙骨下端部と思われる小破片が含まれている。

26、腓骨または脛骨と思われる骨幹片。

27、右手根骨（月状骨、三角骨、豆状骨、大菱形骨、小菱形骨、有頭骨、有鈎骨）、中手骨破片数点、有橈骨遠位端片、腸骨片、その他細片多数。

28、右舟状骨指節骨体7点、右腸骨身状面部破片、寛骨臼部片数点、大腿骨頭および同頭部片。

29、腰椎および仙骨の破片群。

30、椎骨破片群。

31、椎骨片を含む細片群。

32、薄い小剝片群。

（12、18、19は保存状態いちじるしく悪く、同定不能。）

以上の骨片群の分布状態を総合してみると、下肢長骨の破片と思われる骨片が、墓拡の南南西半に集中し、上肢骨、椎骨が北北西半に位置し、寛骨片がほぼ中央に分布している。

しかも右の上腕骨、前腕骨、手骨が解剖学的位置を保って、背椎の西側に位置している。下肢骨骨片の分布がきわめて不規則であり、頭骨の骨片が全く認められない点は、はなはだ変則的であるが、全体としては、仰臥伸展位をとっていたものと推測される。

性、年齢

上腕骨遠位端、前腕骨の近位端および遠位端の化骨が完了していることと、観察できた関節面（椎骨関節空起、肘関節、橈骨手根関節、手根間関節、仙腸関節、股関節）のいずれにも、全く老年性変化が認められないことから、本人骨の年齢は、成年ないし熟年の範囲内と推測されるが、頭蓋、歯、恥骨が保存されていないので、年齢推定にこれ以上の精度を求めることは困難である。

頭蓋が保存されていない上に、寛骨も破損がはなはだしいため、性別の判定もきわめて困難であるが、前腕骨の骨幹位が小さいこと、採りあげ時に観察した大座骨切痕部の形態が、どちらかというと女性的であったことから、不確実ではあるが、女性の可能性がやや大きい、と考えられる。

右前腕骨の形態

右前腕の橈骨と尺骨は、全身骨格の中でもっとも強く燃焼され、比較的よく保存されているが、その反面、ひび割れが入って、かなりの変形をうけている。

橈骨はほぼ全長にわたって保存されているが、骨幹下部に欠損部があり、全長は復元できない。上下とも関節面に変性は認められない。骨幹は細く、後面にたての長いひび割れが走る。骨間縁の発達はとくに強くない。全体として華奢な印象を与える。骨幹の計測値は

骨幹横径　12mm

骨幹矢状径　9mm

骨幹断面示数　75.0

火熱による収縮、変形をうけているので、これらの数値を非火葬骨のそれと直接比較することはできないが、参考までに、津雲貝塚人の平均を引用すると、横径男性17.2、女性14.8、矢状径男性11.8、女性10.3、示数男性69.2、女性70.3である。径の絶対値は、津雲貝塚人女性平均値よりかなり小さく、骨幹の扁平度もかなり弱い。

尺骨は、骨幹部がよく保存されているが、近位端が欠けており、遠位端も一部破損している骨幹の後面中央をたてに長いひびが走り、前面と内側面には、横方向のひび割れが見られる骨間縁の発達は弱く、骨間中央部の接断面は正三角形に近い。骨幹の計測値は

骨幹背掌径　11mm

骨幹横径　　11㎜

骨幹断面示数　100.0

ちなみに、津雲貝塚人の平均は、背掌径男性14.2、女性11.7、横径男性16.3、女性14.0、示数男性87.3、女性84.5であるから、径は女性平均より小さく、偏平性が著しく弱い。

尺骨は上端を欠くので、最大長を計ることはできないが、尺骨粗面と回内筋稜と尺骨頭を目安として、本尺骨に近い長さをもった縄文時代人尺骨を6例えらび出し、それらの尺骨の最大長の平均を求めると246.3㎜、となる。この値は、縄文時代人尺骨最大長の男性平均と女性平均のほぼ中間に相当する。

上述の縄文時代人6個体の大腿骨最大長の平均410.9㎜、から、仮に女性としての身長をピアソン式によって推定してみると、152.8㎝、となる。縄文時代人女性としては、平均よりやや大きい。

考察

この人骨は、強い火熱によって変形し、前腕骨以外はほとんどすべて小さな破片となっていたため、人類学的特徴を調査できる部分にとぼしいが、その反面、縄文時代における火葬人骨の一例として見た場合、その出土状況にはきわめて特異なものがあり、興味ある新資料を提供している。

まず、人骨が、部分的に若干移動してはいるが、全体としてほぼ解剖学的配列を保った仰臥伸展位の位置をとっており、しかもかなり厚い木炭に埋もれた状態で出土し、土坑内に炭化物や焼土も発見されたことである。一般に火葬人骨は、火葬の現場ではなく、一旦とりあげられ、一括されて別場所に埋葬されることがないのに対して、本人骨の場合は、このＳＫ０５土坑内で火葬にふされ、そのまま灰とともに埋葬された可能性が高いように思われるのである。とくに右の上腕骨から前腕骨を経て右手骨に至る位置関係、左右寛骨と背柱との位置関係は、明らかに原位置を保っており、別の火葬場から各骨片が捨われて再び本土坑内で配列されたものとは到底考えられない。下肢骨の位置の乱れは、移動によるというよりは、火葬の過程におこった自然の乱れと解釈することができそうである。

もうひとつの特異点は、本人骨に頭骨と歯が全く認められないことである。その原因としては、一応次の3つを考えることができる。

(1)　遺体に、はじめから頭部がなかった。

(2)　火葬後に頭骨片だけが持ち去られた。

(3)　頭部の燃焼度が弱かったため、腐蝕が進み、保存されなかった。

このうち、(２)は、大小さまざまの頭骨破片と歯を１点残らず持去ることは困難と考えられる

ので、可能性は低いと思われるし、(3)についても、頭部とあまり離れていない上肢骨が十分に燃焼されてよく残っているので、可能性としてはこれも低いと思われる。残る(1)はかなり異常な事態であるが、火葬の場での埋葬という葬法自体が、きわめて例外的、変則的なものである以上、このような可能性も一応考慮に入れた上で、今後検討を進めることが必要であろう。

要約

藤株遺跡SK05土坑で発見された人骨は、年齢は成年ないし熟年、性別は判定困難であるが、女性である可能性がやや高いと思われる。仰臥伸展位で全身的に強く火熱をうけ、ほとんどの骨は変形し、小片、細片化している。大量の灰に埋もれ、しかもほぼ解剖学的配列を保っている所から、火葬の現場に埋葬されたものと推測される。この人骨には頭骨の破片と歯が1点も認められない。このことは、この人骨の変則的な葬法と何らかの関係があるかもしれない。

第5章　まとめ

藤株遺跡は縄文時代晩期の遺跡として広く知られている遺跡である。今度の発掘調査でも晩期の遺物が圧倒的に多い。しかし遺構――竪穴住居跡は縄文時代前期からのものがあり、藤株遺跡に新らしい資料を加えた。

遺構について

遺構は竪穴住居跡24軒、土坑87基、Tピット2基、配石遺構などが発見された。竪穴住居跡は前期円筒下層b式のものが一番古い。平面形は長方形に近い形をなすもの、楕円形のものなどがある。方形に近い形をなすものに周構が伴う。炉は地床炉、柱穴ははっきりしないが、壁に接してあるもの、SI01のように4本と考えられるものなどがある。

後期の住居跡は平面形楕円形のものが多く、全体に小型である。柱穴は不規則である。晩期の住居跡は1棟だけ確認されている。壁は削平されていて不明。壁に沿って小穴が円形に配列されている。円形を呈し、径8mほどあり大きい。柱穴は4本で大きく深い。炉は不明。この住居跡は青森県岩木山麓で発見されているものと共通するものをもっている。

土坑は87基発見され、時期の確認できたものは全て晩期のものである。全体の配列は定かではないが、16－D、9－A地区で確認されたように土坑が重複して群をなす地域、10－G、12－D地区のように比較的重複するものが少なくて群をなす地域とがある。人骨の出土した土坑は最も北側に存し、その西南にまばらに土坑が存在し、16－D地区の重複している所に連続して弧状あるいは環状をなすようにも見ることが可能であるがはっきりしない。もともと環状とはならず単に群をなす土坑があるだけであるかも知れない。しかし土坑個々のあり方を見ると二基～三期が一組となって存在しているように考えられ、これは湯出野遺跡などの土坑群の発見されている遺跡のあり方と共通している。

土器について

土器は大きく第一群土器と第二群土器に分類して報告した。第一群土器は後期の土器で第二群土器は晩期の土器である。第一群第1類の土器は十腰内I式土器の仲間である。第2類土器は所謂大湯式土器の仲間と考えられる。第1類土器と第2類土器との時期的な関係は平行関係にあると見られている。(磯崎1966　)。第3類土器は磨消縄文のもっとも発達した時期で、黒く光沢があり、口縁に3～5個の大きな突起をもつ深鉢形の土器である。後期中頃の土器で、広い分布を示す土器であるが絶対量の少ない土器である。特殊な使われ方をした可能性のある土器である。後期中葉宮戸IIa、十腰内II式に対比される。第4類土器は磨消縄文が主体をなし縄文がより細かくなり、晩期の縄文に近い状態を示すものである。12の台付鉢の器形は次の第

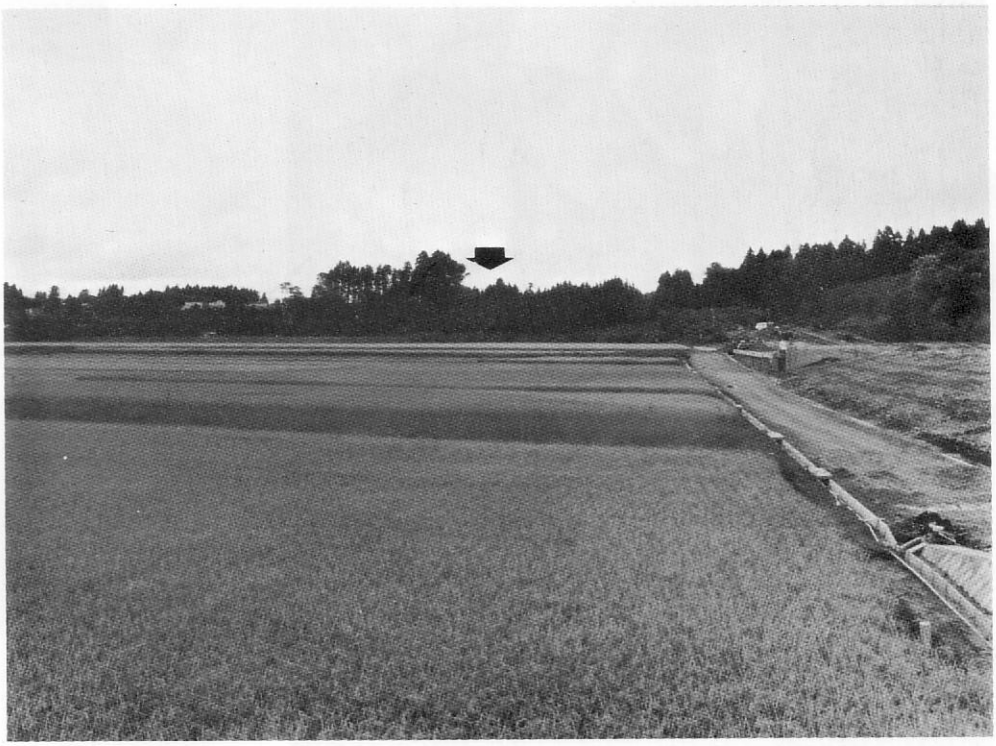
二群第1類の土器の器形に受けつがれて行くものと考えられる。13も頸部に巾をもつもので、晩期直前の時期と考えられる。第5類土器はコブ付土器である。この土器は後期後半につくられた土器で、いくつかの変遷が予想されるが、4類との関連は不明である。

第二群土器は晩期の土器である。第1類a類、第2類a類などは後期と晩期の間を埋める資料としてその帰属が問題となっている土器である。ここでは安孫子昭二（1969）の考えにしたがって晩期としてあつかった。しかし安孫子の扱った土器の仲間にないものもいくつか含まれている。晩期の土器は器形で大別し、さらにそれを細分したので各類に同時期と考えられるものが多くある。

第1類の台付鉢形土器のa類19、20の施文方法は第2類鉢形土器b類と共通する文様がある。又第2類鉢形土器d類と第3類浅鉢形a類、第4類台付浅鉢形土器a類などは玉抱き三叉文風の文様と縄文を残す帯状文が組合さった文様をもち、いわゆる大洞B式土器の古い仲間の土器である。また三叉状八組文の施されている第一類のb、c類、第2類のe類、第4類のb類は同時期の大洞B式土器のものである。第5類注口土器a類2)にも共通する。このように晩期初頭の土器が多い。最も新らしいものと考えられるものは第3類浅鉢形土器の68がそれで大洞C_1式と考えられる。したがって今度発見された土器のほとんどは大洞B式を主体とし、その内容はB_1、B_2式は勿論さらに細分が可能なようにも見られる。

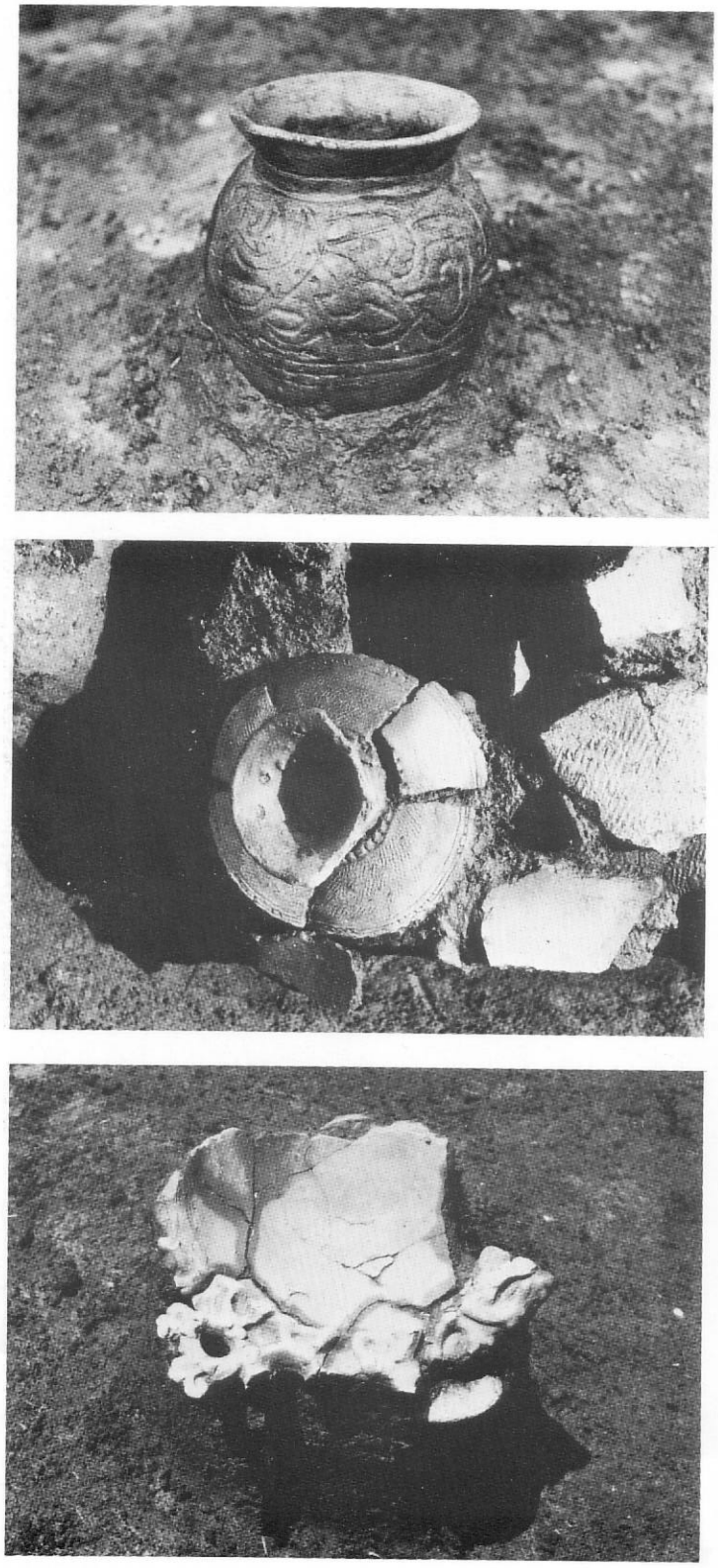
他に注目されるのは無文土器の多いことである。鉢形土器、浅鉢形土器、台付浅鉢形土器、壺形土器、それに注口土器にその数が多い。これは安孫子昭二が説くごとく「土器様式崩壊の危機の、態勢建直し手段として、白紙環元し、新らたな器形、文様を模索する在り方である。この白紙環元とは主に無文ということである」。とすれば、藤株遺跡の集団はちょうどその時期を体験した人達であったといえる。近くの矢石館遺跡、麻生遺跡の土器とも若干差異が認められるところもあり今後他遺跡との関連が必要である。

土器については破片をほとんど取り扱うことができなかった関係で大洞B式土器の詳細な検討はできなかった。これについては近い将来改めて論じてみたいと考えている。

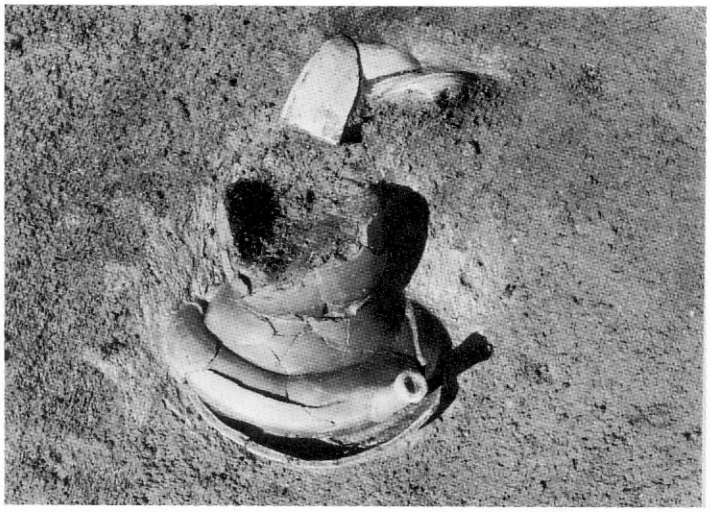


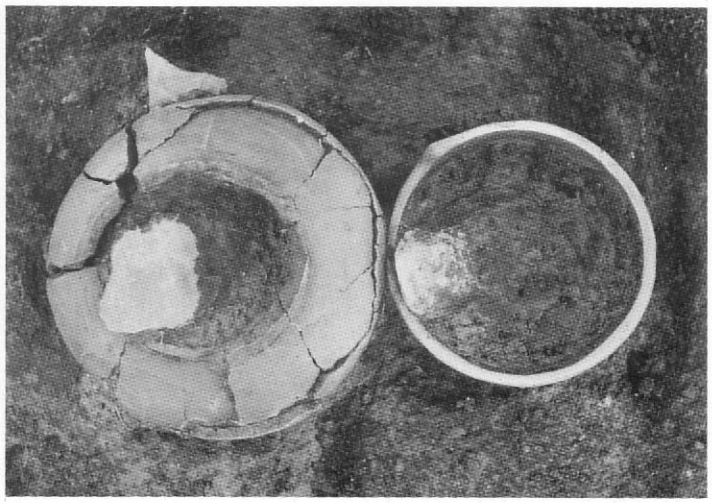
図版１　遺跡遠景（東▶西）

　　遺跡遠景（南▶北）

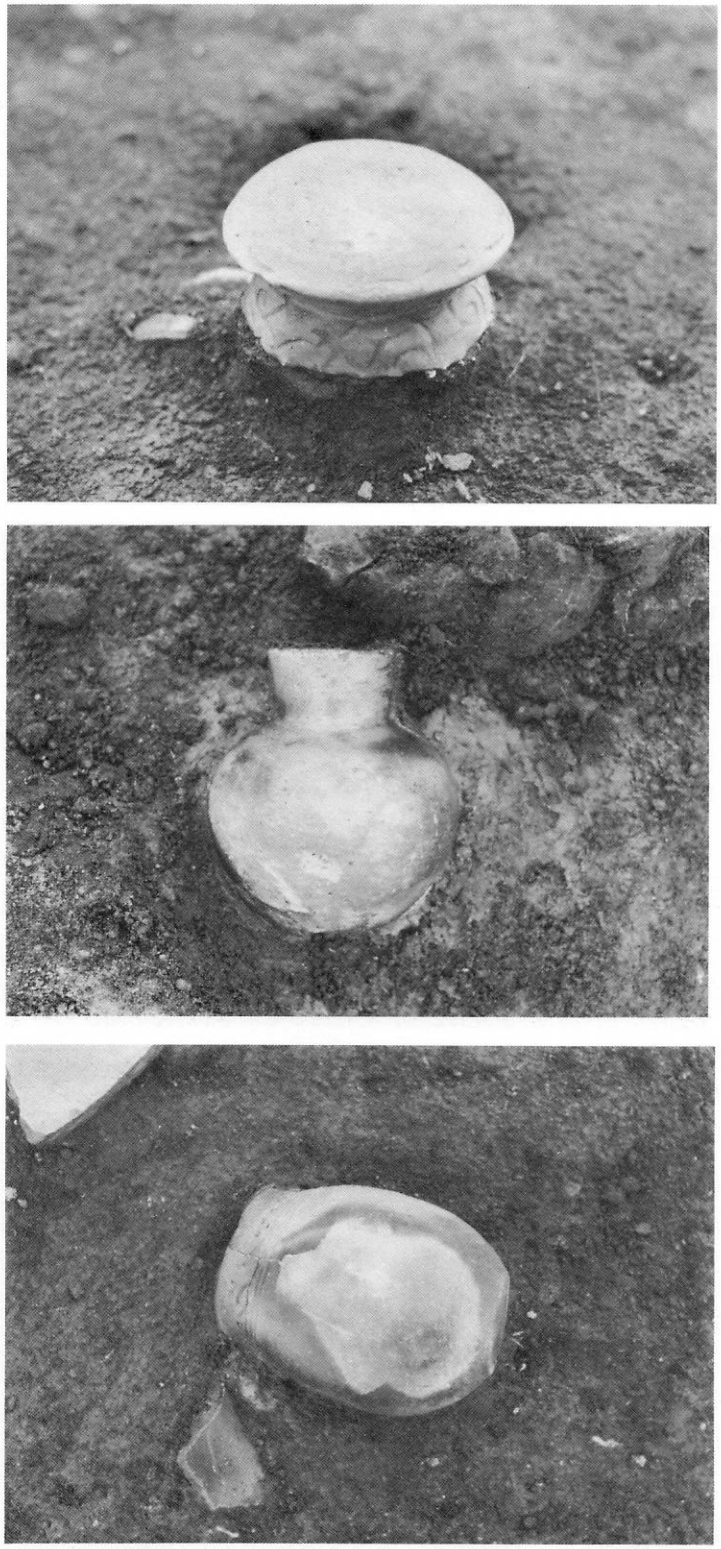


図版 2　土器出土状態

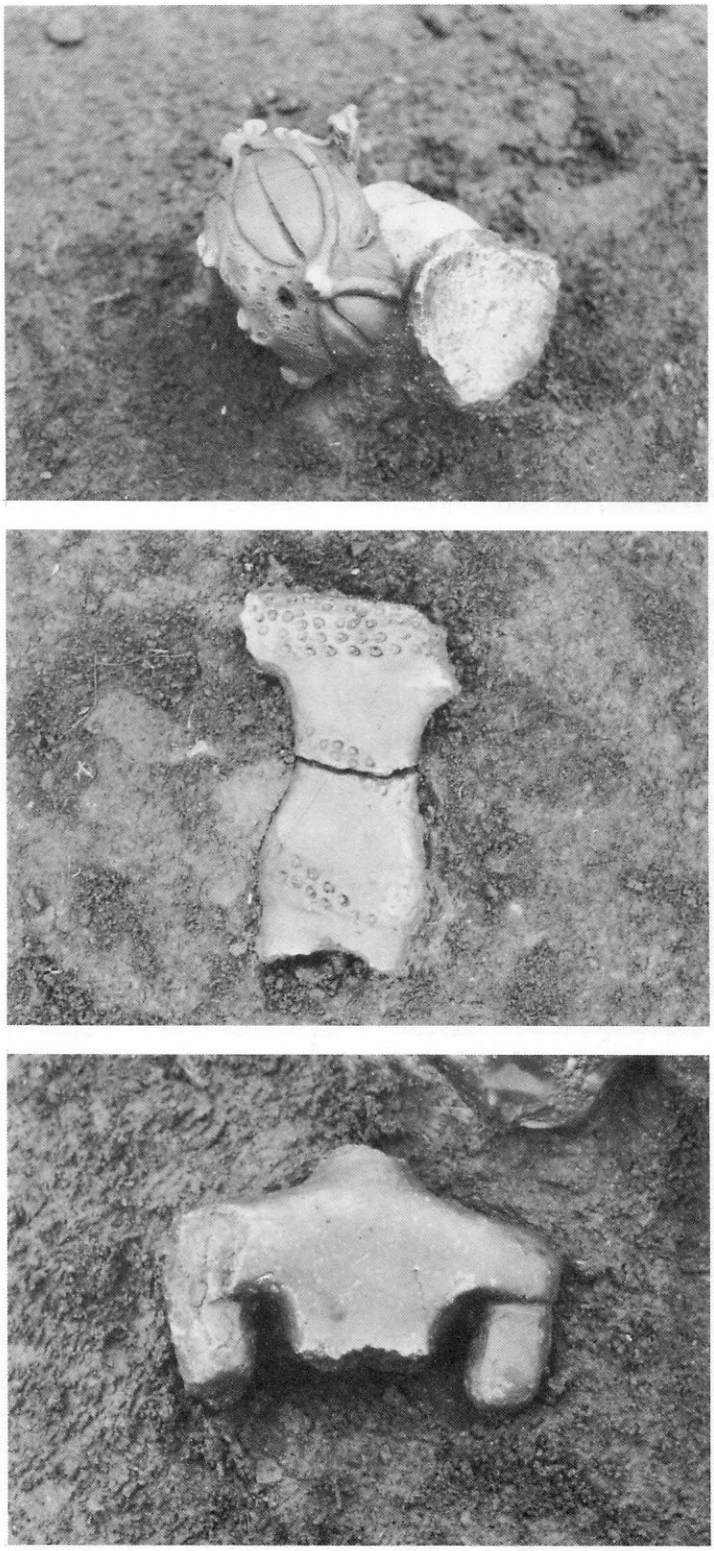




図版 3　土器出土状態

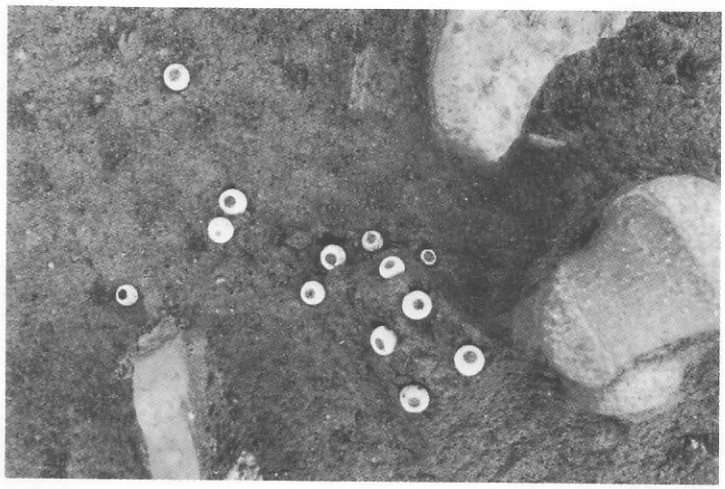


図版 4　土器出土状態



図版 5　土偶出土状態

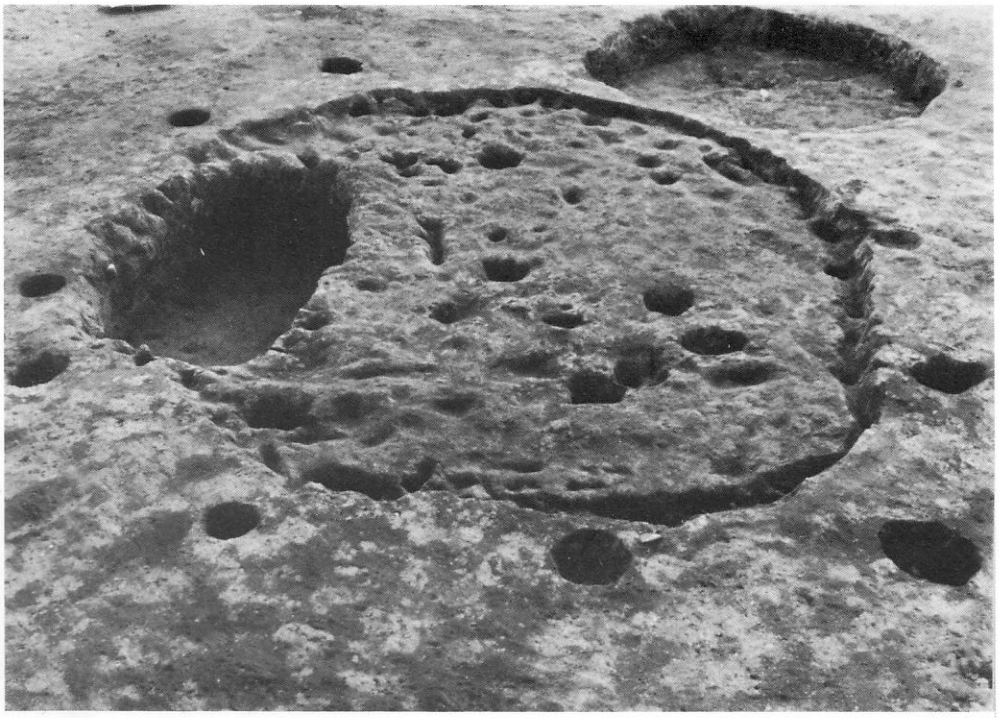
図版 6　石器出土状態



図版７　岩偶出土状態・玉出土状態

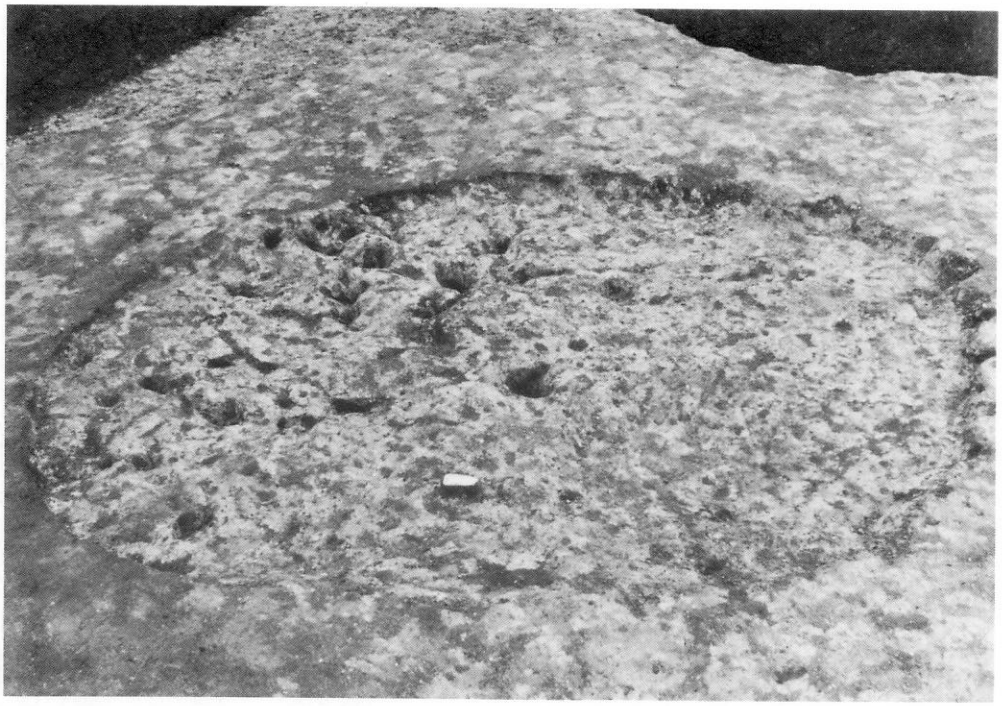
図版8　SI 08

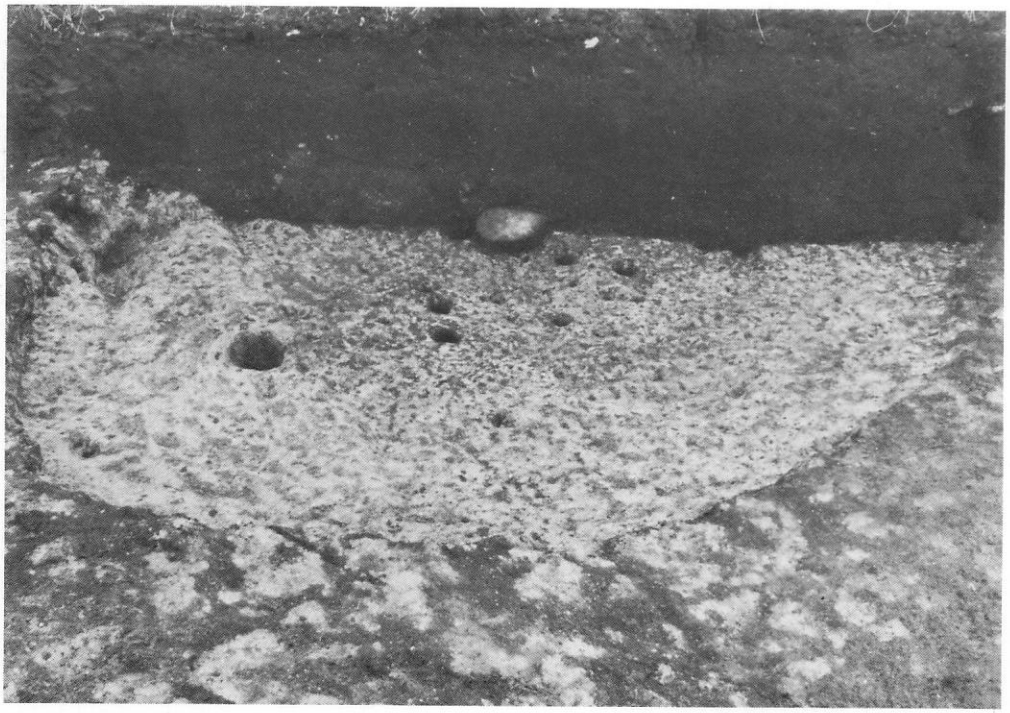
SI 09



図版 9　SI 17

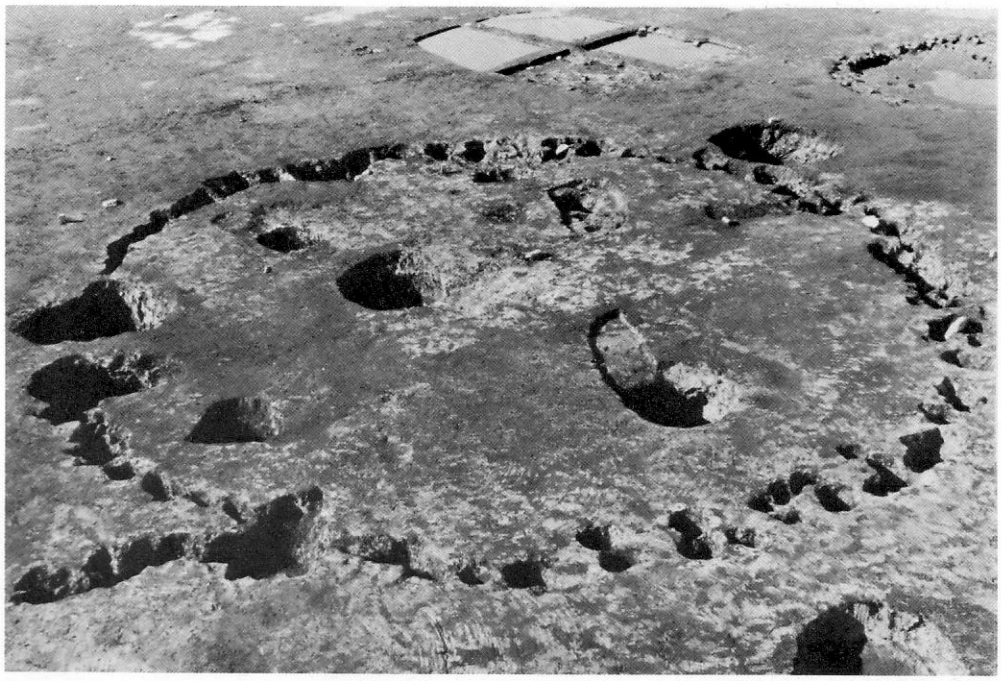
SI 18





図版10　SI 19

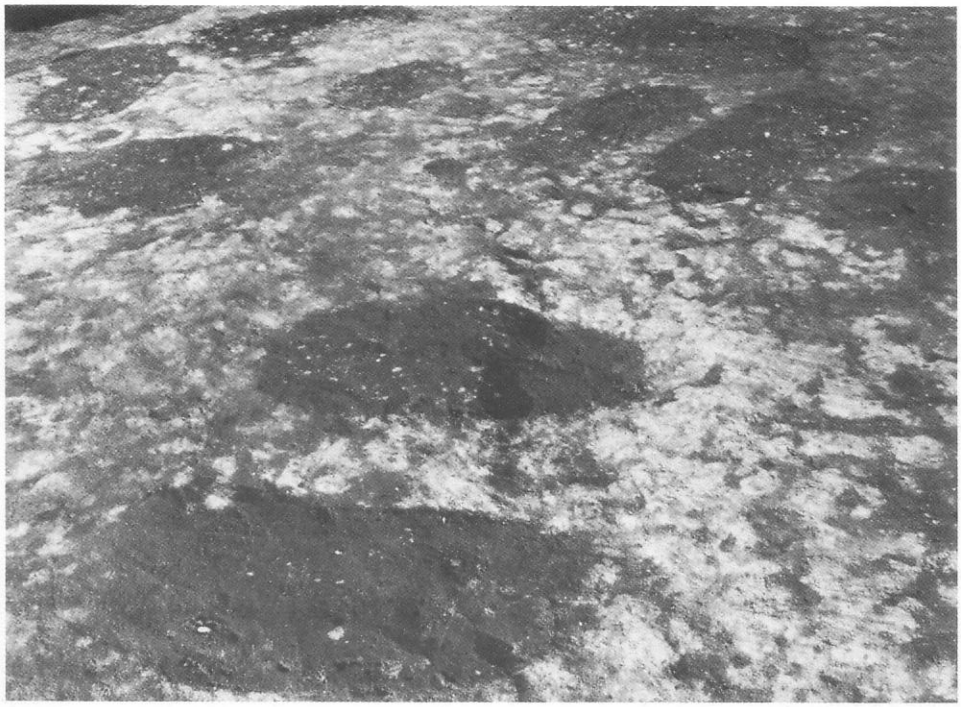
SI 21



図版11　SI 22

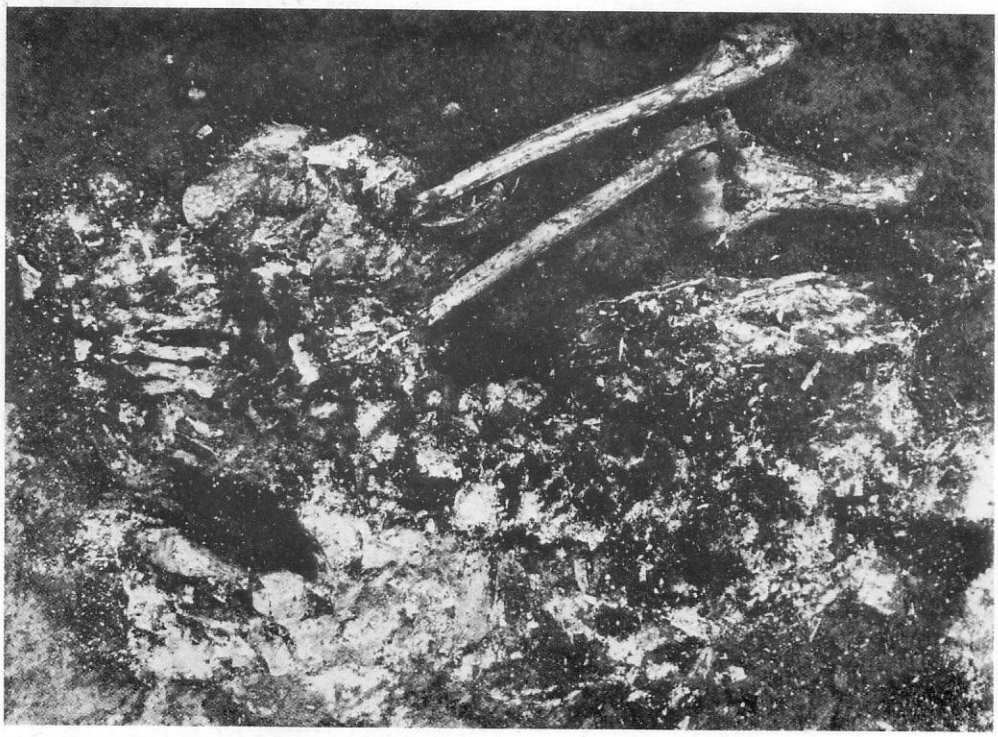
SI 24

図版12　6号炉・同埋甕・9号炉



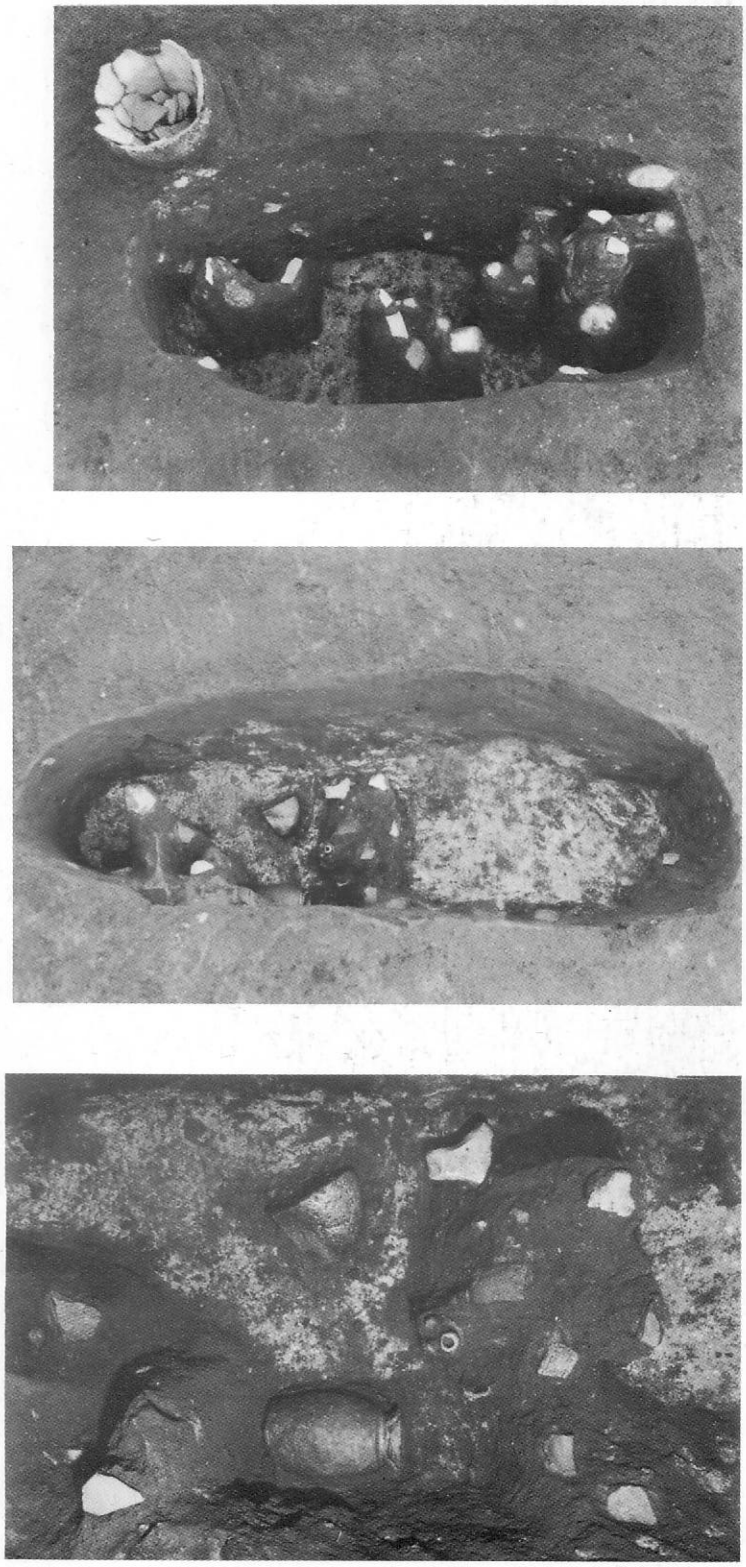
図版13　II区土坑確認状況

同　発掘状況



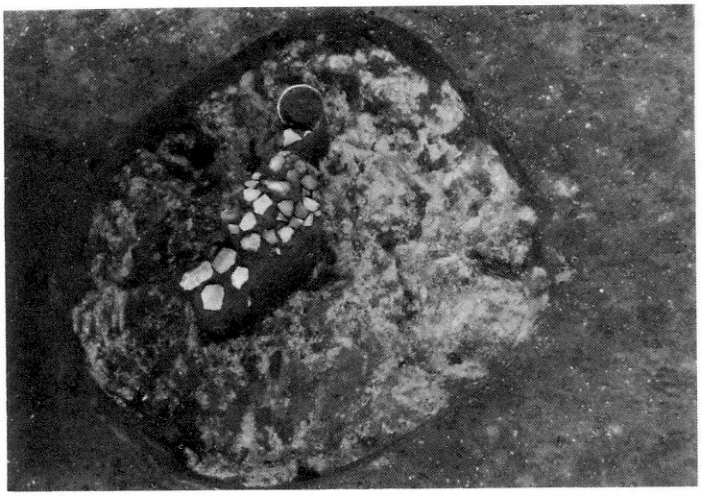
図版14　ＳＫ05人骨出土状態

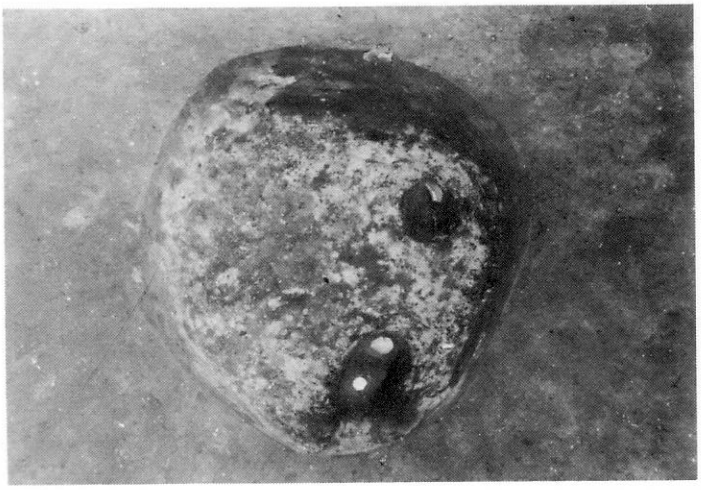
同　拡大



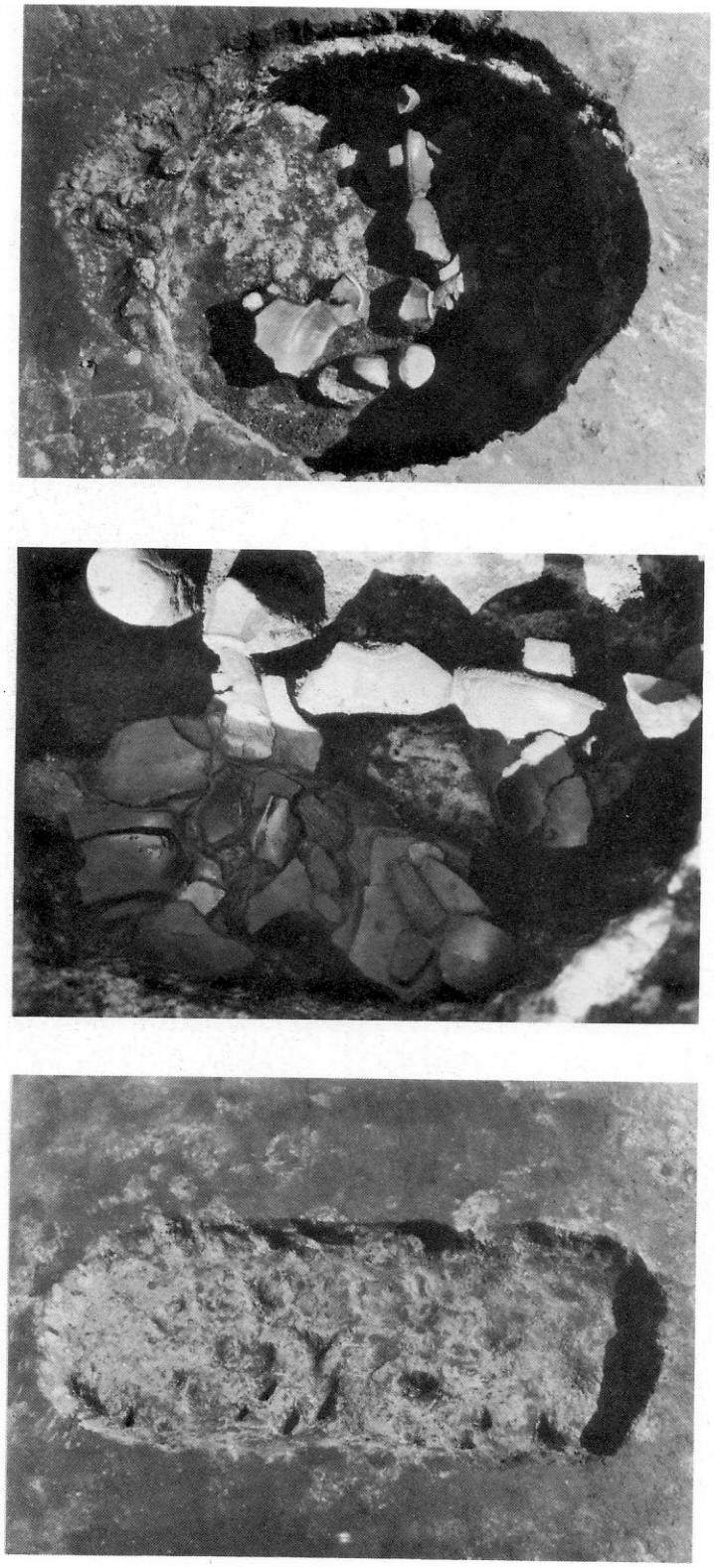
図版15　ＳＫ33・35・同土器出土状態

図版16　SK36・同土製品出土状態・SK51・52

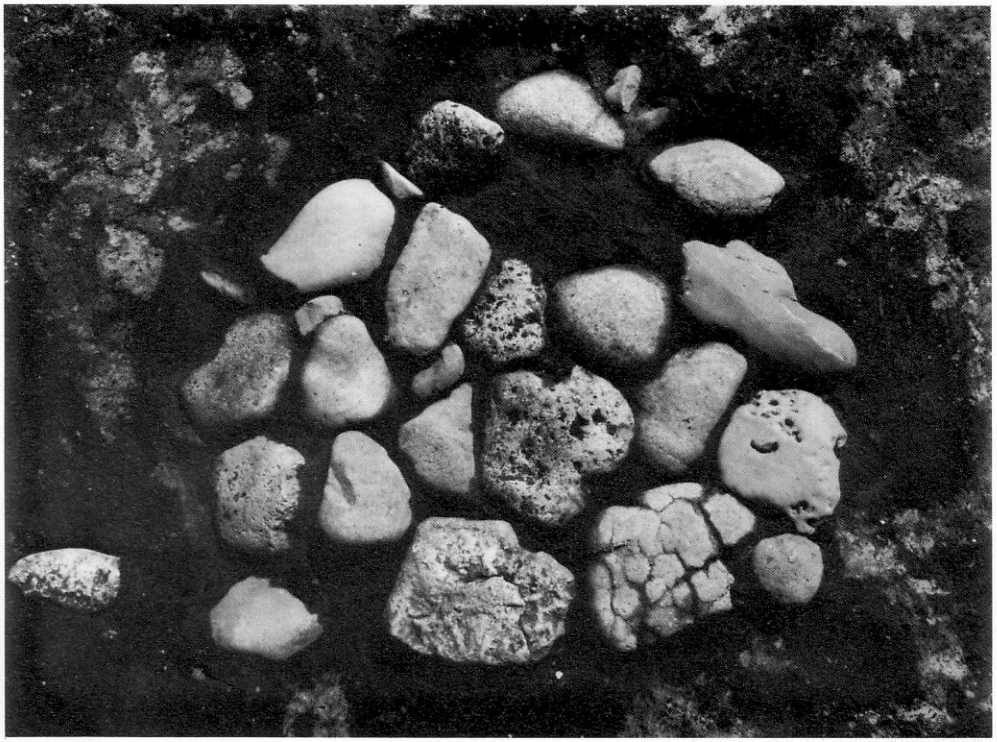


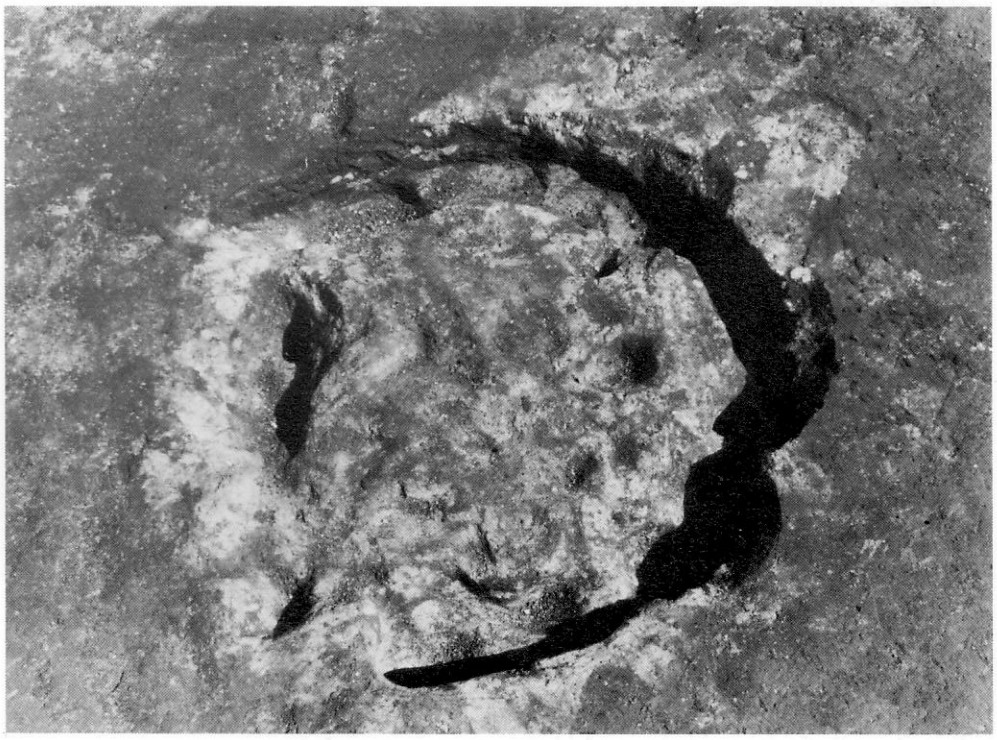


図版17　SK55・59・74

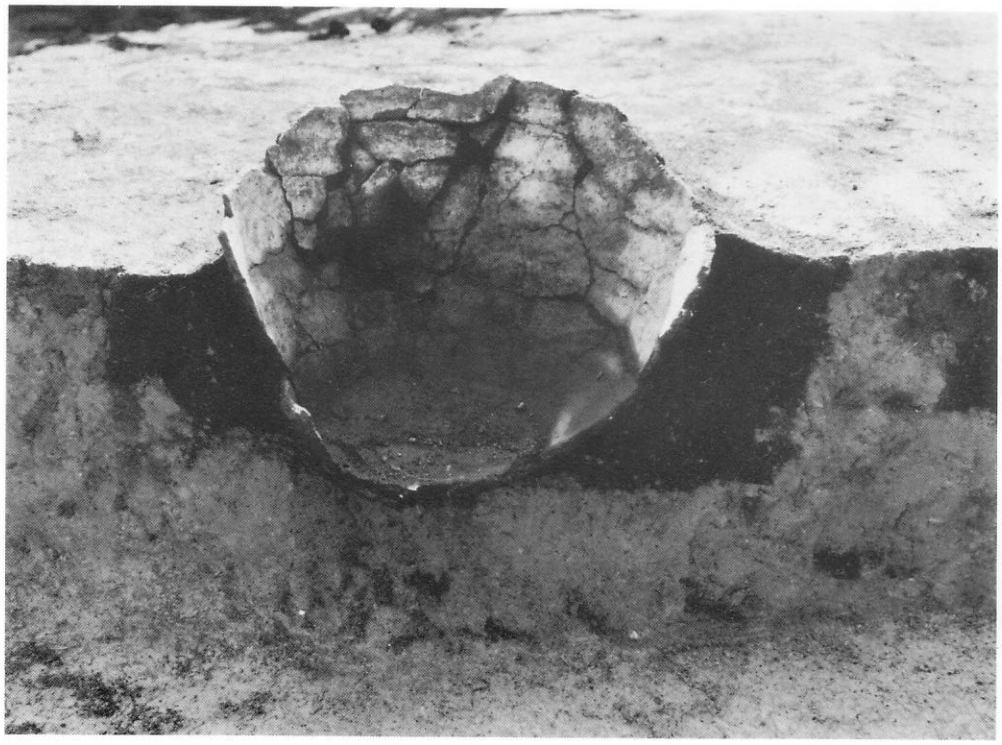


図版18　SK155・同土器出土状態・SK156

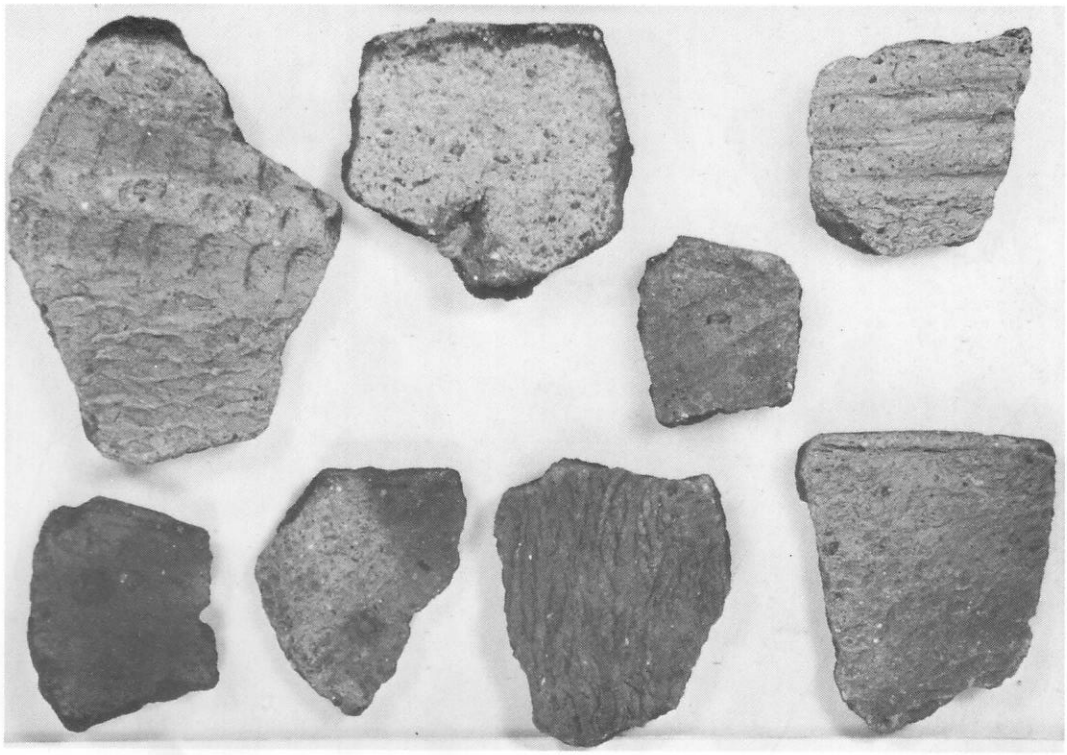


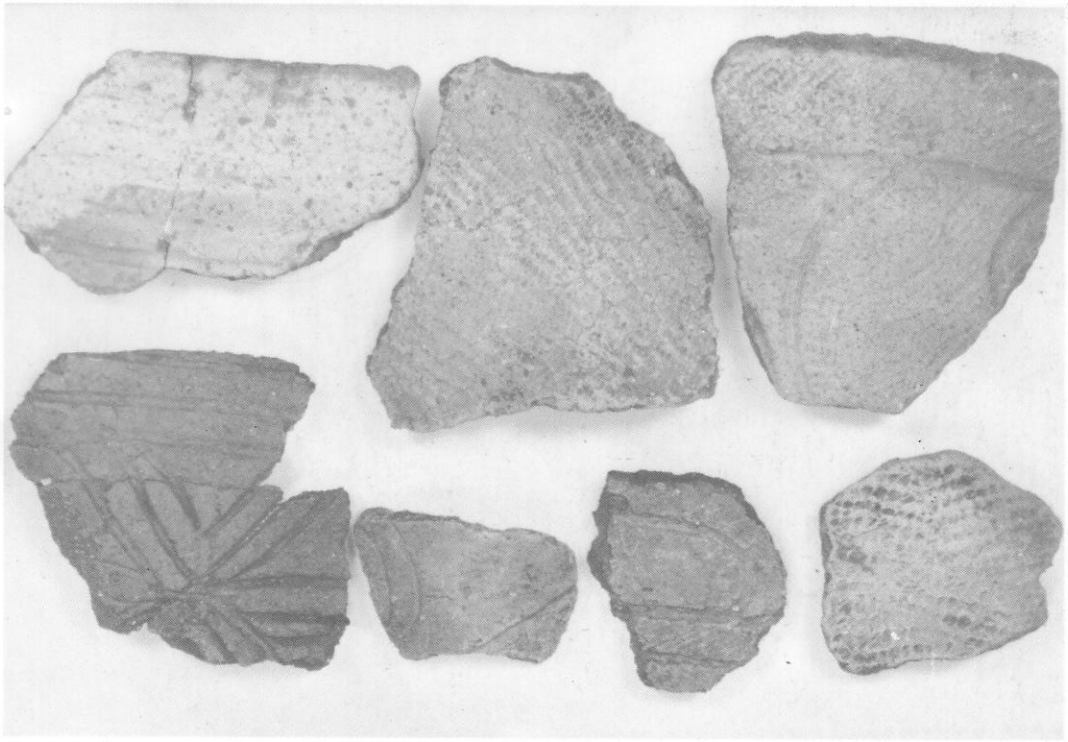


図版19　配石遺構・同石除去後



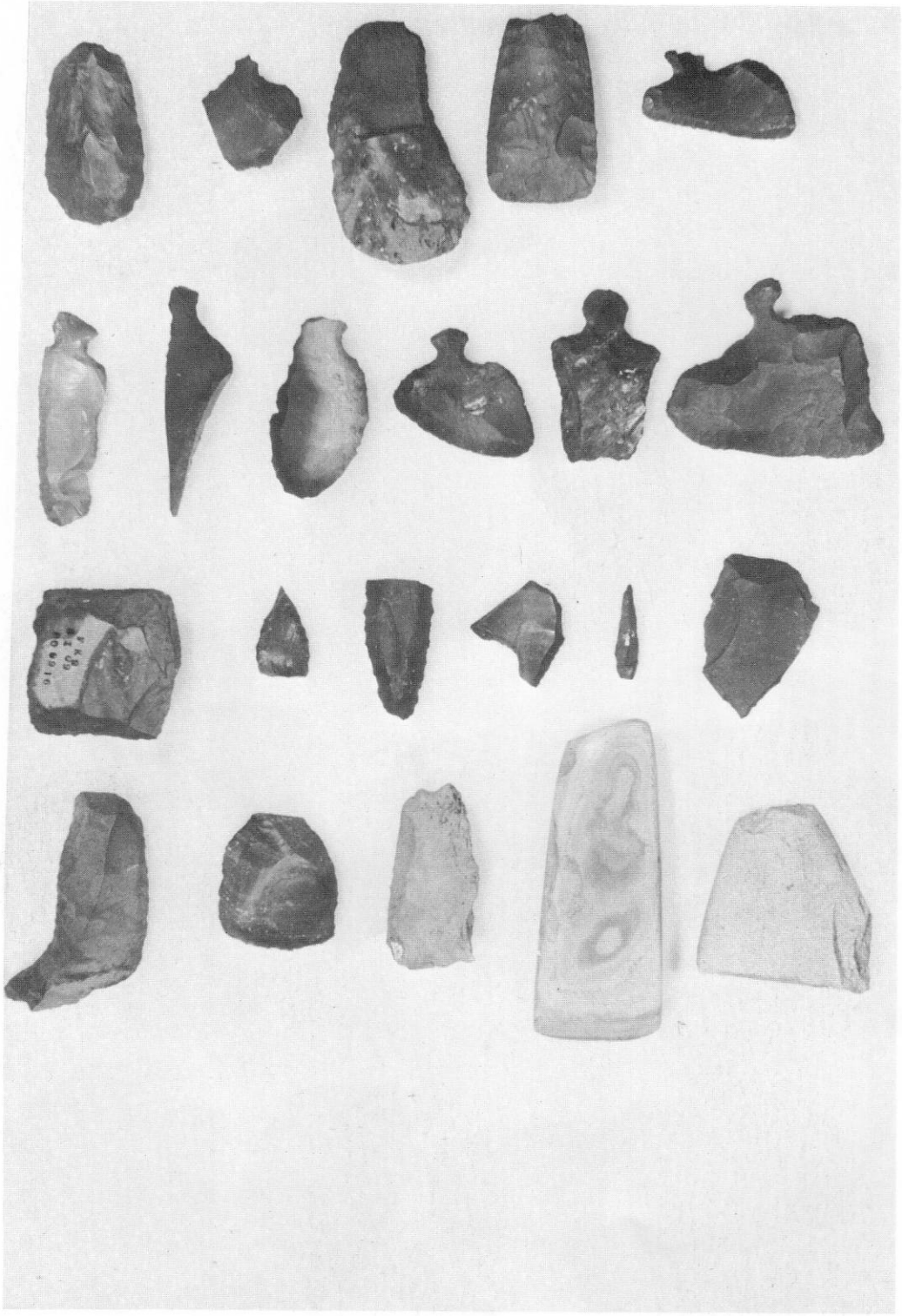
図版20　埋甕



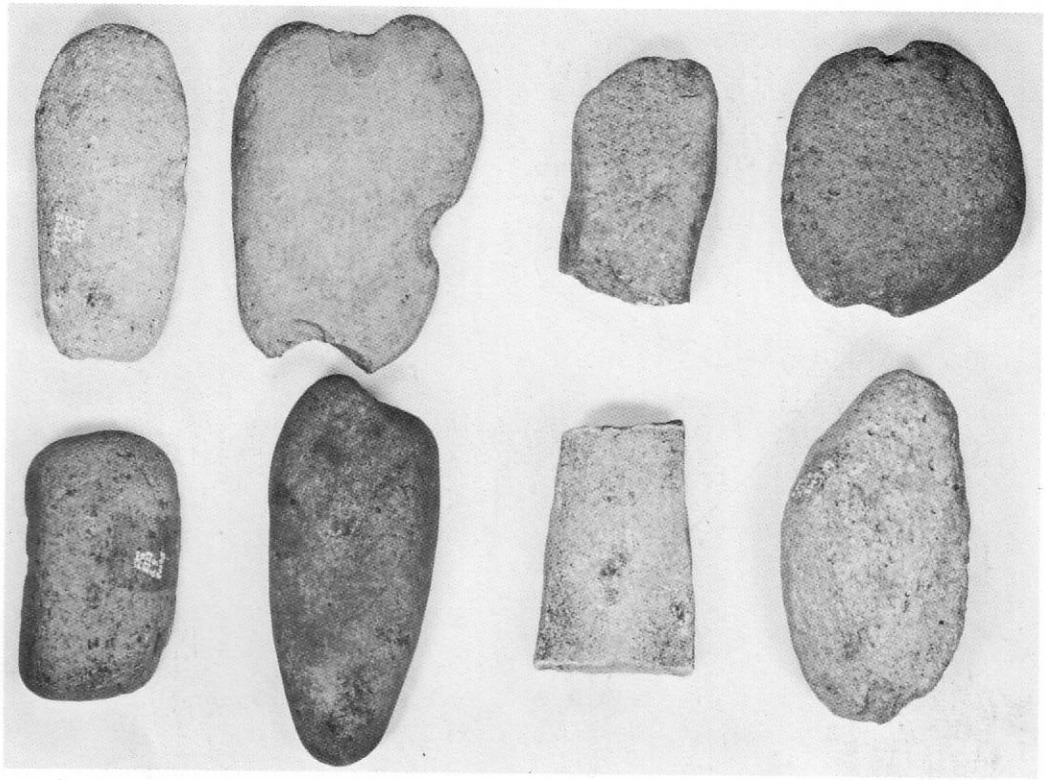


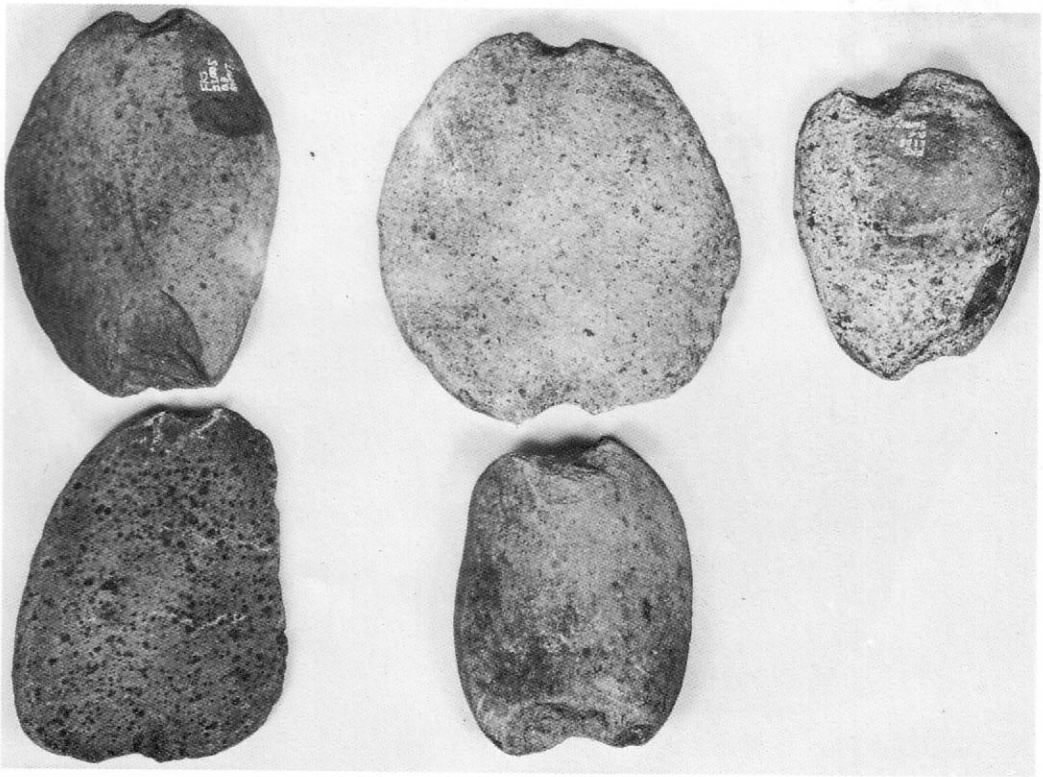
図版21　SI 09出土土器

SI 14出土土器

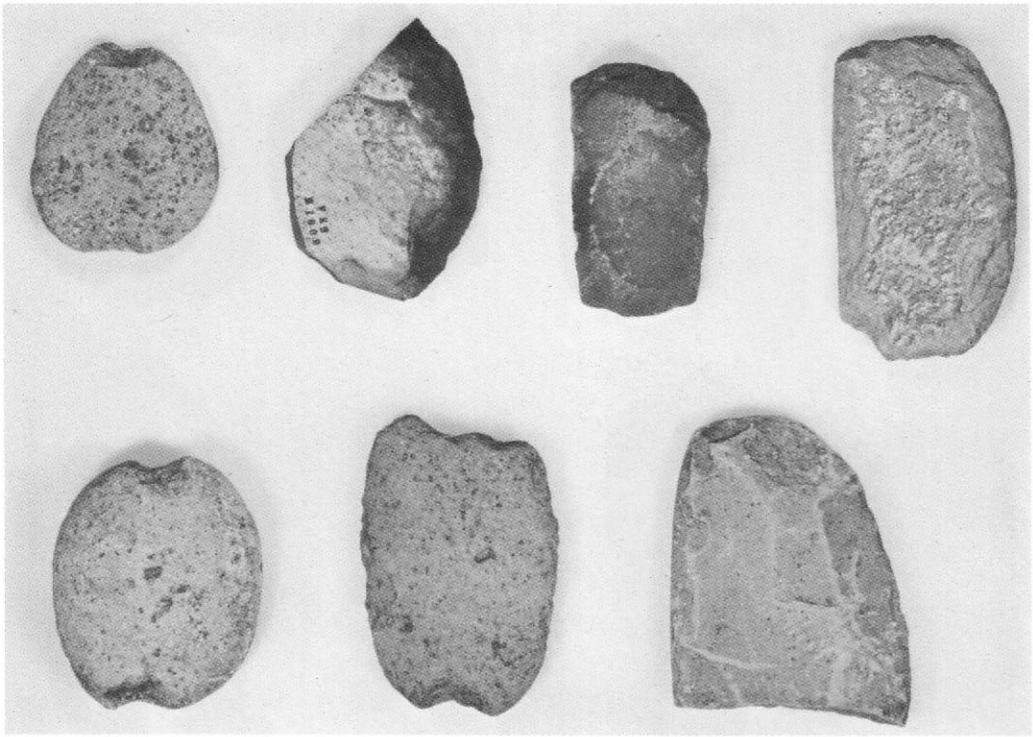


図版22　住居跡出土石器

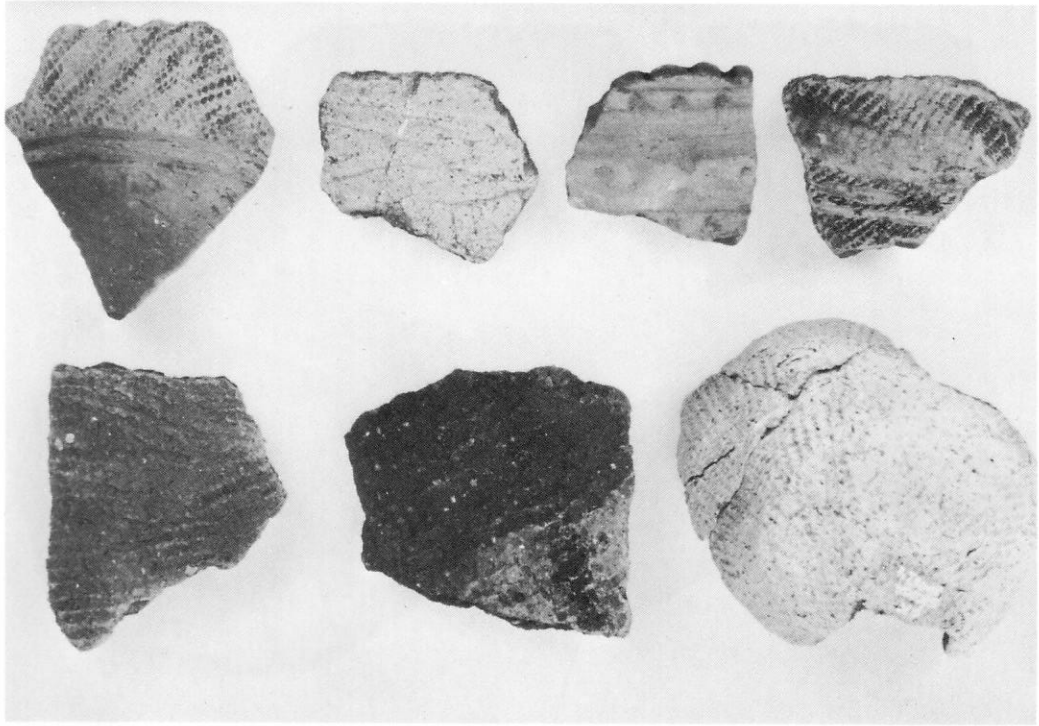


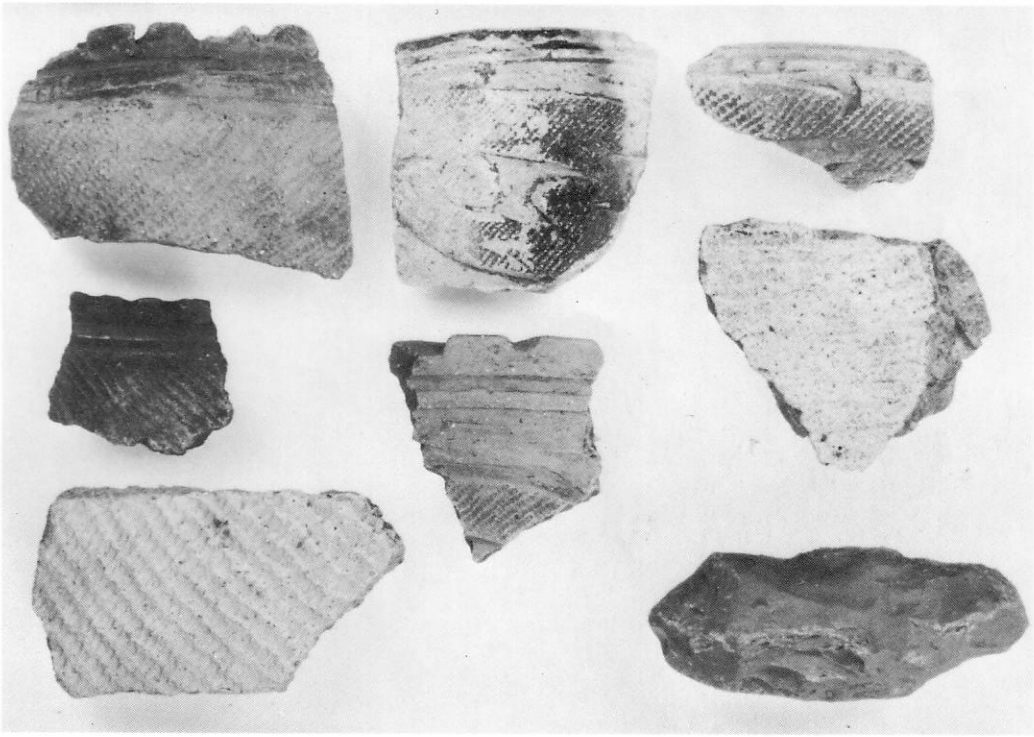


図版23　住居跡出土石器



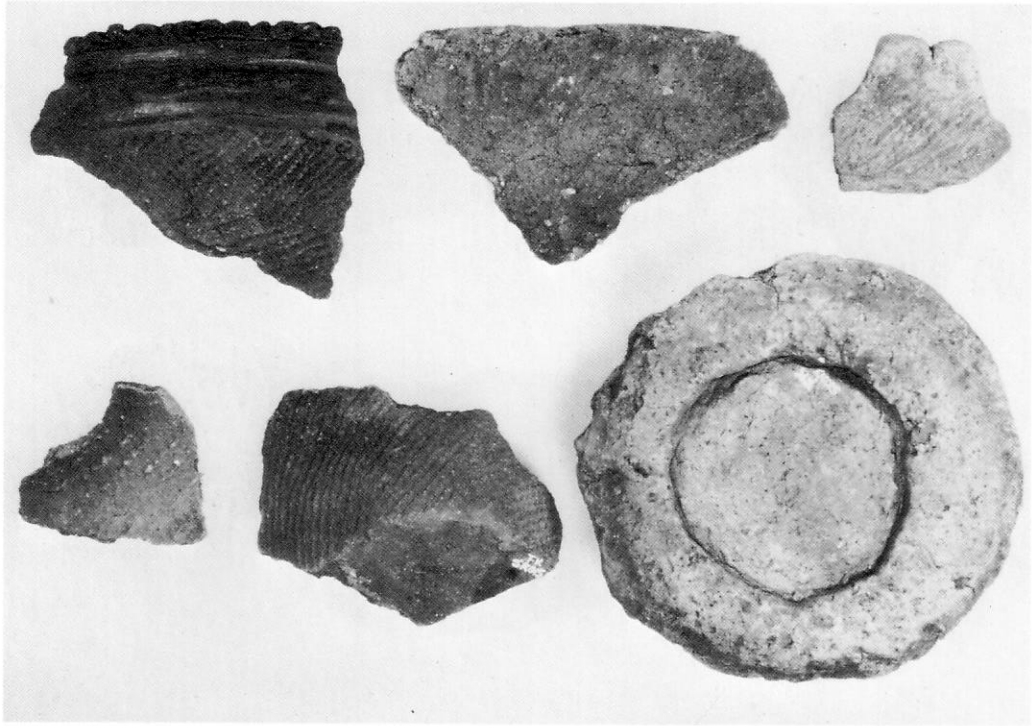
図版24　Ⅲ区埋甕・住居跡出土石器





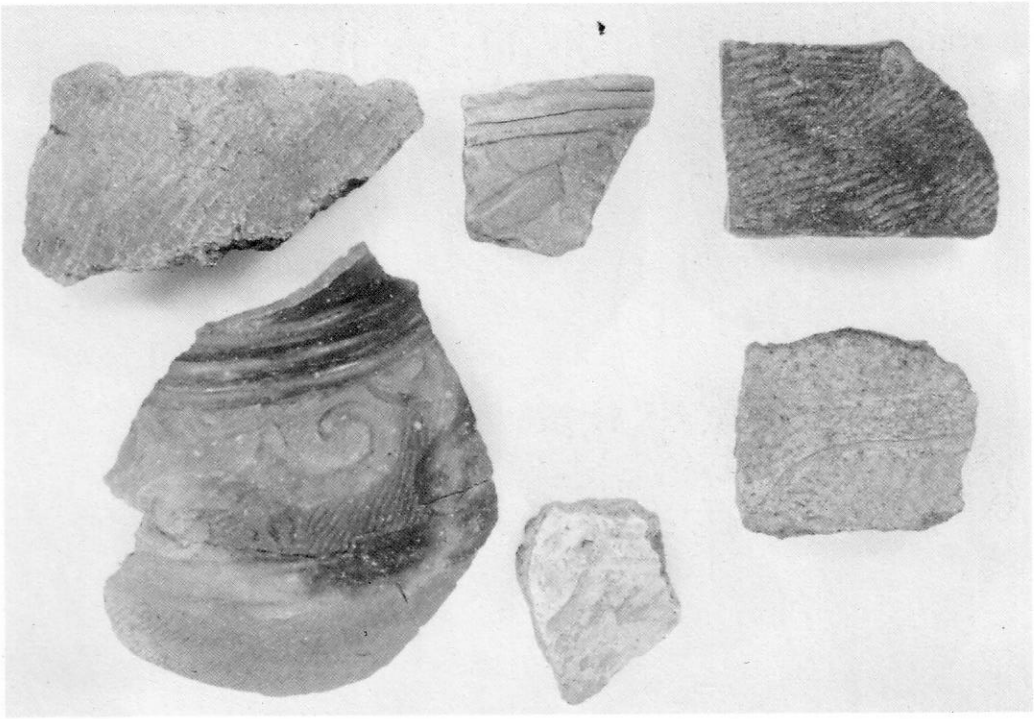
図版25　ＳＫ04出土土器

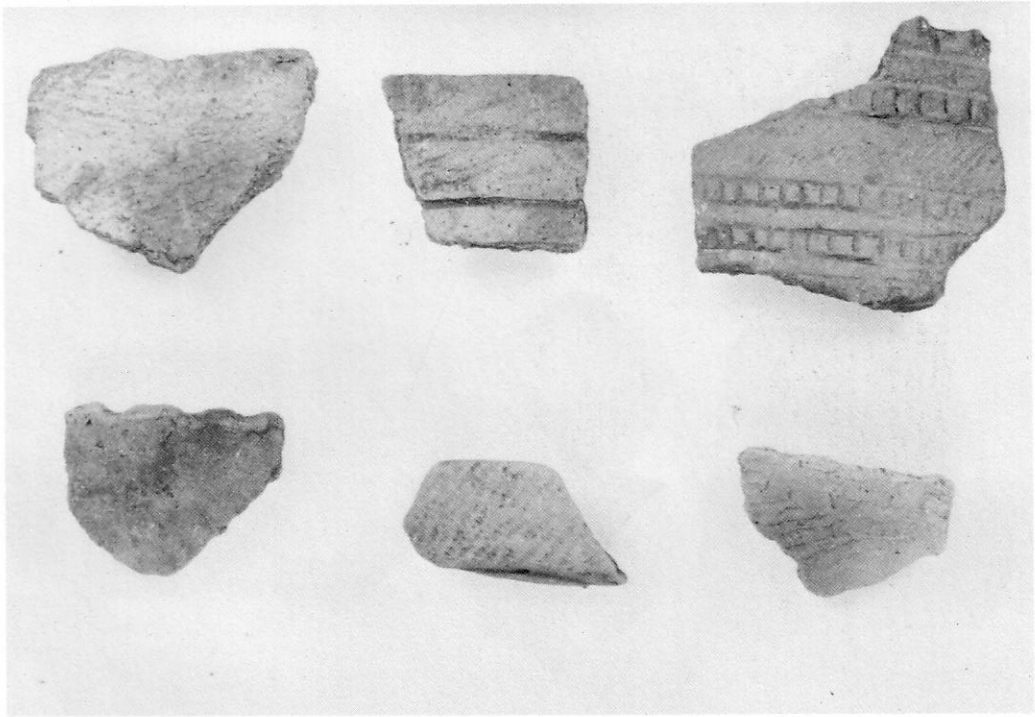
ＳＫ05出土土器



図版26　ＳＫ15出土土器

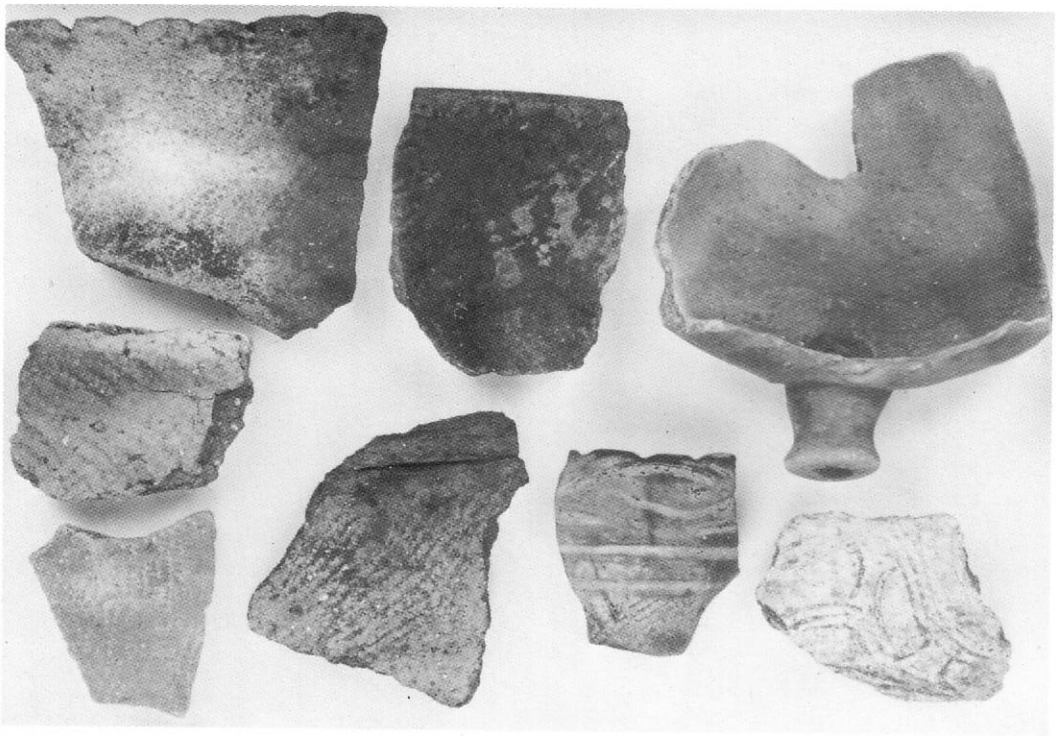
ＳＫ17出土土器

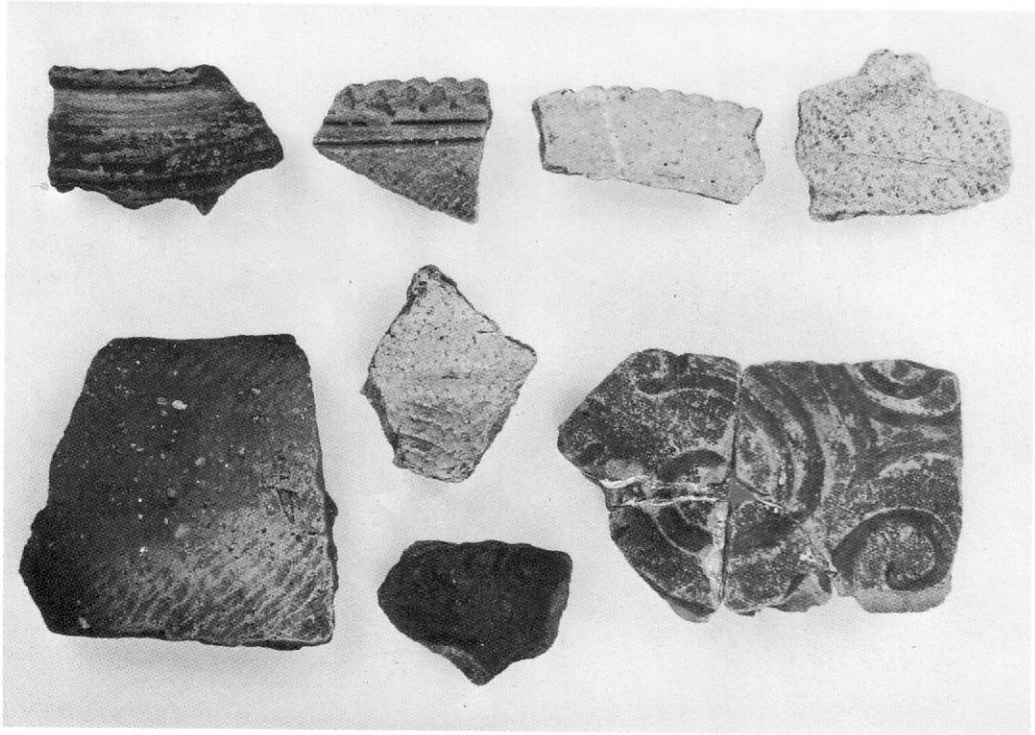




図版27　ＳＫ20出土土器

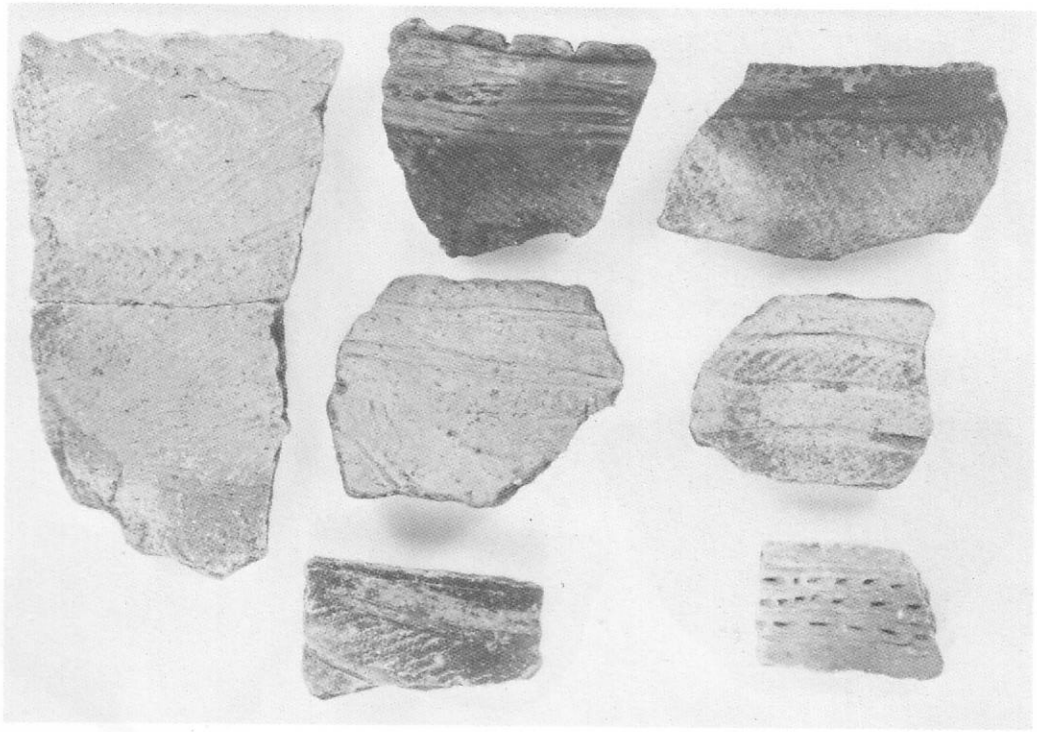
　　ＳＫ26出土土器

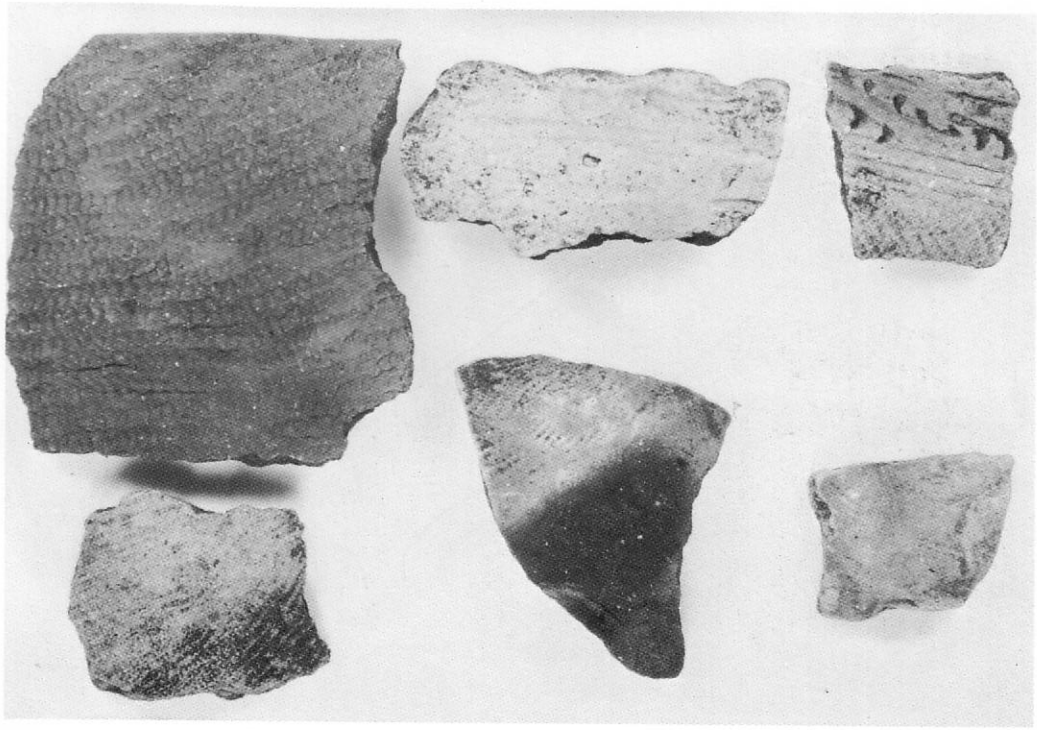




図版28　ＳＫ30出土土器

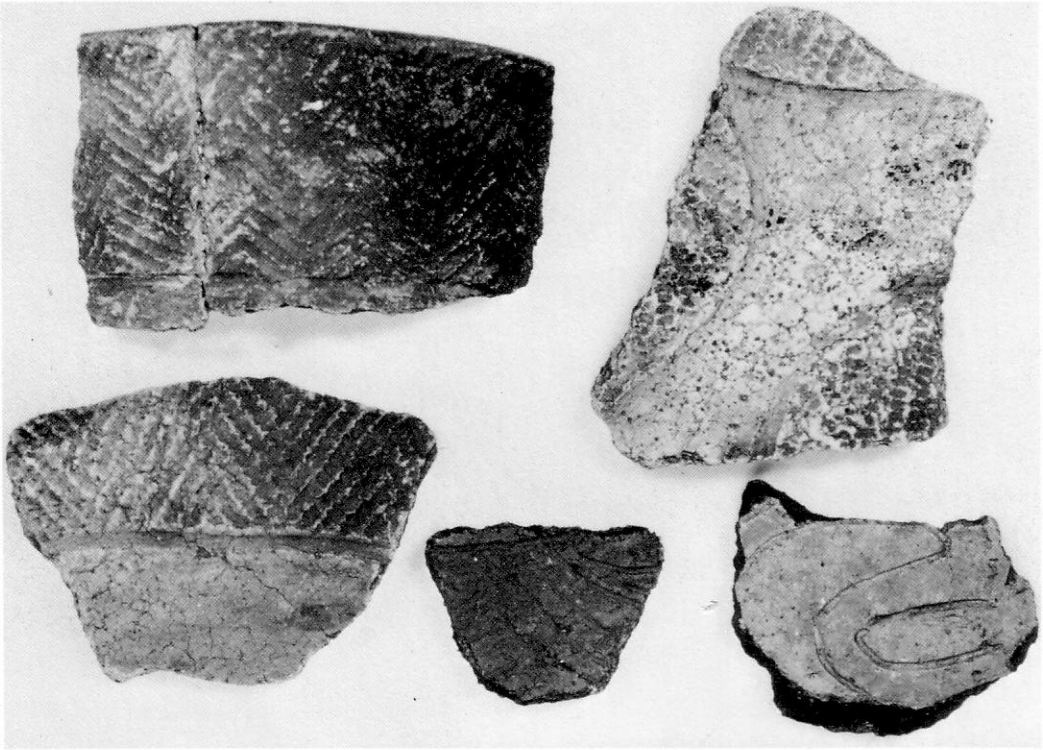
ＳＫ32出土土器

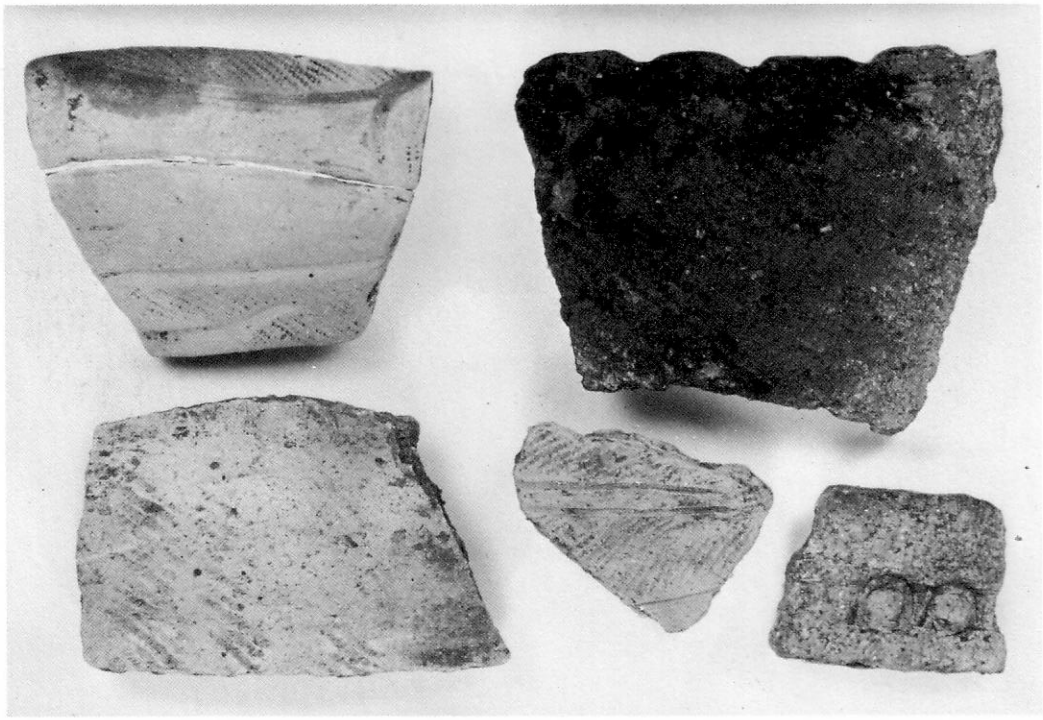




図版29　ＳＫ41出土土器

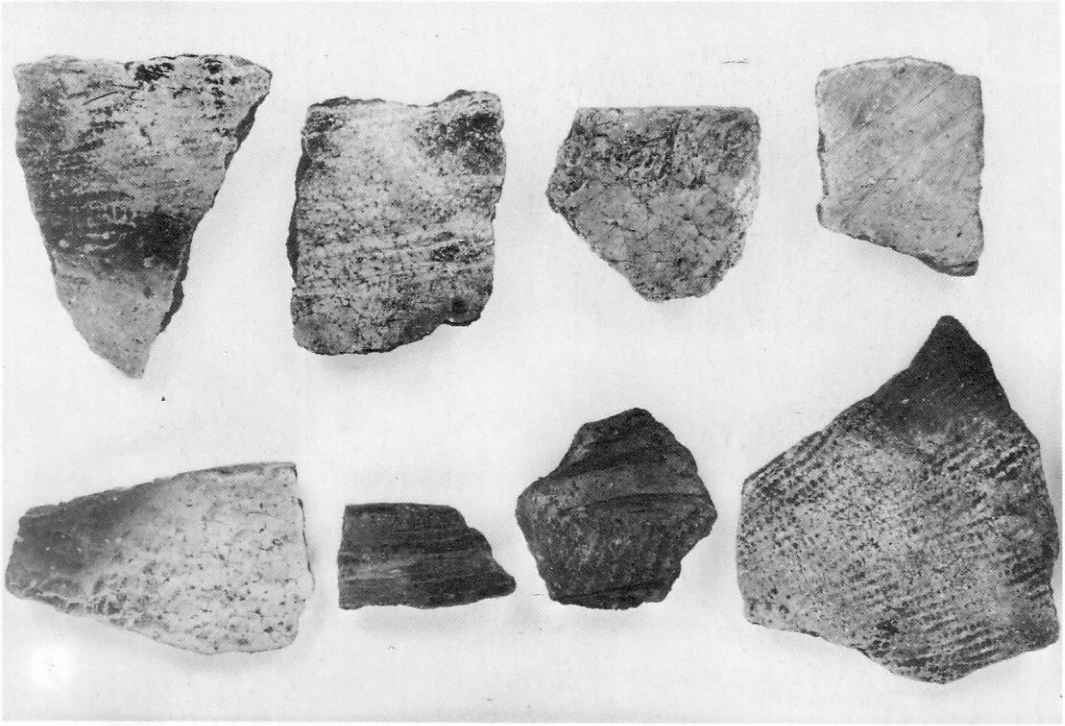
　　ＳＫ43出土土器

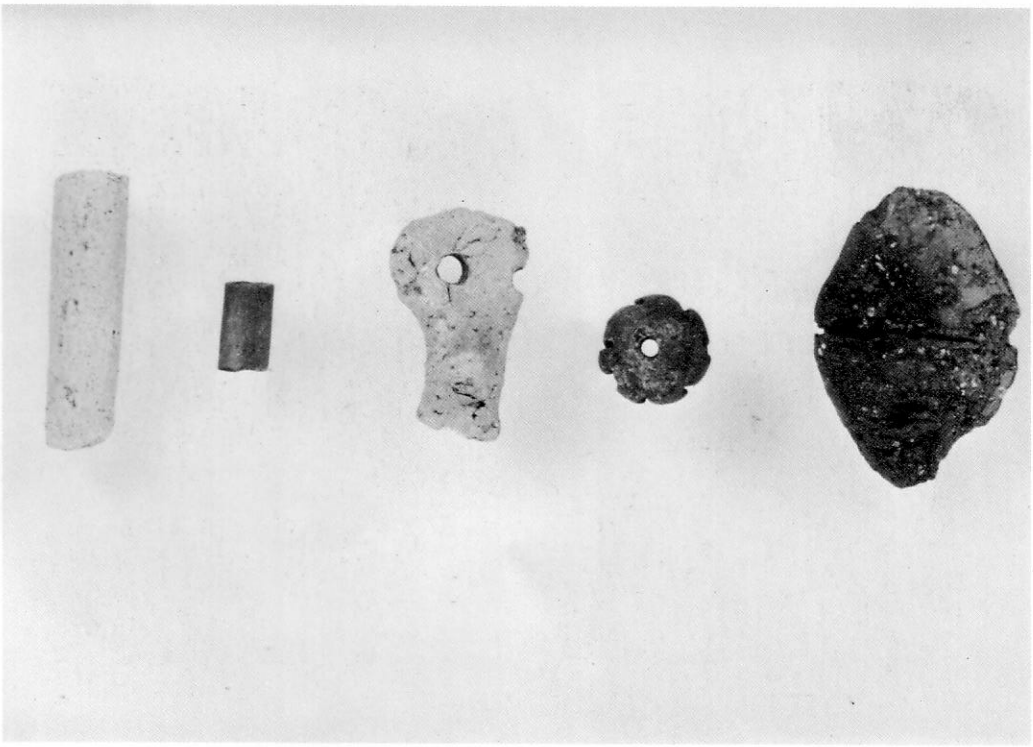




図版30　SK45出土土器

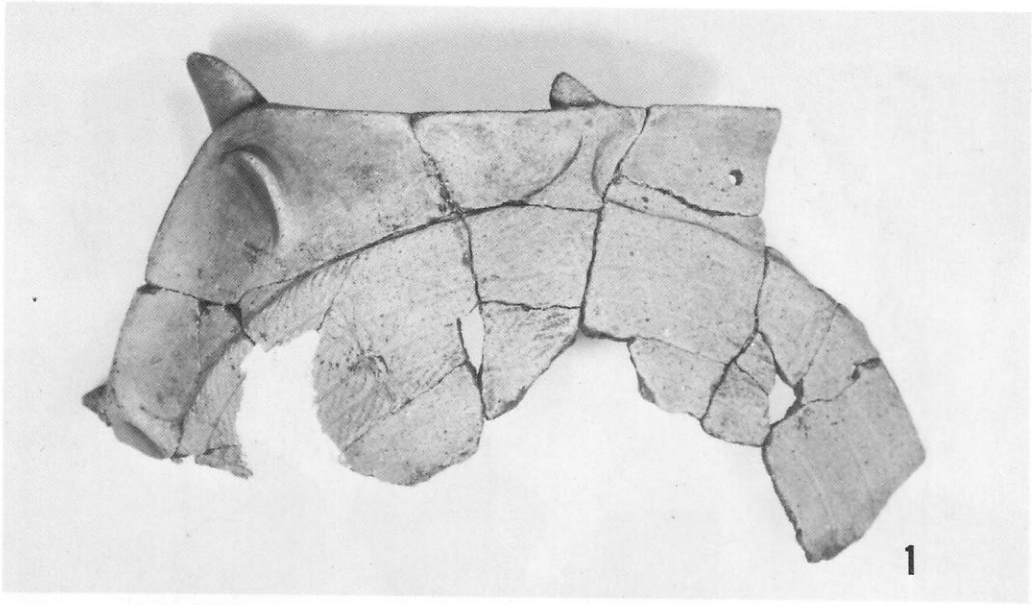
SK65出土土器

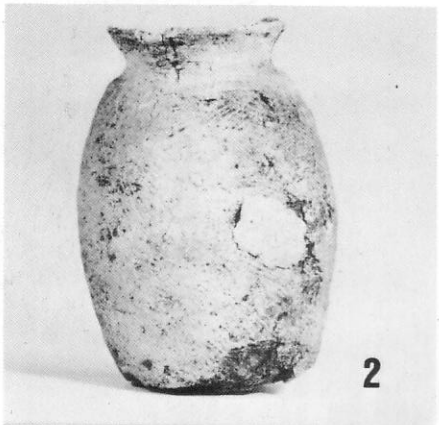


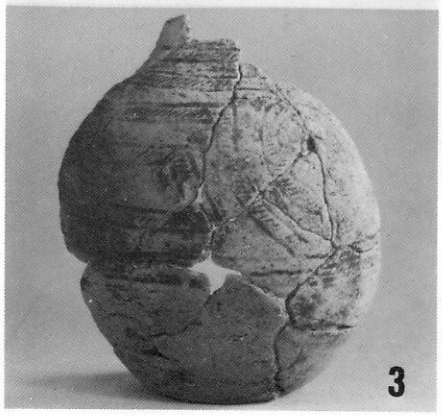


図版31　ＳＫ74出土土器

土坑内出土・土製品

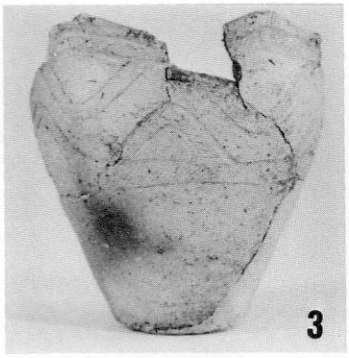


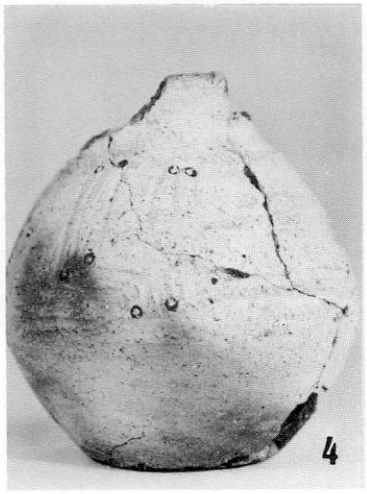


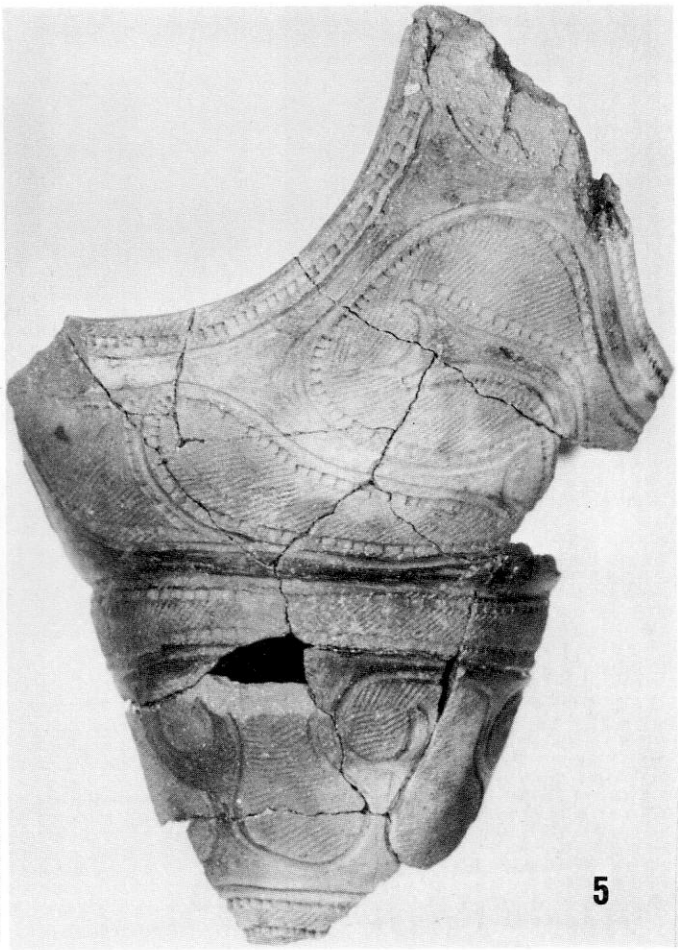


図版32　SI 15出土土器

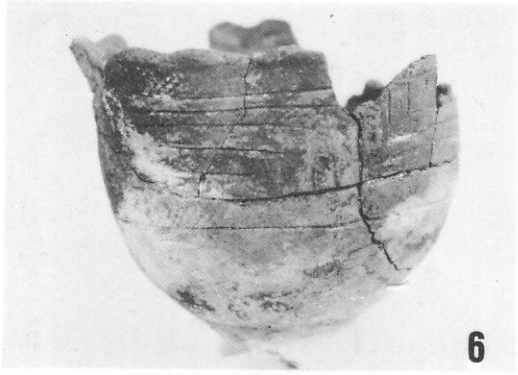
SK35・57・155出土土器

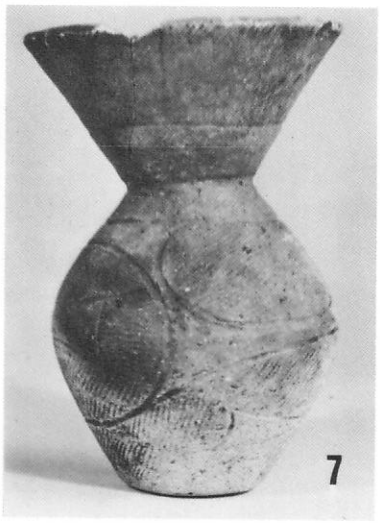


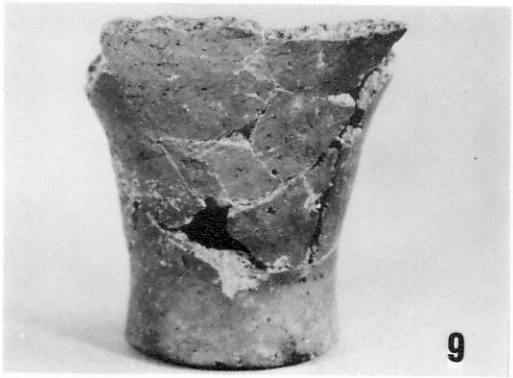


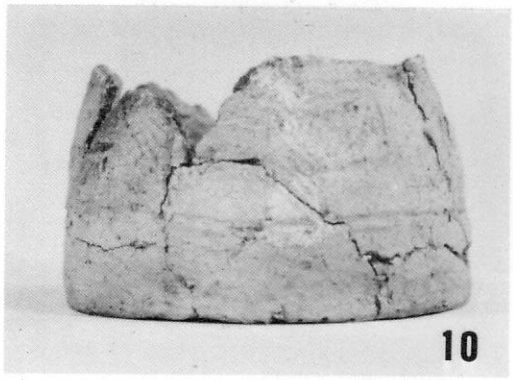


図版33　深針・壺形土器

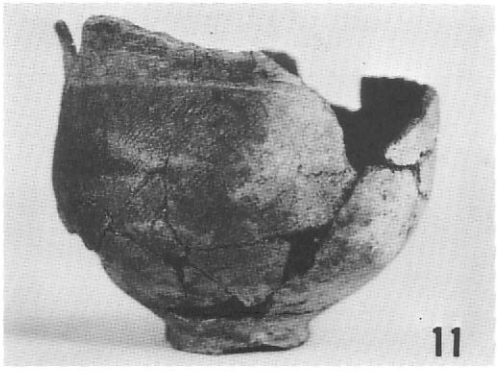


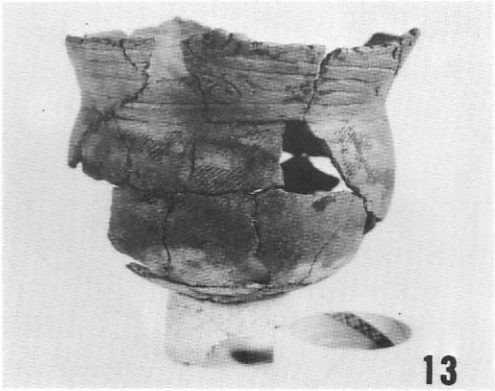


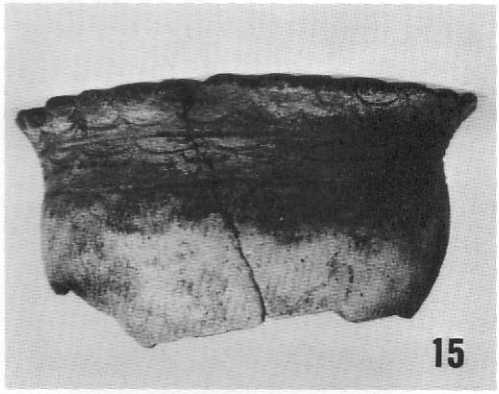




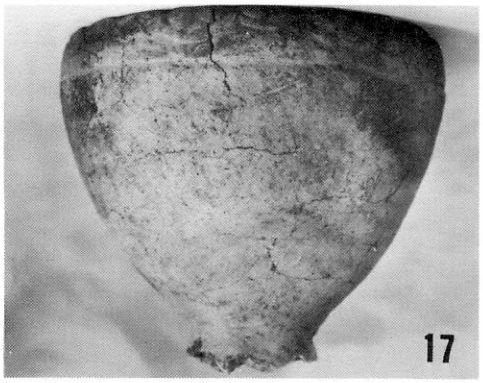
図版34　深鉢形土器・壺形土器

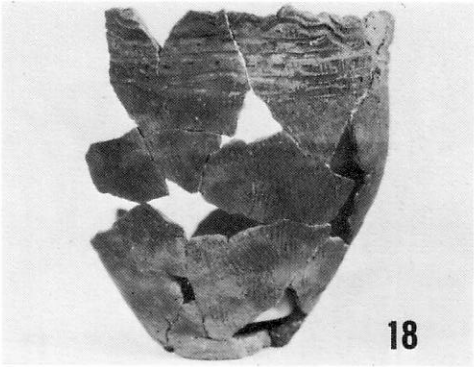


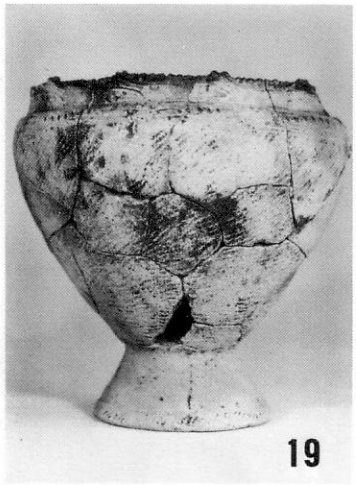


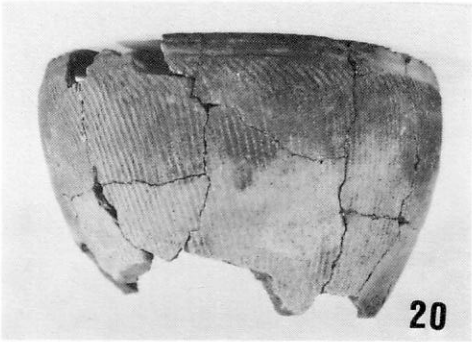


図版35　台付鉢形土器

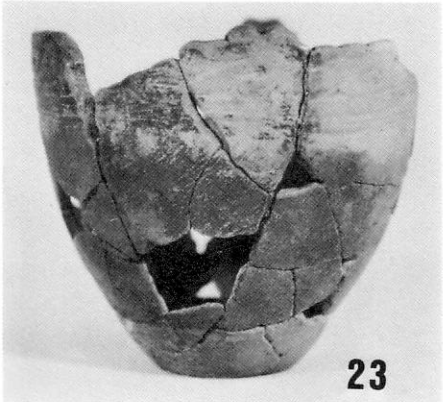


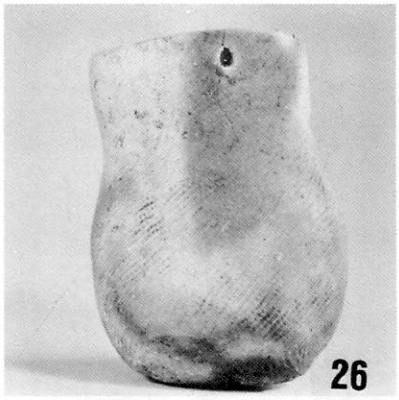


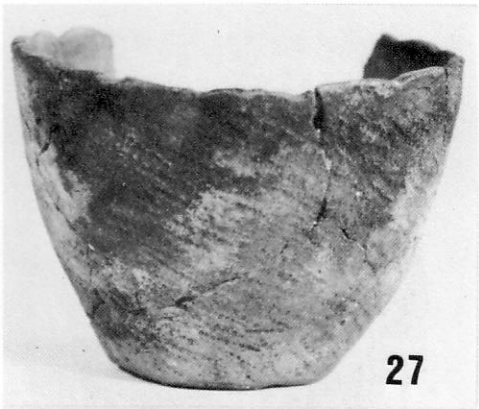


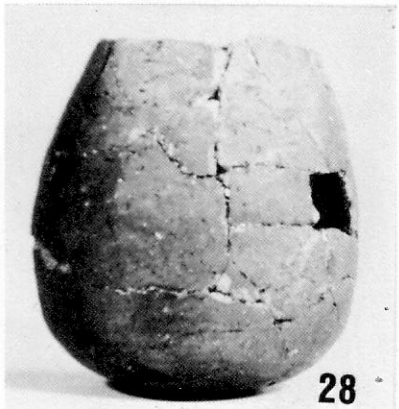


図版36　台付鉢形土器・鉢形土器

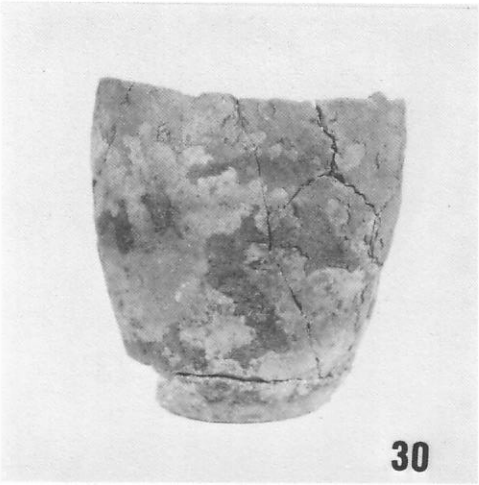


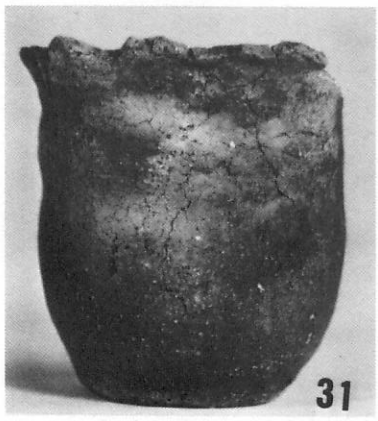


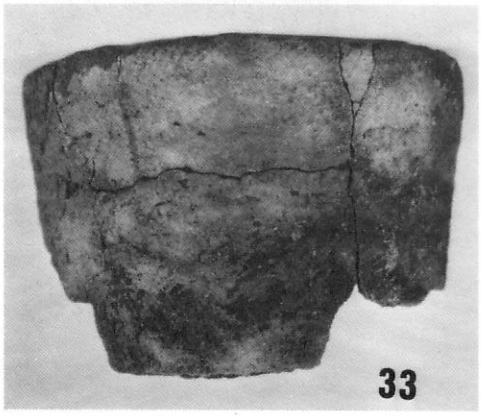


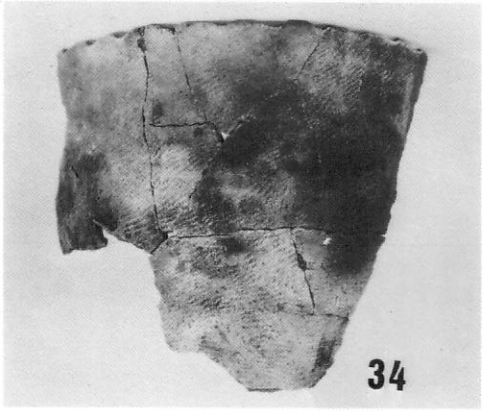


図版37　鉢形土器

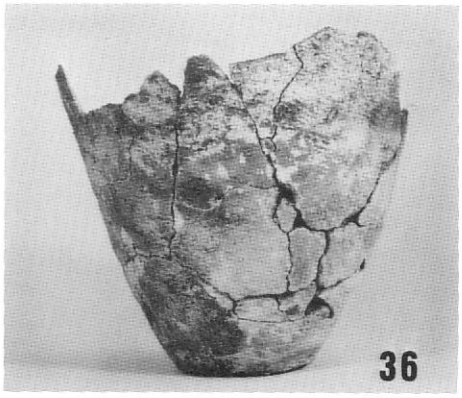


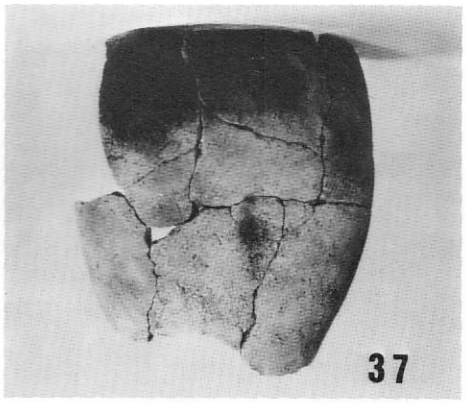


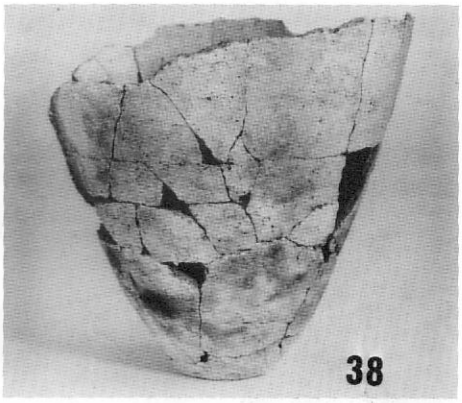


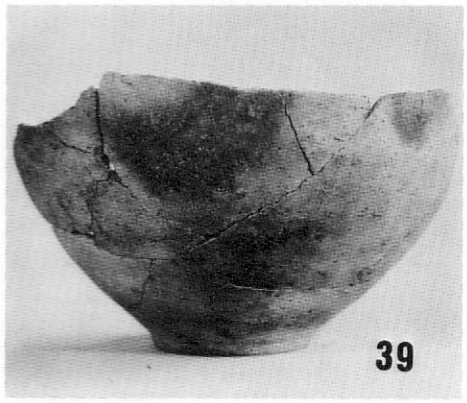


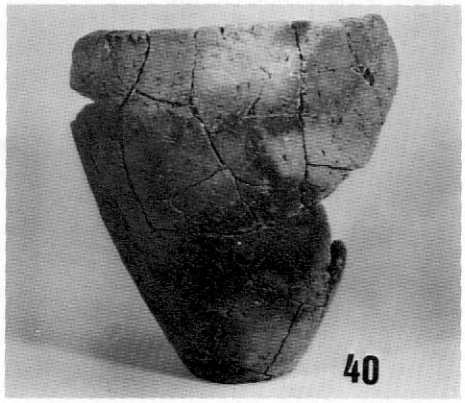
図版38　鉢形土器



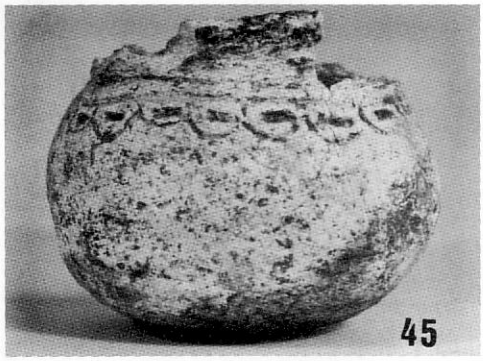


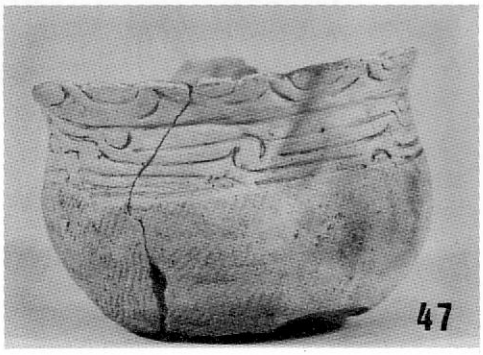




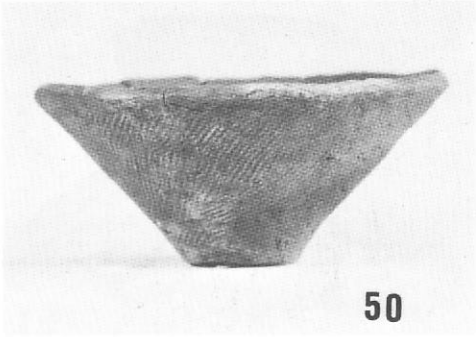


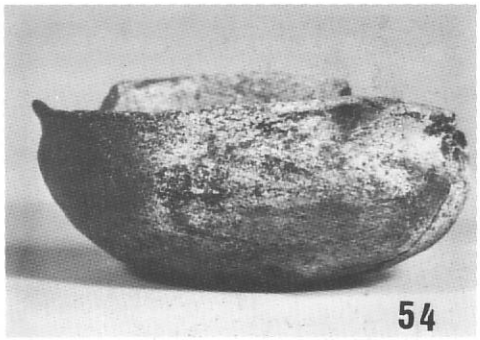
図版39　鉢形土器

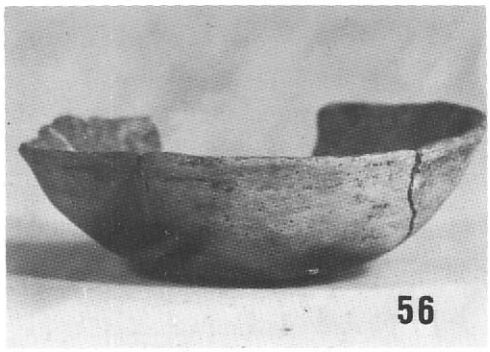




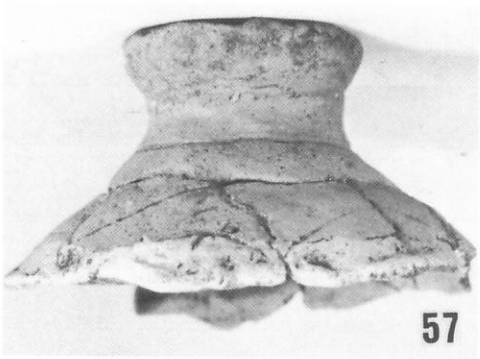
図版40　浅鉢形土器

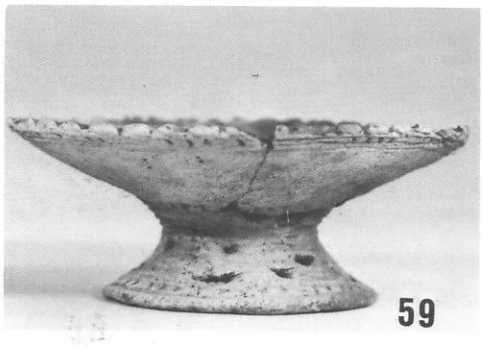


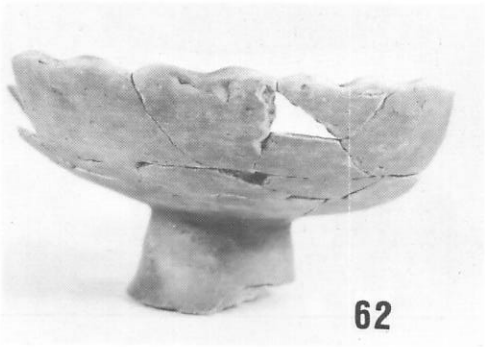




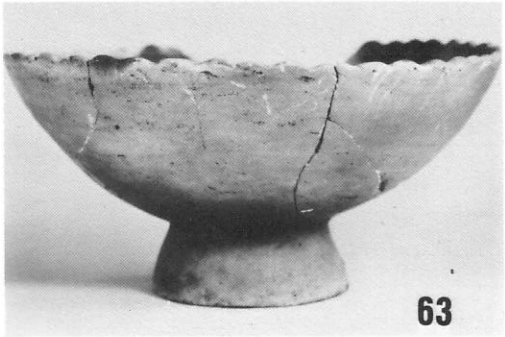
図版41　浅鉢形土器

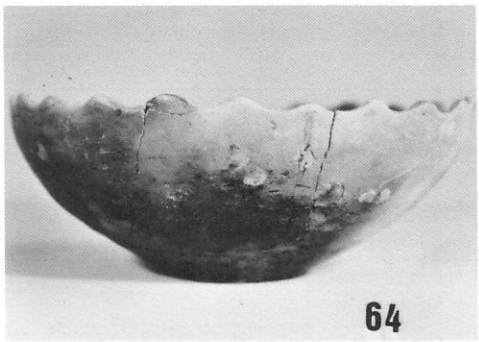


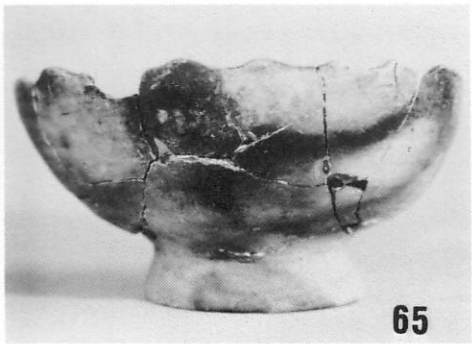


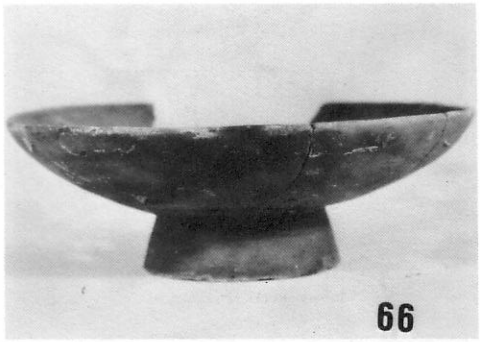


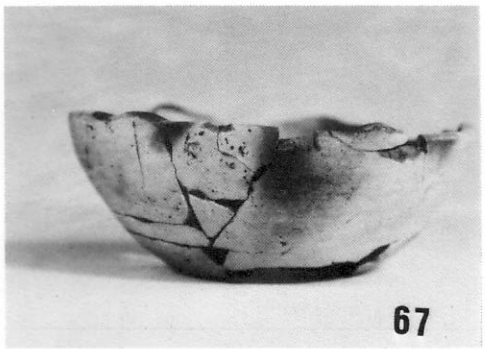
図版42　台付浅鉢形土器



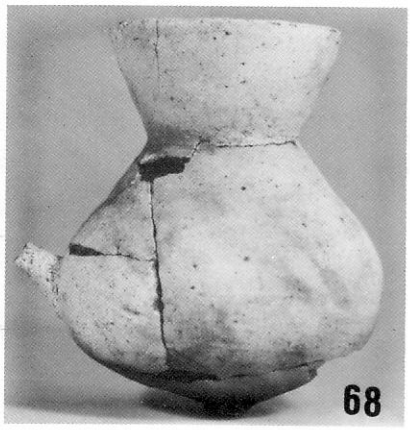


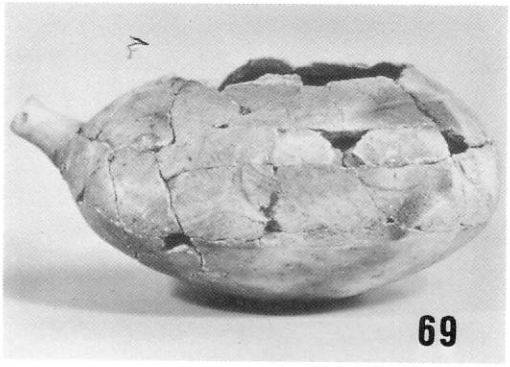


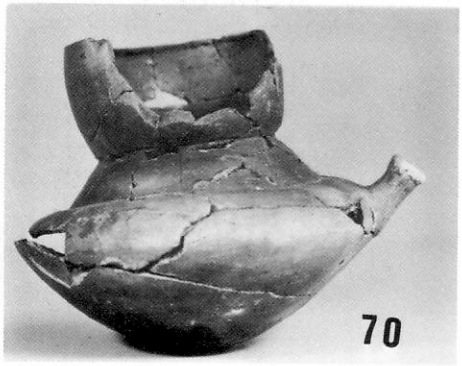


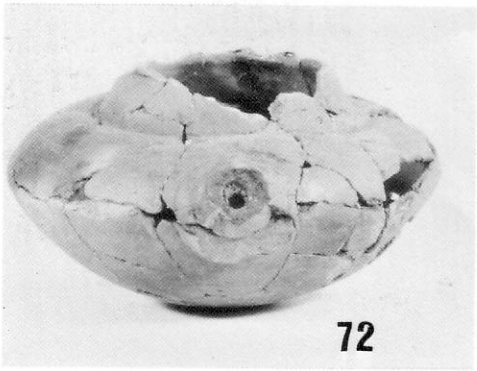


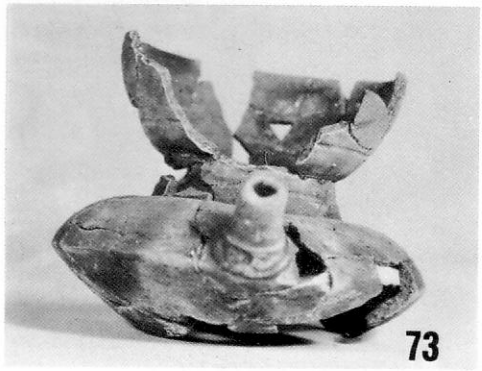
図版43　台付浅鉢形土器



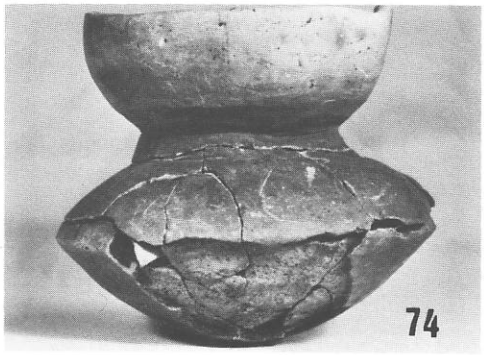


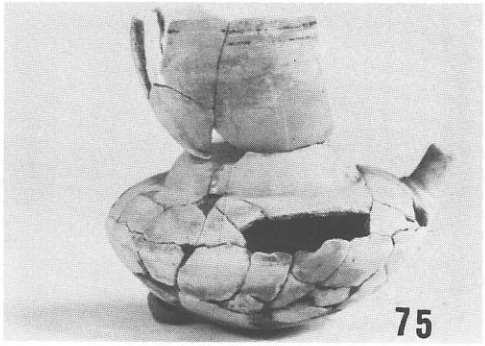


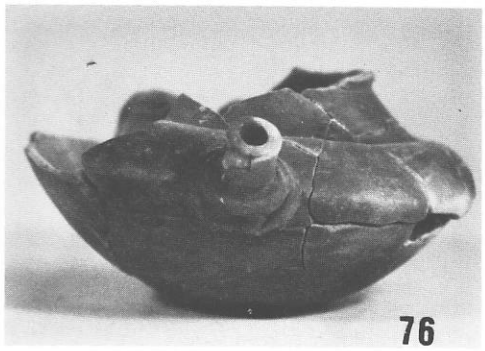


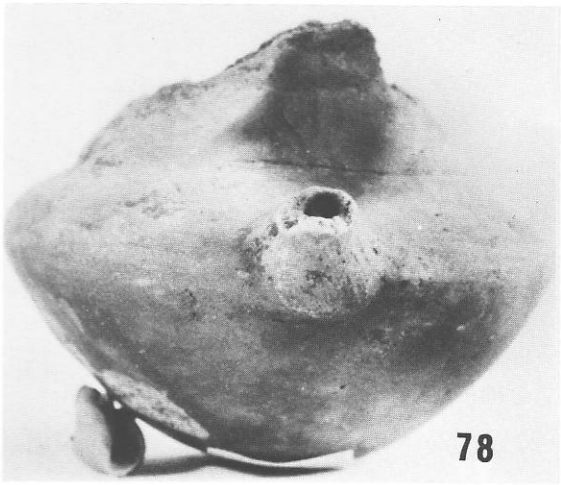


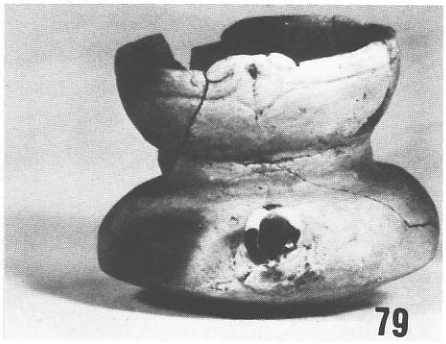
図版44　注口土器



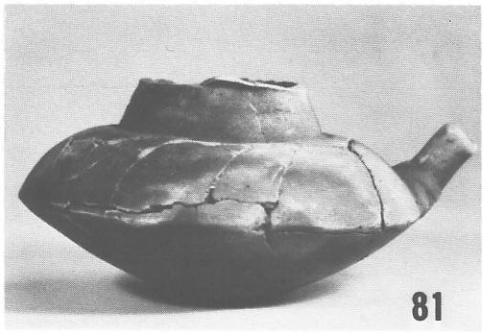


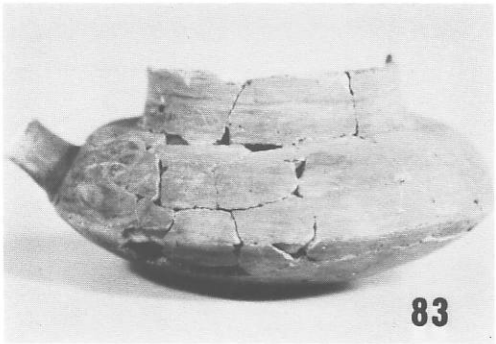


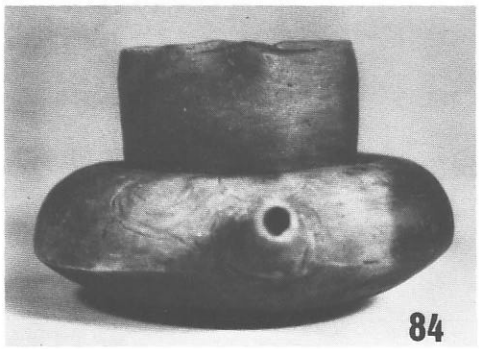




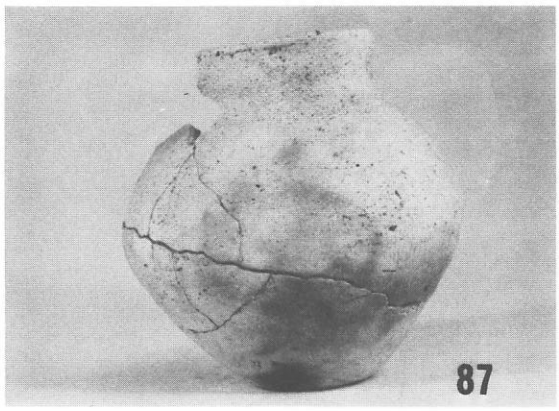
図版45　注口土器

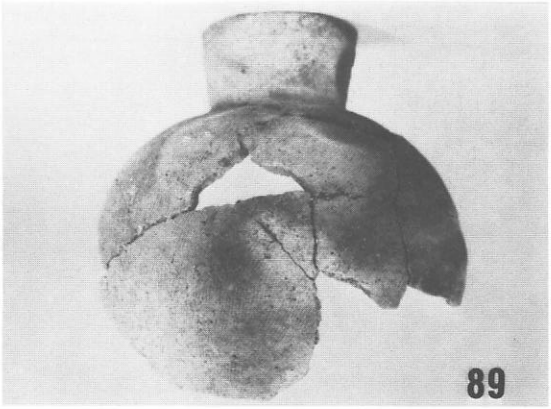




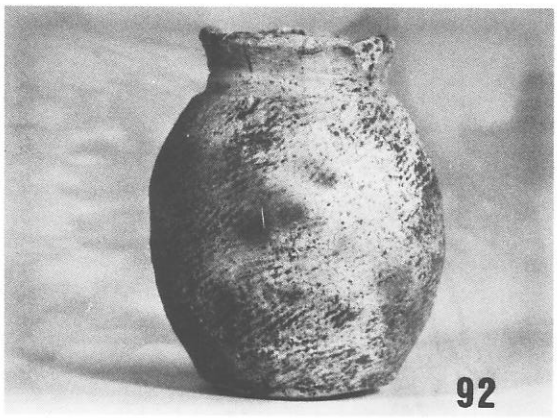


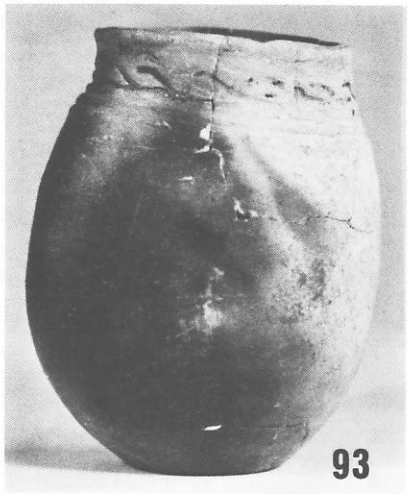
図版46　注口土器



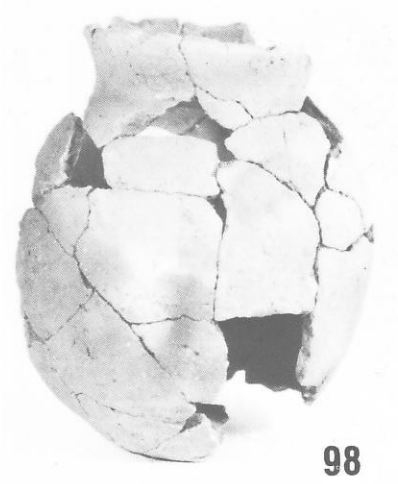


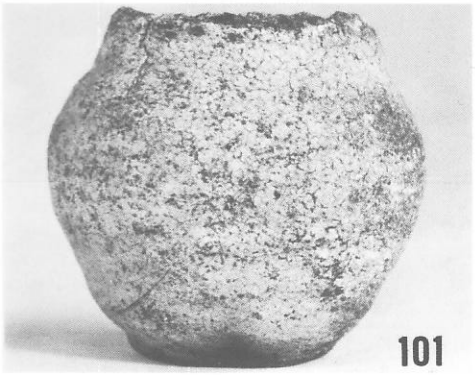
図版47　壺形土器



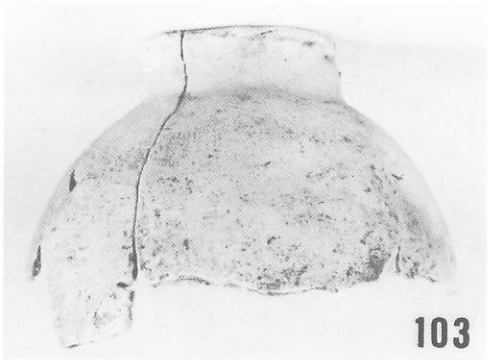


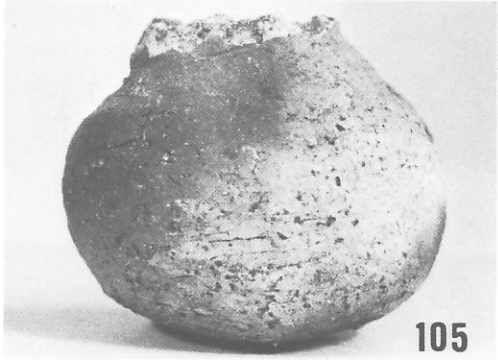
図版48　壺形土器

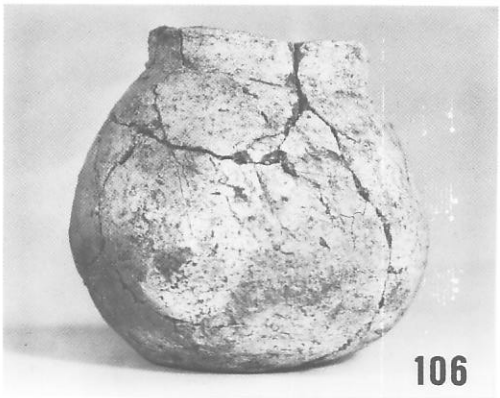


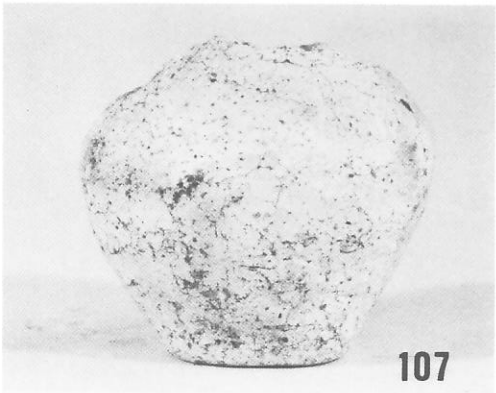


図版49　壺形土器

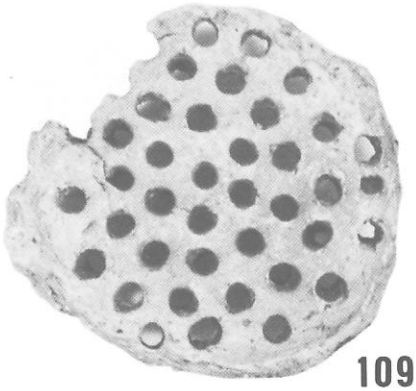


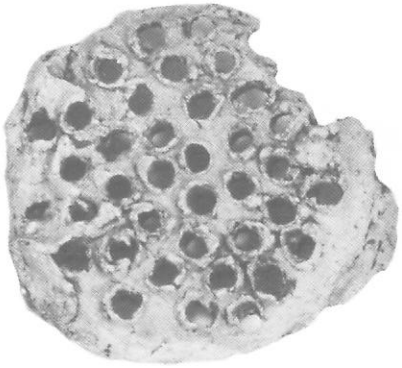




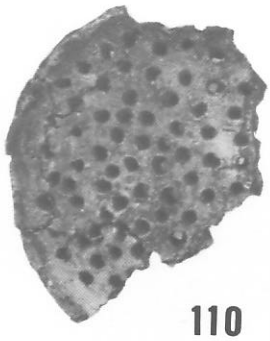


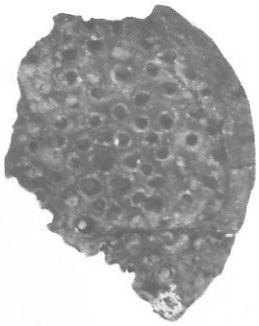
図版50　壺形土器





109

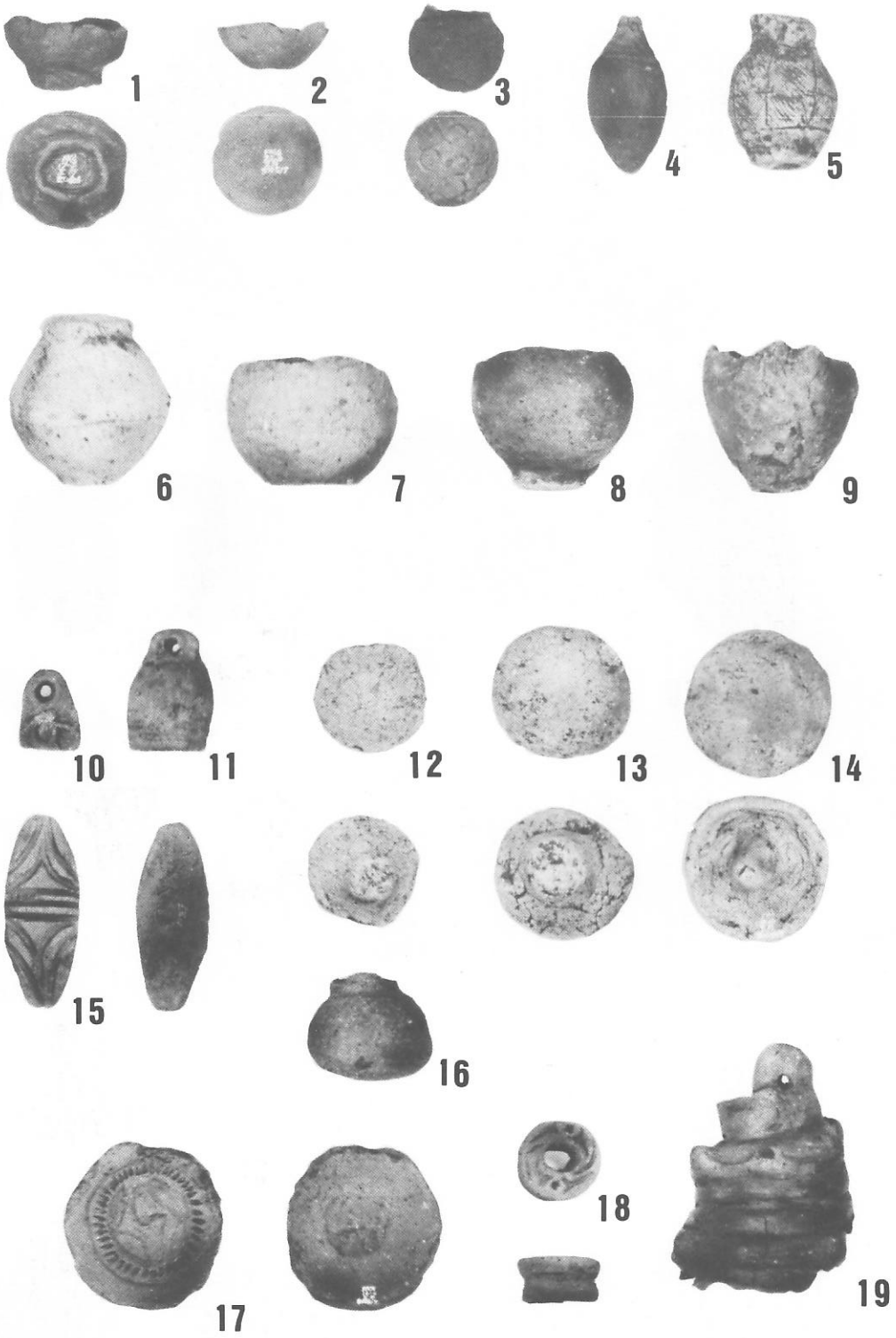




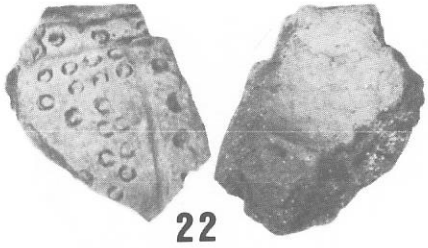
110

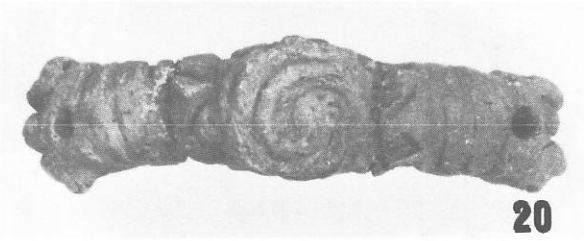
111

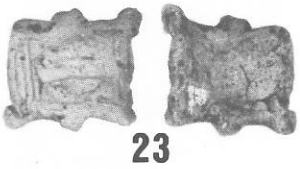
図版51　多孔底土器

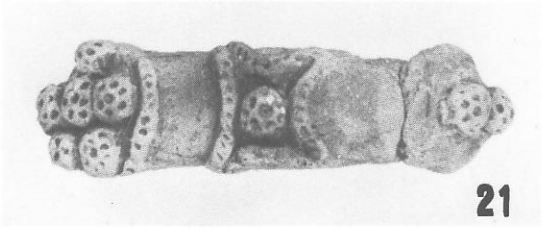


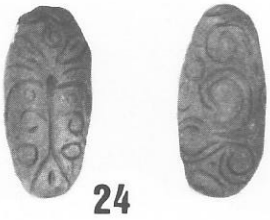
図版52　土製品

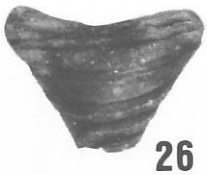


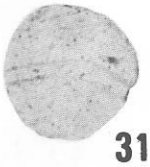


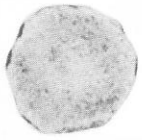


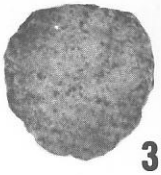










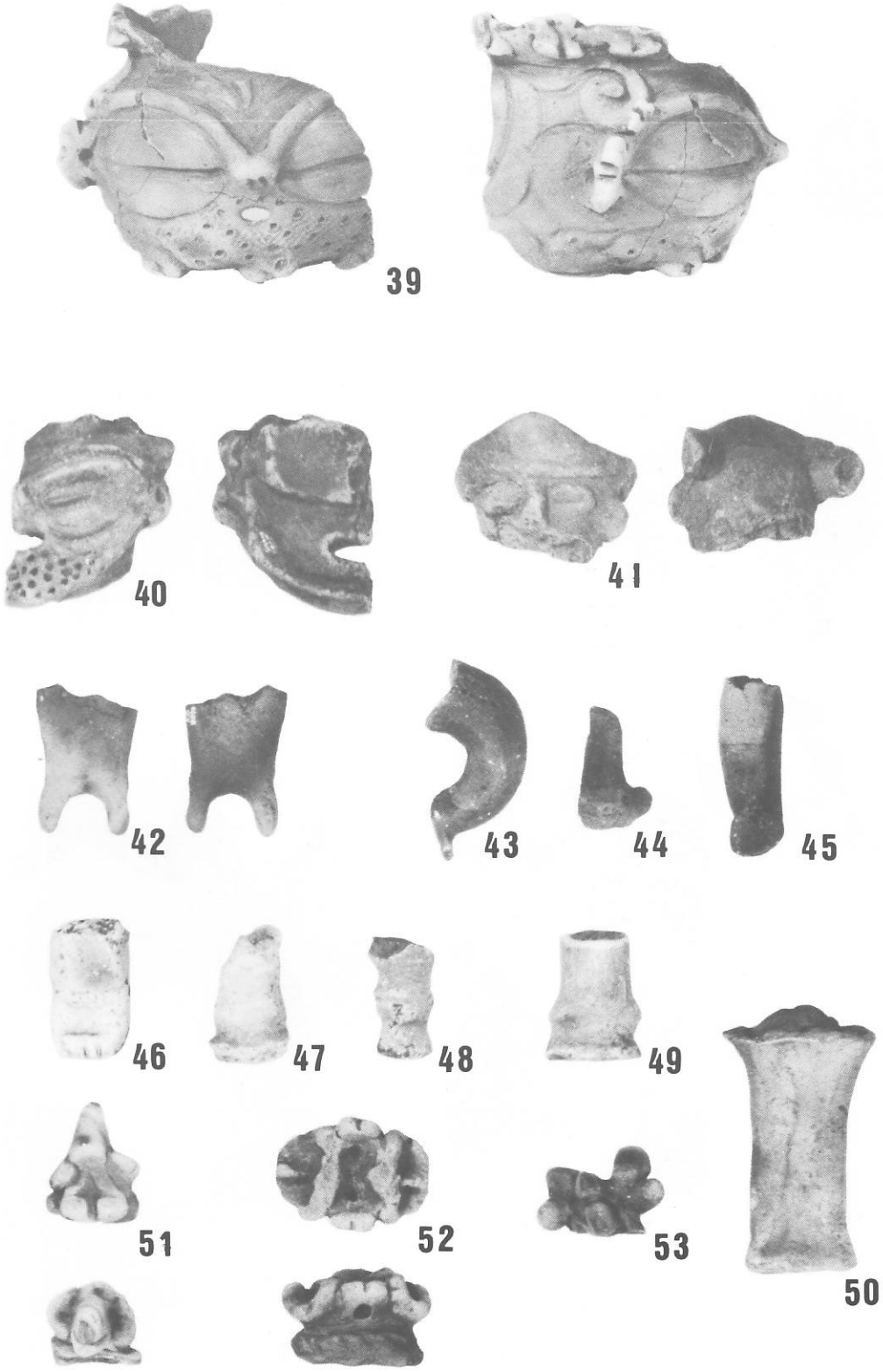


図版53　土製品

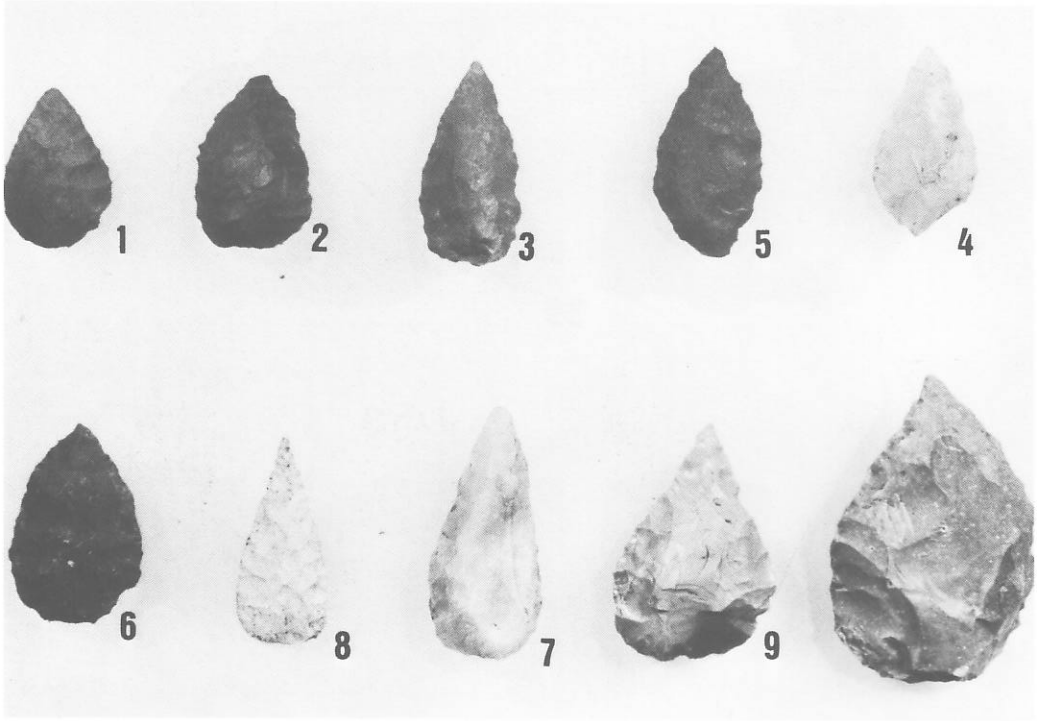
37

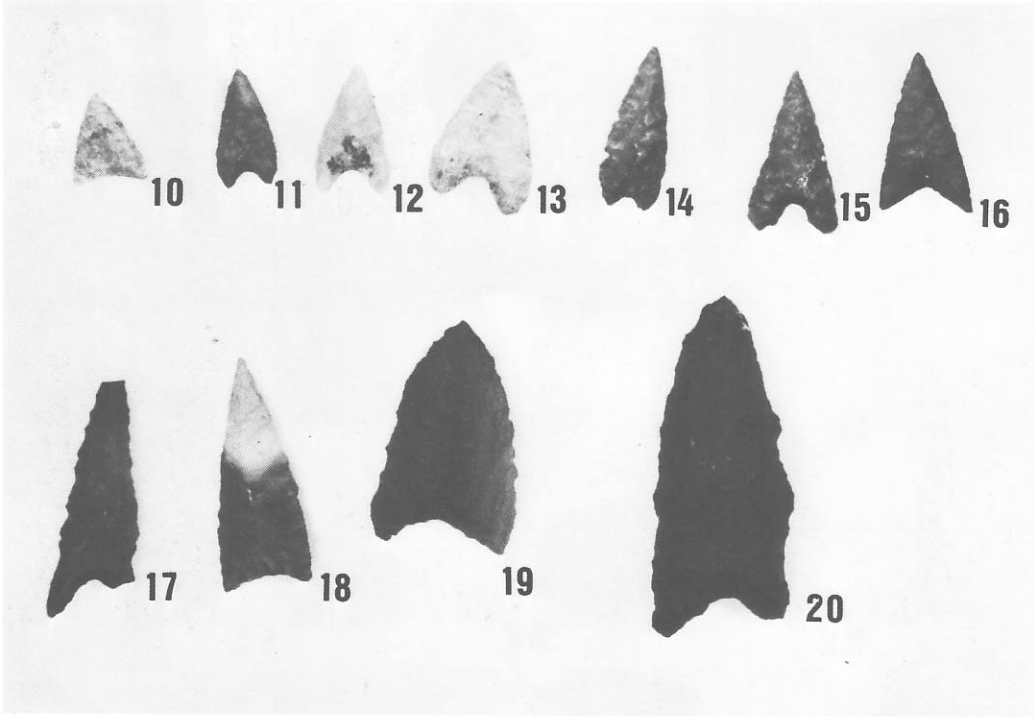
38

図版54　土偶

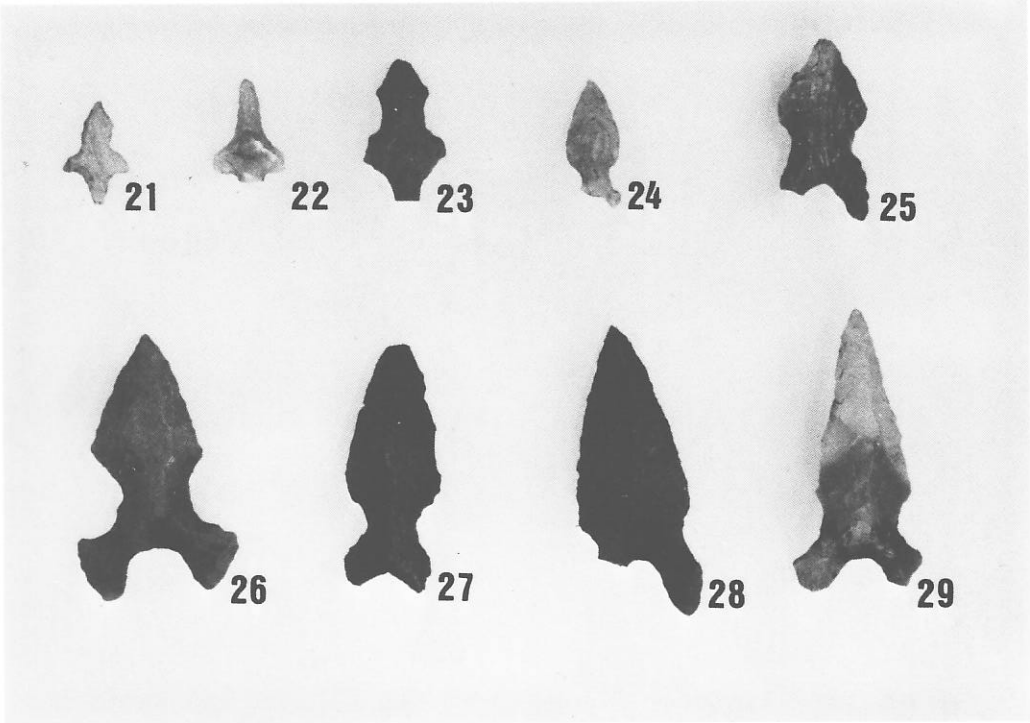


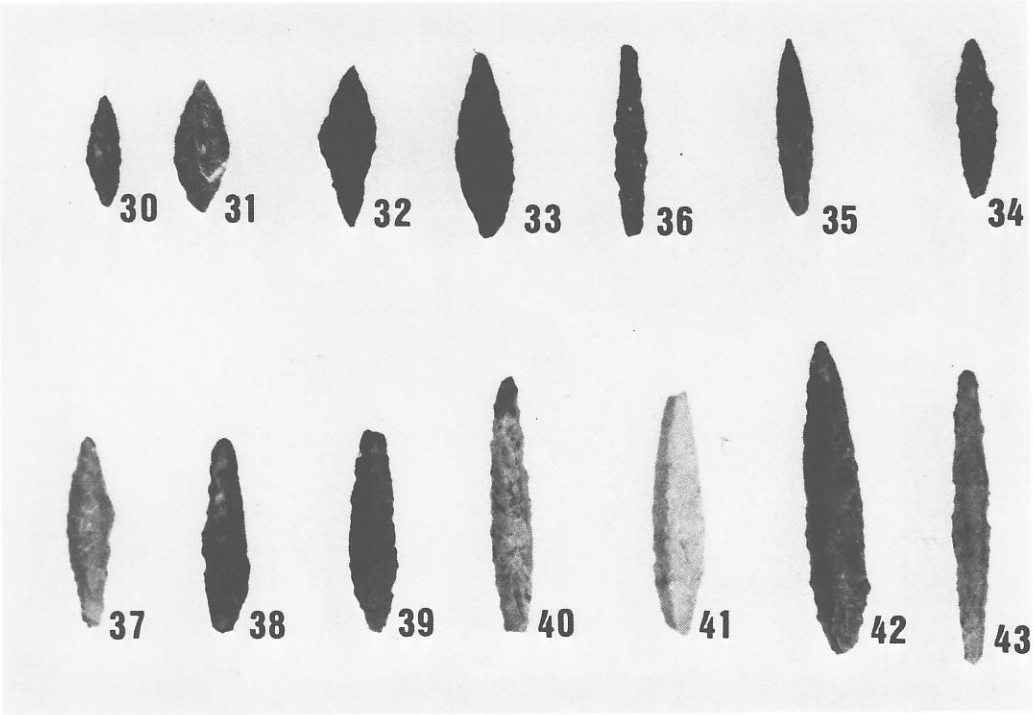
図版55　土偶



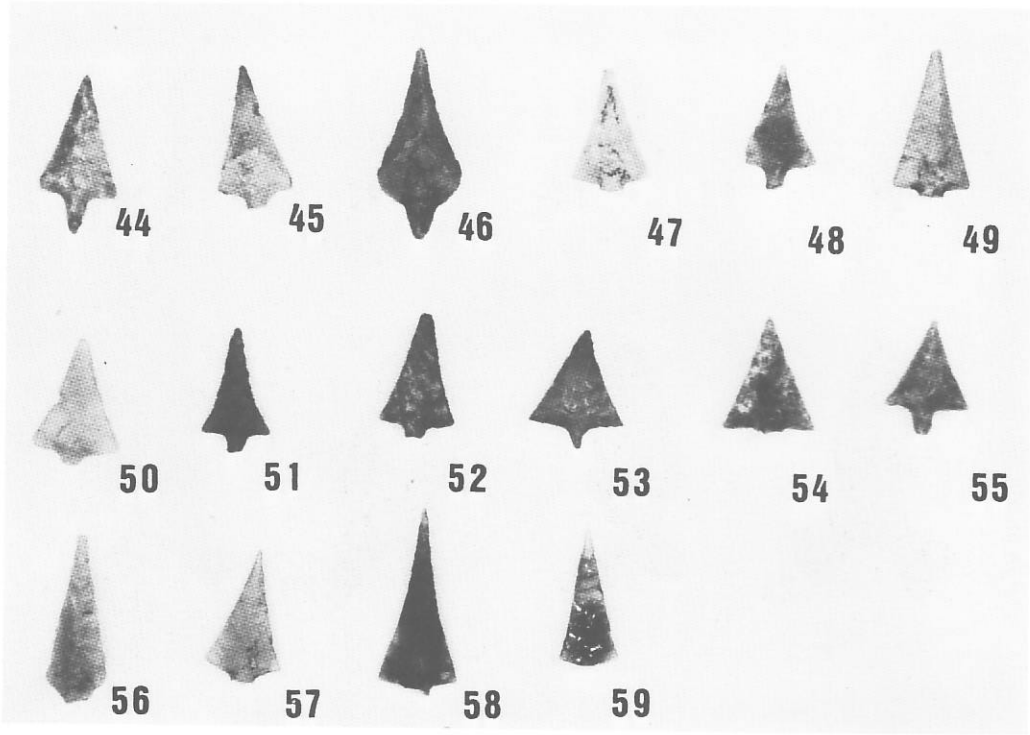


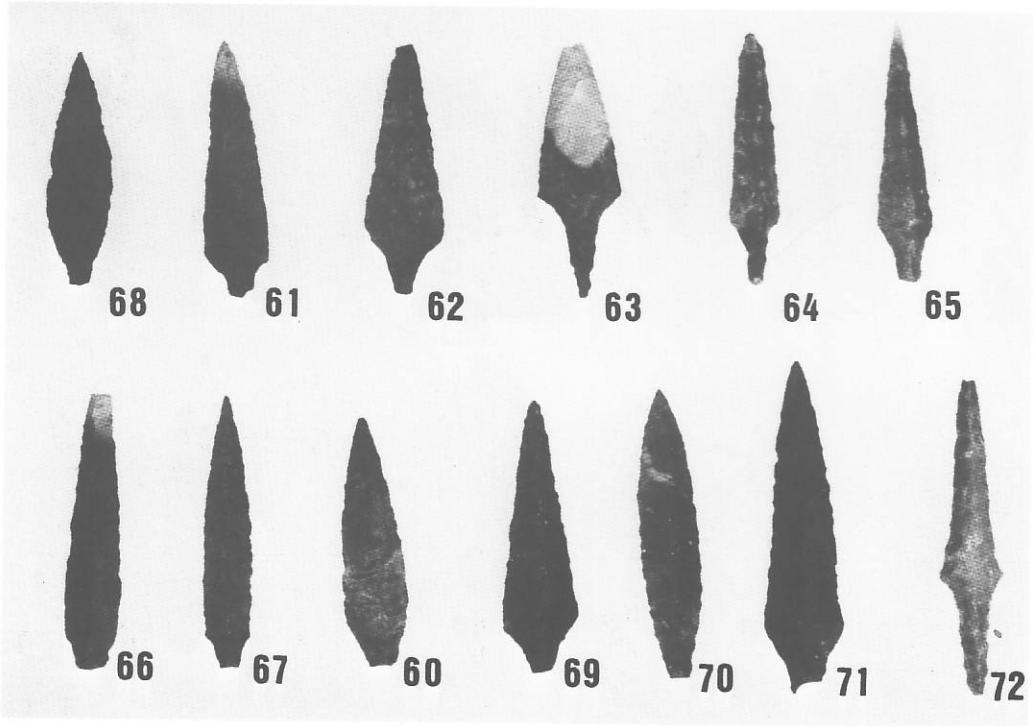
図版56　石鏃



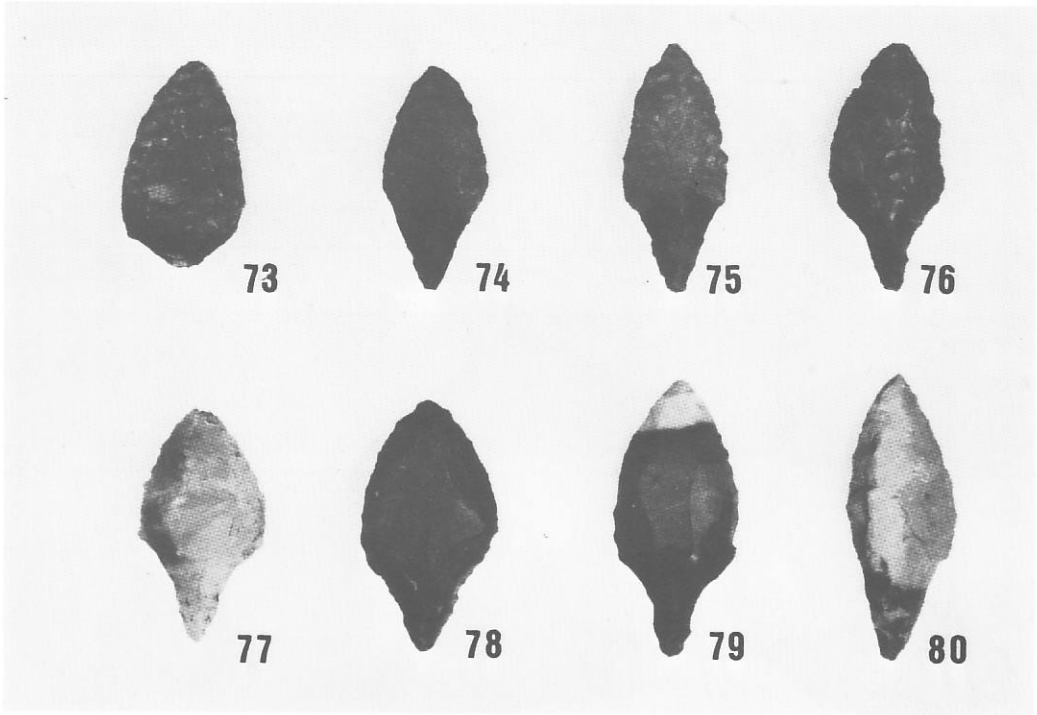


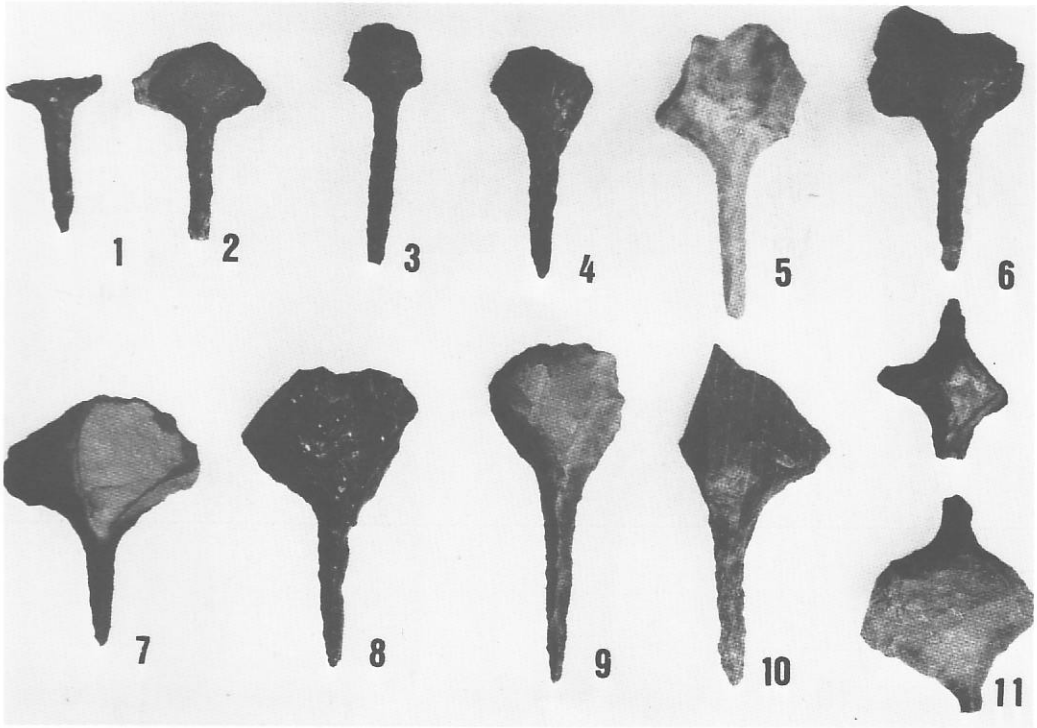
図版57　石鏃


44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59

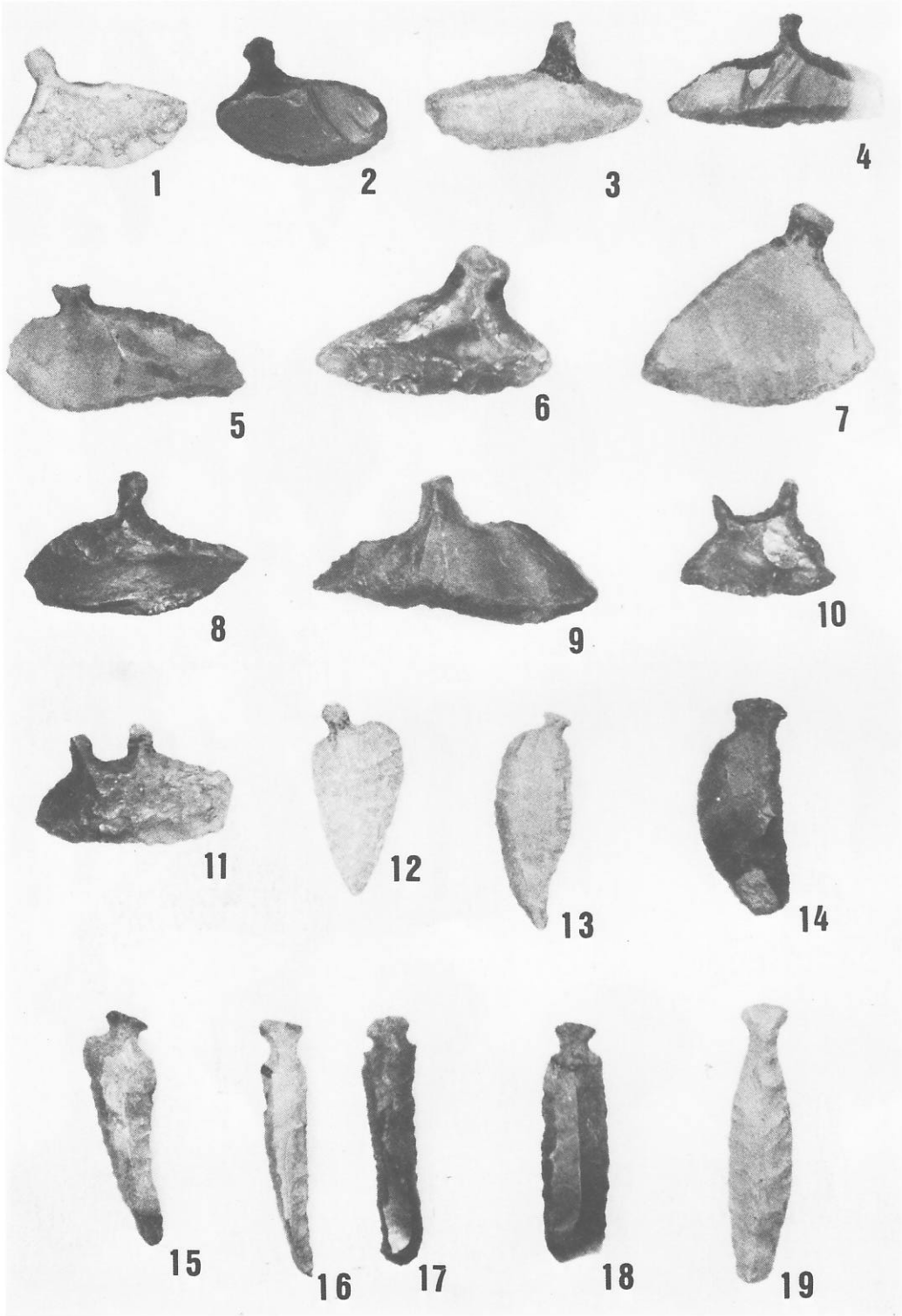

68
61
62
63
64
65
66
67
60
69
70
71
72

図版58　石鏃

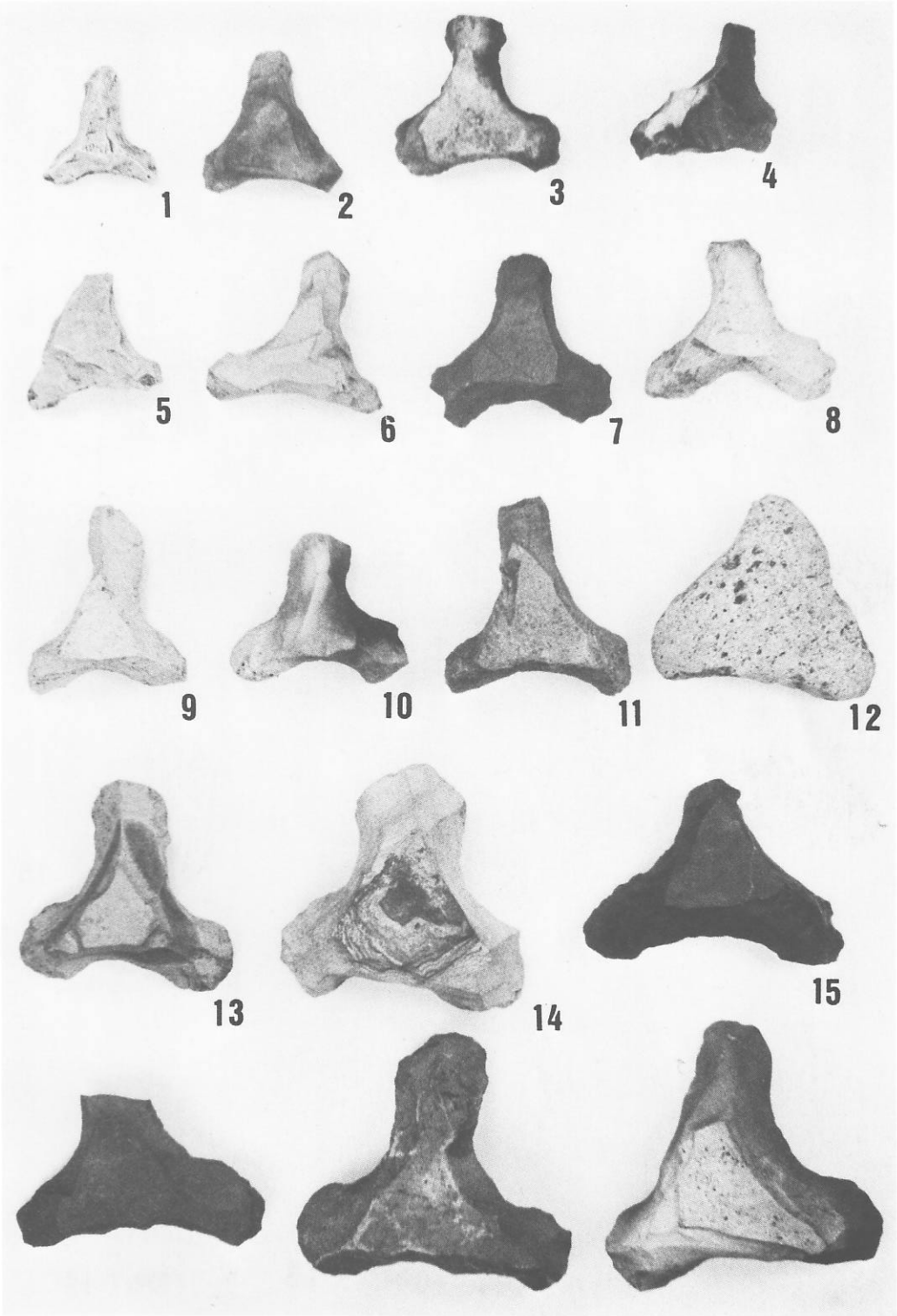




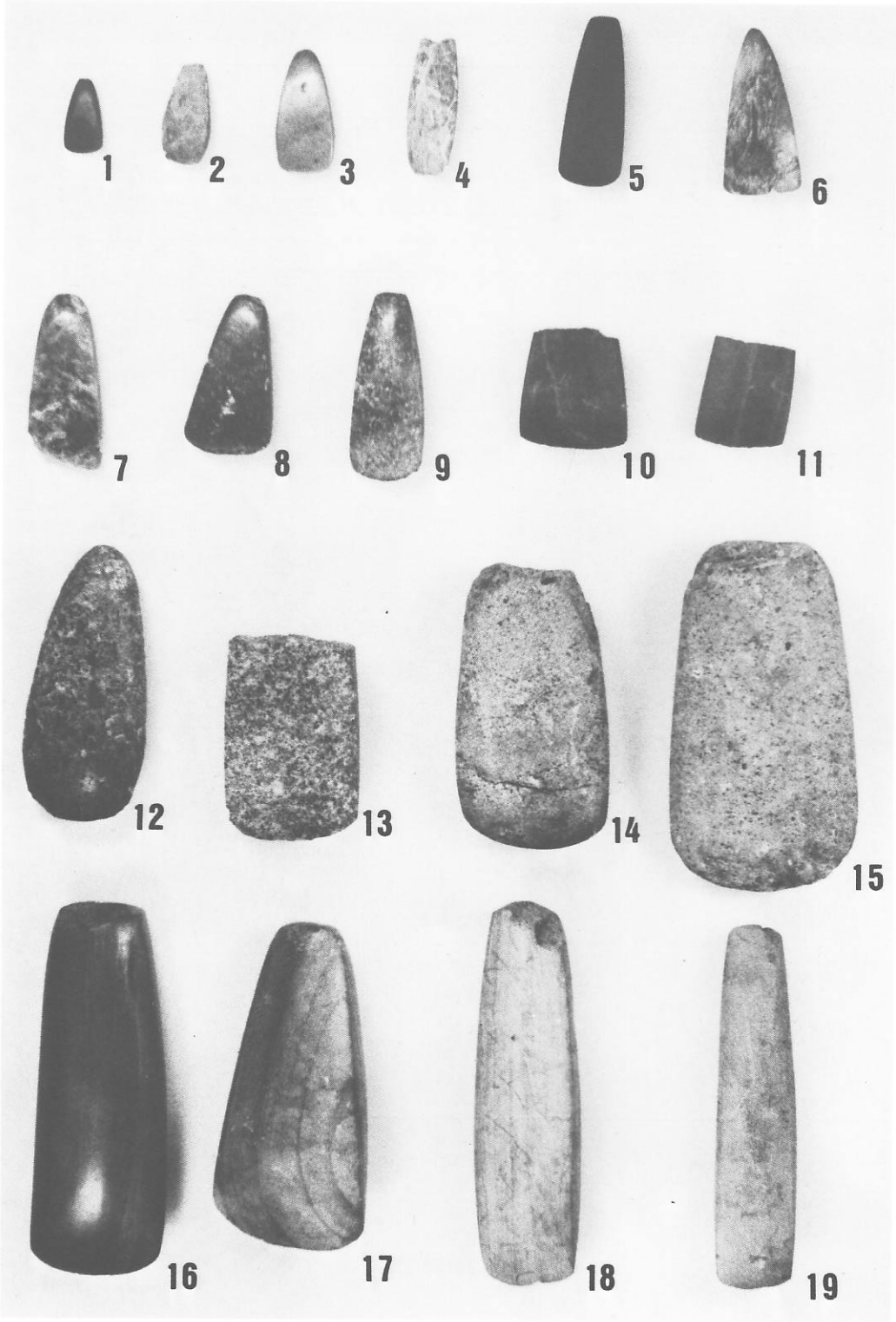
図版59　石鏃・石錐



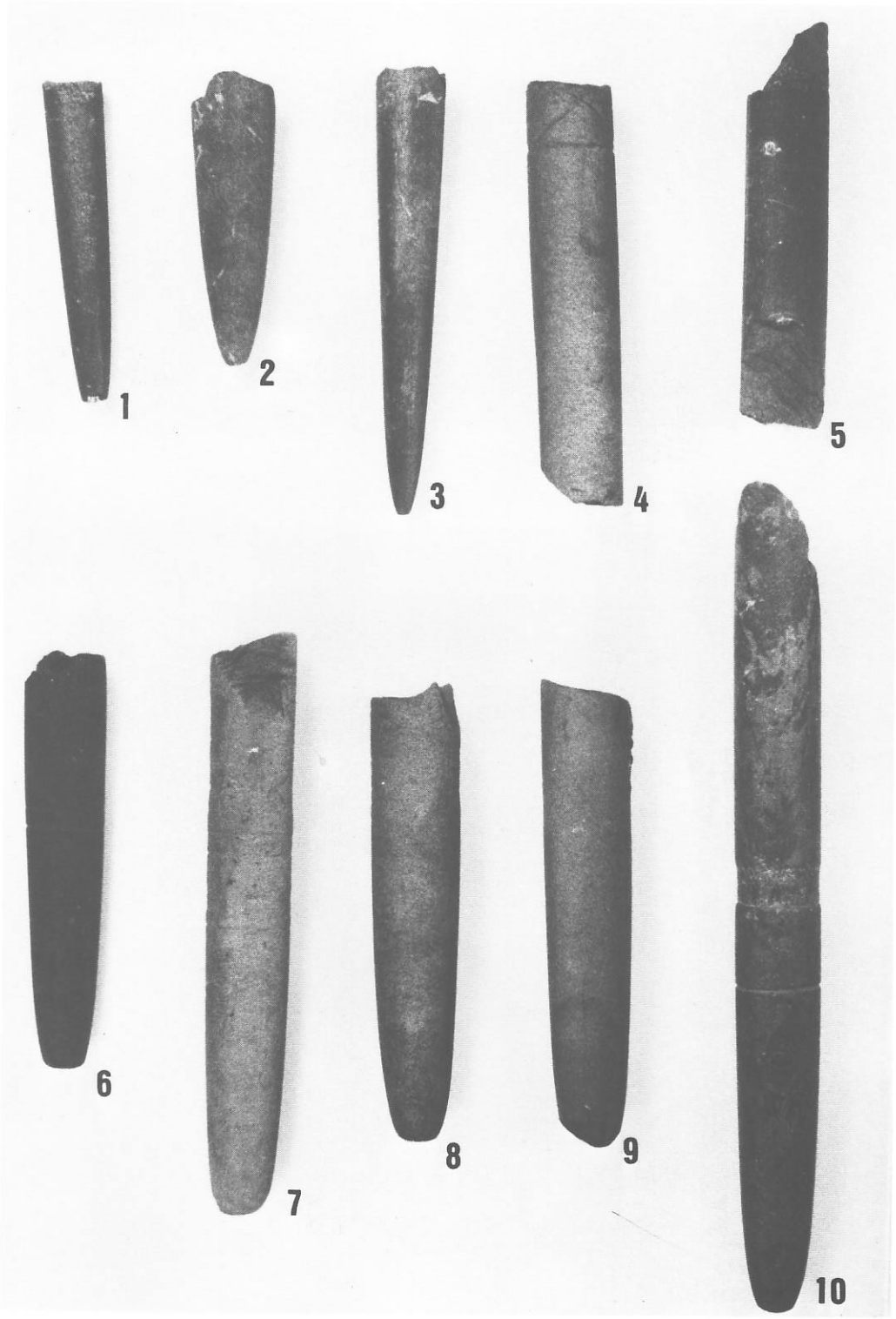
図版60　石匙



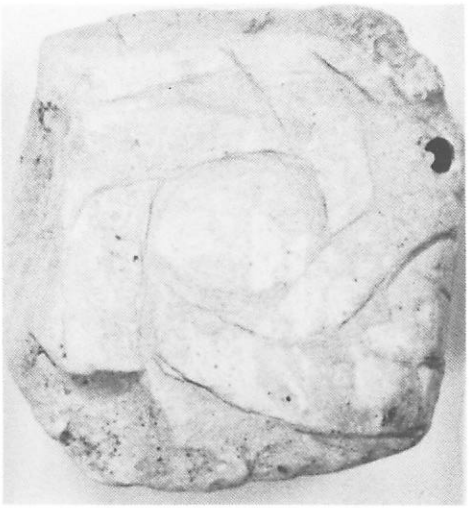
図版61　三脚石器



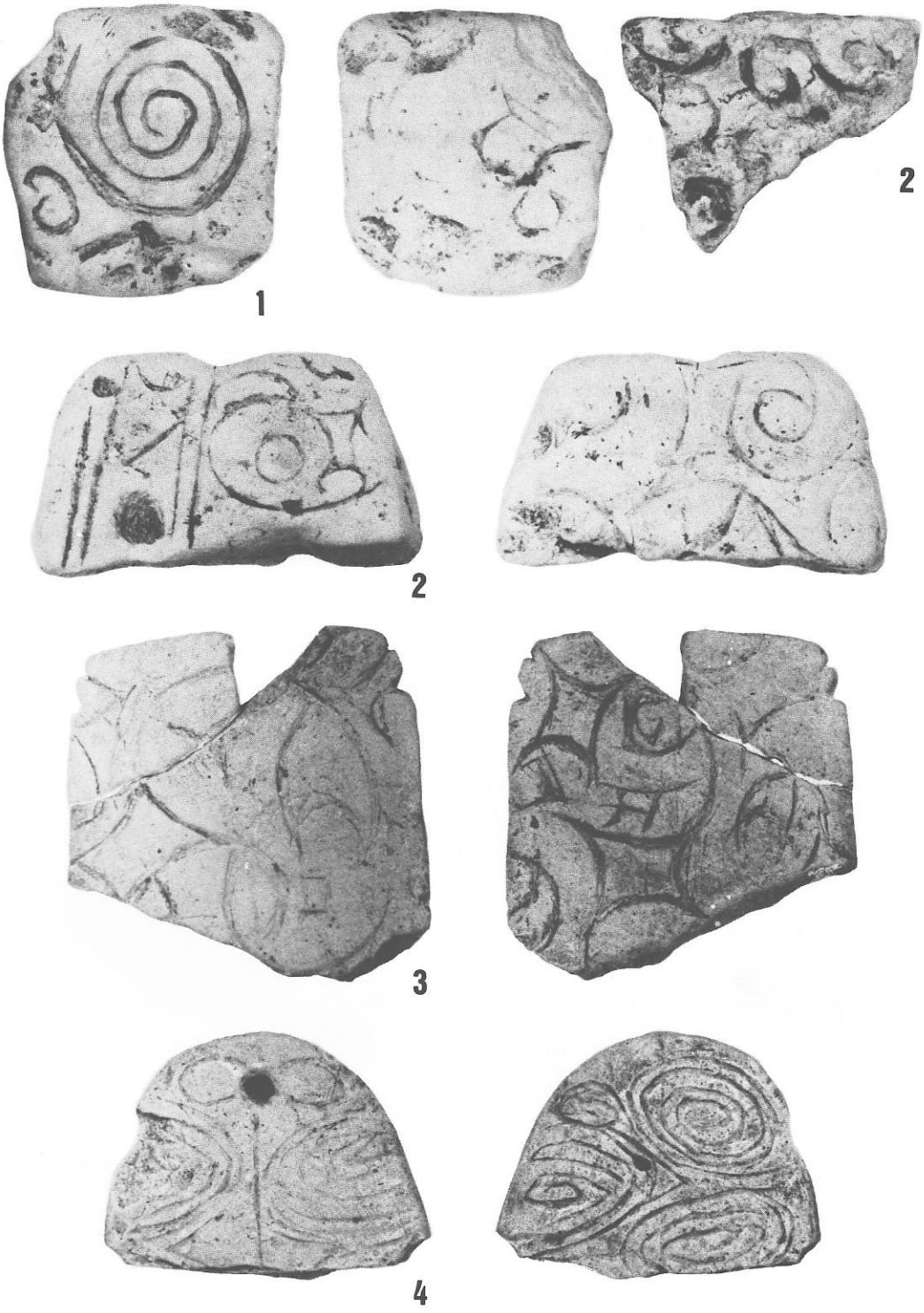
図版62　摩製石斧



図版63　石棒



図版64　岩偶

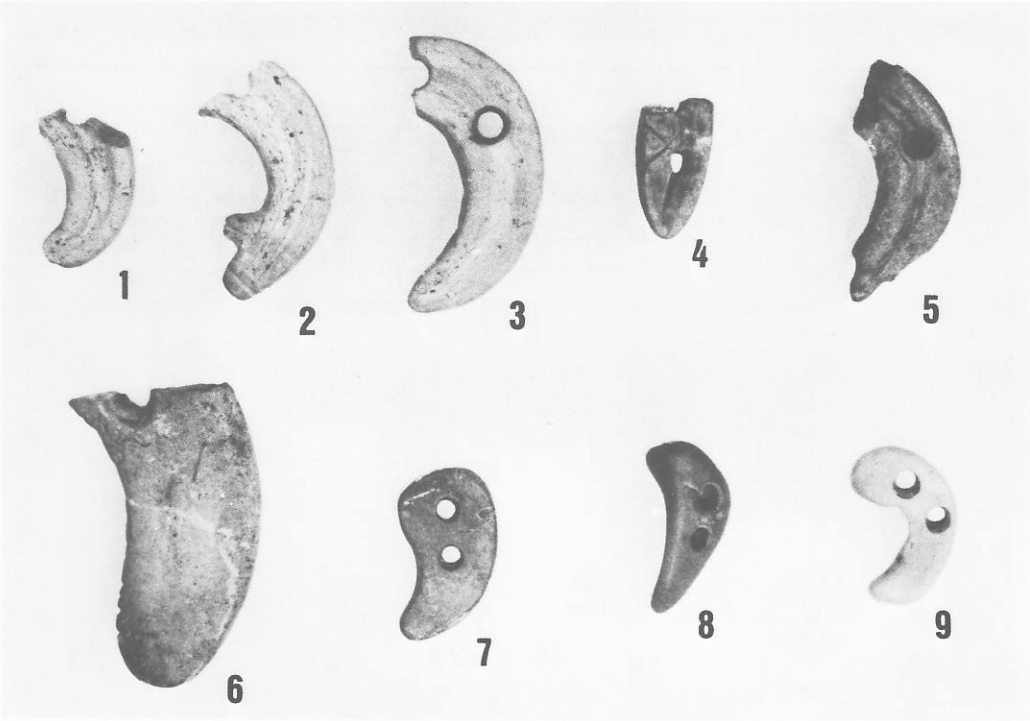


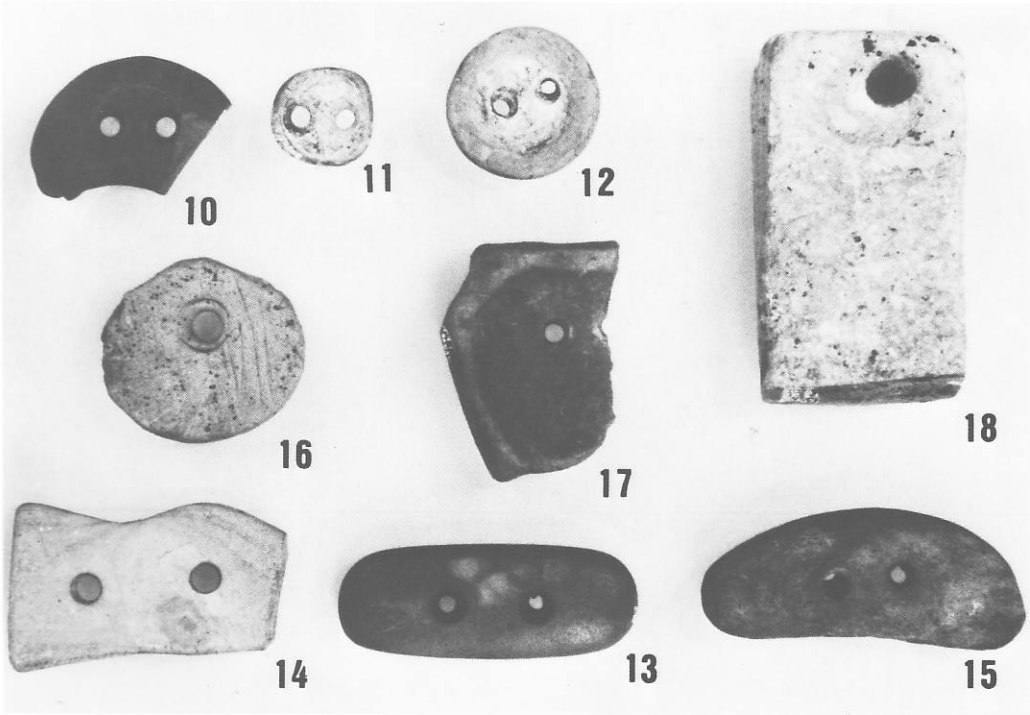
図版65　岩版

6

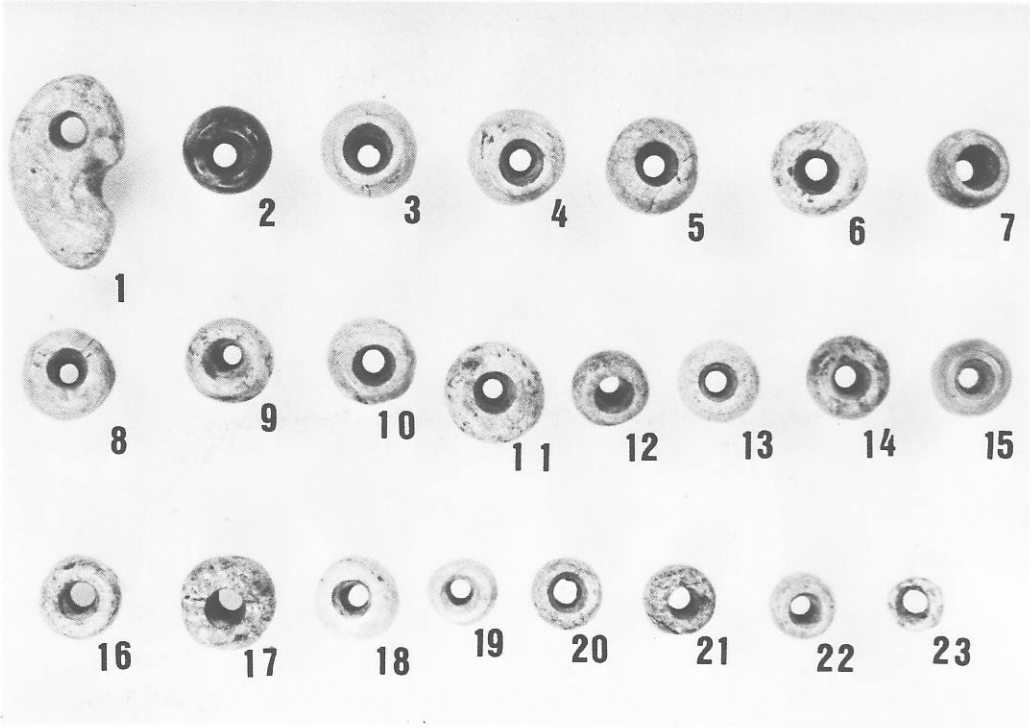
7

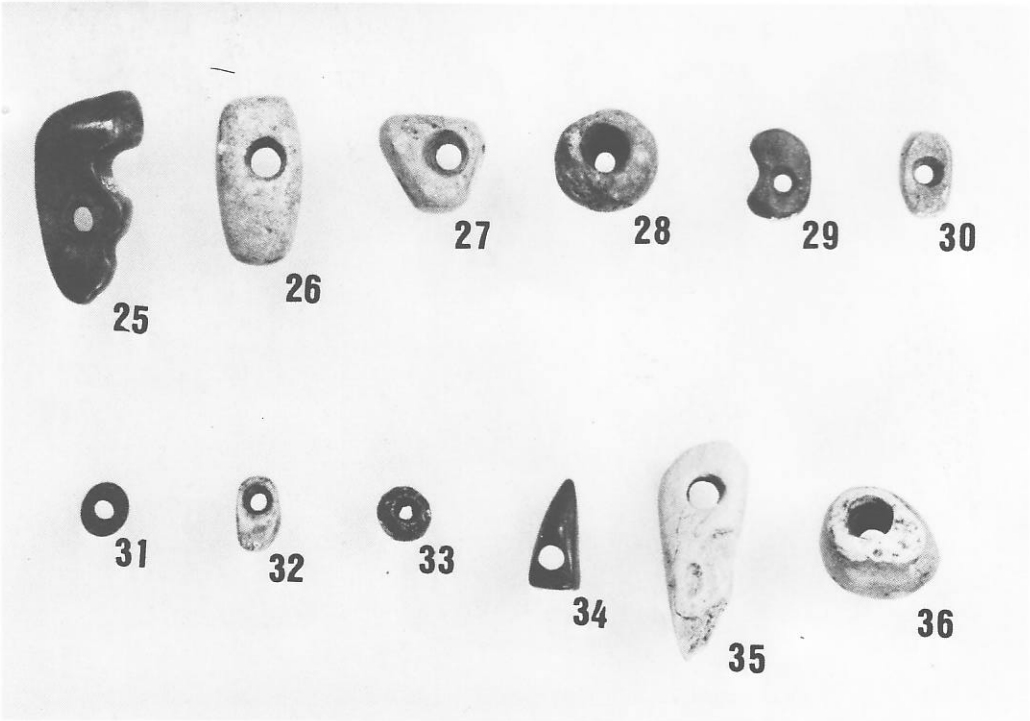
図版66　岩版



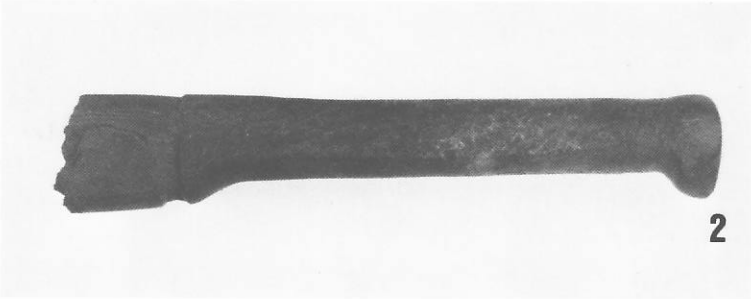


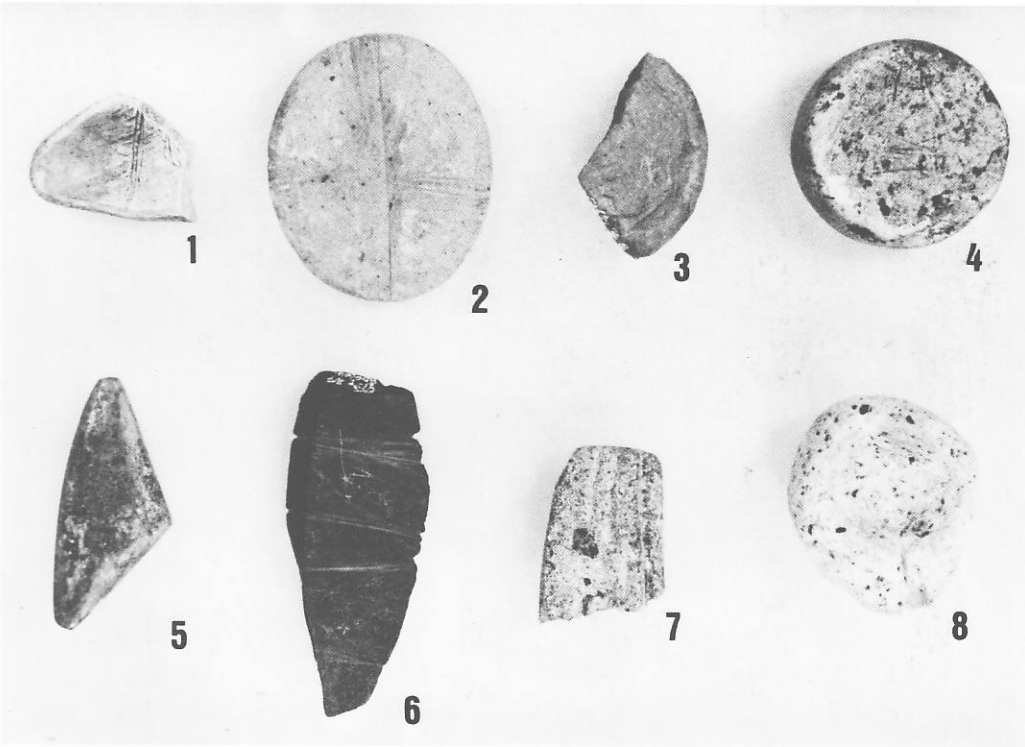
図版67　有孔石製品


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23

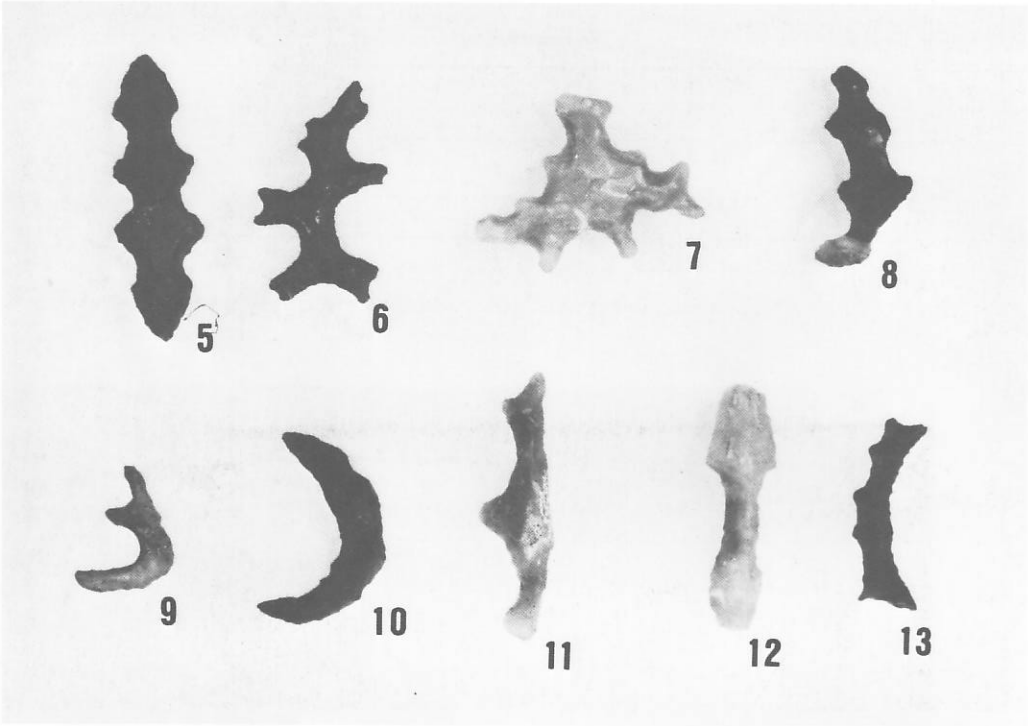

25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36

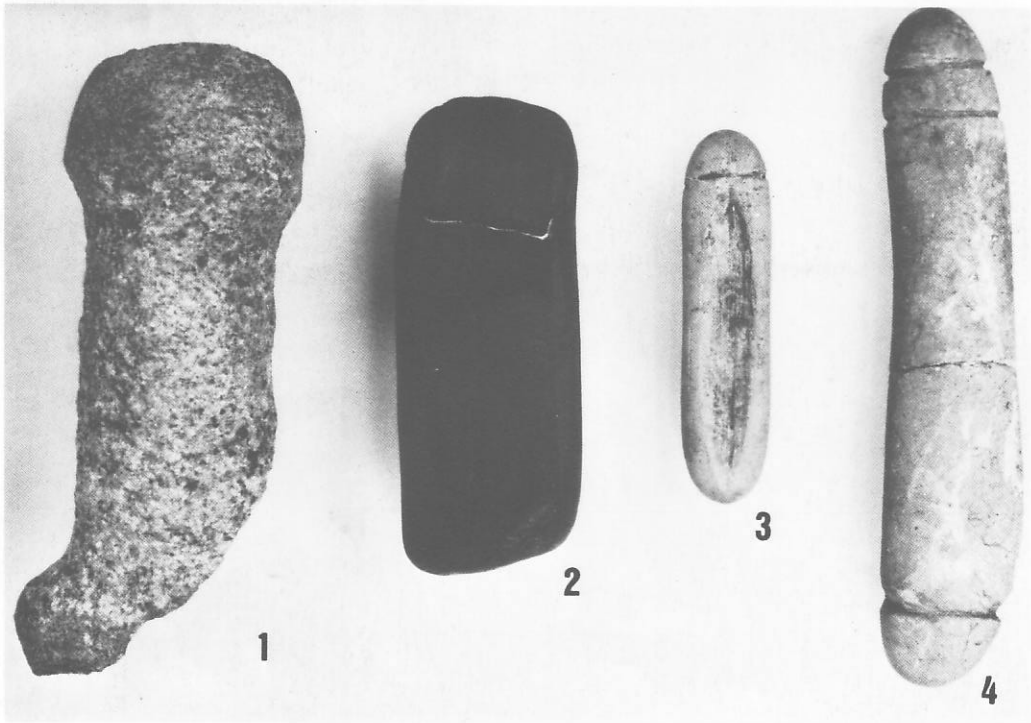
図版68　玉類



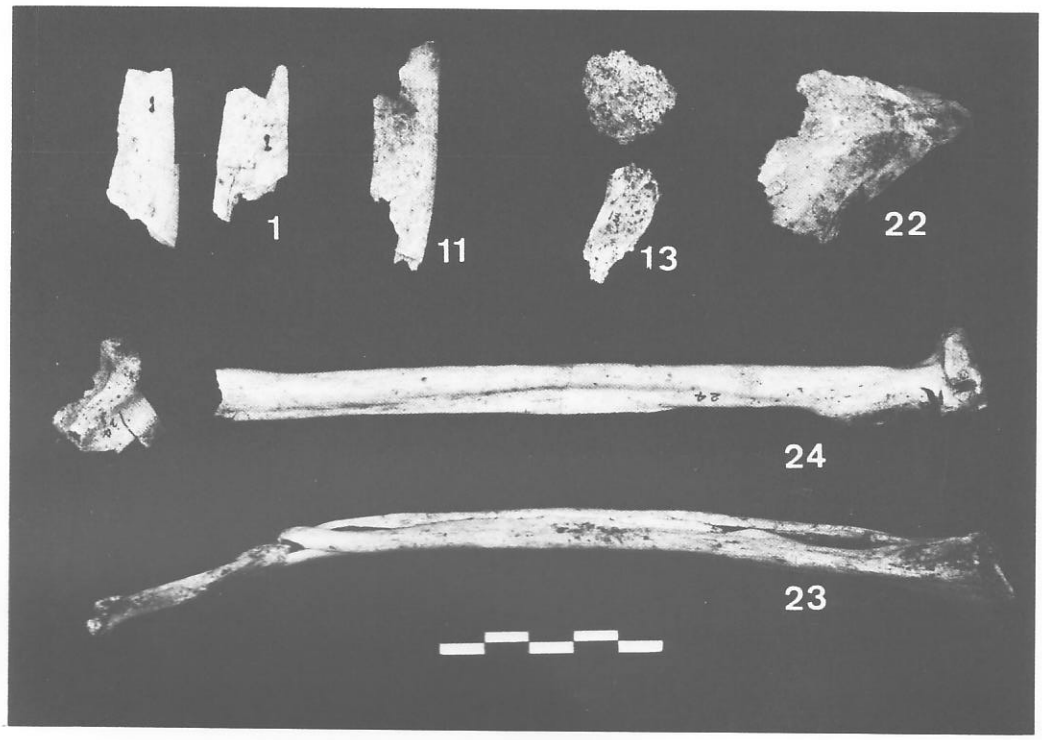


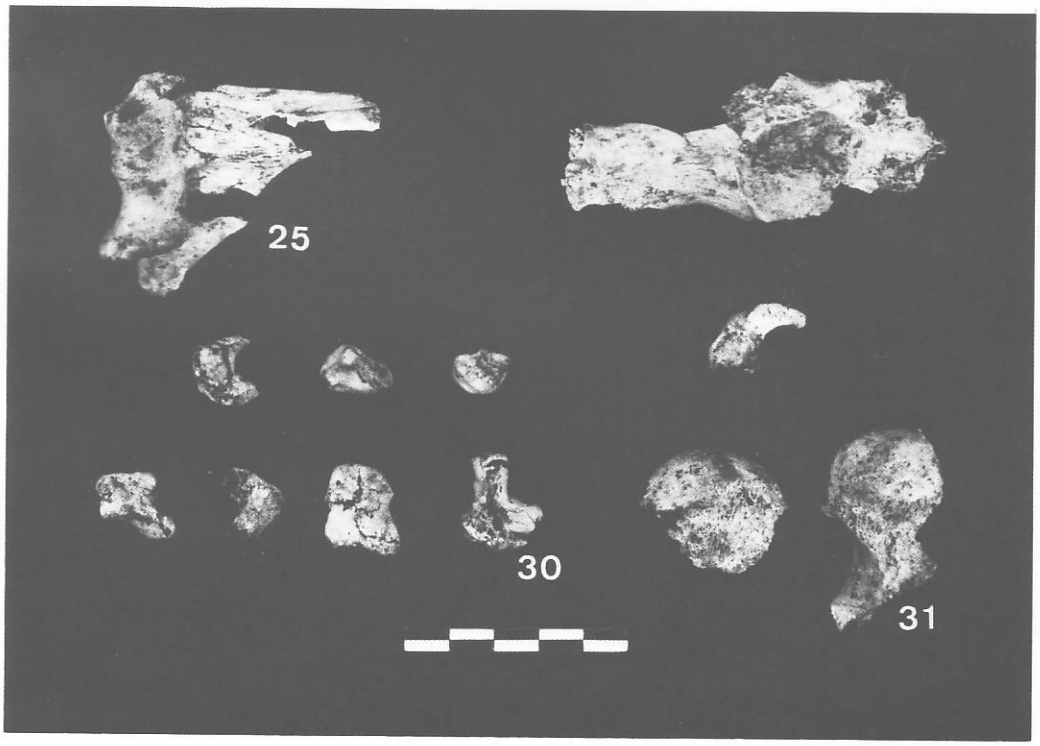
図版69　石刀・石製品





図版70　異形石器・男根状石製品





図版71　人骨